

運命を切り拓くだけの
簡単なお仕事

白鷺 葵

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

認めたくない運命があった。

幸せになってほしかった人たちがいた。

『こんな運命など認めない』『生きて、幸せになってほしい』――。

悲痛なまでの叫びと祈りが、新しい“可能性”を切り拓く。

指し示された“可能性”が至る結末とは――？

その“可能性”――かつて起こった戦いを駆け抜けた男と、彼を兄と慕う少年。

2人のイレギュラーは、大切な家族である少女と共に戦いへと挑む。

ただし、この可能性は「史実」とは何かが果てしなく「ずれ」まくっていますのでこ

注意を。

P3Pを主軸にしつつ、異聞録と罪&罰・他版權・オリジナル要素をふんだんに盛り込んだ物語。

この小説は自サイト(『<http://id32.fm.jp/8/383187>』内の『<http://id38.fm.jp/36/10847309/>』)でも連載しています。

所謂マルチ投稿ですが、あちらとは若干レイアウトが違います。ご了承ください。
ただ今、原作の「チャリオッツ&ジャステイス討伐」時期に突入。

S・E・E・Sの面々と一緒に行動しています。

目次

主人公紹介	1
サブキャラ紹介	6
ペルソナ紹介	11
0・開幕ベルを鳴らすだけの簡単なお仕事	
0―0・ベルベツトルームを蹴破るだけの簡単なお仕事	19
0―1・巖戸台へ足を踏み入れるだけの簡単なお仕事	32
0―2・はじめての影時間を体感するだけの簡単なお仕事	43
0―3・ひっそりとフラグを立てるだけの簡単なお仕事	62
0―4・外道麻婆片手に江古田を脅すだけの簡単なお仕事	80
0―5・満月の巨大シャドウと初戦闘するだけの簡単なお仕事	103
0―6・わだかまりの緩和剤になるだけの簡単なお仕事	124
0―7・自分の力について考えるよう後輩にアドバイスするだけの簡単なお仕事	153
0―8・過去に思いを馳せつつ新しい一步を踏み出すだけの簡単なお仕事	

1. 新しい戦いに身を投じるだけの簡単なお仕事

1—1. ピンクのポツタクリ妖精をフルポツコにするだけの簡単なお仕事

1—2. 色んな相手と語らうだけの簡単なお仕事

1—3. 6月20日イベントを全力で過ごすだけの簡単なお仕事

1—4. 絆を紡ぎ、なぞるだけの簡単なお仕事

IF—XX1. 色んな意味で惨事に直

面する新しい可能性のひとつ

1—5. 縁を辿って縁に行きつくだけの簡単なお仕事

1—6. 七夕デスマッチ1回戦に挑むだけの簡単なお仕事

1—7. 七夕デスマッチ第2回戦の惨事を静観するだけの簡単なお仕事

2. 本格化していく戦いに挑むだけの簡単なお仕事

2—1. 壁にぶち当たる寸前まで、騒がしくもセンチメンタルに過ごすだけの簡単なお仕事

IF—XX1. 色んな意味で惨事に直

- 2—2. BGMに幼児虐待を流すだけの簡単なお仕事 ————— 385
- 2—3. 屋久島旅行へ想いを馳せるだけの簡単なお仕事 ————— 418
- 2—4. 罪の重さを思い知り、新たに決意するだけの簡単なお仕事 ————— 441
- 2—5. 機械乙女をパーティに迎えるだけの簡単なお仕事 ————— 465

主人公紹介

空本 至（そらもと いたる）

年齢：27歳（早生まれのため）

職業：〃自称〃探偵。本業は南条コンツエルンがバックに控える 〃対怪異調査員〃であり、〃ペルソナ研究員〃も兼任している。

外見：女神異聞録ペルソナ主人公と同じ顔。髪の色は明るめの藍色。微妙にくせ毛で少々跳ねている。左耳には星形のイヤリングを付けている。無駄に若作り。

アルカナ属性及び所持ペルソナ：ナルカミ／愚者、ウロボロス／世界、スザク／太陽
特技：遠距離および精密射撃、人とのコミュニケーション、ざつくりとした未来・可能性予知

趣味：旅行（特に団体）、団欒（人数が多ければ多いほどいい）

好きなもの：家族（航、陽向、千影）、仲間（エルミン時代の戦友、ジョーカー／JO
KER事件の戦友、放課後特別活動部の面々）

嫌いなもの：フイレモン&ニヤルラトポテプ

苦手なもの：恋愛がらみの修羅場と痴情のもつれ（航・麻希・英理子トライアングル

の巻き添えを喰った被害者筆頭)

学力：実は天才／勇氣：文句なしの漢／魅力：光るときは激しく光る

性格・性格診断をすると十中八九「自由な子ども」という結果が出る人間。診断通り、びつくりするほど(色んな意味で)フリーダム。

ムードメイカーであると同時にトラブルメイカーであるが、責任感が強く、いざという時はとても頼れるお父さんの存在。身内の事にはとても真剣に向き合う。

お人好しで世話焼き体質。面倒見がよく、面々に対して家族のように接する。人一倍子どもっぽい、時折大人としての風格や包容力を垣間見せる人。

情熱を注ぐ方向が若干アレ気味だが、不思議と愛され親しまれている。『愛すべきバカ』にして『ある意味で尊敬すべき年長者』的な扱い。

縁者構成

藤堂 航(とうどう わたる)……双子の弟。かつての“ピアスの少年”その人。南条グループに所属し、ペルソナ研究をやっている。朴念仁により未だ独り身。

要 陽向(かなめ ひなた)……遠い親戚。 “P3Pの女主人公”その人。ムーンライトブリッジの事故で両親を亡くしている。

国光 千影(くにみつ ちかげ)……親戚。外見は “P3Pの男主人公”その人だが、

経歴は違う。両親から虐待されていたが、紆余曲折あつて至に引き取られる。

経歴

両親の離婚により航と姓が違う。しかし、住んでいる所がそれなりに行き来できる範囲だったため、航との交流は途切れず続いていた。航と交流を続けていたことは両親にも内緒である。航は母親・至は父親についていった。

聖エルミン学園在学時に「ペルソナ様」遊びを提案し、「体育館倉庫からスノーマスクを発見・持ち出した」張本人。ぶつちやけ「ある種の元凶」。雪の女王事件（一般には公表されていない）と「セベク・スキヤンダル」に巻き込まれ、仲間たちと共に立ち向かった。この一件によつて、何故かフレモンとニャルラトポテプに気に入られてしまう。

学生時代は特待生の奨学金を利用しており、圭と学年TOPを争うほどの学力の持ち主。若干(??)人と感性が違っているものの、本人は全く気にしていなかった。「1日3時間睡眠すれば問題ない体質」のため、結構凄まじい生活をしてきた様子。

卒業後は兄弟そろつて南条コンツェルン（むしろ圭）に非公認で引き抜かれる。航はペルソナ能力研究者として、至はペルソナ絡みの事件を追う客員調査員としてグループに所属。正式に公認採用されたのは大学卒業後である。それでも活動は頻繁に行つて

いた。

大学2年生の時、調査の一環で珠？瑠市へ赴いたら、ジョーカー／JOKERの事件に巻き込まれる。罪・罰の両方と関わり、圭たちを巻き込みながらも事件解決のために駆け回った。

ジョーカー／JOKER事件に巻き込まれる1年前、千影の後見人となり彼を引き取る。その半年後にムーンライトブリッジの「事故」が起こった。親戚中から厄介者扱いされていた陽向の後見人となり、彼女を引き取る。

実は「エルミンでの一件（雪の女王事件）で黄昏の羽・月のかけらを発見」し「それから2つやJSMについて、桐条グループとの共同研究を圭に提案した」張本人でもあった。

各地を転々としつつ怪異があれば首を突っ込み、そういうのが見つからないときは航のサポートや圭と航からの依頼を受けたりして生計を立てていた。

その他

・陽向を引き取るきっかけになった「陽向失踪事件（もとい家出未遂事件）」で、とある少年と出会う。以後の交流は一切ないが、陽向の恩人として心配していた。

・圭によって兄弟共々社交界に引きずり出されたことが何度かあり、その際に武治や

美鶴と知り合った。何度目かの会合で「会場がテロリストに占拠される」事件が発生。その時、人質にされかけた美鶴を助けたことがある。

・航を射止めんとする麻希と英理子に「どっちに協力するの？」と問われた際、悩んだ挙句に「永世中立」と返答。結果、1ヶ月ほど「夜道に気を付けなきや生きて帰れない日々」を送る羽目になった。それ以来、恋愛系の修羅場が苦手。現在でもまだ勝負が続いているので、現在進行形で巻き込まれている。最近は「航が好きになった子の味方」と言っただけで逃げている。

随時更新・あるいは変更すると思われまます。

サブキヤラ紹介

「中心的なサブキヤラ」

藤堂 航
とうどう わたる

年齢：27歳（早生まれのため）

職業：南条コンツエルン・ペルソナ研究部門の主任

性格：冷静沈着で真面目な性格。だからといって「お堅い」というわけではなく、適度なフランクさと社交性を持っているので交流関係は意外と広め。意外とお茶目さんでもある。判断力と決断力に優れており、無自覚に人を引き付けるカリスマとリーダーシップの持ち主。

恋愛系にはおそろしく疎く、麻希と英理子が自分を賭けて水面下の戦いを繰り広げている事実を全く知らない＋理解できていない朴念仁。そのツケが全て至に回っていることにも気づけていなかったりする。たまにだが、素で酷い事を平気で言い放ったりするので油断できない。変な意味での天然疑惑が浮上中。

その他：女神異聞録ペルソナ主人公「ピアスの少年」その人。至の双子の弟だが、両

親が離婚したため姓が違う。

・料理はよくするのだが、毎回キツチンを爆破するため「メギドラオン（あるいはヒエロスグリユペイン）クッキング」と呼ばれている。

・適正アルカナは皇帝・節制・世界で、ペルソナはヴィシユヌ（皇帝）、ゲンブ（節制）、シヨクイン（世界）。

・特技は歌うこと。至と一緒に歌うと、打ち合わせなしでハモったり、パート別に歌う等の高度なコンビネーションを見せる。

国光 くにみつ 千影 ちかげ

年齢：17歳

所属部活：剣道部、料理同好会、フアツション同好会（たまに）

所属委員会：保健委員

性格・物腰穏やかで思慮深く、礼儀正しい性格。引っ込み思案かと思われがちだが、いざと言う時の行動力は至以上に突飛な行動を取ることもある。人当たりがよく誠実なので人に好かれやすい。芯がしっかりしていて揺るがない人。

普段は柔らかな微笑を浮かべているが、怒らせたり敵に回したりすると怖い相手でもある。若干腹黒い面があるようで、笑顔で毒や暴言を吐いたり脅しにかかったりす

るため油断ならない。実は健啖家な一面も。意外と強い執着心の持ち主。

その他：・ペルソナ3の男主人公と同じ外見だが、バックボーンは全く違う。至の親戚で、両親から虐待を受けていた。ペルソナ能力を覚醒させたことで紆余曲折諸々の経緯を辿り、至に引き取られる。

・料理全般が得意だが、特に甘いものやお菓子作りに突出している。それが高じて料理部を立ち上げた程。

・適正アルカナは剣・金貨・運命で、ペルソナはアーサー（剣）、ペリ（金貨）、フエンリル（運命）。

・根っからのファミリーコンプレックス。どれくらいかと言うと、「好きな人：家族、好きなこと：家族の手伝い、好きなもの：家族の作った料理、嫌いなもの：家族に危害を加える現象・人間すべて」と豪語する程。

要^{かなめ}
陽向^{ひなた}

年齢：17歳

所属部活：テニス部、ファッション同好会、料理同好会（たまに）

所属委員会：図書委員

性格：明朗快活で頑張り屋な性格。自分の感情に素直なため、表情がこころ変わる。

妥協してはいけないと思えば全力で相手にぶつかっていく気の強さの持ち主。責任感の強さから、どんな事態に直面しても気丈に振る舞おうとするため、物事を背負い込みやすい。

何も考えていないように思われがちだが、実はとても他人想いで相手の事を考えている。人の感情にとっても敏感で、無自覚ながらも相手の言動や行動から何かを察することが得意。本人は気づいていないが、何かを抱えている人に惹かれるきらいがあるようだ。

その他：・P3Pの女主人公その人。至とは遠い親戚で、10年前の事故で両親を亡くした後、至に引き取られる。そして本編に突入し、放課後特別活動部のリーダーに任命された。

・何事もそつなくこなせる天才肌。魅力・学力・勇気が最初からMAX状態だが、本人は一切無自覚。

・ワイルドという特別な能力を保持し、全てのアルカナに適性がある。最初に目覚めたペルソナはオルフェウス（愚者）。

・部活の掛け持ちだけでなく、生徒会にもちよくちよく顔を出しているようだ。いつも忙しそうに駆け回っている。

【その他】

いずも
出雲 創真 そうま

年齢：15歳（月光館学園中等科の3年生）

・乾の親戚で、彼のお兄ちゃん的存在。乾からは「創まにいちちゃん」と呼ばれている。2人の仲はとても良く、ちよつとやそつとでは途切れなくらい強く結びついている。

・「あれは事故ではない」という乾の主張を唯一信じている人物で、彼と一緒に2年前の事故のことを調べまわったり、神社で願掛けをしたりしていた。

・中等部の生徒会長を務めるカリスマの持ち主で、生徒たちからは尊敬と畏怖を込めて『番長』と呼ばれているらしい。

・「奴」に「彼の迎る運命は興味深い」と太鼓判を押された。曰く、「あの少年は、霧に包まれた田舎町を舞台に、愉快な仲間たちと一緒に真実を探すため奮闘する」ことになるという。端的に言うところ「未来のN（とある少女の頭文字）コン番長」らしい。

ペルソナ紹介

『空本至のペルソナ』

ナルカミ

アルカナ：Fool 愚者

元ネタ出典：女神異聞録ペルソナ

【弱点・耐性】

耐性：物理・魔法攻撃属性全て

【使用技】

- ・マハブフダイン（氷／全体攻撃・威力：大）
- ・マハジオダイン（雷／全体攻撃・威力：大）
- ・ゴットハンド（打撃／単体攻撃・威力：特大）
- ・マハンマオン（光／全体攻撃・即死効果）
- ・マハムドオン（闇／全体攻撃・即死効果）
- ・バイパースマツシュ（斬撃／単体攻撃・威力：大・連続して使うごとに威力UP）

・ポイズンアロー（貫通／単体攻撃・威力：大・確率で毒状態にする）

至が普段よく使用するペルソナ。威力の高い全体攻撃魔法（氷・雷）と即死全体魔法（光・闇）、単体物理攻撃技が使える。

しかし、魔法攻撃は対象が全体のため威力が分散してしまうのでいまいち決定打に欠けるのと、物理攻撃は単体しか使えないので囲まれると辛いのが難点。

全属性に耐性があるとはいえ、あくまでも耐性なので殴られれば痛い。無効でない点に注意が必要だったりする。

スザク

アルカナ：Sun^{太陽}

元ネタ出典：女神異聞録ペルソナ、ペルソナ2罪&罰、ペルソナ3

【弱点・耐性】

無効：風

吸収：炎

弱点：氷

【使用技】

・メシアライザー（補助／味方全体・全状態異常及び体力全回復）

・メディアラハン（補助／味方全体・体力全回復）

・地獄の業火（炎／全体攻撃・威力：特大）

・マハガルダイン（風／全体攻撃・威力：大）

・精霊の加護（自動／戦闘終了後、自身の体力・魔力回復）

・アムリタ（補助／味方全体・戦闘不能以外の全状態以上回復）

・サマリカーム（補助／味方全体・戦闘不能全回復）

至が緊急時に使うことの多いペルソナ。とっさの移動手段や仲間たちの回復に活躍してくれる。

各種回復技以外にも、高威力の炎属性と風属性の全体攻撃を使えるので充分戦える。氷属性にはめっぽう弱い。カバーする方法もないため、氷を使う敵が出ると出番が一気に減ってしまう。

ウロボロス

アルカナ：World^世

元ネタ出典：ペルソナ2 罪&罰

【弱点・耐性】

耐性：光と闇以外の魔法攻撃属性全て

無効：光、闇

弱点：物理属性全て

【使用技】

- ・ 串刺し（貫通／単体攻撃・威力：中）
- ・ ミラージュブレス（万能／全体攻撃・威力：中）
- ・ ヒエロスグリユペイン（万能／全体攻撃・威力：超特大）
- ・ テトラカーン（補助／味方全体・物理反射）
- ・ マカラカーン（補助／味方全体・魔法反射）
- ・ 吸魔（万能／単体攻撃・魔力吸収）
- ・ コンセントレイト（補助／自分・次に使う魔法の威力を強化）

ある意味で至の最終兵器的存在。コンセントレイト⇒ヒエロスグリユペインはとんでもない威力を叩き出す。

しかし、万能属性魔法の燃費の悪さが唯一のネック。吸魔を使ってもじり貧になるのが難点である。

物理攻撃関連にはてんで弱い、そこはテトラカーンでカバーする。マカラカーンによるサポートも得意。

『国光 千影のペルソナ』

アーサー

アルカナ：Sword^剣

元ネタ出典：ペルソナ2 罪&罰

【弱点・耐性】

無効：光

吸収：風、雷

弱点：闇

【使用技】

・ ツインスラッシュ（斬撃／敵単体・威力：中）⇒ブレイブザッパー（斬撃／敵単体・威力：特大）

・ 利剣乱舞（斬撃／敵全体・威力：中・複数回攻撃）

・ 旋風陣（風／敵全体・威力：大）

・ 二段突き（貫通／敵単体・威力：中）

・ デイア（補助／味方1人を小回復）⇒メデイア（補助／味方1人を中回復）

・食いしばり（自動／瀕死時に体力わずかで踏みとどまる場合あり）⇒不屈の闘志（自動／倒れても、1度だけ全回復して起き上がる）

・武道の素養（自動／物理攻撃時の体力消費半減）

千影のペルソナ。順平や明彦らと同じ、物理攻撃主体のアタッカータイプである。

食いしばりや不屈の闘志で踏ん張ったり、武道の素質でガンガン攻撃できるのが強み。

だからといって調子に乗るとすぐに体力が尽きる。一応、自力で回復できるのが救いか。

ペリ

アルカナ：Pentacle^{金貨}

元ネタ出典：ペルソナ2 罪&罰

【弱点・耐性】

無効：光、闇

【使用技】

・アギラオ（炎／敵単体・威力：中）⇒アギダイン（炎／敵単体・威力：大）

・リフレッシュリング（補助／味方全体・戦闘不能、ヤケクソ以外の全状態異常回復）

・メデイラマ（補助／味方全体・体力を中回復）

・ブフーラ（氷／敵単体・威力：中）⇒ブフダイン（氷／敵単体・威力：大）

・ガルーラ（風／敵単体・威力：中）⇒ガルダイン（風／敵単体・威力：大）

・ジオンガ（雷／敵単体・威力：中）⇒ジオダイン（雷／敵単体・威力：大）

・魔術の素養（自動／魔法攻撃時の魔力消費半減）

千影のペルソナ。単体の属性（炎・氷・風・雷）攻撃・回復術を使いこなすので、どんな状況にも対応できる。

そつなく戦えるが、攻撃術が大群相手に対応できないのと、少々器用貧乏になってしまおう所がネック。

魔術の素養による消費魔力半減で、通常よりも大盤振る舞いできるのがウリなのかもしれない。

フエンリル

アルカナ：Wheel^運 of Fortune^命

元ネタ出典：ペルソナ2罪&罰

【弱点・耐性】

無効：炎、光、闇

【使用技】

- ・デットリーバーン（炎／敵全体・威力：超特大）
- ・マハラクンダ（補助／敵全体・防御ダウン）
- ・マハスクカジャ（補助／味方全体・命中、回避UP）
- ・マハタルカジャ（補助／味方全体・攻撃UP）
- ・メギドラオン（万能／敵全体・威力：大）
- ・大暴れ（打撃／敵全体・威力：中）⇒アカシヤアーツ（打撃／敵全体・威力：大）
- ・プララヤ（貫通／敵全体・威力：特大・確率で恐怖付与）

ある意味で千影の最終兵器的存在。補助魔法で味方を強化&敵を弱体化させたあと、破壊力の高さでひたすら相手を殲滅する戦い方が得意。

特にデットリーバーンは、炎耐性を持たない敵や弱点にしている敵を一掃するのに長けている。ただ、体力・魔力共に消費が激しすぎるのが難点。

すぐに息切れしてしまうので、アイテムの準備や使いどころを考える必要がある。ノリ的には、アイギスのオルギアモードに近いのかもしれない。

0. 開幕ベルを鳴らすだけの簡単なお仕事

0—0. ベルベットルームを蹴破るだけの簡単なお仕事

人気がない裏路地で、藍色の髪の青年は、ひとりジャンプを繰り返していた。とーん、とーん、とーん、とーん、と、ローヒールブーツが煉瓦を叩く軽やかな音が響く。まるでそれは、運動前のウォーミングアップに似ていた。

その動きに合わせて、左耳だけにつけられた星のイヤリングがしやらしやらと揺れる。彼の視線は、青く薄光りする扉に向けられていた。何のタイミングを計っているのか、それはきつと、この場にいる青年自身にしかわからないであろう。

そして――

「バイオレンスにこんにちわ、イゴオオオオオオル!!」

充分に助走をつけた後、彼は迷うことなく扉めがけて飛び蹴りを叩きこんだ。

【0—0. ベルベットルームを蹴破るだけの簡単なお仕事】

ぶちぬかれた青い扉は不自然に凹んでいたものの、何事もなく元通りに設置されていた。この部屋の仕組みは相変わらずハイテクじみているとつくづく思う。

部屋の主は所在なさ気に椅子に座っている。心なしか縮こまって震えているように見えなくもない。ついでに、奴は一切こちらに目を合わせようとはしなかった。

老人の口は確かに「お久しぶりですな」と言ったが、その表情は「二度と来ないと思つてたのに」としつかり語っている。奴の頬がげっそりしてた。こつちだつて二度と来ることがないと思つていたのだ。お互い様らしい。

脇に突っ立っていたベルボーイがおどおど視線を彷徨わせているのが目に入った。おそらく、主がここまで追い詰められている光景を見るのが初めてなのだろう。そして、*“*かつてのお客様*”*が *“*あの時のお客様*”*と関わっているという事実も。

久々に足を踏み入れたこの部屋は閑散としていた。ピアノもアトリエもない、ただ椅子とテーブルと柱時計があるだけの小さな部屋。

部屋を見回したが、住人は彼等しかいないようだった。こんな小部屋に男2人とは――随分とむさくるしいと言うか、寂しい光景である。

「^{ペラドンナ}歌手やピ^ナア^ナニストたちはどうした？ ……まさか、リストラ？」

「……………彼らは『成すべきことを成すため』に、この部屋を後にしました。しばらくは戻ってこないでしょう」

「……………ふーん。ならいいや。このご時世にリストラなんてされたら、流石に辛いだろうよ」

部屋の主は居心地悪そうに、そつと自分から視線を逸らした。どうやらあの3人は事実上の『お暇』を出されてしまったらしい。可哀想に。

ベルボーイは首をかしげている。自分以外にも住人がいたことに、純粹に驚いているようだった。部屋の主にちらちら視線を送っている。

きつとこの老人は、ベルボーイの問いにも曖昧にはぐらかすのだろう。自分は無意味にそう確信できた。理由など知らない。

老人はベルボーイにアイコンタクトをとる。「余計な質問をするな」と言った所か。ベルボーイが見るからにしよげたから、おそらくそういう意味での視線だったのだろう。

2人をしばし見つめた後、自分はテーブルの上に置いてあつたグラスに手を伸ばした。慣れた手つきで氷を入れて、水差しから水をなみなみと注ぐ。

勝手知つたる他人の家——もとい、勝手知つたる自分たちのベルベツトルームだ。御影町の事件や珠？瑠市での一件で何度も出入りした経験がある。住人の数が減つても、物の置き場所はある頃から変わっていないらしい。

グラスの水を一気に飲み干し、テーブルの上に叩きつける。きつと自分の眉間に浮いた皺は数割増しになっているだろう。

今までのこととこれからのことを考えると頭が痛い。気を抜けば、色々なものに押しつぶされてしまいそうになる。畜生、胃まで痛くなつてきたぞ。

「して、何用ですか？ 貴方様はもう——「珠？瑠の一件でイケメンに整形した元・骨格崩壊肩幅なパピヨンマスクと最近変なものに感化されつつある絶望大好きな這い寄る黒い触手プレイのタッグによる、人類を使った壮大な実験」

「——たぐ——」

「その生贄として白羽の矢が立ったのが妹分だったんで、俺が奴らの実験によって奪われたあの子の未来を取り戻すために色々やろうと計画してたんだ。……そしたら、それに気づいたパピヨンマスクと這い寄る何かが、その影響を受けるであろう『俺』の行動を実験対象として選んだっつーだけの話だよ」

「……ああ、成程。かつての『主』と『這い寄る混沌』絡みですか」

老人は最初呆気にとられたようだが、自分の言葉が何を指しているかは一瞬で理解できたようだ。

流石は人類で実験していた奴の元・部下的存在である。いや、そもそもこの部屋に足を踏み入れた直後からこんな風に言っていたからだろう。特に前者。

パピヨンマスクの質問に名前を答えた後、真つ先に「あなたの間接はどこですか？

そもそもその体格はおかしく不是吗？（意識）」と問いかけたのは、今でも鮮明に覚えてい

る。その後このネタを引っ張っては、弟や仲間達から突っ込みを入れられていたっけ。特に、皇帝のアルカナを所持する弟と法王のアルカナを所持する御曹司から。

ああ、懐かしきわが青春。あの頃はこんな目に合うだなんて、微塵も予想できていなかった。

普遍的無意識の表裏一体存在に目を付けられたのが運のつきなのか。

もつとも、人生そのものが青春だと思っている自分に見れば、それもまた青春の1ページにすぎないのだけど。

物語はまだまだ続く。そして、パピヨンマスクと這い寄る何かによる人類実験も、だ。勿論、這い寄る何かもたらす「破滅と絶望」に屈するつもりは毛頭ない。

だからといって、パピヨンマスクの「証明」に、ただ使われてやるつもりも毛頭ない。むしろ、普遍的無意識どもの思惑通りになど動いてやるものか。動かしてなんかやらない。

決意を新たにグラスを煽る。2杯目の冷水は、一気に喉を通り過ぎた。

「ウチの可愛い可愛い妹分にお前らが接触したことはわかってるんだ。……言い逃れはさせないぜ、イゴール？」

「……………相変わらず、貴方様は恐ろしいお方ですなあ。空本そらもと 至様いたる」

「お前、本当は悪魔にも適正あるだろ」と。悪魔と塔のアルカナを所持する友人が、そう言いながら浮かべた苦い表情。

目の前にいる老人——イゴールと、奴の傍に控えていたベルボーイは、丁度その友人

と似たような表情を浮かべて自分——空本至を見ていた。

——これは、ひとつの可能性。

『生きてみたいと思ったんだ』

桜吹雪の舞う学校の屋上に、少年の声がこだまする。

『お前が、俺を生かしてくれたんだぞ』

なのになぜ。

少年の嘆きがこだまする。

『なあ、いつまで寝てるんだ。……起きろよ』

少年は少女を抱きしめていた。

彼女は、彼の声に反応する様子はない。

『一緒に学校行つてやるから。お前の行きたいところ、どこでも連れてつてやるから。お前の好きなモン、なんでも作つてやるから』

『もう二度と、お前を置いて、勝手にいっちまったりしねエから……』

だから、と。

少年は少女を抱きしめる腕に力を込めた。彼女の左手首に巻かれた腕時計の針は、既に止まっている。

まるで、時を刻むことを止めてしまったかのようだ。……否。もう、少女が時を刻むこと——未来を生きることはない。

その事実を、少年は認めなかった。認めたくなかった。認められるはずがなかったのだ。

『……頼む。……俺を置いて、いくなよ……!』

悲痛な叫びが、こだまする。

少年は、自分が少女を置いて行くとばかり思っていた。自分がいなくなった世界でも、少女が生きていてくれるとばかり思っていた。

それ故に、*“自分が置いて行かれる”* 可能性など微塵も考えていなかったのだ。*“彼女がいけない世界”* など、存在するとすら思わなかった。

しかし無情にも世界は示す。残酷なまでに、少年につきつける。『彼女の死は、どうしようもないことなのだ』——と。

響く慟哭。変えられない運命。

少年が抱えていた唯一の想いは、大切にしていたかった想いは、彼の手から零れ落ちて消えていった。

——これは、ひとつの可能性。

『ねえ、どうして』

桜吹雪の舞う学校の屋上に、少年少女の嘆きがこだまする。
彼らの視線の先には、穏やかな微笑を浮かべて寄り添う恋人たち。

『2人とも、いつまで寝てるの? ……起きてよ』

肩をゆすろうと伸ばしかけた手は空を彷徨い、誰も何もできやしない。

寄り添う2人は、まるで完成された美術品のような神々しさを放っている。

故に、うかつに触れられないのだ。触れてしまえば、何もかもが崩れてしまいそうで。

呆然と2人を見つめる少年少女の眼前を、青い蝶の群れが飛んでいく。どこか遠くへ、飛んでいく。

幻想的な光景。神聖にして誰も犯せない、あまりにも美しく尊いもの。まるでそれは
“絶対の運命”とでもいうかのように、彼らの前に突きつけられる。

『寄り添う2人が永遠の眠りにつくのは、どうしようもないことなのだ』——と。

『ねえ、どうして』

『2人は、生きて幸せになることが許されないの』

2人を見守りつづけた仲間たちの慟哭。運命に対する問いかけ。それに答えるべき存在は、どこにもいない。わかっている、彼らは問いかけずにいられなかった。

——その可能性を、胸に抱いて。

——新しい可能性を、そして未来を切り開く。

「……おい、いいのか？」

「当たり前じゃないですか、至にいさん。……そもそも、僕を置いて行こうなんて水臭いんですよ。直接的に血が繋がってなくとも、僕たちは家族でしょ？」

「チカ……」

暗闇の果て、普遍的無意識の宇宙。モナドマンダラの最奥に、至と青い髪の少年——
国光^{くにみつ} 千影^{ちかげ}が佇んでいた。

感極まって口を真一文字に結んだ至に、千影はただ穏やかに微笑み返す。その瞳に

は、ゆるぎない決意が燃えている。

2人は顔を見合わせ、頷き合う。もう、言葉はいらなかった。

浮かんでは消える心の光。映し出されるのは、少女を想う人々の姿。

あるいは、少女と彼女が愛した男を想う人々の姿。

『こんな運命など認めない』『生きて、幸せになつてほしい』——彼らの声が、悲痛なまでに響き渡っていた。

「その嘆きを、その叫びを、その想いを、受け取ろう」

彼らは静かに手を上げる。

足元から青い光が立ち上り、どこからともなく風が吹き荒れた。

「そして、新しい可能性を——ここに示す」

その言葉と同時に、タロットカードが浮かび上がる。愚者から世界までの絵が描かれたそれらは、鮮やかな光を放った。

眩いばかりの閃光。この場が青に覆い尽くされたと思つた刹那、弾けるようにして――

—消える。

光が晴れたモナドマンダラ最奥にはもう、2人の姿はどこにもなかった。

0—1. 巖戸台へ足を踏み入れるだけの簡単なお仕事

2009. 5 / 10 昼間

あねはづる⇒巖戸台駅

車内アナウンスが到着を告げる。

意識が覚醒し、至は目を瞬かせた。隣を見れば、千影がうつらうつらとまどろんでいる。

……何か、形容しがたい夢を見ていた気がする。どんな夢だったのか、その詳細を思い出すことはできなかった。

(やだな。俺、まだ年じゃねーつてのに)

27歳が世間一般でいう「年」に当たるものか、至はよくわからない。同年代の連中はどう思っているのだろうか？ ちよつとした疑問である。

などと、とりとめないことを考えている間に千影も目覚めた。まだ眠そうな目をこす

りつつ、棚から荷物を下ろす。

ごった返す乗客の波をかき分けて改札口をくぐり、そのまま外へ出る。降り注ぐ太陽の日差しが目に染みて、思わず手で遮った。

「0—1. 巖戸台へ足を踏み入れるだけの簡単なお仕事」

「先日のモノレールオーバーランの影響でダイヤが乱れたって聞いた時は、どうなるかと思ったんだがな」

「そうですね。どうにか元通りになって、予定通りに到着出来てよかったです」
「ここに来るのも10年ぶりかー……」

巖戸台に足を踏み入れたのは、可愛い妹分・要かなめ 陽向ひなたの両親が亡くなった時の葬儀以来だ。

あの時の親戚連中の態度は、思い出すだけで腸が煮えくり返りそうになる。

誰が陽向を引き取るかでもめにもめた拳句、本人に対して暴言を吐いた親戚連中。

それに耐えられなくなった陽向が起こした家出事件。でも、奴らはそんなのお構いなしで議論ばかりしていたのだ。

彼女を探しに行つたのは、至と千影だけだった。他の奴らは一切探しに行こうとも、陽向を心配するそぶりすらなかった。

遺産が目がくらんだ大人たちなど信頼できない——あの一件があつたから、至は陽向を引き取ろうと思つたのだ。

あの子の後見人になるのは本当に大変だった。

親戚たちと繰り広げた戦いの日々を思い出しかけ、ふと至は思い返す。

「……そーいや、長鳴神社で会つたあの男の子、元気かな」

「ああ、ひなを励ましてくれた男の子のことですね？」

元気だといひですなえ、と、千影は懐かしむように目を細める。

陽向が家出した事件には、ちよつとした続きがある。陽向を探し回っていた至たちは、やつとの思いで長鳴神社にたどり着いた。

あの子が遊び場にしていそうな場所として浮かんだのが、あの神社。子どもの行動範囲を考えて消去法を駆使した結果である。

果たしてそこに陽向はいた。心配して捜してたと至たちが告げれば、陽向が泣きながら抱き着いてきた。そのまま自分たちも泣いていたっけ。

そして、その光景を何とも言えなさそうに見つめる視線に気づけば、安堵すればいいのか困惑すればいいのかわからなさそうにしている少年と目があつた。

陽向日く「お兄ちゃんが一緒にいてくれた」らしい。「あのお兄ちゃんの言った通り、私の事を心配してくれる人がいた」と。

どうやら彼は、「自分を心配してくれる人なんていない」と絶望していた陽向を励ましてくれていたようだった。

そのことに礼を述べれば、彼は照れたように視線を逸らす。言葉遣いはぶっきらぼうだったけれど、とても優しい心を持っているように見えた。

しばらく話し込んでいるうちに夕方になったので別れた。彼とはそれっきりになつてしまったが、元気でいてほしいな、と至は思う。

できれば、もう一度会つて話したい。

「いつか、会えるかな。……会えたらいいなあ」

小さく呟きながら、至は踏み出す。千影もまた、うんうん頷きながら歩みを進めた。新居にして新しい拠点に向かうために。——そして、この街に渦巻く“何か”を明らかにするために。

ごつた返す人々が交差しあう。

ニット帽とコートを着込んだ少年が彼らの横をすれ違ったが、2人は気づかなかつた。

同時に、その少年もまた、至や千影とすれ違った事に気づいていなかった。彼らの運命が重なるのは、もう少しだけ先の話である。

\$\$\$

少し、時間を巻き戻して——

2009. 4/23 昼間

南条コンツェルン本社／ペルソナ研究部門の研究室

「——巖戸台？ ……随分急な話だな」

至と瓜二つの顔をした青年——双子の弟・藤堂とうどう航は、物珍しそうに振り返る。唯一彼が自分と違う部分があるとするとするなら、右耳だけにピアスがつけられていることだろう。

双子にもかかわらず苗字が違うのは、所謂「大人の事情」というヤツだ。はつきり言えば、幼少時代に両親が離婚したのが原因である。自分たちは別々に引き取られたが、両親に内緒で、自分たちだけ交流を深めていた。

表だって堂々と話が出来たのは、聖エルミン学園に入ってからのことである。それについての説明は、今は割愛しよう。

研究ばかりで徹夜し続けたためか、航は大きなあくびをして椅子に腰かけた。目の下には黒いクマが刻まれている。

首にかけられているのは「ペルソナ研究部門：主任・藤堂航」と書かれた名札。名前の脇には、南条コンツェルンの社章が描かれていた。

航の職業は、ペルソナに関する研究を専門としている研究員だ。同時に、若くしてペルソナ研究の権威的存在でもある。

「あそこは桐条グループのお膝元だろう。あちらでは独自に研究を行っていると聞いたが……」

「けど、その研究結果はすべて向こうが独占してる。協力体制しいてるにも関わらず、南条側に提示されるのはほぼわずかじゃねーか。こつちが向こうに提供した『黄昏の羽』と『月のかけら』の研究報告だって、なんか胡散臭いんだよな。書類に改ざんした形跡が見られる。」

……おまけに、桐条んトコの先代が『2つのオーパーツを全て引き取って調査した』って申し込んだきたのは、南条コンツェルンから『あのシステム』に関する技術漏えいが発覚した時期と一致してるんだぜ？

終いによあ、当時の実験記録——もとい、人工島計画書文を持っていた元・研究員からそれを譲り受ける約束をしてたんだが、そいつが不審な死を遂げちまった。遺品を調べてみても、その書類が見つかったという報告はない。むしろその存在自体がなかったことにされてやがる。……絶対怪しいだろ、コレ」

「……成程。偶然にしては、出来すぎている気がするな」

ふむ、と、航は顎に手を当てる。他にも思い当たる点はあるらしい。

情報漏えい疑惑の2年後に起きたのが、陽向の両親が亡くなった忌まわしい「事故」。

当時の資料を見てみたが、あれは本当に「事故」だったのか——正直、至は信じていない。

「まあ、確証に近いモンを得たのは、月光館の寮に入った陽向からの情報なんだから」

至はくしやりと前髪をかきあげ、大きくため息をつく。そして、陽向がくれたメールをコピーしたものを航へ手渡す。

その文面を眺めていた航の表情がみるみる変わっていった。何か恐ろしいものを目の当たりにしたような眼差しを至に向けてくる。

巖戸台分寮で暮らす面々の共通点と、自分が関わることになった出来事。ペルソナの覚醒と、桐条バックアップの元に構成された組織——放課後特別活動部。

正直この一件が無かったら、きっと自分は「巖戸台に出向こう」などとは思わなかった。

桐条という大きな会社が必死になって隠そうとする「何か」に、気づくこともなかっただろう。

至はおもむろにポケットからタロットカードを引つ張り出す。適当に山札を切つて、上から順番に3枚カードを引いた。

出そろつた絵柄は運命、塔、死神——それら3枚の柄を睨みつける。それは、可愛い可愛い妹分に迫る「試練」の暗示だった。

普遍的無意識もとい人類実験に興じるバカ2人によつて与えられてしまった未来・可能性予知は、ぼんやりとしたヴィジョンしか見えない。

けれど、至はそれだけわかれば充分だった。

可愛い可愛い妹分が、ペルソナがらみの事件に巻き込まれている。おそらく「試練」とは、それにかかわる出来事なのだろう。

己が何をしなければならぬのか——これで、決まったも同然。至は歯噛みする。

「……桐条宗家の人間は、全てを知ってるのか？」

「知ってるんだろうな、「ある程度までは」。全て知ってたんなら、ご当主様や次期当主様が黙つちやいねーだろ」

特に前者が。

航に聞こえぬようその言葉を飲み込みながら、至は窓の景色へ視線を向ける。高層ビルであるが故に、ここはとても眺めがいい。町全体を見渡すことが出来る。

研究に根詰めた後でこの景色を見れば、気分が晴れるに違いない。普段だったら、そうに違いないのだが。

今の自分の気分は、雲一つない青空とは全く対照的なものだった。

(武治さんや美鶴ちゃんが隠ぺい工作してるように思えないんだよな)

圭によって引きずり出された社交界で出会った、凛々しい親子の事を思い浮かべる。

最後に顔を合わせたのは、娘の美鶴が中学を卒業した頃だろうか。

その数か月前の会合では『会場がテロリストに乗っ取られる』なんて事件があり、「君がいなければ美鶴が危なかった」と武治に感謝されたこともあった。

正直大したことはしていない。自分はテロリストの隙について動いただけだ。ぶつちやけその隙と言うのは、「偶然鳴り響いた携帯電話の着信メロディがサトミタダシのうただった」——ただそれだけのことなのだ。

誰の携帯電話か。無論、至の携帯電話である。……もちろん、この事実は公にされる

はずがない。こんな間抜けな事実など公表されてたまるものか。至は苦笑する。

逃げるように湧いた思考回路を引き戻し、至は航の方に向き直った。

航も同じように、至へと視線を向ける。

そして——顔を見合わせ、頷いた。

「ちよつと、南条くんに掛け合つてみようかなと思つてんだ」

「わかつた。俺からも頼んでおこう」

「渋つたら、大音量でサトミタダシのうた流してやろうぜ」

「やめろ。圭が発狂したら面倒なことになる。特にヤマオカさんがキレるだろ」

「あの人、まだ南条くんのペルソナやつてんだ」

「しかも現役だぞ。おまけに最近、メギドラオン覚えたみたいだし」

「やだヤマオカさん素敵。愛があれば、最強技のひとつやふたつ覚えられるつてか」

「おい藤堂。この間の件だが——……って、いたのか空本」

くだらない話に盛り上がっていたら、いいタイミングで本人が降臨した。

0—2. はじめての影時間を体感するだけの簡単なお仕事

2009. 5/10 夕方

巖戸台分寮付近

ふと向けた視界の先に、見覚えのある少女の姿が横切った。

艶やかな深緋色の髪をポニーテールに結び、目が覚めるような猩々緋の瞳を持つ少女。

見間違えるはずがない。彼女こそ、今年の4月から巖戸台の月光館学園高等部へ編入したため、至たちから離れて寮生活を送っていた可愛い妹分——陽向だ。

「おーい、ひな！」

至は反射的に陽向を呼び、左手を挙げる。道路を挟んだ向こう側にいた陽向はそれにあきついたようで、大きく手を振り返してくれた。

彼女には「近々長期の仕事で巖戸台へ赴く」と連絡をしていたが、それが「今日」という事は言わなかった。ちよつとしたサプライズである。

本来だったら、明日に千影が月光館学園に編入することでネタばらしをしようと考えていたのだ。まさか、仕掛ける前に破たんするとは。

こんなに早いタイミング——しかも、巖戸台に足を踏み入れた翌日——で再会するだなんて思わなかった。

ドツキリ企画はおじやんになってしまったが、再会できたのは僥倖だ。彼女の不在が寂しかったのは事実である。

信号機が青になる。それを見計らって、陽向は至たちのいる向こう側へと渡って来た。満面の笑みを浮かべ、ぱたぱたと駆け寄ってくる。

「待ってよ陽向!」「どうしたんだよ? いきなり走り出して……てか、誰? その人、知り合いなの?」——陽向の後を、青い帽子をかぶった少年とピンクのセーターを着た少女が追いかけてきた。

どうやら、友人たちと一緒に寮へ帰る途中らしい。月光館学園の制服や砕けた話口調からして陽向の同級生のようだ。つまり、千影の同級生でもある。それを察した千影が2人に会釈した。

自分たちと陽向の関係、どうして自分たちが巖戸台へ来たかをざつと説明する。千影

が明日から月光館学園に編入することを告げれば、2人は目を輝かせて食いついた。

「俺、順平！ 伊織 順平っていうんだ。困ったことがあつたら何でも相談に乗るぜ！

気軽にジュンペーって呼んでくれよ」

「アンタじゃ役に立たないでしょ？ ……ああ、あたしはゆかり。岳羽 ゆかりっていうの。よろしくね」

「はい。よろしくお願ひします」

綺麗なお辞儀で斜め45度。我が義弟の特技である。

あまりの美しさに、帽子の少年——順平とセーターの少女——ゆかりが呆気にとられる。そのまま、2人はおぼろおぼろとお辞儀し返した。

流星に綺麗なとまでは言わないが、千影に触発されたらしい。「相変わらずチ力は姿勢がいいね」と陽向は笑っている。

明るく朗らかな陽向が太陽ならば、穏やかで物静かな千影は月だと至は思う。この2人は正反対の性格だが、仲はとてもよかった。

方や遠い親戚、方や従姉の息子。血の繋がりは薄い、至たちは「家族」である。友人たちからは「本物の家族以上だ」とまで言われたほどだ。

理由は何であれ、近場に3人揃ったのだ。きつと明日から、楽しい毎日が始まる事だろう。

「所で、至さんって大学生なんスか？」

「え？ そう見える？ 俺、これでも27歳なんだけど」

「ウソ!? 全然若い！」

「そうなんだよねー。至兄さんの同級生も『お前無駄に若作りだな』ってため息つくくらいだし」

「双子の弟さんである航兄さんもこんな感じですよ？」

「うわー……そりやすげーや。殆ど詐欺じゃないスか！ アンチエイジング!？」

「ごめんな、特別なことは何もやってないんだわ」

「羨ましい。至さん、男性なのにー」

わいわいがやがや。

陽向の友人と千影のクラスメート候補と他愛のない談笑をしながら、家路につく。

色々懸念はあるけれど。

これから2人が過ごす日々が充実したものであってほしい——至は心の底からそう

願うのであった。

【0—2. はじめての影時間を体感するだけの簡単なお仕事】

同日 夜

至と千影の家／リビングルーム

陽向と別れ、ようやく自分たちの新居へと帰宅する。圭のツテで得た小さな物件だ。しばらくはここが拠点となる。

荷物類の片づけは既にあらかた終了していた。明日から普通に生活を営める状況だと言っても過言ではない。

「いやー、うまかったなあ。はがくれのラーメン！ 噂以上だった」

「あそこは人気店ですから、混んで食べれない事の方が多いらしいです。絶望的かと

思っていたんですがねー」

「二歩間違えれば羽生蛇蕎麦の味そのものですよー」なんて、千影が苦笑する。確かにあれはそういう代物だ。至も頷く。

1976年の8月2日に、土砂災害で流された村。その村に伝わる郷土料理——それが件の羽生蛇蕎麦だ。

文字通りの蛇足ではあるが、類似品兼郷土料理として羽生蛇ラーメンなるものも存在する。

作り方の手順は大体一緒。茹でた麺に、甘辛く味付けされたスープを絡める所までは、ごく普通の中華風麺だ。

ただし、最後の最後にとあるブツを投入する。朝食のパンに塗るもので、その中でも赤いものだ。オレンジでもブルーベリーでもない——イチゴジャム。

初めてその料理を目の当たりにしたとき、「おばあちゃんは俺の事嫌いなのかな」と真剣に悩んだことがある。

至の父方の祖母は羽生蛇村出身で、この郷土料理2品が1番の得意料理だった。今や天に召されてしまったものの、この料理の作り方は至に引き継がれている。

味がうまかったからではない。完全に「嫌がらせ」や「罰ゲーム」に特化したメニュー

として、である。

ちなみに、食べてみた時の味は、両品とも「どうあがいても絶望」という言葉が似合う味だった。つまり、とんでもなくマズかった。これを食べてから1時間後の記憶が全てすっぽ抜けてしまうほどに。

その記憶は未だに帰ってこない。食べるたびに記憶が飛ぶので、もう諦めてしまった。

最近はおつぱら「記憶が飛んだ」仲間を作るのに勤しんでいる。勿論、仲間たちから怒られたが。

（文字通りの「阿鼻叫喚図」だったなあ。抱き合わせて冬木の泰山麻婆も出したから）

劇物との出会いは、両親が離婚する少し前の事だった。観光と親戚への挨拶を兼ねた冬木旅行。昼食時に立ち寄ったのは、とある中華料理屋だった。

店内はほどほどに人がいて、自分たちは窓際の席に腰掛けたことを覚えている。ふと、自分たちの左隣へと視線を向けたこと——それが、あの外道麻婆を初めて拝んだ瞬間だった。

件の麻婆豆腐を普通に食べる神父も凄かったが、興味本位に口を付けてぴくりとも動

かなくなった人間も見た。どちらかといえれば後者の方が衝撃的だったと至は思う。

勿論、泰山麻婆も至の「嫌がらせ」や「罰ゲーム」に特化したメニューとして殿堂入りした。同時に、その3品は至の得意料理である。

それら合わせて「どうあがいても絶望・3点セット」——現場に居合わせた舞耶にそう言わしめ、克哉とパオフウを一撃で沈めた3品だ。

ついでに人類実験に興じるバカ×2にも効果があり、顔面に叩きつけられたり口の中に入れられた暁には、しばしのた打ち回っていたか。

その隙をについて「今だ、やっちまえー！」と総攻撃の合図を出したのは、きつと何も間違っていない。それでもしなけりや勝てなかつたし。

他にも、色んな相手に対して食べさせていたなどと思い至る。ついでに、奇抜なメニューはすべて「嫌がらせ」や「罰ゲーム」用料理として次々に習得していった。

それらも今となつては同窓会や忘年会の主役となつた。活躍頻度はけっこう高い。最近では脅しにも使えるようになった。本当に便利なものである。

圭や英理子、麻希や秀彦らは何か言いたげな目をしてこちらを見ていたが、料理を作るたびにキッチンを爆破させる航よりはマシではないかと思いたい。この前も、泊まり込みの研究員用にあてがわれていた部屋のキッチンを吹き飛ばしたし。

そんな事を考えつつ、至はテレビのスイッチを入れる。丁度、秀彦が司会を務める

トーク番組の真つ最中だった。

ゲストは *musese*、久慈川りせ等のアイドル達。その中には少々場違いだが、ヴィジュアル系バンドのボーカル・ミッシェルもいる。

「おーおー、ブラウンも頑張ってるなー」

高校時代の仇名にして、秀彦の芸名を眩く。かつて彼の弱味そのものだったこの仇名、今では秀彦の愛称として親しまれている。本当の意味での「愛称」として、だ。

当時、由来の事など全く知らなかった至は「ブラウンって仇名なのは、秀彦の髪の色がきれいなブラウンだから」だとばかり思っていた。ついでに彼にそれを言ったら、ちよつとだけ泣きそうな顔をされたのを覚えている。

今はその由来も秀彦の葛藤も知っている。そして、そのトラウマを乗り越え、未来に向かつて歩き出している事も。秀彦がブラウンという芸名でデビューしたことがその証明である。他の仲間達——正男やゆきの、玲司や優香たちだって同じだ。皆、それぞれの道歩んでいる最中なのだから。

他にも、この中で見知った面々はある。しかし、それを言葉に出すことはしない。

懐かしさの中に感じた一抹の寂しさを持って余すように、至はぼんやりとテレビを眺め

る。

しばらくした後で時計を見れば、もうすぐ11時だ。明日から学校である千影に視線を向ければ、彼は既にパジャマに着替えた後だった。

至が何を言うかなどお見通しだったようで、千影は「そろそろ僕は寝ます。おやすみなさい、にいさん」と挨拶して、あてがわれた部屋へと向かう。

その背中を見送り、再びテレビへと視線を向けた。秀彦が番組の終了を告げ、スタッフや出演者一同の名前が書かれたテロップが流れていく。

ムーディなBGMが響く。画面に大きく「来週もお楽しみに！」というテロップを最後に、トーク番組は終了した。ぱっと画面が切り替わり、次々にCMが流れていく。

時価ネットたなか、ジュネス、サトミタダシ——耳に残るようなメロディを聞き流しながら、ただぼんやりと画面を眺める。そうこうしているあいだに、時刻はもうすぐ0時になりそうだ。秒針が動く。

カチ、カチ、カチ、——ポーン。

壁掛け時計が0時を告げたその瞬間、世界が一変した。

——影時間・開始——

突然テレビが消えた。間髪入れずに部屋の蛍光灯も消える。

……いや、テレビや蛍光灯だけでなく、ありとあらゆる電子機器が一齐に沈黙したのだ。何の前兆も無しに。

（——停電、か？）

近場に置いたラジオに手を伸ばすも、ラジオも無言のまま。うんともすんとも言わなかった。

最近購入したばかりの最新機なのにおもいつつ、至は大きいため息をつく。引越して早々、こんな面倒事に巻き込まれるなんて。

トラブルに首を突っ込んでしまったり、直接的だろうが間接的だろうが厄介ごとの片棒を担いでもあったりする——それが、自他ともに認める空本至の難点だ。

今回の一件が厄介ごとで面倒事でもあることは認めていたものの、踏み入れてすぐに

直面することになるだなんて思わなかった。しかも、こんな形で。

ここまで大きな停電騒ぎなら、地方新聞やら他県のワイドショーやらで取り上げられてもおかしくないレベルだろう。

明日の一面はこれで決まったな、などと思いつつ窓を見る。

不気味な光が、カーテンの隙間からこぼれていた。……何やら妙に明るい気がする。

立ち上がってカーテンを開ければ、外の光景がはつきりと見えた。

どこか緑を帯びた黒雲の向こうに、大きな月が浮かんでいる。満月から少しだけ欠けているが、肉眼で見るとはあまりにも大きい。

ぼつかりと浮かんだ月は不気味な光を湛えていた。この明るさならば電灯は不要だろう。しかし、月明かりにしては妙に明るすぎやしないか。

ふと周囲に視線を向ければ、街の至る所に沢山の「何か」が佇んでいる。大ききにはばらつきはあるものの、棺のようなオブジェであるのは間違いない。

「……なんだコレ……!?!」

あまりの光景に、至はごくりと生唾をのむ。

異界化した御影町や噂によってとんでもない事になった珠? 瑠市の様子や出来事も

アレだったが、この光景もそれに匹敵するくらいインパクトがあった。

初見の動揺を場数での経験でどうか抑え込み、冷静に考える。——おそらく「コレ」が、陽向の言っていた「影時間」なのだろう。

「ペルソナ使いは影時間への適性がある」というのは陽向のメールから知っていたが、自分にもその適性があるかどうかの自信は一切なかった。

知覚できぬ25時を通常と変わらず自由に動ける人間。どうやら、至もその人間の一人として認められたらしい。

正直あまり嬉しくないのだが、それは至の追いかける「謎」への手がかり。至が知りたいと望む、真実に触れるための最低条件なのだ。

『真実への扉は開かれた。さあ、進むがいい。そして、人の可能性を示せ』

『絶望への扉は開かれた。……さあ、私を楽しませてくれ』

不意に響いた2つの声に、至は後ろを振り返る。そこには誰もいなかった。

ものすごく吐き気を催すような、速攻で殴りたくなるような2人の声だった。至が嫌う、あのバカども2人の声だった。空耳ではなく、はっきりと聞き取る。

微かに感じた気配に前を向く。相変わらず広がる不気味な光景の中を、一羽の蝶が飛

んでいた。黄金色に輝く蝶は悠然と羽ばたき、月の向こうへと消えていく。

「至にいさん！」

階段を駆け下りてきたのは、少し前に部屋へと戻っていた千影だった。どうやら彼も適性者として認められたらしい。

この異変が「危ないもの」と感じ取ったためだろう。寝間着であることを除いては、竹刀装備の臨戦態勢だった。千影は前の学校で剣道部に入っていたから。

外を見る。棺のオブジェとは別物の、黒く蠢く「何か」が徘徊していた。しかし、奴らは家や建物の中に入ってくる様子はない。なら、動かないでいるのが得策か。

息をひそめて周囲を確認するが、その「何か」はこちらに入ってくることはないようだ。しかし、用心するに越したことはないだろう。

護身用に使っているライフル銃と小型拳銃を持ち、じつと隠れる。至は、千影と顔を見合わせた後すぐに窓へ視線を戻すのを繰り返した。

そんなピリピリした空気の中において、どれくらいの時間が過ぎただろう。

——影時間・終了——

不意に、沈黙していた電化製品が動き出した。蛍光灯の明かりが、消していなかったテレビが、沈黙していたラジオが、次々と点灯し音を出す。

時計の時刻は0時のまま。電気製品の復旧とともに、秒針が動き出す。テレビの時刻は0時を過ぎたまま。先程の影時間など存在しなかったかのように。

否、実際には『存在していない』。だから、どのテレビでも取り上げられることはないのだ。

棺のようなオブジェも、普通ではありえない大きさになっていた月も、徘徊していた黒い「何か」も、影時間の終了と一緒に消え失せる。

至と千影は顔を見合わせ、大きいため息をついて警戒態勢を解いた。今回は、もう襲われることはないだろう。

酷く緩慢な動作でテレビとラジオを消し、立ち上がる。明日から始まる新生活に備え、そろそろ体を休ませなくては。

「…………寝るか」

「…………そうですね」

安堵したからか、どつと疲労が押し寄せる。首をもたげ始めた睡魔に従い、2人は寝室へと足を進めたのであった。

\$\$\$\$

2009. 5/11 朝

至と千影の家／ダイニング

本日から新生活が始まる。目覚めは、正直言つて悪くないと思う。

昨日の気疲れさえなければ、きつと最高の目覚めだった。至は心の中でひとりごちながら、手早くスクランブルエッグを完成させた。

その隣では、千影がサラダとフルーツヨーグルトを作っている。もうすぐ完成しそうだ。この分なら、同時に出来上がるだろう。

至がスクランブルエッグを盛り付け終えたのと、千影が盛り付けを終えたのは同時だった。今朝の料理は洋風だ。

カリカリに焼いたトーストとベーコン、インスタントで作ったポタージュ、ふんわりしたスクランブルエッグ、瑞々しい野菜のサラダ、缶詰にされた白桃を切って入れたフルーツヨーグルト。

2人は顔を見合わせ、互いの仕事を讃えるかのようにハイタッチする。そして、至は自分局のコーヒーと千影用の紅茶を淹れた。出来上がった紅茶を手渡す。

「いただきます」

他愛のない会話をしつつ、朝食を食べ進める。テレビのニュース番組にチャンネルを合わせれば、最近この周辺で起こっている謎の病気が紹介されていた。

無気力症。ある日を境にして、突如人が無気力になってしまうという病気らしい。専門家はストレス性のものだと言っているようだが、その割には患者が多いという。

（重病人の場合は、立つて歩く事や会話も困難になるのか。……ストレス性でここまでなるモンかねエ？）

そういえば、セラピストとして独立した麻希も「最近の患者さんがおかしい」と言っていた気がする。

彼女が手を焼いている患者の特徴は、先程テレビで紹介された無気力症と一致するのだ。何やらキナ臭くなってきたぞ。

今度、その患者の容体や状況を詳しく聞いてみるべきか。珠？瑠で起こった事件で発生した「影人間」や「JOKER化」に近いものを感じる。

刑事になった達哉も、「行方不明になった人間が無気力症になった状態で発見される」ことに悩まされているらしい。この情報は克哉経由で聞いた。

今のところは巖戸台を中心に行方不明になっているようだが、達哉の管轄先にもぼつぼつ現れたそう。爆発的に増えたら面倒な事態になるだろう。

情報をまとめ次第、圭や航たちに報告しておこう。

そう結論付け、至はトーストにマーガリンとマーマレードを塗る。千影はピーナッツクリームを塗ったトーストに齧りついていた。

テレビを流し見つつ、2人は朝食を食べ終えた。「行ってきます！」——威勢よく挨拶

をして、家を出ていく彼の背中を見送る。

「——さて、俺も頑張ろうか」

何を頑張ればいいのかなど、皆目見当もつかない。けど、自分のすべきことは巖戸台にある。

至は漠然と、そう感じていた。何の確証もないが、そう確信していた。

(……航の奴、朝食作ろうとしてキッチンを吹き飛ばしてなきやいいけど)

至がそんな事を考えていた丁度その頃、南条コンツェルンの研究室——正確に言えば、研究室のすぐ隣にある宿直用の部屋に備え付けられていたキッチン——が爆発・炎上している真つ最中であつた。

0—3. ひっそりとフラグを立てるだけの簡単なお仕事

2009. 5 / 23 夜

巖戸台寮

『わかりました。戦いに協力します』

ですが、と、少女は言い添えた。猩々緋の瞳がまっすぐに自分を見返す。宿る意志には一切の揺るぎがない。

『先輩、一つだけ言っておきます。私は貴女たちを“完全に”信じたわけではありません。だってそうでしょう？ シヤドウとの戦いは、“いつ終わるかの目処が立っていない”。そんな不透明で、しかも最悪の場合、命を落とすかもしれないですよ？

普通の人間だったら、そんなののために命を賭けるなんて絶対に嫌ですよ。だって死にたくないですもん。訳が分からないまま巻き込まれて、訳が分からないまま使い捨て

られるなんて、それこそゴメンです。私は兵士になるために月光館（くわくかん）に来たんじゃない。……それでも私は貴女の「駒」になるんです。相応の見返りを求めることは間違っていないはずですよね?』

鋭く細められた猩々緋。どこまでも冷徹なそれは、容赦なくこちらを貫く。

朗らかで活発な少女からは予想できない表情と言動。爪を隠していた鷹が、ここぞとばかりに鉤爪を光らせたかのようにだった。

その眼差しに、いつぞやの「彼」の面影を見た。

とある会合の際、会場がテロリストに占拠された時のこと。誰かの携帯電話が鳴り響き、奴らがその音楽に気を取られた瞬間。その隙をついて、「彼」は自分を救い出してくれた。

あれは文字通り「捨て身」だったと言っている。もし、何かが一歩でも間違っていたら……。「彼」はこの世にいなかったかもしれないのだ。

少し明るい藍色の髪と左耳のイヤリングを揺らし、暗い深緋色の瞳を鋭く細める。記憶の中の「彼」は、切迫した状況にもかかわらず、微かな笑みを浮かべていた。獲物を捕らえた鷲が一気に急降下する——そんなイメージを連想する。

何故自分は、陽向の眼差しから「彼」を連想したのだろう。彼女の後見人について

は、南条側からの厳しい睨みのせいで詳しく調べられなかった。

空白と黒塗りだらけの資料から読み取れたことは、後見人は南条側の重鎮・あるいは重鎮クラスと同格の保護を受けている人間なのだということのみ。

（確か、要は「後見人のツテ」から月光館こちからに来たのだったな……）

もう一度資料を読み返し、確認する。やはり、新たな情報は掴めそうにない。

「先輩、ただいま帰りましたー！」

「！ ああ、おかえり」

返ってきた陽向にばれないよう、慌てて資料を隠す。幸い、テレビに夢中な順平とソファに腰掛けた陽向は気づいていないようだった。

奥にあるカウンター席に座っていたゆかりが訝しむように眉をひそめるものの、結局追求する様子はない。その事実になんか少しだけ安堵した。

今日はどうする？ と、ごまかすようにして陽向に話題を振る。陽向はしばし考えた後、顔を上げて微笑んだ。

「試験も終わって一息つきましたし、今日はタルタロスにアタックします。多分、先に進めるようになってると思いますし」

「おつ、いいねえ！ ちなみに俺はいつでもいけるぜ！」

「うん。あたしも大丈夫」

「当然だ。この日をどれだけ待ちわびたことか……」

「そうか。ならば準備をしてくれ」

「了解（っス）！」 「ああ、わかった」

返事をし、面々が慌ただしく準備を始める。アバラを痛めて戦線を離れていた明彦も、ようやく復帰できた。

これでタルタロス探索、および攻略もはかどるだろう。一定条件を満たさないと先に進めないようだが、戦力が増えてくれることはいいことだと思う。

——さて、こちらも準備をしなくては。

自分——桐条 美鶴は思考を切り替えるように首を振る。そして、サポート用の機材を準備するために立ち上がった。

贖罪は、まだ終わらない。

【0—3. ひつそりとフラグを立てるだけの簡単なお仕事】

2009. 5/25 夕方

至と千影の家／ダイニング

今日の食卓は純和風にしてみた。人参や茸類と油揚げの炊き込みご飯、焼き魚、具材がたくさん入った豚汁。

豚汁は明日の朝も食べていけるよう、多めにつくつてある。明日の一品は手抜きできるな、などと邪なことを考えながら、至は盛り付けを開始した。

月光館に編入した千影は2—E組になったらしい。F組である陽向たちとは離れてしまったものの、クラスには馴染めたようだ。最近ではよく部活や友人の話を聞く。

年上好きのクラスメートが教師に告白したとか、剣道部の主将と仲良くなったとか、保健室で訳の分からない劇薬を発見したとか——本当に様々だ。

特に、千影自身が立ち上げた料理同好会の話になると、表情が一段と明るくなる。誰も入らないと思っていた所へ、思わぬ入部希望者が現れたからだろう。

その子は料理が苦手らしい。しかし、頑張り屋で努力家なのだそうだ。「山岸さんは大器晩成型だと思えます」とは千影の話である。

今日は同好会の活動日。千影は件の山岸さんと一緒に何かを作っている頃であろう。この前はスイートポテトを作ってきた。

（今日のデザートは、千影が持って帰って来るであろう『同好会の手づくりお菓子』で決まりだな）

千影は同好会の活動があると、必ず活動で作った料理を持ちかえってくる。初日——および山岸さんが入部する前——では、洋梨のタルトタタンを作って持ち帰って来た。味？ 勿論美味しかったに決まってる。

山岸さんが同好会の入部を申し出たのも、千影がタルトタタンを作っていた現場を偶然目撃したかららしい。ついでに蛇足だが、克哉に「弟作。美味しかった」と題して写メールを送ったら、自分も食べたかったという旨の文章と達哉の自慢話が長々と3通帰って来た。

あまりにも長つたらしい文面だったので、昔撮った泰山麻婆の写真を空メールで送りつけてやった。しばらくはトラウマを思い出して悶絶している。大人しくしてくれるだろう。彼は辛い物が苦手だし、泰山麻婆を見ただけで失神しかけた人間である。

脱線したが、話を戻そう。

山岸さんが入部した後、彼女が極度の料理音痴であることが発覚。彼女のレベルに合わせて、簡単なお菓子類を作る活動へとシフトチェンジした。

今はまだクッキーやスイートポテト等の基本的なお菓子を中心に作っているが、山岸さんの料理の腕が上がり次第、少しずつ難易度を上げていく予定らしい。

今日は山岸さんとあんなことを話した、こんな話題になつて盛り上がった……：……：……：そう語る千影は、とてもいい笑顔なのだ。

見ているこっちも微笑ましくなってくる。千影は自分自身の変化に無自覚なのだろうけど、長年一緒に暮らしてきた至にはお見通しだ。

料理同好会の活動が、千影をより良い方向へと変えている。青春まつしぐらだな、なんて至は思った。

体育祭の準備に盛り上がっていたあエルミン学園の校舎で、何の気なしに始めた「ペルソナさま」遊び。それが、至や航たちの運命や人生を一変させてしまった。

あの日、あの遊びを思いつかなくなったら、あの遊びをしなかったら——きつと今、至

はここにいない。他の仲間たちも、今の道を選んでいなかっただろう。

「ただいま、にいさん」

「お、お帰り！ 晩御飯できてるぞ」

「今日は純和風なんですね。今日の料理同好会も和物なんですよ」

そう言つて、千影はビニール袋からタツパーを取り出した。その中には、串に刺された緑色の団子が入っている。今日は茶団子を作つたらしい。

「ナイスチョイス！」と言つて親指を立て、その勢いでハイタッチ。でかしたと頭を撫でれば、千影は照れくさそうに微笑んだ。

「よし、食べるか！ ——いただきます」

「いただきます」

椅子に座つて手を合わせる。

今日の夕食は、とても楽しいものになりそうだ。

\$\$\$\$

2009. 5 / 30

ベルベットルーム

「なんで俺のベルベットルームの入り口は、治安が悪い所にあんだよ」

不満を隠すことなく、至は目の前にいる男を睨みつけた。

蝶を模した仮面をかぶり、人間とは思えないほど不可思議な肩幅を持つ男——もとい、人類実験に興じるバカの片割れである。

今回は、当時エルミン学園の2年生だった至が「あなたの間接はどこですか？　そもそもその体格はおかしくありませんか？（意識）」と問いかけた体型で具現化したようだ。そのせいで、現在椅子に腰かけている奴の体勢はモロM字開脚状態である。気持ち悪いと思ったらありやしない。色んな意味で残念な気分になる。

だいたい足の長さからしておかしいのだ。どう考えても無駄に長い。関節も、普通の人間にあるまじき急角度で折れ曲がる。

それを散々至に指摘ネタにされたから、珠？瑠の一件で再会したときはイケメン仕様にしたのではなかったのか。

そう問いかけたら、ものすごく不服そうにこう言った。「……この姿を、人類が望むのならば」と。

なんでも、イケメンに骨格整形したバカの姿を不快に思った人間たちがゴマンといたらしい。彼らのとても強い要望があったのだそうだ。

ついでに一部の連中は「お前が整形したという事実が気に喰わない」だの「前の方が（ネタ的に）よかった」だのと主張していたらしい。

「何故、括弧までついてるんだ……」と嘆きを叫んでいた、なんてことをイゴールが言っていたような気がする。正直どうでもいいことだ。

話が大きく逸れたので、軌道修正しよう。

夕食の準備中だった至の元へかかってきた一本の電話。電話の主は、目の前にいる男だった。「久しぶりだね」——勿論、即通話を切った。

が、何度切っても、奴はしつこく電話をかけてきたのである。あまりにもうるさかったので出てやれば、突如「話がしたい。ベルベートルームに来てくれないか」と言われた。

そういえば陽向からのメールで、ポロニアンモールに青い扉があったというのを聞いて

ていた。とりあえず千影にメールを送っておき、目的地へ向かう。

ポロニアンモールの裏路地へ足を踏み入れれば、壁が青く発光しているだけで、扉はどこにも見当たらない。

そうしたら、再び奴から電話があつた。どういふ事だと問い詰めれば、

『君専用の扉は別の裏路地にある。ヒントは「治安が悪い所」だ』

携帯電話を叩き折りそうになつたのを堪えるのは本当に大変だつた。ついでに、辰巳ポートアイランド駅までUターンするのも、扉の周囲にたむろする不良どもを追い払うのも大変だつた。

不良たちはどんなに交渉しても退けてくれる様子がなかつたので、とりあえずサトミタダシのうたを流しておいた。ものの数秒で阿鼻叫喚図が出来上がった。

流石は圭に「洗脳ソング」認定された歌である。せつかなので流しっぱなしにしておいた。ここから自分が出るまで、それを止める人間はどこにもいない。

至の回想を読み取つたのか、バカは何か言いたそうにこちらを見てため息をついた。「頼むから、人をバカ表記するのはやめてもらえないか？」——バカをバカと表記して何が悪いのか。

妥協する気はないと言う意味を込めて鼻を鳴らせば、奴は諦めたかのように肩をすくめる。某初号機みたいな動きだ。ういーんがしょん、なんていう効果音が付きそうである。

「要^あ陽向^ちのベルベットルームと君^{きみ}のベルベットルームは別ものだ。君とあの子の『ペルソナ』のルートが違うのと同じこと。それ故に、同じ扉から入ることは不可能なんですね」

「でも、実際同じ部屋じゃねーか。壁で仕切ったついでに、扉を2つに分ける必要性なんて感じられねーつつの。隣にいたベルボーイとイゴールがめっちゃ驚いてたぞ」

「……まさか、何の躊躇なくぶち抜くなんて思わなかったんだ……」

ついでに泰山麻婆を顔面に叩きつけられたり、羽生蛇蕎麦&ラーメンを口に突っ込まれるとも思っていなかった、と奴はもたす。

これだから、もう片方のバカ（主に危険な方）の後手に回る羽目になるのだ。そのせいで弱体化したのだから、自業自得である。

「年を追うごとに手厳しくなっているような気がするのだが」

「お前ら限定だよ。人類実験に興じる普遍的無意識の表裏コンビどもめ。……で、今度は誰で実験するつもりだ？」

「それは君が一番知っている人物だろう。無論、ある意味で、君もその中に含まれるが」

今何か聞き捨てならない事を言わなかったか、このパピヨンマスク。至が睨みつければ、奴は静かに一枚のカードを取り出した。

『我、新たな可能性をここに示す。よつてその対価として、可能性における“いかなる結末”をも受け入れん』——どうやら、何かの契約書のような。

署名欄はふたつ。両段とも、ある人物の名前が書かれていた。一段目には“空本至”、二段目には“国光千影”。

書いた覚えのない契約書である。訝しげにサインを見返すが、それは明らかに自分と千影の筆跡だった。

誰かが自分たちの筆跡をまねたものではない。正真正銘、自分たちが書いたものだ——何の確認もないのに、至はそう直感する。

刹那、頭の中を何か駆け抜けた。

桜吹雪が舞う学校の屋上に響くのは、少女を失った少年の嘆き。あるいは、かけがえない仲間を失った少年少女たちの嘆き。それらの光景を見つめるのは、左耳に星のイ

ヤリングをつけていた藍色の髪的青年と、ヘッドフォンを首にかけた青い髪の少年だった。

『……頼む。……俺を置いて、いくなよ……!』——それは、少年の叫びだった。

『どうして2人は、生きて幸せになることが許されないの』——それは、少年少女を見守りつづけた仲間たちの叫びだった。

『生きて、幸せになつてほしい』——それは、少女と家族のように過ごしてきた者たちの叫びだった。

『こんな運命など、認めない』——それは、少女や、少女が愛した少年と関わつた、すべての者たちの祈りだった。

それらを背負つて、青年と少年は普遍的無意識の領域に立つ。そして、静かに腕を挙げた。青い光が立ち上る。

光が消え去つた後には、もう誰もいなかった。

そのデジャビュが意味することが何なのか、至は知っている。脳裏に浮かんだのは、孤独に戦い続けた1人の少年の姿。

形は違えど、それを利用したのは、彼も、自分も同じなのだ。

——つまりは、そういうこと。

「彼ら」は君たちに賭けた。あの少女を救えるよう、あの少女を取り巻く運命を変え

るために君たちを投じた」

「……」

「君たちがなぜ、巖戸台へ足を踏み入れることになったのか。……それこそが、彼によるこの世界への干渉だったということだ」

「……ファイルモン」

「何かね？」

「お前、歯ア喰いしばれ!!」

何の迷いも躊躇いもなく、至はペルソナ・ウロボロスを降魔する。

そして、ある意味^{ファイ}全ての元凶^{レモ}目がけて、ヒエロスグリユペインを打ち放った。

完璧に蛇足であるが。

また壁が吹き飛ばされたこと、丁度隣の部屋ではイゴールとベルボーイがティータイムをしていたこと、その2名がファイルモン共々巻き込まれたことを記載しておく。

\$\$\$

少し時間を巻き戻して――

2009. 5 / 30 放課後

学校／家庭科室

(……おかしいな。いつもなら、山岸さんが来ているはずなのに)

今日の活動日、山岸さん――山岸風花は「参加する」と言っていたはずだ。だというのに、今日に限って家庭科室に来ていない。

今朝、彼女は学校に来ていた。昼休みには今日の活動についての確認をした。材料の補充をしてから行くかと伝えたら、「先に行って待つてる」と言っていた。

なのにどうして、いないのだろう。

急な用事が入ったなら、風花の方から連絡してくるはずだ。それらしきものは一切来ない。

不審に思っって携帯電話を取り出し、彼女のアドレスにメールを送ってみる。しばし待

てば、携帯電話が唸るように振動した。

返事が来たかと思つて開く。……しかし、それは千影が期待したものではなかった。要約すれば『今日は野暮用が入ったので遅くなる。夕飯はどこか適当な場所で食べといてくれ』——という、至からのものだ。

風花からの連絡を期待していたためか、どつと力が抜けてしまった気がする。千影は大きいため息をついた。

『ムカつく奴に呼び出されたから、外道麻婆と羽生蛇ラーメンをお土産にする』……かあ。相手の人、ご愁傷様)

至のメールを読み返し、苦笑する。

彼女が来るまで時間を潰すことにして、千影は材料の下ごしらえを始める。リンゴを適当な大きさに切つて、パイシートを重ねて……。

それから幾何かの時間が過ぎ、気づいた時にはもう料理が完成していた。アップルパイ。本来だったら、風花と一緒に作るはずだったもの。

窓を見れば夕日が差し込んでいる。部活動を続けるにはもう遅い時間帯だ。

『そろそろ時間なので、僕は帰ります。あとで連絡ください』——再び風花の携帯に

メールを送信する。

携帯電話をポケットに入れた後、千影は一人寂しく片づけを始める。理由はわからないが、ヤケに気分が重かった。

のろのろと片づけを終え、家庭科室の戸締りを確認。どこも何も問題ない。調理器具もきちんと戻した。

最後に、入り口に鍵をかける。そして、千影は鍵を返すためにその場を後にした。

——背中に向けられた複数の視線と嘲笑に、気づくことなく。

0-4. 外道麻婆片手に江古田を脅すだけの簡単なお仕事

2009. 6 / 4 放課後

月光館学園 / 応接室

「アンタは『古典こそが正しい日本語』なんて言ってますけど、そもそも『正しい日本語』という言葉そのものが単なる幻想にすぎないんですよ。知ってますか？ 平安時代から言わせれば奈良時代の日本語が、奈良時代から言わせればそれ以前の日本語の使い方が『正しい日本語』とされてきました。その理論でどんどん突き詰めていくと、最終的には『誕生した当初の日本語が一番正しい』ということに落ち着くんです。仮名も片仮名もない、口語で語り継がれてきた言葉たちだ。おまけに、古典って『当時の文章を現代の発音で読み進める』授業でしょう？ それって、『正しい日本語』という視点から見るとすつごく間違ってるんですよ。矛盾が生じるんです。だって、その文が書かれた当時は現代と全く発音が違うんですから。現代では日本語の発音って50音でしよう？ 当時は90音近い発音があったんですよ。正確に言えば88音。上代特殊

仮名遣いと分類される発音でね。仮名表記では同じものでも、発音の違いで2種類あったんです。代表的なものはイ段のキ・ヒ・ミ、エ段のケ・ヘ・メ、オ段のコ・ソ・ト・ノ・ヨ・ロ。一応モもありましたが、モの区別は『古事記』にしか出ていない。残念ながら、上代仮名遣いの中では一番最初に消滅してしまっただんです。ちなみに、それらの発音を記号化してみると……」

延々と語り続けながら、至はふと考えた。

どうして自分は泰山^{外道麻婆}麻婆の乗ったれんげを千影の担任教師——江古田に突きつけながら、日本語史の講義をしているのだろうか、と。

【0—4. 外道麻婆片手に江古田を脅すだけの簡単なお仕事】

——時間を少しだけ遡る。

自分が知りたいことはただ一つ、未だ家に帰ってこない千影の行方について。

この2日間、彼は行方不明になっている。

最後に彼の連絡——もといメールが来たのは、6月2日の夕方であった。

それを要約すると、『数日前から山岸さんが学校に来ていなかった理由がやっとわかった。彼女はずつと行方不明だったのだが、どうやら担任が隠ぺいしていたようだ。自分は彼女の行方に心当たりがあるから、そこを当たってみる』——というもの。

このメールを送った当初、千影は当日中に帰るつもりでいたようだ。証拠として、『夕食に間に合わないかもしれませんが、頑張ってみます。夕食を作って待っていてください』という文章で締められている。それから2日間も音沙汰がない。これは何かあったと踏むべきだろう。

「事件を隠ぺいする教師」という単語から嫌な予感を感じていたものの、担任の江古田は案の定な人物であった。至が「これは異常事態だ。警察に連絡を」と言えば、落ち着くようにと諭された。もとい、警察に持っていくのはやめてくれと頼まれたのだ。

どれ程「生徒の、ひいては義弟の生死がかかっている」と訴えても、奴は至を押しとどめることに心を砕いていた。

終いには、「もしも警察沙汰になれば、事態が大きくなるのは避けられない。千影の人生に傷がつく」と、義弟の成績を盾にしてきたのだ。

「お義兄さんだつて、彼の人生を無駄にしたくないでしょう？ たかが家出事件ではないですか」

「……なんだつて？」

「ですから、たかが家出事件……」

「——ふざけんな！ たかが家出」という言葉で片づけんじやねえ！」

至の劍幕に、江古田は一瞬たじろいだ。しかし、まるで暴れ馬をいさめるように自分をなだめすかそうとする。

それら一切を無視し、至は言葉が続けた。ここで引き下がるわけにはいかない。

「生徒2人の、未来を担うであろう大事な子どもたちの命が危ないんだぞ!? それを何だと思つてんだ!?! アンタ、それでも本当に教師かよ!?!」

「しかし、私は千影くんの、貴方の義弟さんのことを思つてですね……」

「本当に義弟の事を考えてんなら、なんで放置することを選択した!? 放置することを親や後見人に進める!? ウチの千影が行方不明になったのは2日前だけど、山岸さんはもう1週間近くなるじゃないか! それをアンタはツ!!」

「お、落ち着いてください。もう少し、もう少しだけ様子をみるべきだと。事は荒立てず、穏便に……」

「そうこうしてるうちに2人の身に何かあつたらどうする!? 2人が命を落とすことになつたら!? —— そうなつたら、アンタはどうやって責任を取る気だ!?!」

「……そ、そつちこそ! 警察に持つて行つて事態を大きくした挙句、何でもなかつたら……」

「それこそ『お騒がせしましたすみません』つて頭下げりやいいだけの話だろうが! 死んじまつたら、未来も成績もクソもないんだぞ!!」

人の命と自らの保身。貴様はどちらを取る——!?

訴えるように江古田を睨むが、奴はまだ至を押しとどめようとしていた。警察沙汰になるほうが怖いのだと訴えんばかりの勢いで。

ああ、こいつはダメだ——至は大きいため息をついた。江古田にはつきりと見えるように、だ。

奴は訝しげにこちらを睨む。至はまっすぐに、逸らすことなくその視線を受け止め、睨み返した。嫌な沈黙が続く。

しかしそれも一瞬の事。先に根を上げたのは江古田の方だった。フン、と、負け惜しみのように鼻を鳴らして視線をそらす。

至の経歴に関することをブツブツ言っていたようだが、その一切すら耳に届かない。むしろ、奴の言葉などどうでもよかった。

どこからともなく、至は配達用の入れ物を取り出した。

においが漏れぬよう、しっかりと密閉された鉄製のヤツである。

何も言わず、それをすべてフルオープン。刹那、江古田が奇声を上げた気がしたが、至には関係のない事である。

取り出したるは真つ赤な劇物。冬木で出会った凶悪なモノ。人ならざる者たちをも屠つた（実例：セベク・スキヤンダルや雪の女王事件、珠？瑠市に出てきた悪魔ども）
リーサルウェポン
 最終兵器——泰山麻婆。

別名「外道麻婆」と呼ばれるその威力は計り知れない。宴会の罰ゲームで何人の人間を戦闘不能にし、通りかかった人間をも巻き込んだであろうか。つい最近には、人類実験に興じるバカ（秩序・創造担当）・フイレモンをのたうちまわさせた。

臭いだけで威力を悟ったらしい江古田が顔を真つ青にした。何かを叫ぼうと開きか

けたその口、むしろ顔面に向けて、至は外道麻婆を突きつける。直後に響く悲鳴と咽たように咳込む音。それら全てを無視し、至はぐりぐりとれんげを押し付けた。

江古田は必死になってその刺激臭から逃れようとあがく。

至はそれを押さえつけるように、麻婆豆腐を乗せたれんげを突きつけた。

怒りのメーターが振り切れてしまったせいか、逆に妙な冷静さというか、冷徹さが頭の片隅にあった。ただし、あくまでも、冷静なのは一部分だけである。

それ以外はすべて、興奮およびヤケクソ状態だと言つていい。つまり、自分のやることを自分で抑えられなくなるのだ。

「——ねえ江古田先生、知ってますか？ 古典を研究すると正しい日本語がわかるとかっていうの、アレって間違ってるんです。正確に言えないんですよね——」

——その結果が日本語史の講義だった、ということだ。

「まあ、戯言はこの辺にして、本題に入ろうか。……千影が最後に接触した女子生徒一派について、話を聞かせてもらえないか？ ……まあ、本人に会わせていただければ一番ベストなんだが」

ようやく日本語史を語り終えた後で、至は笑った。江古田はひつ、と情けない声を上げる。

奴の角度から見た自分はどんな表情を浮かべているのだろうか。ふとそんな事を考えたが、どうでもいい。

「それについて教えてくれれば、俺は納得して帰りますが?」——れんげをさらに押し付ける。その衝撃で跳ねた汗が、江古田の目に入ったらしい。某大佐よろしく悲鳴を上げて目を抑えた。

心なしか、何かが焼けるような音が響く。煙が出た気もしたが、さすがにそれは気のせいだろう。至は気にしないことにした。……なんだか外が騒がしい気がしないでもない。

何か焦臭くないかという女子生徒の声も、応接室から変な色の煙が出てるといふ男子生徒の声も、きつと自分の聞き間違いだ。

ひとしきり苦しんだ江古田が、ぎつと至を睨み返す。

「……お前、教師を脅す気か……!?!」

「脅してるも何も無い。俺はただ、アンタに泰山麻婆を勧めているだけだが? ほら、食

べないの?」

「それを脅迫だと」だったら、出るところ出てもいいんだぜ? そつちがそのつもりなら、俺だつて考えがある」——!」

「自らの保身のために、行方不明になつた生徒を1週間近く放置してた教師。……警察やメディアが食いつきそうな話題だな」

久々にたつちちゃんかつちちゃんに連絡してみようかなー、あの2人は現職刑事だし。舞耶は10代向けの雑誌の記者やつてるから、こういう話題が転がってきたら怒るだろ。マークやブラウンにも伝えて拡散してもらおうか、2人はメディアと関連の深い有名人だからな。あと南条くんも怒るよねー絶対、あ、彼は南条コンツェルンのトップなんだ。

それらすべてをノンプレスで言つてのければ、江古田の顔はみるみる青く染まつていくではないか。

今なら全身青色づくめのパフォーマンス集団と並んでも充分通用するかもしれない。奴はかなり追い詰められているようだった。

当然だ。奴にとつてモンスターペアレント同然の厄介者が、実は途方もないパイプの持ち主だったなんて知つたのだから。しかも、殆どが影響力の強い人物ばかり。

奴は唾然とした表情で口をパクつかせる。まるで、酸欠の金魚みたいだ。

何かを言い返そうとして、けれど結局は言葉に詰まる。その姿が滑稽で、至は思わず口角を吊り上らせた。無論、江古田がそれに気づく余裕などない。

畳み掛けるようにして至は距離を詰めた。麻婆豆腐の入ったれんげを奴の鼻に押し付けるようにして、囁く。

「……そういえば江古田先生。貴方の御親戚に、反谷 孝志さんっていましたよね？」

ほら、聖エルミン学園で教頭を務めた後、七姉妹学園の校長になった」

「俺、高校時代はお世話になったんですよ」と、至はぼつりと呟いた。付け加えるように、お亡くなりになったそうですねえ、と呑気に告げる。

外道麻婆の刺激臭に悶絶していた江古田の肩がびくりと跳ねた。それを確認した至は静かに目を細める。

無論、笑っているわけではない。今の気分は、獲物を捉えた鷲のような状態である。

「あの人、彼を疎んじる人物にJOKER呪いをかけられ殺された”らしいですよ？」

呪いをかけた犯人は学校の生徒だったって、もっぱらの噂です」

「……な、なにが言いたい……!?!」

「——子ども舐めんな、ってことだよ。子どもたちってのは、大人以上に大人を見てるんだ。行動力だつて凄まじいんだぜ? ……あまり好き勝手すると、そのうち手痛いしつぺ返しを喰らうだろうな」

至は吐き捨てるように言うと、再び江古田へれんげを突きつける。そしてますます笑みを深くし、言った。

「さて、話を聞かせてくれませんか? 江古田先生」

\$\$\$\$

同日 夕方

ポロニアンモール／噴水広場前

最終的にわかったことは、「江古田は役に立たない」ということだけだった。自己保身に走る教師の言い訳など腹立たしくて聞くに堪えない。

結局、千影と最後に接触したと思われる女子生徒一派に関する情報も吐こうとしなかった。「最近の事件によって病院送りにされた」で押し通すつもりのようなのだ。

まったく最近の大人は、と至は心の中でひとりごちる。教師の在り方について、冴子先生やゆきのらとじっくり話し合いたいと思った。この件が解決して落ち着き次第、久々に彼女たちに連絡を取ってみると言うのもいいかもしれない。

大人が全くあてにならない事態に放り込まれた自分たちは、必死に事件解決のため奔走した。むしろ、絶対権力のようなものを敵に回して渡り合ってきたと言っても過言ではない。例としては、当時の大企業や人類実験に興じるバカ（運命を嘲笑う方）だろう。特に後者は成人後にも縁があった。全く持つてうれしくない。

こうなったら自分の手で調べるしかない。至はばん、と自分の頬を叩いて気合を入れた。月光館の生徒たちに聞いて回れば、少しは何かわかるかもしれないと淡い期待を抱く。探偵の基本は足を使った捜査だと聞いた。勿論、刑事やマンサーチャーでも言えることである。

「ねーねー聞いたー？ 今日、イヤミ田、体調不良で早退したらしいよー？」「うわ、ざまあ」——女子生徒の声だ。

どこの学校にも嫌われ者はいるらしい。今は亡きハンニャ——もとい、反谷の事を思い出し、至はひっそりと笑みをこぼした。奴は根っからの独裁者気質だった。

母校のエルミンや達哉と舞耶らに出会った七姉妹より、月光館の教師連中は個性が派手だと思ふ。職員室に乗り込む直前にすれ違った、白衣を着た眼鏡の男性とか。

至はくるりを踵を返し、近くを通り過ぎようとする女子生徒たちに声をかけた。

「すみません、ちょっといいかな？ 最近この学園で起こってる事件について聞きたいんだけど……」

\$\$\$\$

2009. 6 / 8 夕方

辰巳ポートアイランド / 裏路地

溜まり場の不良たちに声をかければ、喧嘩を売られた。ICレコーダーでサトミタダシ再生するぞと言ったら、みんな顔を真っ青にして一目散に逃げ出した。

「どうやら、彼らは至がベルベットルームに入ろうとした際に喧嘩を売って来た一派と知り合いだったらしい。どいつもこいつも「大変だ、サトミタダシの回し者が来たぞー！」と叫び、雲の子を散らすように逃げ出してしまったのである。

「……なんだよー。これじゃあ情報収集できないじゃないか」

せつかく苦勞して、件の女子高生一派がここを出入りしていたのを突き止めたのに。江古田の隠ぺい工作は至の思った以上に綿密だった。生徒たちの大半は「噂程度しか知らない」し、何かを知っていそうな人々は黙秘を貫くのみ。

詳しく聞き出すことはできなかったが、どうやら箝口令が敷かれているらしい。面倒事に巻き込まれてしまうと踏んだからであろう。彼らの不安は分からない訳ではない。

至はあーあため息をつき、人っ子一人いなくなった裏路地に立ち尽くす。

……やはり洗脳ソングの代表格・サトミタダシは不味かつただろうか。殴り合い沙汰にならずに済むと思っていたのだが。

そういうえば、悪魔との交渉でもサトミタダシは不評だったなあと思り返す。あれを歌うと、何故か勝手に逃げ出してしまふのだ。

カード集めをしたときは大変だった——なんて、至はひとり懐かしさにふけた。歌

とは関係ないが、くちさけどもに囲まれた時とかは本当に危なかった。

あの時、圭の皮肉や玲司の手品に何度窮地を救ってもらっただろう。ムドオン連射地獄——おかしいな、気が遠くなってきたさうだ。

「——ん？」

そう考えて、ふと足を止める。微かに感じた気配は、ペルソナ使いである者が放つ独特のものだった。ペルソナ同士の間鳴現象と言った方が早い。

どこのどいつだろう？ 気配に釣られて、振り返る。——壁にもたれかかるようにして突っ立っていた少年と、目があった。

初夏のさわやかな風が吹き抜けるこの季節に似つかわしくない、渋茶のニット帽と臍脂のロングコート。暗い鶯色の髪は無造作に伸ばされている。

なんて暑苦しい恰好なのだろう。至は思わず顔をしかめる。無遠慮にじろじろ見られれば腹が立つもので、件の少年も苛立たしげにこちらを睨み返してきた。

脳裏を駆け抜けたのは、かつてエルミン学園で「伝説の裸グロープ番長」と呼ばれていた玲司。手品が得意でお母さん想いの玲司。2人目の子どもが3歳になった玲司。ただ今子煩悩を絶賛大爆発させている城戸 玲司の姿であった。大切なことなので重ねて

言っただけである。

トゲトゲした雰囲気や目つきの悪さは彼に似通う所があった。この手のタイプは「いかつく不良じみているのは外見だけで、根はいい人」であるパターンが多い。沢山ちよつかいをかけられたり、世話を焼かせるようなダメな子を見るとつい手を出してしまう。ソースはもちろん実体験&城戸 玲司である。

ムドオン地獄の最中に手品コールしたら、「うるせえ黙つてろ！ まだ仕込が終わつてねえんだ!!」と一喝されたのはいい思い出だ。

ちなみに蛇足であるが、平時の時に手品コールしても同じ反応が返ってくる。良くも悪くも、玲司は根が律儀で真面目な奴だった。

玲司と至が仲良くなったきっかけは覚えていないが、至が積極的にちよつかいをかけていたことは覚えている。玲司も覚えていないようだが、何度も話しかけてきた至に対して律儀に相手し返していたのが積み重なった結果だろう——そんな風に答えを出した。

最終的な決定打は、祖父母想いの至がおじいちゃんおばあちゃんつ子ぷりを披露したからだ。それが、お母さん想いだつた玲司の琴線に触れたようで、そこからちよつかい色んなことを話すようになった。

懐かしい思い出にひとしきり浸つた後で。

「ねえ、ちよつといいかな？」と、至は少年の元へと歩み寄る。

「あ？ ……なんだよ、何か用なのか？」

『……なんだよ、何か用か？』

完全に雰囲気一致した。言葉は違えど、最初の頃の玲司と今の少年の反応は全く同じである。

その事実に関心吹き出しつつ、至は手短かに用件を伝える。『最近、ここに月光館学園の女生徒たちがたむろしていなかったか』——問えば、彼は怪訝そうに眉をひそめた。それもそうか。見ず知らずの大人がそんなことを訪ねてきたら、誰だって不審に思うだろう。

行方不明になった女子生徒の行方が分かったというメールを残して義弟・千影が行方不明になったこと、行方不明の女子生徒は千影と同じ料理同好会の部員だったこと、担任の江古田があまりにも役に立たなかったこと、むしろ隠ぺい工作の片棒を担がされそうになったこと——。

「そりゃあ、俺と千影は直接的な血の繋がりは薄い。……でも、それでも、千影は俺の大

切な^{かぞく}「義弟」なんだ」

少年は、黙って至の話聞いていた。神妙な顔つきで目を瞬かせていたが、何か思い当たる節があったのだろう。

「……まさか、あいつの……？」——思わず、と言った調子で少年が零す。至は即座に食いついた。

最初、食いつかれた少年は頑なに視線をそらして口をつぐんでいた。しかし、それで引き下がる程、至は人間が出来上がっていない。

今日で2人が行方不明になって1週間近く——あるいは1週間以上経過していること、下手すれば2人の命にかかわることを必死に訴える。あまりにも必死になりすぎたせいで、自分の発言が支離滅裂になっていることは自覚していた。

けれど、このまま黙っているつもりはない。ただ手をこまねいているわけにはいかない。玲司に接していた頃を思い出しながら、至は必死になって食い下がった。少年は相変わらず頑なな態度を崩そうとはしなかったが、どこか迷っているように見える。

彼もまた、至と同じペルソナ使いである。しかし、彼は「至がペルソナ使いである」ことに気づいていない。

ただの一般人だと思っている相手に、影時間やらペルソナ絡みの話をするのは気が引

けるだろう。おまけに、それを話せば厄介なことになると踏んでいる。

彼の判断は間違っていない。間違っているとするとするなら、「至が一般人である」というその前提だけだ。

この前提をどうにかして覆さない限り、少年は決して喋ろうとしない。至はそう確信し、即座に実力行使へ打って出る。

先程から煩い位に響く共鳴現象——しかも、この少年からの一方的なものだ——を読み取りつつ、ジャンパーのポケットからタロットカードを取り出した。

「……やめとけ。この一件、アンタには荷が重い。しばらく大人しくしてりやあ帰って来る——「君、ペルソナ使いだろ？」!!?」

「……まで露骨に気配をばらまいているの、この場で君くらいだよ!」

弾かれたように警戒態勢を取る少年に、至はタロットカードを示す。

「アルカナはHierophant^{法王}、主に物理攻撃を主体にしたアタックカータイプ。……ほほう、意外と場数は踏んでるんだな。けど、最近は戦線を退き、年単位のブランクがある。」

ちなみに、法王のアルカナの正位置は慈悲や優しき、連帯や協調性、法令や規律の尊守、強い信条を表わしている。しかし裏を返せば——つまり逆位置的に考えれば、旧主性による古さや頑固さ、躊躇や逃避、独りよがりやお節介が目立つ人物であると言えるな」

「テメエ……」

「おや？ 君、何か心配事でもあるのか？ ……正位置の月が出てるな。不安定、現在逃避、猶予のない選択の象徴か。何を抱えてるのは知らないが、独りで抱え込むのは御法度だぞ？ 友人がいるんだったら相談してみればいいと思うけど……——つて、え？」

山札から、淡い光を放つカードを引く。1枚目は月の正位置——ここまでなら大して問題なかった。

至が凍り付いたのは、2枚目のカードに描かれたアルカナが原因だった。しかも、その向きは正位置。

「——死神？ 清算、決着……死？」

「デタラメ言うんじゃないぞ!!」

何か琴線に引つかかるものがあつたらしい。少年は怒り任せに拳を突きだした。至はそれを難なく受け止める。

この少年は喧嘩慣れしているようで、拳による一撃は結構重い。しかし、至の知人友人らと比べればまだまだである。特に城戸 玲司。

彼も一撃を受け止められたことで至の力量を察したのでだろう。驚いたように目を見張り——けれども警戒態勢を解かぬまま——、大きくため息をついて拳を戻した。

何とも言い難い沈黙が流れる。互いの息遣いと至の腕時計が秒針を刻む音だけが、路地裏に響いていた。

「デメエは一体何者だ？」——訝しむように、少年が問う。彼の瞳はどこまでも鋭く、抜身の剣のように輝いていた。

一般人だつたら、その殺気にやられて逃げ出すだろう。しかし本音を言わせてもらうと、彼の殺気は「手負いの獣」のようなものだ。かつての玲司やパオフウのような。

野良犬や野良猫にエサをやる気分だな、と、至はひっそり考える。勿論、表情には一切それを出していない。

出したら間違いなく少年が怒るだろう。話を聞くどころではなくなり、別な方向に脱線することなど目に見えていた。

圭と起こした「くだらない喧嘩騒ぎ」の数々を思い返し、ああやつぱり法王アルカナは頑固者が多いのかと勝手に納得する。

まあ、それはどうでもいいか。至は早々に思考を切り替えると、

「俺も、君と同じペルソナ使いだよ。……ただし、ちよつとばかし「旧式」タイプのね」

ルーツがちよつと違うだけだから。本質的には君たちと同じだよ。

だから君の知つてることを詳しく話してほしい、と言えば、少年は観念したように頭を掻いた。どこか不服そうに「わかった」と、疲れたような顔をして頷く。

そういえば名前を聞いていなかった。至は自分の名を名乗り、彼の名を問う。少年は目を瞬かせたのち、少しだけかすれた声で呟いた。

「……真次郎。荒垣 真次郎だ」

至は知らない。

先程少年——荒垣 真次郎をざっくりと予知した際、青い光を放っていたカードが
もう一枚”あつたことを。

そしてそのカードの柄が、正位置の運命の輪であつたことを。

運命の輪が示すもの——”定められた運命”が、何を意味するものなのかを。

この時の至は、まだ何も知りはしなかつた。

0—5. 満月の巨大シャドウと初戦闘するだけの簡単なお仕事

2009. 6 / 8 夜

巖戸台分寮付近

真次郎と別れた至は帰路についていた。もちろん、頭の中では情報を整理しながらである。

先日、真次郎は陽向たちと会ったらしい。彼女たちも、月光館学園の女子生徒が相次いで校門前に倒れていた事件を調査していたようだ。

彼は山岸さん——山岸風花が1週間近く行方不明になっていたこと、同じクラスで料理同好会メンバーである千景も行方不明になっていたことを話したという。

その際、千景の話題に顔色を変えた陽向のことを覚えていたようだ。だから（うっかり）「……まさか、あいつの……う」と零したらしい。

おそらく、ここでたむろしていた女子学生は風花をいじめていたメンバーだったのだろう。噂によると、彼女たちは次々と校門前で倒れる事件の被害者になったそうだ。

2—Eの女子生徒の写真すべてを提示し、首実検を依頼。真次郎は「これ、犯罪じゃねーか……？」等々、ぶつくさ何かを言っていたが、最終的には律儀に協力してくれた。

『江古田が箝口令ついでに隠ぺい工作やってたから、ちよつくら奴のPCにハッキングしただけだよ。もちろん、その道のプロにも協力依頼したから抜かりないし』
『やつぱり犯罪じゃねーか！』

……等々、途中で色々脱線したせいで時間がかかった次第である。随分時間をかけてしまった。しかし、真次郎の協力が無ければ手遅れになってしまっていたかもしれない。彼には感謝してもしきれなかった。

お礼になるかはわからなかったが、はぐくれの特性ラーメン無料券と少々の謝礼金、至の名刺を渡しておいた。……断じて、それしか持ち合わせがなかったからではない。真次郎は珍妙なものを見るような視線を向けていた。

「俺は大したことなんてやってねえよ」と渋る彼に、半ば押し付けるようにして手渡したのだ。あとは急いでモノレールに飛び乗り、現在に至る。時計を見ればもうすぐ午前0時。誰も知らない25時が始まる。

5、4、3、2、1、——0。

——影時間・開始——

時計が0時を指した瞬間、世界が一変した。この街に来てから体感できるようになった感覚。

空を覆うのは緑を帯びた黒い雲。ぽっかりと浮かぶ月は完全に丸く満ちていた。

「今日は満月、か」

影時間は何度も体感していたが、月が満ちていけばいく程不気味な感じがする。

満月である今日は、その不気味さが際立っているような気がした。至は月を睨みつけて。周囲には棺桶を模したオブジェが佇んでいた。動く様子はない。

25時を知覚し動ける人間は自分たちのようなペルソナ使いだけ。この時間を知覚できても、ペルソナ能力が備わっていないければ即座に精神をお陀仏にされる。無気力症の患者がいい例だろう。

過去、至と共に駆け回ったペルソナ使い達にもいろいろ聞きまわってみた。どうやらみな、影時間を体感できるようなようになったらしい。同じペルソナ使いでも影時間の適性が出るまでの潜在期間に若干の違いがあるようだ。

一番最初に影時間適性を得たのは至だった。その報告を受けた航と圭が相次いで適性を得、それに続いて無気力症についての情報を提供してくれた麻希や周防兄弟が目覚めていったらしい。

最近はおオフウとうららのマンサーチャーコンビ、玲司や舞耶らにも影時間適性が発覚したようだ。もちろん彼らは歴戦を渡り歩いてきた「戦士」である。シャドウに精神を喰われて影人間化することはなかった。

蛇足だが、ジョーカー事件の「影人間」と巖戸台の影人間は、全く毛色が違うものである。

前者は無気力になる上に、徐々に人から存在を忘れられてしまうのだ。存在自体が「なかった」ことにされると言った方がいい。薄れていく存在を知覚できるのはペルソナ使いとしての適性を持つ者だけになり、けれど最終的にはペルソナ使いですら感知できなくなってしまう。

生きる目標や気力を失った者が絶望した場合も「影人間」になってしまう。おまけに絶望に苛まれることも引き金になるからタチが悪い。それが「夢を叶えたが故の絶

望」であつてもだ。

そう考えると、後者は若干救われているのかもしれない。存在が消えてしまうことがない——この1点だけを考えれば。……もつとも、精神崩壊したあと、自我が戻らぬまま生き続けるのが救われているかどうかは別にして、である。

(……本当に、何が起ころうとしているんだろいな)

至は空に浮かぶ月を睨みつける。満月は不気味な輝きを放つのみで、何も語らない。しかし、どうしてだろう。至には、月が自分を嘲笑っているように見えて仕方がなかった。

【0—5. 満月の巨大シャドウと初戦闘するだけの簡単なお仕事】

(——あれ?)

至はふと異変に気付いた。

1人の女子生徒がふらふらと寮を出ていく。金髪に染められた髪に浅黒い肌。

慌ててポケットの中にある写真と照らし合わせる。その中で大きく丸がついた写真の顔と、彼女の顔が一致した。

森山 夏紀。 山岸 風花のいじめを行っていたグループの人間であり、辰巳ポートア
イランドの裏路地にたむろしていた生徒の1人である。

一応、ペルソナの共鳴現象が無いか確認してみたが、夏紀は完全な一般人だった。な
らば、影時間の適性はないはず。

しかし、現に彼女は影時間内に普通に動き回っているではないか。これはどういうこ
とだ——至は首をかしげる。

「風花、風花。……ごめんね……今、行くから……」

夏紀は虚ろな瞳に涙をいっぱい浮かべていた。おぼつかない足取りで歩みを進めて
いく。自分がいじめた少女・風花に対する懺悔の言葉を繰り返しながら。

彼女はどこへ行くつもりだろう。こんな——下手したらシャドウに精神を喰われかねない、危険な時間帯に。そもそも、この少女は影時間に気づいているのだろうか。

追いかけて声をかけてみようか否か。至が考え込んだ丁度その時、夏紀の数歩前の地面が黒く染まった。ドロドロした影が蠢く。あ、と声を上げる間もなく、夏紀は黒い影に呑み込まれるようにして消えてしまった。

それと入れ替わりに、別な人物が姿を現す。七姉妹学園の制服を着た男子生徒。品行方正という印象には程遠いが、完全な不良とも言えない程度の着崩し具合。茶髪だが、あれは完全な地毛だろう。その少年の姿には見覚えがあった。

ただし、そこにいる人物は至の知っている「彼」ではない。その証拠に、少年の双瞼は不気味に輝く黄金だ。口元には全てを嘲笑うかのような歪んだ笑みを浮かべている。奴が誰——正しくは何——か、至は知っていた。ああ、思い出すだけで忌々しい。

奴は色々な姿に化けることが出来るが、特に「彼」の姿や「ある男」の姿を気に入っているようだった。

どちらに——ぶつちやけ誰に——化けられるにしろ、至にとっては腹立たしいことこの上ない。

歯噛みするこちらとは対照的に、奴はへらりとした笑みを浮かべて言葉を紡いだ。

「久しいな、空本 至」

「……そーかい。俺は二度と会いたくなかったよ」

「おやおや、つれないなア。私はこんなにもお前に会いたかったというのに」

奴の声色は睦言を囁く恋人のように甘ったるい。見上げられ、顎に伸ばされた手を至は振り払う。ついでに「きめえ」と一刀両断するの忘れない。

護身用に持ち歩いていたハンドガンの安全装置を外せば、奴は不満げに口を尖らせた。だから気持ち悪いんだよ、と至は吐き捨てる。

「で、わざわざそつちから来たってことは、今回の黒幕もお前ってことでいいんだな？」——問えば、奴は喉の底からくつりと笑い声をあげた。

「半分正解で半分ハズレだな。もつとも、私は“発端”になった出来事に干渉しただけにすぎない。引き金を引いたのは他ならぬ“ニンゲン”だよ」

「引き金を引かせるような真似をしたのがお前だつて分かれば充分だ。テメーは口クなことしないからな」

「ほう？　ここに私を倒そうというつもりか？　……残念だが、私を倒したところで何も終わらぬよ。運命は私の手を離れた。私は、拙く愚かな人間が紡いでいく運命を嘲笑

うだけだ。——もう、既に始まっているのだからな！」

奴が高らかに笑った刹那、突如吹き上がった突風。闇が湧き上がり、奴はその中へと消えてしまった。

——畜生、取り逃がした！

至が悔しさに舌打ちすると同時に響いたのは、奴の声だった。

『あの女生徒を追わなくていいのか？ このままだと、取り返しのつかないことになるぞ』——ああそうだ。夏紀を追わなければ。

彼女はおそらく、風花の行方に心当たりがあるのだ。闇に呑み込まれて消えてしまったが、一体どこへ向かうつもりだったのか。奴が危害を加えた訳ではなさそうだ。

奴が出したあの闇は、彼女を『彼女が行きたいと願う場所』に導いたに過ぎない。転送装置と同じようなものだ。

しかし、夏紀は一体どこへ向かおうとしていたのだろう。それがわからないのだから動きようがない。

あの野郎余計なことしてくれやがって——至がそう愚痴を零そうとするか否や、再び奴の声が響く。

『そうだな、ヒントくらいはあげようか。お前が動かないと楽しくないからな。』

——ヒントは「タルタロス」。かつてお前が駆けた迷宮と同じ名を冠する塔を探してみればいい。この街で、月に一番近い建造物だからな。……ああ、昼間は学生が多い場所として存在している。むしろ、ほぼ学生しかいないと言った方がいいかな?』

『——あ、いけね。ほぼ答え言っちゃった』——どこぞのイシユキツクと似たような声色で奴は言った。しかしボイスはバリトンのまま。奴は人を不快にさせる天才である。そりやどーも、と乾いた返事を返せば、『……べ、別に、お前のためじゃないんだからねッ。私自身が楽しむためなんだから!』なんて言い出した。だから気持ち悪い。

最近、奴はうーにやーうーにやー変な呪文を唱えて踊りだしたとフィレモンが言っていたか。確実に、何かに毒されているらしい。一体どこへ向かおうとしているのだろう。

変な方向に転がりそうになる自分の思考を叱咤し、至は即座に頭を切り替える。

行くべき場所は決まった。目的地はタルタロス——もとい、昼間でいう月光館学園。

普段はモノレールで行き来しているが、この時間帯だと電気機器は使えない。車もバイクもダメである。

「——スザク！」

右手を挙げて、共に戦場を駆け抜けてきたペルソナを降魔する。青い光が立ち上り、紅蓮に輝く美しい聖鳥——スザクが姿を現した。

至が何を言わんとしているかを察したスザクは高らかに嘶く。その様子に頷き、至はスザクの背に飛び乗った。

\$\$\$\$

同日 影時間

タルタロス／エントランス

「くっ……」

体中を襲う痛みに、美鶴は齒噛みする。隣では、ゆかりが弱弱しくうめきながらも立

ち上がろうとしているところだった。

自分たちの眼前に佇むのは、2体の巨大シャドウ。どこか王侯貴族の雰囲気を漂わせるそれらのアルカナは女帝と皇帝だ。しかも、かなりの強さを持っている。

「なんで……どうして攻撃が効かないのよ……!？」

ゆかりが歯噛みしながらエンペラーを睨む。先程から術や物理攻撃を試しているものの、奴らに通じる様子は全くない。

美鶴がアナライズで2体の情報を引き出そうにも、ペンテシレアの能力では完全に把握することは不可能だった。把握する前に何かをされてしまう。

文字通りの万事休す。しかし、ここで諦めるわけにはいかないのだ。まだ、自分の贖罪は、何ひとつすら終わっていないのだから。

相変わらず通信状態は悪い。陽向や明彦たちがどこにいるのか、全くわからないのだ。

ペンテシレアによる分析、およびサポート能力にも限界が来たということだろう。事態は悪化の一途をたどっている。

せめて陽向たちに連絡を取ることが出来れば、救援を求めることが出来るのに。

『……、……えるか？ ……山岸……保護……』

——と、そこへ雑音交じりの通信が入った。ほとんど聞き取れないが、明彦の声。

「明彦！ 敵襲だ、今すぐこっちに——!？」

美鶴が言い終える直前、エンプレスが杖の切っ先をこちらへ向けた。迸るのは炎。ペンテシレアが唯一苦手とする属性だ。

しかもあれはアギではない。アギより一段上位に位置する、アギラオ。あれを喰らってしまえばひとたまりもないだろう。

「先輩！——ゆかりの悲痛な叫び声がやけに遠い。

アギよりもひと回り大きな炎の弾丸が、美鶴めがけて打ち放たれる。通信が繋がったことで一瞬気を抜いていたためか、反応が遅れた。

水魔法で威力を相殺しようにも、ペンテシレアのブフでは到底及ばない。今の自分ができることは、防御態勢を取ることのみ。

襲い来る衝撃を覚悟し、美鶴はきつく目を閉じ——

「危ない！」

『美鶴ちゃん』

視界が瞼に覆われるその寸前、いつぞや聞いた懐かしい人の声を聴いた気がした。

—
—
—

(—?)

いつまでたつても訪れぬ衝撃に、美鶴は思わず瞼を開ける。自分を庇うように立っていたのは、黒いジャンパーを着た男性であった。

炎のせいで逆光状態のため、その姿をうまく把握できない。しかし、その光を反射して輝いた星形のイヤリングに、その男性が「誰」であるか思い至る。

— 何故、彼がこんな所にいるのだろう。

彼が「誰」であるかに思い至った刹那、美鶴の脳裏を真っ先に駆けたのがその疑問であった。

この場に彼がいるだなんて有り得ない。何故なら彼は（基本フリーランスであるが）南条側の人間だ。南条は分家筋である桐条とあまり絡んでこない。

自分たちの関係は分家であると同時に、対等な立場にある。それに、今回の件は南条側に対しても機密事項になっているはずだ。

故に、彼が動くことはほぼない。——彼個人が、桐条側に不信感を抱かない限りは。

あるいは、彼個人が桐条側に不信感を抱き、その報告を聞いた南条がバックアップに入ったということも考えられる。

「……このくらいの熱さだったら、まだまだ余裕だな」

「なあ、スザク」——強い風が吹き荒れ、青い光が舞い上がる。召喚されたのは、紅蓮に輝く美しい聖鳥。

召喚機を必要としない召喚。それを目の当たりにした美鶴は思わず息をのむ。ゆかりも同じようで、啞然と彼の背中を見つめていた。

(そんな……。あの人も、ペルソナ使いだったなんて……)

しかも、かなりの場数を踏んでいる。歴戦の経験者だ。

ペンテシレアのアナライズ能力が即座にそれを叩きだし、美鶴に突きつけてくる。その事実が、何よりも重かった。

ただ呆然とその背中を見つめることしかできない。時間にしてはほんの一瞬だろうが、自分にとっては数時間も経過したような気分になる。

「美鶴……桐条先輩……」——まず先に響いたのは明彦と順平。「至にいさん!」——次に響いたのは、陽向と行方不明だった生徒・千影の声だった。

男性——至の存在と、召喚機なしでペルソナを行使する姿に驚いた順平が声を上げる。

至は順平に一言二言何かを言っていたが、衝撃が大きすぎてぼんやりしていた美鶴には聞き取れない。

と、エンプレスが武器を構えて攻撃を繰り返してきた。順平と話をしている至の背中に、その一撃が迫る。

はっとした美鶴が声を上げる直前、

「ウロボロス！」

至のペルソナが変化する。次に呼び出したのは、自分の尾を口にくわえ、背中に翼をはやした蛇——ウロボロス。

一際高く咆哮したそれは、躊躇うことなくエンペラーに向けて虹色に輝く吐息を放った。まともに喰らったエンペラーが吹き飛ばされる。

入れ替わるようにしてエンプレスが杖を突きつけるが、奴の術は完成することはない。かっつ。

「——ペルソナっ！」

竹刀を構えた千影の足元からも青い光が舞い上がる。現れたのは、鎧に身を包んだ白銀の騎士王——アーサー。

そのまま飛び出した彼の一撃がエンプレスの杖を弾き飛ばし、続けて放たれたアーサーの一撃が見事にエンプレスに叩き込まれる。

「そおら、もういつちよ！ 全弾くれてやらア!!」

よろめいた所へ、ウロボロスと至が追い打ちをかけた。ウロボロスは容赦なくエンプレスを串刺しの刑に処す。大きな的となったそれに向けて、至がライフフルで狙い撃つた。

1 発、2 発、3 発、4 発、5 発——間髪入れず連続でトリガーが引かれる。しかも全弾命中だ。その攻撃に、エンプレスが疲れたようによろめく。

先程まで攻撃が効かなかったのが嘘のようだ。ダウンしていたエンペラーも、ふらつきながら体を起こす。

今ならいけるかもしれない。そう思った刹那、2体のシャドウは自分の得物を掲げる。

世界がぐにやりと曲がるような感覚。それが過ぎ去ったと思えば、2体の纏う雰囲気が変わった。

ペンテシレアが把握できなかった「何か」だ。「……雰囲気が変わった？」——至もそれを察知したらしい。訝しげに眉をひそめる。

「気を付けろ！ このシャドウ、攻撃が通じなくなるぞ!!」

先程までの戦闘から得た情報を仲間たちに伝えれば、仲間たちは困惑した様子で2体と対峙する。

……それもそうか、頼みの綱であるアナライズも効果がないのだ。バックアップなしでの戦闘となる。かなりきつい戦いになるはずだ。

美鶴がそんな事を考えていた時だった。思わぬ乱入者が、ふらふらと扉を開けてエントランス内へと入ってくる。——分寮で保護していたはずの森山 夏紀。

何故彼女がこんな所へ——そう問いかける間もなく、2体のシャドウが視線を向けた。奴らの目が、まるで獲物を見つけたかのように細められる。

異形の存在に気付いた夏紀が怯えた声を上げてへたりこむ。完全に腰が抜けてしまったらしい。あ、あ、と声を漏らして後ずさるが、もう遅い。

杖が、剣が、夏紀を捉える。

瞬間、ガラスが割れるような音が鳴り響き、青い光が炸裂した。召喚機を使った、ペルソナの召喚によるもの。

弾かれたようにして音の出どころを向けば、行方不明だった生徒・山岸 風花。彼女は目を潰された聖人の胎内にいた。ガラスのようなものに覆われた中に。

『……見える。あのバケモノの弱点が、全部わかる……!』

「なんだって?! ……彼女の分析能力は、美鶴以上だったのか……?」

風花の言葉に明彦が驚いたように息を飲んだ。

ならば、と、美鶴は風花に協力を要請する。彼女を巻き込むのかとゆかりが声を上げたが、間髪入れず風花が頷いたため押し黙った。

至と千影に視線を向けたが、確認するまでもなかったようだ。2人は当たり前のように陽向の隣に並んで、武器を構えている。

再び至と千影の足元が青く光り、スザクと3つの赤い光を湛え、白・赤・緑を基調にした服に身を包んだ者——ペリが姿を現す。温かな光が、仲間たち全員の傷を癒した。

エンペラーとエンプレスはくるりとこちらを振り返る。呆然とする夏紀より、立ち向かわんとする自分たちに狙いを変えたようだ。

美鶴もレイピアを構え、彼らと共に並んだ。長いブランクがあるが、それを言っていないでは始まらないだろう。

「——みんな、行くよッ!」

「「「「「「「「「「「「「「」」

全員が戦えることを確認した陽向が号令をかける。
仲間たちは返事をし、敵を打つために駆け出した。

0—6. わだかまりの緩和剤になるだけの簡単なお仕事

2009. 6/8 影時間

タルタロス／エントランス

『エンプレスの弱点が変わりました！ 斬撃が弱点になったようです！』

「わかった！ —— 順平、チカ、お願い!!」

「待ってましたア！ —— ヘルメス!!」「了解です！ —— アーサー!!」

風花のアナライズを聞いた陽向が指示を出す。それを受けた順平と千影が飛び出した。

召喚機の引き金が引かれ、ガラスの割れるような音が響く。竹刀を構えた足元から、青い光が湧き上がる。

順平が召喚した旅人の守護神——ヘルメスと、千影の騎士王——アーサーが姿を現した。2体は駆け出す2人と共に飛び出す！

それに気づいたエンペラーが、エンプレスの盾になろうと前に出る。奴は斬撃・打撃・

突攻撃の全てを無効化する力を持っていた。

しかし、逆にその行動が仇となった。待つてました、と言わんばかりに少年——真田明彦が召喚機の引き金を引く。現れたのはふたご星の片割れ・ポリデュークス。

至も和服に身を包んだ者——ナルカミを呼び出し、明彦に視線を合わせる。そして、エンペラーに向き直った。

「ジオー」「マハジオダイーン！」

ポリデュークスが雷を打ち放ち、現在の弱点属性であるそれをまともに喰らったエンペラーが怯む。

その隙を突くような形で、ナルカミが凄まじい威力の雷撃を打ち放った！ 背後にいたエンプレス共々巻き込むような形でだ。 背後にい

魔法を無効化するエンプレスにとつて、それは痛くもかゆくもないだろう。

しかし、自分の盾になってくれる存在がダウンしてしまったこと——それこそが痛手。

ダウンしたエンペラーを押しのけるようにして、千影と順平が駆け抜ける。剣を構え、あるいは掲げて、2人が吠えた！

「うおおおおおおお——ッ！」

2人の剣が、交差するようにエンプレスを切りつけた。彼らの攻撃に続くように、ヘルメスとアーサーが斬撃を繰り返す！

ヘルメスのスラッシュとアーサーのツインスラッシュもまた、順平と千影の攻撃と同じように交差する。

綺麗な十字傷を刻まれ、更にそれを一刀両断されたエンプレスは、悲鳴を上げながら消滅した。崩れ落ち、溶けるように消え去る。

残されたエンペラーが体を起こす。まるで片割れを失ってしまったかのような哀しい咆哮が響いたが、奴はすぐに順平と千影に剣を向ける。

空間が歪むような、奇異な感覚。それこそ、奴が弱点属性を変化させたことを示す合図だった。

即座に風花がアナライズを行う。

『弱点が氷に変化しました！』

至はちらりと美鶴に視線を送った。彼女も頷き返す。

「ペンテシレア、ブフ！」「ナルカミ、マハブフダイン！」

召喚機の引き金が引かれ、アマゾンの女王——ペンテシレアが降り立つ。

彼女の剣先から迸った冷気がエンペラーを穿ち、追い打ちとばかりにナルカミが吹雪を巻き起こした！

皇帝の名を冠するシャドウは成す術なく吹雪に呑み込まれる。断末魔のように響く咆哮は、やがて少しづつ小さくなり——掻き消えた。

吹雪が晴れ、そこにはもう何もいない。陽向たちはしばし警戒体制のまま周囲を見回していたが、もう敵がいなくなったことに安堵したのだろう。

大きいため息をついて、その場に崩れ落ちるように膝をついた。武器をしまい、へたりこむ。

と、どざりと何かが倒れこむ音がした。「風花！」——先程まで呆然としていた夏紀が慌てた様子で駆け寄り、必死になって声をかけている。

どうやら初めてペルソナを召喚した事によるショックらしい。美鶴と明彦は顔を見合わせて何かを話し合っているようだった。

至は控えるように佇むナルカミに視線を戻す。ナルカミは微笑ましそうに彼らのやり取りを見つめていた。そんなナルカミの様子に、至も思わず笑みをこぼす。

——影時間・終了——

——世界が、一変する。

迷宮への入り口は、いつの間にか学校の下駄箱になっていた。なるほど、エントランスは昼夜同じ場所に相当するらしい。

影時間が終わったのと同時に、夏紀がそのまま気を失ってしまう。存在しない時間帯に動いたことによるショック。美鶴と明彦の会話からそれを聞き取った。

ふと振り返れば、泣きじやくる陽向が千影の肩を揺すっている所だった。その様子を順平とゆかりが生暖かく見守っている。

「チカのばかああ！ どれだけ心配したと思ってるのよー！」「すみません、ミイラ取りがミイラになってしまいました……」——ああ、我が家の日常だ。

気を失ってしまった風花とは違い、千影は元気そうだった。若干やつれてはいるもの

の、普通に歩いたり言葉を交わしたりする余力はあつたらしい。

「シャドウの巣窟に閉じ込められていながら、あの精神力……。文字通りタフだな。彼も戦力として引き入れるのか？」

「そ、それは……」

きらきらと目を輝かせる明彦とは対照的に、美鶴はものすごく気まずそうに視線を彷徨わせる。それもそうか。美鶴は至のことを知っている。

詳しくはないだろうが、南条主催の会合で顔を合わせているのだ。聡明な彼女なら容易に察するだろう。

ついでに気づいたに違いない。千影と陽向の後見人が、一体「誰」であるかを。

ナルカミが静かに至の心へ帰ってくる。この場から姿が解けるように消え去ったのを確認し、至は静かに前を向いた。明彦と美鶴の元へと歩み寄る。

美鶴は明彦の質問を捌ききれないようだった。明彦は千影が新しく放課後特別活動部に所属するものだとばかり思っている。

ついでに、至も込みで参加すると思っっているようだった。なんだか勝手に話が進んでいるように思うが、明彦は自覚していないのだろうか？

「久しぶり、美鶴ちゃん」

至の声に、美鶴はびっくりと肩をすくませて振り返る。

明らかな焦りと怯えの色があつた。何も知らない明彦が首をかしげる。

「美鶴、知り合いか？」

「い、いや、その……」

彼女は言いよどむ。……そんなに怖がらなくてもいいじゃないか。

「積もる話はあるだろうけど、今は場所を移そうか。後でじっくり話をしようぜ？

—お互いに」

美鶴の表情が凍り付いた。それに続いて明彦が息をのんで肩をすくませる。

青筋が立っているように見えるのはきつと気のせいだろう。至はそう結論付け、千影の無事を祝う2年生たちに声をかける。

刹那、陽向と千影を覗いた面々が動きを止めた。まるで恐ろしいものを見てしまったかのように表情を引きつらせる。だからどうしたのだ。

しかし結局、「ここにいると警備員さんに見つかってしまいうから」という陽向の鶴の一声で、彼らは弾かれたように動き出す。

疲れた体を半ば引きずるようにして帰路につく。彼らは皆、勝利の余韻に浸ろうにも浸れないと言ったような面持ちであった。

ただ、千影の無事を喜ぶ陽向と、そんな陽向の様子に「自分は無事に帰って来たんだ」ということを嘯みしめる千影の笑い声だけが響いていた。

「彼は綺麗な笑みを浮かべていたが、目は一切笑っていなかった」——余談だが、後に桐条 美鶴はこう語っていたそうだ。もちろん、至の預かり知らぬところで、である。

【0—6. わだかまりの緩和剤になるだけの簡単なお仕事】

2009. 6 / 11 夜

巖戸台分寮／ラウンジ

目の前にいる少女は、まるで死刑執行を待つ囚人のような眼差しをしていた。

どこか躊躇いと怯え、そして諦めが滲んでいるように見える。

——気まずい。ただひたすら気まずい。そして沈黙が重い。

仲介役的な意味で座っている理事長——幾月 修二は、どことなくハラハラした瞳で至と美鶴を交互に見つめていた。このおっさんはどれだけ役に立たないのだろう。

先程から「場を和ませるため」という彼のダジャレは恐ろしい勢いですべりまくっていた。悪魔との交渉に失敗した時よりも気まずすぎる。命の危機ではないにしろ、だ。そもそもダジャレでどうにかしようとする自体おかしい。

あまりの寒さとすべりっぷりに「もうアンタ喋るな」と釘を刺したことは、かえって逆効果だったのだろうか？ 何せ、美鶴は何も語ろうとしないのだ。ただ沈痛な色を浮かべている。申し訳なさそうに視線をそらし、俯いていた。

そんな彼女を見つめるのは至だけではない。放課後特別活動部に所属する2年生の

少女・岳羽 ゆかりも、美鶴を厳しい目で睨んでいる。

彼女は元々「父親のことを知る為」に、美鶴に接触したらしい。そして、そのまま放課後活動部に加わって戦ってきたと言うのだ。彼女の父親は研究者で、桐条グループで働いていたという。

ゆかりもまた、10年前の「事故」で父・岳羽 詠一郎を失った被害者であった。おまけに彼は「爆発事故を引き起こした張本人」として、世間からの非難を浴びていたらしい。その噂が、残された母と子にどれ程の景況を与えたか——容易に想像できる。

かねてから積み重なって来た疑念が、ここへきて一気に噴出したのだ。至や陽向が美鶴に疑念を抱いていたのと同じように。

ゆかりはじつと美鶴を見ていた。どこまでも探るような、厳しい非難を宿して。彼女はただ一途に真実を追い求めている。

順平と明彦は所在なさ気に視線を彷徨わせている。何をどうすればいいのかわからないと言った感じだ。彼らは力試的な意味合いで戦っているからだろう。

(……みんなの目の前で話したのがマズかったか……)

後悔後先に立たずとはこういうことだろう。至は内心、あちゃーと言いながら額を抑

えていた。

エンペラー&エンプレスとの戦闘終了後、至は半ば強引に美鶴たち放課後特別活動部に「何がどうしてこうなったか」を詳しく聞き出すと言う約束を取り付けたのだ。

千影の検査入院も終わった（実際、風花と比べればはるかに元気だったから退院も早かった）ので、勇んで分寮の扉を開けたのが、今から数時間前の話である。そこから部長である美鶴に色々尋ねたのだが、彼女は頑なに話そうとしなかった。

そんな美鶴の態度に業を煮やしたのがゆかりである。彼女は自らの経歴を話した後、火山が噴火せんばかりの勢いで詰め寄ったのだ。あまりの勢いに、周囲の人間はおろか至まで呆然としてしまった。そして広がる沈黙。——重いつたらありやしない。

こんな時、ムードメーカーな面々がいたらどんな話をするだろうか。秀彦と正男・リサや栄吉らのことを思い返すが、なんだか違う気がしてならない。

ならば空気を読める人々はどうかだろう。圭やゆきの・達哉や克哉らのことを思い返したが、自分にはそれをやれるだけの能力がないと気づいて、やめた。

自分なら何ができるだろう。至はううむと考え込む。言い出しつべは自分なのだから、自分がこの空気をどうにかしなければならぬだろう。至が言い出さなければ、ゆかりが疑念を爆発させることも、美鶴がここまで追い詰められることもなかったのだ。

昔から、こういう厄介ごとが始まるのは至が原因だった。余計なことを言ったから、

あるいは余計なことをやったから。自分たちがペルソナ能力に目覚めたのも、「雪の女王事件」が発生したのも、もとを正せば根源は至である。

お前は どうして不用意に厄介ごとを持つてくるんだ——圭が言っていた事を思い出して苦笑した。もちろん心の中で、である。顔に出していたら出していたで大参事だ。これ以上居た堪れない空気になってしまったら、至も流石に困ってしまう。

びりびりとした空気が肌を突く。緊張は最高潮だ。ついでに居た堪れなさも。

美鶴は口を真一文字に結んだまま。その様子に、ゆかりはより一層眉間のしわを深くする。陽向と千影が顔を見合わせ、修羅場へと視線を戻した。そしてまた顔を見合わせる。

順平と明彦は相変わらず所在なさ気に隅にいた。自分たちはお門違いなのでは、と、どこか不安そうに見えた。そして理事長も役に立たないままであった。

途方に暮れかけたが、もう一度。この空気を打破する方法を考えてみる。なんでもいい、なんでもいいから話題を提供しなくては。

必死に頭をひねり——ふと、思い至る。

「……岳羽さんはお父さんが大好きだったんだな」

「えっ!?!」

「わかるよ。俺も、自分の父親が大好きだった。……事故で亡くなっちゃったけど」

離婚してから3年足らず。唐突に現れた死神は、至の父親を連れて逝ってしまった。それを吐き出した瞬間、先程まで詰まっていた何かが、堰を切つてあふれ出し始める。

「大好きな人が原因不明の事故に巻き込まれたり、勝手に首謀者にされたら凄く嫌だ。何としてでも真実を突き止めたと思って思う。俺だって、8年前のとある事件に首を突っ込んだ理由は『千影が巻き込まれた』からだったし」

「う。……すみません、至にいさん」

「いいよ。ちゃんと無事に帰つて来てくれたんだから。——それに、お前が巻き込まれる原因作つたの、俺だしな」

8年前、JOKER呪いが流行っていた時のことを思い出し、至は苦笑した。

あの日——8年前、至が千影と陽向を連れて珠？瑠市に赴いた時、到着早々JOKERに千影を誘拐されてしまったのだ。それを追いかけていくうちに達哉および舞耶らと出会い、謎のデジャビュに悩まされつつJOKERの行方を探し続けた結果、一連の事件に巻き込まれた。

赤いライダーズスーツに身を包んだ茶髪の少年の後ろ姿を、至は一生活れることは出来ないだろう。「彼」は罪を償い罰を受けた。——今、「彼」はどうしているのだろうか。平行世界の自分が命がけで守り抜いた希望を思い返し、目を細める。

心の海で会えると「彼」は言った。あの一件が終わってから、至は一度も「彼」と言葉をお互いに交わせたことはない。けれど、心のどこかでは繋がっていると実感していた。目を閉じる。「彼」が苦笑している姿が見えた。がんばれ、至さん——そう、口が動く。

「……でも、自分の大事な人が『首謀者かもしれない』、あるいは『首謀者をつるんでいられるかもしれない』ってなったら、それもそれで辛いと思う」

「……………」

「そんな真実なら、誰だって『見たくない』って思うんだ。知るのが怖いって、躊躇って当然だと思うんだ。——美鶴ちゃんも、お父さんのこと大好きだし」

至の思わぬ発言に、美鶴とゆかりが驚いたように目を丸くする。

その話題からそう転がってくるだなんて思わなかったのだろう。

美鶴は父親の事を大切に想っていた。会合で顔を合わせる度、武治の背中に眼差しを向ける少女の姿を何度も見ていた。将来は父親を支えていきたいと語っていた。

桐条側が必死になって隠そうとしていること、必死になって償おうとしていること——その全貌を知るには、美鶴はまだ幼い。その背に一族の業を背負うには重すぎた。

彼女の実を案じる武治のことだ。少しでも、美鶴の負担を軽くしたいと考えるだろう。彼もまた、人の親だ。美鶴のことを大切に想う、立派な父親なのだ。

そのためならば、どんなことでもやつてのける。全てを偽って、命を賭けてでも成し遂げるだろう。それ程の危うさがあった。

自分が知りうる限りのこと——特に美鶴の父・武治について話した後、至は大きく息を吐く。

脳裏を駆けたのは、圭のことだ。8年前、彼はJOKER事件で難題に直面することになる。

「……少し毛色は違うけど、南条あつコンツェルンちのトップである南条くんも似たようなことで悩んでた。8年前の事なんだが、当時俺が追いかけてた事件の関係者がいたんだよ。別件で動いていた南条くんも、そいつが怪しい奴だって早いうちから睨んでたらしい。でも、そこには大きな問題があつたんだ」

「問題？」

「南条くんのお父さんが、そいつに多額の政治献金してたんだよ。……ああ、事件の関係

者は政財界での大物だったんでな。終いにやあ、用途も何も聞かないで、奴に言われるがまま下水処理施設作っちゃったんだ。実際その施設は「要塞」として機能してた」

「さ、最悪じゃないスカ……」

最初に食いついたのは明彦で、至の言葉に続くような形で顔をしかめたのは順平だった。

うん、と頷き、話を続ける。

「当時、南条くんは大学生だ。確かにハタチ過ぎてたけど、先代当主がまだまだ現役だった頃だからなあ。……意見しようにも、周囲から見れば南条くんはまだ「子ども」同然の扱いだった。誰も、彼の話を聞いてくれそうになかったんだ」

「そんな……」

「あの時はもう吹っ切れた様子で『俺は俺の道を貫くだけだ』って言ってたけど、本当は凄く悩んだと思う。結論を出すまで、すつごく苦しんだと思う。下手すれば、自分のせいで南条コンツェルンが危なくなるかもしれないなかったんだから。」

……でも、南条くん、逃げなかったよ。最後までずっと、俺達に手を貸してくれた。

……本当に、すつげえカッコよかった」

これを本人の目の前で言ったら、そっぽを向いて鼻を鳴らしていたか。その際、耳を真つ赤にしていたのが印象に残っている。彼は意外と照れ屋だった。

後で英理子から聞いた話だが、「至がいてくれたから頑張れた」と言っていたらしい。面と向かつて言ってくれればいいものを。

顔を合わせれば皮肉しか言わないのに。なんて不器用で——でも、とても優しい男なのだろう。至は思わず笑みをこぼす。

「美鶴ちゃん。今の君は、この時の南条くんだ。何を言っても『子どもだから』と遠ざけられてしまう。……違うか?」

問えば、美鶴はひゅつと息を飲んだ。しばし俯いたのち、悔しそうに頷く。彼女は大きく息を吐くと、「自分の立場ではわからないことが多い」と告白した。まるで懺悔をする罪人のような眼差しで。

どうあがいても、桐条グループ全体から見れば美鶴はまだ『子ども』なのだ。故に、真相に近いと思われる機密事項には『ある程度』しか触れることを許されていない。至の話から「もっと大きな陰謀めいたもの」を感じたが、自分では踏み入れない領域の

ようだ、と。

「すまない、岳羽。私にもっと力があれば……」

「先輩……」

「いや、力がないだけじゃない。……本当は怖いんだ。もしかしたら——……父は、何か大きなことを隠しているのでは、と……」

「でも、自分は父親を信じたい」——美鶴は震える声でそう紡いだ。

その言葉に、ゆかりは弾かれたように目を見張る。

——そう、同じなのだ、この2人は。

方向性や経歴が違えど、2人は父親の事が大好きで、父親の事を信じたいと願っている。大好きな父親は、何も悪い事をしていないのだと。

自分が愛し、自分を愛してくれた優しい人なのだ。その姿こそが、正しい真実なのだ。揺るぎないものなのだ。

今にも泣きだしてしまいそうなのに、美鶴は涙の幕すら見せなかった。その姿はとても痛々しい。おそらくゆかりもそう感じているのだろう。

わかりました、とゆかりが頷く。先程までの鋭い視線はなく、彼女は少しだけ泣き笑

いに近い表情を浮かべていた。

美鶴の苦しみに触れたからこそだろう。父親を信じたいと願うその心同士、繋がったものがあつたのかもしれない。

「……岳羽。私は必ず、必ず君に真実を話すと約束する。……その断片を私自身が掴むまで、待つてくれないだろうか……？」

その懇願に、ゆかりは迷わず頷き返した。どこか悪戯っぽい笑みさえ浮かべて、「あまり遅かったら、あたしが先に掴んじやいます。競争しますか？」と告げる。まるで茶化すような台詞に安堵したのだろう。美鶴がようやく笑ってくれた。

修羅場一色だったラウンジに平穏が戻る。明彦がよかつたな、と美鶴の肩を叩き、順平があーホントよかつたーと肩の力を抜く。刹那、彼の腹の虫が盛大に鳴り出した。げ、と肩をすくめる順平に、仲間たちがどつと笑いだす。

時間を見れば夜の8時を回っていた。どうやら2時間半以上も話し合っていたらしい。そういえば夕食はろくに食べてなかつた。千影と陽向に視線を向ければ、2人は至の意図を読み取つたのだろう。大きく頷き冷蔵庫の中を漁り始めた。

「簡単なものを作って食べよう」——そう提案すれば、子どもたちが嬉しそうに目を輝

かせた。安心したのも相まって、一気に空腹と疲労がやって来たのだろう。盆と正月が一緒に来た気分だ。何か間違っている気がするが、実質的には何も間違っていないのが憎い所である。

「いやー、一時はどうなることかと思ったけど、よかったー」

何とも場違いな声に視線を向ければ、そこには幾月がいた。ほつとしたように手を合わせている。

そんな姿をしばし見つめた後、至は思わず彼にこう言った。

「理事長、アンタまだそこにいたの」

\$\$\$\$

2009. 6 / 12 夕方

ポロニアアンモール前

「先日、その……ありがとうございます」

「大袈裟だつてば！ 俺は何もしてないよ」

綺麗なお辞儀をする美鶴に、至はあわあわと首と手を振った。学生たちの視線がものすごく痛い。ひそひそ話までやっている。

聞き間違いでなければ「生徒会長の婚約者候補」扱いされてる。ちよつと待つてくれと至は叫びたい気持ちに駆られた。自分はそこまでの器ではない。

—というか、婚約者候補つて何だ。何人いるんだ。桐条グループ節操なさすぎるだろ—
—そう思ったけど、武治さんはそんなことしない。絶対やらない。

自分は感謝される理由がないと言つたが、美鶴はまっすぐに至を見つめている。

最後に会つた時は至の胸より少し高い程度の身長しかなかったのに——いつの間にか、至の肩に彼女の頭が届くか届かないかになっていた。子どもの成長は早いものだ。

そりやそうだ。あれから3年近く経過しているのだ。何も変わらないと言う方がおかしいだろう。見ないうちに美しい御令嬢に成長していたことに、ほんの少しだけ寂しさを覚える。

なんだか一時帰国してきた正男と顔を合わせた気分だ。エルミン卒業後、正男はアメリカカンドリームを掴みデビューを勝ち取ったらしく、テレビで大きく報道されていたのだ。

長年の努力が実を結んだ結果だと至は思う。彼はなんやかんやで努力家だったから。……まあ、片思いもあるんだろうけど。現在セラピストとして頑張る麻希の姿を思い浮かべる。

トライアングルプラスα。あの恐怖の三角州の脇から、麻希に淡い恋を抱き続ける男——それが稲葉 正男、通称マークである。ああ、そういえばアメリカでの愛称もマークだったか。

あるいは秀彦。スタイリストさんのおかげなのか本人の努力の結果なのか、奴は「今流行の芸能人！」として注目を集めている。とくにおしやれに關してだ。

僭越ながら、こつそり至も参考になっている。現在至が着ているジャンパーも、もとは秀彦が着ているものの色違いなのだ。

「……美鶴ちゃん、見ないうちに身長伸びたよな」

脱線しかけた思考回路を引き戻す。

至はしみじみと呟いた。それに反応して、美鶴が口をとがらせる。「あなたまで私を子ども扱いです」——不満げに彼女は至を見上げた。ああ、変わってない。

どんなに成長しても、彼女の面影は何も変わらないのだ。必死になって背伸びしようとする、まだまだ幼い少女。周囲からの期待を受け、グループの跡取りとして努力を続けてきた女の子なのだ。

その事実には思わず頬を緩ませる。ついつい癖で彼女の頭を撫でてしまつたが、美鶴は大人しくされるがままになつていた。

会合で顔を合わせるたびにこうだった。小さい子相手にするように、いつも至は彼女の頭を撫でた。最初の頃はそれで圭や美鶴に叱られたつけ。

最終的には、「ああいつものことだね」と、誰も何も言わなくなつた。——美鶴は変わらず抵抗していたけれど、素直にされるがままなことが多くなつた気がする。

「で、今日は何か用？」——至の問いかけに、美鶴は何か言いたげに口を開き、けれど言いにくそうに口ごもる。……一体どうしたのだろう？

とりあえず、至は待つてみる。しばらく沈黙が続いたが、幾何かして美鶴がようやく言葉を紡いだ。

「少しだけ、時間をいただけじゃないでしょうか？ ……行きたい場所が、あるので」

\$\$\$\$\$

同日 夕方

巖戸台商店街／はがくれ

——そしてこうなった。

至は微笑ましい気持ちで、ラーメンを食べる美鶴の姿を見つめる。御令嬢が初めて経験する庶民の味だ、興味深いに違いない。

テーブルマナーを気にする時点で「あ、こりゃあ初体験だな」と踏んで正解だった。至は心の中でうんうん頷く。

「ココが好きだと要から聞いたので。……先日のお礼がしたかった、というのもある」——至をはがくれに連れてきた美鶴は、照れくさそうに視線を彷徨わせながらそう言った。どうやら陽向から話を聞き出したらしい。

運良く手に入れた無料券をなくした（実際は真次郎に譲った）という至の話聞いていた陽向から情報を得た彼女は、至にラーメンをおごろうとしていたのである。しかし悲しいがな、美鶴は生まれも育ちもガチガチの御令嬢である。着いて早々、テーブルマナーについて詳しく聞かれる羽目になった。

ラーメン屋のテーブルマナーなど、至が詳しく知るはずがない。下手に変なことを教えれば、間違いなく圭（のヤマオカさん）による、最近習得したばかりのメギドラオンが炸裂するだろう。あるいは武治に近距離射撃されておしまいか。どっちも嬉しくない。

とりあえず「まずは力を抜いて、楽しみながら食事すること」、「麺が伸びる前に食べること」、「食べ終わったら『ごちそうさま』と言うこと」をマナーだと教えておいた。……間違っていたら本当にすまない。

内心ハラハラする至を隣に、美鶴は興味深そうにラーメンを食べだした。懸命にラーメンをすすする彼女を見守り始め、現在に至るのである。

「始めは、変わった味だと思ったが、相当に深い味わいだ……」

「そうだな。俺、ここのラーメン好きなんだよ」

「……貴方がそう言ってくれるなら、来た甲斐があった」

美鶴がうれしそうに微笑む。そんな風に笑う彼女の様子に、思わず至も頬が緩んだ。彼女の様子に触発され、こちらも自分の分のラーメンをすすする。

とんこつラーメンをぺろりと平らげ、「ごちそうさま」と手を合わせた。美鶴はまだ悪戦苦闘しているようだ。彼女の様子をじっと見守る。

ようやく彼女も食べ終えて、至の見よう見まねで「ごちそうさま」と手を合わせた。少しでも不安そうであったので、大丈夫の意を込めて微笑み返す。

しかし、本当の罨はここからだった。

「料理長」

彼女は何を思ったのだろう。いきなりそう言つて、店長を呼んだ。呼ばれた店長が首をかしげる。

あ、やばい。——至がそう察した時には、何もかもが遅い。

美鶴はきらきらと目を輝かせて、言葉が続ける。

「素晴らしい味だ。……こんな感動は久しぶりだな。ブイヨンには何を入れているんだ

「？」

(ぎゃあああああああああああああああ!?)

何度でも言おう。桐条 美鶴は、生まれも育ちもガチガチの御令嬢であつた。サトミタダシのうたで洗脳されてしまふ、南条 圭の遠い親戚であつた。

美鶴違ふ、それブイヨン使つてない! ——慌てて至が耳打ちするが、店主が「味は教えられない」と答える方が早かつた。それを聞いた美鶴は少し残念そうに頷く。

付け加えるように店主が「これでメシ食つてるんだから」と言えば、何を勘違いしたのだろう。ラーメンと一緒にご飯が出てくると言いだす始末。

まあ、関西方面ではご飯も一緒に出てくるから間違つてはいない。間違つてはいないが、もう何もかもがブリリアントに間違つている。マーベラスなくらいにオーマイゴツトだ。自分が何を言つてるのか、至自身が理解できなくなつてきた。

店主が逃げるように厨房へ引つ込めば、「特許申請して使用料を」まで言いだした。普通通誰もそんなこと思いつかないし、店長だつて絶対首を縦に振らないだろう。お願い美鶴、帝王学より一般庶民の常識を学んでくれ! てか学ばせてあげて武治さあああん!! 頭を抱える至の様子に気づいたのか、彼女はすまなさそうに謝罪した。まあ、興味深いと言つてくれたからよしとしよう。

「……一度、こういうものを食べて見たかったんだ」

何とか至が取り繕ったのを確認した後、美鶴はまるで悪戯を咎められた子どものように肩を落とす。いつの間にか自分が楽しむことに目的がすり替わっていたらしい。

正直至も「自分がラーメンを食べる」よりも「美鶴がラーメンを食べている姿を見守る」のが目的になってしまったクチだ。人のことは言えない。

大丈夫だと言いながら、至はうんうん頷いた。その様子に安堵したのか、美鶴がほつと息をつく。

幼い頃からこういういったものに手が届かなかった——当たり前だ。彼女は筋金入りのお嬢様である。こういう場所に慣れていなくてもおかしくない。

自分の手が届かないものに憧れる。……それは、誰しもが持っている当然の感情だろう。憧憬は、決して悪い事ではないのだ。

「今日は来てよかった。……作法も教えてもらえたから」

「そっか。それじゃあ、機会があつたらまた行こうか？」

「………いいん、ですか？」

「うん。美鶴ちゃんと俺の都合が合えば、だけど」

あ、俺と行くのつて迷惑？——至がそう尋ねれば、美鶴はぶんぶん首を振った。ぜひまた、と、畳み掛けるように即答する。

その様子があまりにも必死だったので、ちよつと笑つてしまった。美鶴はきよとんと眼を瞬かせたが、どこか安堵したように微笑む。

「それじゃあ、帰ろうか」

「……そうだな。そうしようか……」

美鶴はどこか名残惜しそうに頷いた。店主に代金を払い、店を出る。

夕焼け空は藍色に滲み、一番星がちかりと光っている。もうすぐ夜の帳が下りてくるのだろう。

至は美鶴を寮に送り届けるため、彼女を促して歩き始めた。

0-7. 自分の力について考えるよう後輩にアドバイスするだけの簡単なお仕事

????
?/?
?

聖エルミン学園高校／とある教室

退屈な日常。繰り返される、当たり前の平穩。

誰もかれもが不平不満、あるいは息苦しさを抱えて生きる日々。

それが崩壊するカウントダウン。

そうとは知らず、そうとも気づかず。

『世にも奇妙な都市伝説』という胡散臭い本を読んでいた少年は、おもむろに、近くに居合わせた別の少年に声をかけた。

『なーなーブラウニー。これ、おもしろそうじゃね?』

——その時の事は、今でも鮮明に覚えている。

『未来が見えるかどうかまでは知らねえけど、もう超常現象バリバリよ？ 絶対やる価値があるって!!』

『おーし、賭けるか？ 負けた方がジョイ通のピースダイナーで食い放題のおごりだ。いいな?』

『わーい！ じゃ、アヤセ、上杉にのる！ だつて面白そうだもん!!』
『私もBrownにBetしますわ。超常現象……うふふふ♪』

ゴーグルをつけた綺麗なブラウンの髪の少年が、黄色のニットキャップを被った少年と賭けをした。

一緒になって、金髪のコギャル少女とポニーテールの帰国子女がそれに乗る。4人の口元には楽しそうな笑み。

『愚にもつかんな。俺は知らんぞ』

『あたしも右に同じ。……勝手にやりな』

1と書かれた青いスカーフを首に巻いた眼鏡の少年と、姉御肌気質なベリーショート
の少女が呆れたようにため息をつく。

『おい、その双子！ お前たちはどっちに賭けるんだ？』

彼らを横目に、黄色のニットキャップを被っていた少年は、真正面に佇む少年たちに
問いかけた。

右耳に丸いピアスを付けた深い藍色の髪の少年——弟と、左耳に星のイヤリングを付
けた淡い藍色の髪の少年——自分が顔を見合わせる。

『じゃあ、俺は正男に賭ける』

先に答えたのは弟の方だった。その言葉に、ニットキャップがにやりと笑う。

じゃあお前はどっちだ？ と、ゴーグルが問いかける。

『正直どっちでもいいかなあ』——あっけらかんとそう答えれば、ゴーグルの少年が一
瞬引きつった笑みを浮かべた。

『ちよ！ おつま、言い出しつpegがそれでいいのかよ!』

『いいじゃん。何が起ころうが起きまいが、「皆でわいわいしましたー!」って事實は消えないんだから。数年後に振り返った時の肴にやあもってこいだろ?』

『うつわ、変な意味でじじくさい……』

『……これで俺と学園TOPを争う学力の持ち主だと言うのが、未だに信じられん』

コギヤルが眉間に皺を寄せ、眼鏡が額を抑えて唸る。姉御は眼鏡の肩を叩き、彼を励ましていた。

しばし皆とわいわい話をした後で、ようやく本来の目的——「ペルソナさま遊び」へと移る。

『ペルソナさま、ペルソナさま、おいでください』

——声が、響く。

『ペルソナさま、ペルソナさま、おいでください』

——声が、響く。

『ペルソナさま、ペルソナさま』

——そして

『お、おい……後ろ……!』

『んだよ? ——!!?』

眼鏡の指摘に、ニットキャップが振り返る。そこには1人の少女が佇んでいた。先程までそこには誰もいなかったはずなのに。

ぼんやりとした輪郭、青白い肌。どこから見ても“人”じゃない。端的に表現する言葉があるなら——「幽霊」。

刹那、突如雷が教室中を迸り始める。姉御に直撃したのを皮切りに、ニットキャップ、眼鏡、弟が次々に雷に打たれていくではないか!

なんだどうしたどういうことだ!? ——あまりの状況に、どうすればいいかまったく

わからない。

そうだ、弟。弟を助け起こさねば——自分がそう思つて駆け寄ろうとした瞬間、大きな音と衝撃が体を襲つた！

マヒしてしまつたかのようにそのまま崩れ落ちる。

自分が倒れてしまつたこと、自分も雷が直撃したことに気づいた瞬間、視界は一気にブラックアウト。

何も感じられなくなる刹那、黄金色に輝く蝶が羽ばたく幻を見た気がした。

——それが、ペルソナ使い・空本 至の“はじまり”。

【0—7. 自分の力について考えるよう後輩にアドバイスするだけの簡単なお仕事】

2009. 6 / 12 夜

敵戸台寮／ラウンジ

分寮内に足を踏み入れたのは、本当に偶然だと言っている。

ロードワークを終えてきた明彦と寮の前でぼったり落ちあわなかつたら、丁度彼が寮の玄関を開けていなければ、ラウンジ内で何かを読んでいた陽向がこちらに声をかけてこなければ、きっと至は寮の中へ入ろうなどとは思ひもしなかつただろう。

至がいるというのを聞きつけたゆかり、順平と千影も顔を出す。そういえば先日、千影と順平はゲームの話で盛り上がっていたか。自慢げに話していた順平は知らないだろうが、千影は結構な腕前の隠れゲーマーだ。ちなみに陽向もゲームに強い。

理事長は流石に居ないようだった。正直、至にしてみれば「居ようが居まいが何も変わらない」に等しいのだが。理由は先日の霞みっぷりである。あれが顧問で大丈夫なのだろうか——失礼ながら、ひっそりと不安になったものだ。

「せっかくだし、お茶でも飲んでよ」

「じゃ、その言葉に甘えさせてもらおうわ。お邪魔しますー」

「よっこらせ」「うわ、オヤジくさいっすよ至さん」「当たり前だろ、俺は27のアラサーだ」「27!?」大学生の間違いじゃないんですか!?!」——他愛のない会話にしばし花を咲かせる。

ふと、至は陽向に視線を向けた。彼女の手には、何かの書類。まだ読みかけだったらしく、ホチキスで留められた紙が何枚かめくられている。

「何読んでるんだ?」

「タルタロス内部で見つけた書類。人工島計画書文っていうんだけど」

「ふーん、人工島計画書文………——人工島、計画書文……!?!」

至は陽向の言葉を反復し、止まる。人工島計画書文——10年前にこの周辺で行われた実験内容が記された、重要な機密文書だ。

当時発生した“爆発事故”——ひいては、桐条の先代当主が起こした暴走に関するヒントが記されている可能性を持つ。

本来、これは半年前に、当時桐条グループで働いていた元・研究員から譲り受ける約束をしていたものだ。しかし彼は、約束の日の当日に謎の不審死を遂げてしまう。件の人工島計画書も、彼の不審死と共に姿を消してしまった。

それきり行方知れずになってしまった件の書類が、こんなところで姿を現すだなんて。1人戦慄する至の様子に、陽向が驚いたように目をぱちくりさせていた。「どうしたの？ 見たいの？」——そう言って、おずおずと書類を突きだしてくる。

頼むと2つ返事で領き、半ばひったくるようにして書類を受け取った。その勢いのまま、至はぱらぱらと書類を読み進める。研究していたものに関する表やグラフ、分析や考察がつつらと並ぶ中、時折書き手の眩きのようにメモ書きされてあった。

しかし情報量が少なすぎるのだ。これでは断片的にしかわからない。機密事項が記された書類の割には、圧倒的に情報不足である。

おまけに、この書類が発見された場所も問題だ。何故、この書類が迷宮——タルタロス内部に落ちていたのだろうか？ 誰かがあの塔に隠したとも言うのだろうか？

どうやら陽向も同じことを疑問に思っているらしい。「あそこはシャドウの巣窟だよ？ 私たちの前に入った人でもいたのかな？」と、首をかしげながら紅茶を啜っている。

「……実は、桐条の探索部隊が何度か足を踏み入れていたんだ。もつとも、第一層の攻略すらままならなかったが」

「探索部隊？ それって、僕らと同じペルソナ使いですか？」

言いにくそうに美鶴が切り出す。ゆかりや順平たちが驚きに目を丸くする中、陽向は「やっぱりか」と言いたそうに美鶴へ視線を向ける。

彼女の言葉を受けた千影は首をかしげた。影時間を認識し、シャドウと戦えるのはペルソナ使いだけ”という前提に引っかけたからだろう。

「詳しい事はわからない。当時、私は父に同行していた。そこでシャドウに襲われて……私はこの能力ちからに目覚めたんだ」

美鶴は静かに自分の手のひらを見つめる。微かに震えているように見えたのは、きつと至の見間違いではないだろう。美鶴ちゃん、と呼ばば、彼女はどこか感傷的に苦笑した。

ゆかりが何か言いたそうに口を開くが、言葉が見つからないらしい。視線をしばし彷徨させた後、どこか悔しさを含みつつ申し訳なきように肩を落とす。

そういえば、美鶴がペルソナに目覚めたのは8歳の頃だと航から聞いた。桐条側の研究者がおもわず零していた会話を聞き取り、覚えていたという。

最年少で覚醒したのが7歳の千影だったということもあつたから覚えていたんだろう。彼は10年前、至に引き取られる以前からペルソナ能力を覚醒させている。もっと

も、美鶴たちのように銃型の召喚機で頭を打ち抜くタイプではないが。

千影もまた、至や航・達哉や舞耶のように「フイレモンからペルソナ能力の発現を促された」タイプである。つまり、何らかの形で「ペルソナ様遊び」を経験、加担、目撃した人間であった。そして尚且つ、奴の質問に自分の名前を答えられた人間でもある。実はフイレモンではなく「奴」から能力覚醒を促される、あるいは能力を与えられるというパターンもあるのだが、それについては割愛しよう。

「そういうや、至さんや千影は召喚機なしでペルソナ呼べるんですよね？ 何か、その、秘訣みたいなのあるんすか？」

「ああ、俺も気になるな」

何かを思い出したように、順平がぼんと手を叩いてこちらを見た。彼の眼はまるで、ヒーローに憧れる少年のように輝いている。興味津々と言った方がいい。

その言葉を聞いた明彦もつられたようだ。おおかた、これから遭遇するであろう強敵に対抗できるような力が欲しいのだろう。それで、至や千影の能力に興味を持ったに違いない。

そもそも、至と千影のペルソナ能力は陽向や順平、美鶴たちとはルーツが違う。それ

故に、能力の毛色や召喚——降魔の仕方も違うのだ。ただ、ペルソナが心の海から生まれると言う点は共通している。

さて、まずは何から話すべきか。何を話しても脱線しそうだ。——しつかり整理して、わかりやすく伝えてやらねばならない。

ルーツや能力が違えど、彼らは自分の後輩。駆け出しのペルソナ使いなのだから。

\$\$\$

自ら目覚めるか、あるいは何者かによつて目覚めを促され与えられるか。ただ、それだけの違い。

複数のペルソナを使い分けることが出来る——陽向はそれを「ワイルド能力」と言った。至や千影もそれに近いように見えるが、厳密に言えば少しだけ違うのだ。

ファイルモンによつて力を得た者は、同時に自分の性格や性質を表わすアルカナを得る。そして、その属性に対応・あるいは相性のいい属性のペルソナを3体まで降魔することができるので。それ以上を降魔させようとするれば、自身がそれに耐えられなくなり

暴走が起きる。

暴走というワードに一瞬明彦が表情をこわばらせる。何か心当たりでもあるのかと問えば、彼はなんでもないと押し黙った。明らかに嘘をついていたが、それを問い詰めるのは良くない気がして流してやる。

「自分自身で目覚めたお前らが『新世代』だとするなら、俺や千影は『旧世代』って扱いになるな。……ま、覚醒条件が『危機に瀕した時』ってのは同じだけど」

至はうんうん頷き、自分で淹れたコーヒーを啜る。ブラックコーヒーのほろ苦い味が喉を流れ、染み渡っていく感覚。

高校時代、なんとなく大人ぶってみたくて、飲んでみて見事に撃沈した事があった。今ではすっかり慣れて、苦も無く飲むことが出来る。月日の流れは凄い。

順平はぼかんとした表情で、ほーほー頷くので手一杯だった。多分、至の説明などほとんど理解できていないだろう。それでもいい。漠然でもいいから『本質は同じ』であると言わってくれば充分なのだ。

明彦やゆかりも大体同じようなものだった。そもそもペルソナ能力が一体何なのか自体、よくわからないまま戦っていたという毛色が強いようだし。これを機に、自分の

能力が何であるか、そして自分自身が抱える問題に向き合つてほしいと至は思う。

「ペルソナ能力に目覚めた人間は、否応にも『自分自身』と向き合わなきやいけなくなる。目覚めた理由が何であれ、だ」——そう伝えれば、この場にいる全員が苦い表情を浮かべて視線を彷徨わせる。どこか不安そうに曇つてしまうものだから、至は苦笑した。

「何も、今すぐつて訳じゃない。ただ、それが『いつか』だつて話だよ。——それは明日かもしれないし、1カ月後かもしれないし、半年後かもしれないし、10年後かもしれない。そう無理に構える必要はないぜ? ……『その時』が訪れたら、どんなに時間がかかつてもいい。まっすぐにありのままを受け入れて、どんな形でもいいから最後に乗り越えりやいいんだ」

「でも……」

「だいじょーぶ! 頭の固い南条くんや、こんな問題だらけの俺でも乗り越えられたから!」

おどけた調子で笑えば、つられるように千影が笑った。彼も、幼くして『自分自身』と向き合い、乗り越えた人間の1人である。

援護射撃とばかりに「僕もその人間の1人です」と晴れやかな顔で言えば、周囲が驚いたように目を瞬かせた。

「確かに、自分自身と向き合うのはとても辛いし、苦しいことだらけです。……だけど、それと向き合ったおかげで、今の僕がいる。みんなとの出会いがある。

……嫌なことばかりじゃなかった。幸せだったことも、楽しかったことも、数えきれなくらいありました。それがどんなに些細なものでも、僕には充分だった」

「チカ……」

「——そう。まるで、『奇跡』みたいだった」

噛みしめるように視線を落とした千影の様子に、陽向は全てを察したように眉尻を下げる。

どこか悲しげに揺れる猩々緋。千影の薄紫苑はまっすぐにそれを見返し、細められた。至もそんな2人を見守るように視線を向ける。

思い返すのは戦いの日々。何気ない日常が壊れ、突如異常に放り込まれ。自分自身の弱さと向き合い、無慈悲な真実に打ちひしがれ。

全てが終わったその時に、自分の手に残されたものがあつた。自分の手に託されたも

のがあった。振り向けば、たくさん仲間たちが笑っていた。

結ばれた絆は決して解けることなく、どんなに遠く離れても繋がっている。それぞれがそれぞれの道に進み、二度と重なることがなかったとしても。

きつと覚えている。そして、その日々は決して色あせることはない。

制服に身を包んだ高校生が繰り広げた御影町での戦いも、どこかの自分が命を賭けて散った平行世界の出来事（間接的だが）も、いい年こいた社会人が噂を操り駆け回った珠？溜市での戦いも。

救えなかったものがあって、救う事の出来たものがあって、大切な人たちとの出会いや別れを経験して、彼らと結んだ絆がなくて、彼らに託したものや託されたものがあつた。それら全てを思い返しながらか、至はうんうん頷いた。

「……なんか、すげーなあ」——ぽつりと順平が零す。どこか遠くを眺めるような視線を至に向けながら。

この力を手に入れた時、まるでヒーローにでもなったような気分だった——夢心地のように、彼は呟いた。けどそうじゃないんスね、と付け加える。

「そんな壮大なモンと、向き合えるかな……」

「自分自身との戦い……そう言い切るには、簡単な問題ではなかったんだな」

順平の言葉に続くように、明彦が自分の手のひらを見つめる。至には、それが何か遠き日々を顧みるかのような仕草に見えた。——取り返しの利かない何かを悔いるような。

「まあ、俺も人の事言える立場じゃないし。答えを得たとしても、別の問題に直面する都合だつてある。あるいは、再び同じことを問われることだつてある。俺なんて、毎回毎回何かあるたびに問われ続けられるからなあ」

……ぶつちやけ、『至の出した答えを覆させ、絶望させたい』という“奴”からの嫌がらせという色合いが強いのだが。

這い寄る混沌がニヤリと笑う姿を幻視して、頭が痛くなる。それがお前に与えられた“罪”にして“罰”だ——“奴”の言葉が耳を震わせた。

ついでに、『その絶望や問いを何度叩き返されても屈しない』という実験結果をファイルモンから期待されているという色もある。

普遍的無意識の権化に、文字通りおもちや認定されてしまったが故なのだろう。己のペルソナに永遠と円環を司る蛇——ウロボロスがいることも、その暗示だったのかも

しれない。

自分の尾を啜えたその姿は、全ての始まりと終わりにして終わりと始まりを意味する。巡る理が意味するのは、きつと至の運命そのもの。至が示しだした世界のアルカナ。

若きペルソナ使い達は沈黙したまま。自分が向き合うべき問題に、そして自分が至るのであろう答えに想いを馳せているかのようだった。

その姿に、かつての自分を重ね合わせる。悩み、苦しみ、足掻き、必死になって出した答えを思い返す。

どんなに時間がかかっても、彼らはきつと答えにたどり着けるだろう——至は頷きながら、再びコーヒーに口を付ける。もうぬるくなっていた。

\$\$\$

同日 夜

至と千影の家／至の自室

「……それで、江古田の奴、ばつちり処分されたらしい。ざまーみろだよなあ」

『……相変わらず厳しいな、至は』

「そうか？ 俺から言わせてもらえば、向こうが酷すぎるんだよ」

受話器越しから漏れたのは、どこか疲れたような航の声だった。どうやら今日も徹夜だったらしい。

今から夜食を作るためにキッチンに行く途中だったという彼の話を聞いて、このタイミングで電話を入れてよかったと本気で思った。

あと一歩遅ければ、明日のニュースは『度重なる南条コンツェルンでの爆破事故』という第一報が流れかねない。

隠ぺいする南条グループの人々が可哀想である。特に圭が。

「ま、世間話はこれくらいにしてだ。……やっぱり、今回の一件は“クロ”だったよ」

至の言葉に、受話器越しから沈痛そうな航のため息が聞こえた。

『桐条グループ全体の意思か?』

「いや、先代の残した置き土産つて色合いが強いな。……ご当主は美鶴ちゃんに全てを話してるわけじゃないから、何とも言えないけど」

『重要なのは、当主が“何をどこまで知っているか”だろう。全てを網羅していて隠しているのか、まだ掴み切れていないものがあるのか……』

「俺は後者に賭けるわ」

『こら、賭け事じゃないだろう』

咎めるような響き。けれど、楽しんでるように聞こえるのは気のせいではない。

至のノリに安堵したのだろうか。真相は定かではない。

『……それで、どうするんだ? このまま巖戸台で調査を続けるつもりか?』

「——ああ、そのつもりだ。陽向や美鶴ちゃんたち、もとい放課後特別活動部の面々のバックアップに協力しながらな。勿論、協力の対価として、桐条側のデータ類を公開してもらえるように交渉するつもり。……もちろん、渋った時用の“保険”も用意してある」

『圭が聞いたら嫌そうな顔するだろうな。えげつない奴だと言いそうだな』

「なんとでも。美鶴ちゃんや陽向を巻き込んでるんだから、これくらいやったって文句ないと思うけどな。……ご当主の事は信じたいと思ってるよ。信じたいからやるんだろうが」

きつと、鏡に映った自分は凶悪な笑みを浮かべているに違いない。こうやって何人の人間を黙らせてきただろう。

伊達に「敵に回すと恐ろしい存在」と仲間達から言わしめた訳ではないのだ。「キミ、絶対探偵でもイケそうだよね」——半ば怯えた様子で零したタダシの言葉を思い返す。

むしろ探偵でも怖いとたまきは言っていた。ちなみにあの2人、結婚していい家庭を築いている。勿論探偵業も続行中だ。(表面上のだが) 同業者としての付き合いも続いている。

ふふふ、と。どこぞの大魔王のような笑い声を零しながら、至は資料へ視線を向ける。引越す以前から、そして引越してきた当日から今まで集めた桐条グループの情報。流石の武治も冷や汗モノばかり取り揃えた。

端的に言えばこれは「脅し」や「恐喝」の部類に入るのかもしれない。でも、そうでもしなければ語ってくれそうにない相手でもある。

「いざというときのために、圭にも根回ししといてくれるよう頼んどいてくれ」

『わかった』

「あ、あと」

『何だ?』

電話を切ろうとした航が訝しげな声を漏らす。それに構わず、至は言葉が続けた。

「夜食は台所用電化製品を使わないものにしとけ。これ以上爆破されたら、流石の南条くんも困るから」

『……………じゃあ、何を食えと言うんだ』

「……………バランス栄養食?」

『虚しすぎるだろ、それ』

0—8. 過去に思いを馳せつつ新しい一歩を踏み出すだけの簡単なお仕事

2009. 6 / 13 朝

至と千影の家 / リビング

「いつでもにいさんは水臭いですよね。まあ、昔からなんですけど」

朝食のコーンフレークを食べ進めながら、千影が苦笑した。どこまでも真っ直ぐな——そして自分を捉えて離さぬ薄紫苑に、至は気まずくて目をそらす。

彼には敵わない。いくら至が誤魔化そうにも、すぐに隠し事を察知し、逃げ道を塞ぎにかかると。敵に回したくない人間とは千影のことを言うんじゃないか。下手すれば至よりもタチが悪いかもしれない。

こいつはきつと将来大物になるだろう。それこそ、桐条グループや南条コンツェルンを揺るがしかねない程の。

「にいさんに似たんですよ」

「……おかしいな。俺はまだ何も言っていないんだが？ てか、人のモノログ読むな」「貴方の背中を追いかけ続けられれば、誰だって何かしらの影響受けますって」

「僕はそれが顕著なだけです」——満面の笑みで千影は告げる。ああ、そういえば、転校先の自己紹介はいつも「好きな人：家族、好きなこと：家族の手伝い、好きなもの：家族の作った料理、嫌いなもの：家族に危害を加える現象・人間すべて」と答えるような性格だったか。

このままいけば大学や会社での自己紹介もこれで通す危険性がある。いや、多分そんなに目立つような問題に発展するとは思わない。思わないが、何だろう。……ちよつと、言葉にできない不安のようなものが湧いてくるのだ。

テーブルの上に置かれたボイスレコーダー。つい先程まで、昨晩航と交わした会話が再現されていた。放課後特別活動部に協力する代わりに、桐条側から情報提供を要請する——そこまでは、あまり重要ではないのだ。問題なのは、その先である。

『千影には内密にしておくべきだ。一歩間違えれば、望まぬ戦いを強いることになる』『当たり前だ』——航の言葉に対して即答した、至の声。

その部分を重点的に再生しながら、千影は微笑んでいた。「僕をのけ者にできると

思っていたんですか、にいさん？」——おかしいな、笑顔が怖い。背後に、彼が呼び出せうる全てのペルソナを背負っているかのような殺気が漂ってくる。

特に殺気を放っているのは白銀の狼——フェンリルだ。ラグナロクで最高神オーディンと対峙し、それを飲み込むほどの強さを持つていた狼である。アルカナは Wheel of Fortune であり、彼の所持するペルソナの中では最強を誇るペルソナであった。

「僕たち、家族じゃないですか」

「そりゃあ、そうだけど。……お前、戦うの好きじゃないだろ？」

「むやみに暴力で解決しようとするのが嫌なだけです。戦いそのものを否定してる訳ではありません」

フレークを食べ終えて、残っていた牛乳を飲み干す。まるでラーメンの残り汁を飲む下すかのような勢いと体勢で、だ。

どん、と、叩きつけるかのように器を置く。千影が不機嫌になると、持っている物をぞんざいに扱う傾向があった。主に、食べ物や食器・置物などがそれに該当する。

——うん、怒ってる。間違いなく怒ってる。

どこまでも強いまなざしを向け——けれど笑みは一寸も崩さない千影の様子に、至は大きいため息をついた。彼は超がつく程頑固者でもある。一度決めたら絶対に引かない。千影は法王アルカナの持ち主ではないし、法王アルカナに適性があるわけではないに、だ。

……そういえば、sword剣には勇ましきとか激怒、あるいは失望つてのがあった。pentacle金貨には家族、自らが所有するものに対する強い執着という意味もあつたか。もしかしたらそれが化学変化した結果なのかもしれない。

まあ、アルカナがすべて正しいと言うわけではない。あくまでも〃その人物が持ちうる運命・性格的なもの〃を端的に示しただけなのだ。万物に当てはまる事象など、そうそう存在していないのが当たり前である。

にここにここに。

その擬音と共に、どずどずどずどずという擬音——視線が突き刺さる音も聞こえてきそう。

「……わかった、わかったよ。チカ、お前にも協力してもらおう。——いいな？」

そうやって両手を挙げれば、千影はパアアアアッ!!! と、表情を輝かせたのだった。

【0—8. 過去に思いを馳せつつ新しい一步を踏み出すだけの簡単なお仕事】

同日 夜

巖戸台分寮／ラウンジ

この場にいる全員の視線が、突き刺さらんばかりの勢いでこちらに向けられている。至はそれをひしひしと感じていた。おそらくは、隣にいる千影もだろう。しかし、至からしてみれば今朝の千影が向けてきたものの方が恐ろしかった。威力的な意味で。

「いやあ、新戦力が一気に増えたねえ!」——仲介役の理事長・幾月はへらへらと笑っていた。どうしてだか、至には幾月の笑みが好きになれない。なんとなくだが、どこか狂気のようなものを感じる。声を大きくして言うことではないのだが。

むしろ「奴」に近い、そこはかとなく邪悪な気配を感じるのだ。何故だろうか考えてもわかりそうにないので、この場は保留という事にしておこう。至はそう結論付ける。

そんな幾月の言葉をぶった切るようにして、千影がさらさらと自己紹介を始めた。淀みないその口調と話し方に、陽向以外の面々は少々圧倒されているらしい。

立石に水という表現がびったりなくらい流暢なのだ。しかも完全な敬語だ。物腰は柔らかいのに、決して折れぬ芯の強さや凛々しさが宿っている。

「至にいさんやひなに比べるとまだまだ未熟者ですが、どうかよろしくお願いします」「もう！ チカは謙遜しすぎだよ。ペルソナ覚醒歴でいえば、圧倒的に私の先輩じゃない」

「ですが、実戦経験はそんなに積んだことないんですよ。珠？瑠市や冬木市で起きた事件以来、まともに戦闘した事なくて……」

完全に身内話である。美鶴や明彦、ゆかりや順平、風花らなんて蚊帳の外状態だ。

が、2人の会話から「千影は相当の手練れ」であることを察したらしい。顔を見合わせ、千影に視線を戻して——それを何度か繰り返していた。

彼らの様子を見守りつつ、至も自己紹介を行う。ペルソナ能力歴は10年目、表面上は自称探偵、その正体は南条コンツェルンがバックに控える「対怪異調査員」。簡単に言えばエージェントに近いようなものだ。

ぶっちゃけ、圭に実力(?)を見出されて信頼されたために、この職業を幹旋してもらえたのだ。諸事情により金銭的に苦しきを感じていた時、彼は絶妙なタイミングで助け舟を出してくれたのである。

持つべきものは友人だ。それを、聖エルミン時代に身に染みる勢いで至は学んでい

る。
御影町の一件だけではなく、その後に来た恐怖の三角州^{トライアングル}——修羅場で。

ああ、あの時——麻希と英理子に「永世中立」と答えたために酷い目にあつた時は、玲司や正男、秀彦や圭が必死になつて麻希と英理子を食い止めてくれたつけ。

レイピア片手にウオフマナフを背負つた英理子と、トイレのつまりを直す時に使う吸盤(しかも使用済み)を弓につがえスクルドを背負つた麻希が不気味に笑つていたのが印象的である。2人が背負うペルソナは、己の適正アルカナの中で最強を誇るものたちであつた。

終いには優香やゆきのも参戦し、びつくり大怪獣ショー的な器物破損をやらかしてくれたか。玲司が降魔したルシファー(レベル99)が一撃で消し飛ばされたり、圭のヤマオカさんが絶句してたり、秀彦がパラスアテナと共に悲痛な雄たけびをあげていたり——ともかく、「何がどうしてこうなつた」くらい收拾がつかなくなつたのである。

ちなみに、その根本的原因である航は、最後の最後——ぶっちゃけ、現在進行形で首

をかしている真つ最中だ。

自分があの2人に好かれていることなど知る由もない。ついでに、自らフラグをバツキバキに折りまくる。彼にとって麻希と英理子は「大切な戦友」止まりなのだ。

恋愛方面に発展する気配はなく、おそらく恋愛方面について覚醒する気配も皆無。朴念仁にも程があるだろうが。本当に、早く決着つけてくれないだろうか。巻き込まれて貧乏くじを引きまくるのは他でもない至なのだ。

「い、至さん？ どうかしたんスか？　なんか、すっごい遠くを見つめてましたけど……」

「いやー、仲間や友人っていいものだよなアって思い返してたの」

順平の問いに、至は曖昧な笑みを浮かべておく。あまり詳しく話してしまえば、おそらく彼は耐えられないような気がしたから。だって、似たような性格だった秀彦や正男がメンタルブレイク引き起こして鬱になりかけていたほどだし。

疲れ切った秀彦&パラスアテナと正男&シヴァの姿。あの痛々しきは絶対に忘れられるはずがない。あと、ぼろぼろになりながらも至を守ろうとしてくれた玲司&ルシファーと圭&インドラ+ヤマオカさんも。

「それじゃあ、国光くんは2階の最奥の部屋だね。ええと、空本くんはラウンジにある受付の奥部屋だ。建前上“寮母”なので、その部屋を使ってもらうことになるが……」
「了解つす。……ああでも、南条くんから借りた家はそのままだとくつもりなんで。あちらとこちらを行き来する形で構いませんか？」
「うーん……わかった。それで構わない」

幾月はどこか不満そうだったが、最終的には頷いてくれたようだ。

寮母専用の部屋は、この分寮の中で一番広い。しかし、それでも至にしてみればまだ「狭い」のだ。資料を保管する棚やカスタマイズしたデスクトップPCを置けば、あつという間にスペースが足りなくなってしまう。

おまけに資料だつて入りきらない。何故なら棚が入りきらないから。文字通り足の踏み場もなくなつてしまうだろう。それは、至にしてはとも困る事態だ。どこに何かあるか分からない——下手すれば情報漏えいに陥ったり、肝心な証拠を失つてしまう事になる。

そんな致命的なミスのせいで陽向や千影たちに何かあつたら、それこそ「どうやって償えばいいのかわからない」。自分も江古田と同じ轍を踏んでしまう。それだけは絶対

に嫌だ。至は心の中でうんうん頷いた。

「これからよろしくな」

「はい！ よろしく願います」

「よろしく願いますよ、至さん！」

面々が笑い、頷く。彼らからも、至や千影が加わることに関する異論はないようだ。新たな仲間として受け入れられたことに安堵する。

そういえば珠？ 瑠で克哉や舞耶たちとも、紆余曲折会った挙句、最終的には仲間として迎えてもらえたつけ。——懐かしい。もう8年も経過していたのか。

平行世界の自分も、紆余曲折や様々な偶然が重なった結果、〃彼等〃を仲間として見ていたか。間接的にしか知らないけれど、おそらくその時も今と同じ気持ちだったに違いない。

まだまだ未熟な後輩たち。可愛い可愛い後輩たち。——次世代のペルソナ使いたち。先輩として守らねばならぬ〃未来の紡ぎ手〃たちだ。至は気合を入れるように、ひとり小さく頷く。そうとは気づかれぬほどに。

今度こそ、ちゃんと守り抜けたらいい。平行世界の自分が〃彼等〃と共に歩めなかつ

た道を、至は歩いていくことになる。

「大人」が役に立たないと嘆いた少年は今、役に立たないと嘆いていた「大人」になった。どんな大人になるべきなのか、どんな大人になりたいのか。至は今でも、まだ悩んでる。

唯一の指針は「子どもを絶望させない大人になる」くらいか。そうなるためにどうすればいいか——至は、未だに答えに至っていない。見つけられる気もしない。

それでも諦めたくないのだ。どうしようもない壁にぶつかっても、それを「はいそうですか」と受け入れて絶望できる程、至は人間が出来上がっていないし達観もできない。

諦めないことに、諦めたくないと思うことにこそ、きつと意味がある。それが起こした「奇跡」や「希望」を、至は「彼」から教わったのだ。あの日々も、あの答えも、未だ色あせることはない。今も、そしてこれからも。

未だ興奮冷めやらぬといった様子で話しかけてくる順平やゆかり、明彦や風花らの質問やら話題やらに答えたり乗ったりしながら、至はそんなことを考えていたのだった。

(……しかし、難なく迎え入れてもらえてよかった)

件の『保険』を使わなくて済んだことに、至は心の中で安堵していた。勿論、その資料は『保険』なので、これからも処分せず、一定期間で改訂しながら残し続ける予定だが。

\$\$\$

2009・6/14 夕方

辰巳ポートアイランド

人込みの中で見かけたのは、先日首実検に協力してくれた(?)少年・荒垣 真次郎 だった。

見知った顔が自分の目の前を通り過ぎると、声をかけずにはいられない。

「ガツキーガツキー荒垣くん！」

至の声に気づいたらしく、彼はほんの一瞬こちらに視線を向ける。が、我関せずとも言うかのように早足で素通りしていった。

勿論、このまま流す至ではない。これでもかと言わんばかりに声を張り上げ、手を振りながら駆け寄った。それを察知した真次郎は、ものすごく嫌そうに眉を顰めて歩調を速める。

ローヒールブーツがレンガを蹴る音がコツコツと響く。それは次第に速度を増し、ついにはカンカンカンカンと険しいものになった。つまり、2人とも全力疾走になったのだ。

傍から見ればバカらしい光景だろう。しかし、至は至って真面目なつもりである。おそらくは、逃げている真次郎も。

「あああああらがああああつきくうううううううん!!」

「だあああしつけえ、ついて来んなああああああ!!」

この時間帯に路地裏でたむろっている人間たちは、おそらく絶句しているに違いない。

サトミタダシの回し者・至と、ここに独り佇んでいるツキ高生・真次郎が、大声でシャウトしながら駆け回っているのだ。どこからどう見ても珍妙な光景である。

普段の思考回路だったらそう判断しているであろう至だが、ここでは絶賛当事者だ。そして、当事者は得てして「当事者故に思考範囲が狭く、短絡的で愚行に走りやすい」ものである。

ついでに部外者は基本無干渉を貫くものだ。つまり、追いかけてここに興じる2人を止めようなどという良心的且つ行動的な人間は、この場に存在していない。あるのは「まあ、あの人たち……」「しつ、見ちゃいけませんー」的な考えだけだ。

どれくらい追いかけて続けただろう。追われる側も策を練ってきたようで、人込みに紛れたりフェイントを使ったりの行動を取り始める。至もそれに食い下がった。

しかし、思う。これでは埒が明かないな——至はわざと歩調を緩やかにし、ついに足を止めた。あつという間に真次郎の背中は人込みに溶けて消えてしまう。勿論、打開策はある。

即座にペルソナの共鳴を行えば法王^真アルカナ^次の主^部がどの地点を移動しているかすぐに分かった。どうやら、裏路地近くのベンチに腰かけて休んでいるらしい。

極力自分の共鳴現象を抑えながら、ゆつくりと真次郎の背後から近づいていく。そし

て——

「逃げるなんて酷いぞ荒垣くん」

「うおおお!」

ひよっこり顔を出せば、真次郎はあわやベンチから転がり落ちそうな勢いで飛び上がった。

極力こちら側の共鳴現象を殺していたとはいえ、そこまで驚くことはないだろうに。

「アンタ、諦めたんじゃないのかよ……!?!」

「おたくの持つてるペルソナの共鳴現象を使えば、どこに逃げようがすぐにわかるようになってるんだよ。……ペルソナの共鳴現象。ペルソナ使いには必須の知識だぜ?」

ポケットからカードを取り出す。煩わしい位に輝くカードに示されたアルカナは法王。真次郎のペルソナが持つ属性だ。

にやりと笑えば、彼はしかめっ面を浮かべた。眉間の皺が一段と深く刻まれる。「——で、何の用だ」——声のオクターブが下がった。明らかにイライラしてる。

「この前の礼がしたかった。あの時は本当にありがとう」——そう告げれば、真次郎は

ぱちくりと目を瞬かせた。すぐに合点がいったのか、だから俺は何もしてないと頑なに
呟く。

「そんなことない。君が協力してくれなかつたら、影時間内にふらふら歩いている女子
高生が森山さんだつて気づかなかつた。もしそのままだったら、デカイシャドウに美鶴
ちゃんや岳羽さんがやられてた可能性だつてあつたんだ。だから、全部荒垣くんのおか
げだよ」

「……アンタ、桐条の知り合いなのか？」

「ああ。何度か会合で顔を合わせてる程度だけどね。南条くん——ああ、俺の同級生で
上司で南条コンツェルンの元締めやってるんだけど、弟共々社交界に引きずり出された
のがきつかけでさー。それからの付き合いなんだ」

「……なるほど。アンタが桐条の言つてた“王子さま”ってトコか……」

「え、なに？　なんか言つた？」

「いいや、なんでもねえ」

真次郎はふいっと視線をそらす。

「話はそれだけか」——彼はぶつきらぼううに言つて、至を睨んだ。相変わらず野良犬を相手にしている気分になる。

しかも、心的な傷を抱えているタイプのだ。人に慣れるまで、すつごい時間がかかる。

その分、懐いてくれた時の喜びは半端ではない。特に、千影や陽向でそれを実感している。

至に引き取られた当初は、借りてきたペットみたいにびくびくしていたのだ。それが今では「至にいさん」と呼んでくれるようになった。嬉しい限りである。

どうやらその思考回路がダダ漏れしていたようで、真次郎が怪訝そうに表情を引きつけていた。どこことなく居心地が悪そうである。そして、何か可哀想なものを見つめるような視線だ。

「千影や陽向と年が近い、あるいは年下の人間だところなっちゃうんだー——至があらはーと笑えば、真次郎は大きいため息をつく。ひどく疲れ切った様子で立ち上がるうとして、小さく咳き込んだ。

ゴホゴホ、と、どこか嫌な響きを宿す不穏な咳。まるで、彼の命を削っているかのようだ。大丈夫かと声をかければ、平気だと言うように手で合図される。

「……心配しなくとも、うつるモンじゃねえよ。気にすんな」

「ごめん、うつる心配なんてこれっぽっちもしてない。むしろ、この前のアルカナの象徴の方がよっぽど心配」

「アルカナって……アンタ、占いにでも凝ってるのか？」

「俺の場合、ペルソナ能力に目覚めたらセットでついてきた。ハッピーセットならぬヘルセットだよ」

普遍的無意識の象徴にして、人類実験に興じるバカ2人の顔を思い出した。ああ、なんて腹立たしいのだろう。至は大きいため息をついた。

あの2人がこの力を与えたのも、全ては実験のため。互いが互いの仮説を証明するためのものだ。嫌な副産物だなアと思いつながら、再びポケットからカードを取り出す。

示されたアルカナは死神だった。まるで彼の運命を至に警告するが如く、一際強く青い光が輝いている。ここまで切羽詰った輝きなのは珍しい。

先程彼が咳き込んだ時、それが一番激しかった。まるで真次郎の咳と呼応するかのよう。うに。

カードを見ていたため、真次郎がどんな表情でいたかは知らない。ただ、彼の居心地

悪そうに息を吐き出す音だけが響く。

「8年前、ワンロン占いが流行った時の事思い出すな——胡散臭そうに真次郎は言った。どうやら巖戸台でも、あの占い師の占い方が広がっていたらしい。

アレと似たようなものだったらまだマシな気がする。噂の力によってブーストされていたとはいえ、人の未来を“ハッキリ”と示すことが出来るのだから。こっちはざっくりとしたものを察する程度が関の山だ。

ついでに、時折普遍的無意識達の干渉なのか、得られる情報に若干——むしろかなり——のムラが見られるのだ。それも現在進行形で、である。腹立たしいったらありやしない。完全に至で『遊ぶ』つもりなのだろう。

「もういいか」と、真次郎が問う。本当に帰りたくて仕方がないと言いたげな様子だった。ちよつと待つて、と引き留める。ますます眉間に皺が寄り、彼は重苦しい溜息を再び漏らした。「この間のお礼として、ひとつアドバイス——そう告げて、至は神妙な眼差しを向けた。

それにつられたのか、真次郎が目を見張る。微かに息を飲んだ音が聞こえた。

「君は、自分がペルソナ能力を持っていることについて考えたりしたことある？」

「……んな事、どうだっていいだろう。俺アもう、この力を“捨てた”んだ」

何か嫌なことを思い出したのだろうか。至の問いかけに、真次郎はそっぽを向いた。彼の背中が、*“彼”*の背中とダブって見える。

「大きな罪を思い出したがために、世界が滅びの危機に瀕してしまった」——そう、辛そうに語った時の様子と似ていた。

「罪には罰が下される。——決して逃れられはしない」

至の口から零れ落ちた単語に、真次郎は一瞬凍りついたように止まった。裏路地を見つめたまま、真一文字に口を結ぶ。

「でも、下されたのは罰だけじゃなかった。……それに勝る程の*“奇跡”*や*“希望”*があったんだよ」

他の誰かがそうだと認めなくとも、至にとっては*“奇跡”*みたいな邂逅だった。罪や罰など霞んでしまう程の*“希望”*。

淡く発行するのは、2枚。星が描かれた正位置のカードと、月が描かれた逆位置の

カード。それを真次郎に示すように見せれば、くだらないと言わんばかりに鼻を鳴らされた。

「信じられないならそれでもいい。『いつか』、信じられる時が必ず来るから——至は確信をもつて付け加える。まっすぐに、真次郎を見つめながら。」

真次郎は神妙な顔つきで至を見返す。しばし無言のまま向き合っていた後、零すように問いかけてきた。

「……アンタは、その『奇跡』とやらを見たことでもあんのか?」

「ああ。あるよ。その『奇跡』に救われて、今ここにいる」

思い返すように空を見る。どこまでも鮮やかな茜色。もう少し赤みが強ければ、『彼の着ていたライダースーツと同じだったろうか。』

珠? 瑠市だけが残された世界へ帰って行った『彼』は今、どうしているのだろう。元気でやっていてくれるといいのだが。——正直、元気であってほしい。

至の様子に感化されて、少しは参考にするつもりになったのだろうか。真次郎はちらりとカードに視線を向けた。

「一応、覚えとく」

——それだけ呟いて、彼はくるりと踵を返す。

そのまま、人込みの中へ消えていく。今度こそ、至は真次郎を引き留めなかった。

彼の背中を見送ってから、どれほどの時間が過ぎたのだろう。空はもう薄暗くなっており、もう少しすれば夜の帳が落ちてくる。一番星が遠くで瞬き始めていた。

そろそろ寮に戻らねば——至がそう考えた時、ポケットの中に入っていた携帯電話が呑気に鳴り響いた。勿論着信メロディは『サトミタダシのうた』である。近くをたむろっていた鳩たちが悲鳴を上げて飛び去って行った。

ディスプレイに表示されたのは『要 陽向』。普段はメールで連絡してくる彼女が電話を使うのだ、火急の用事であることは間違いない。即座に取れば、今日は暇かと問いかけられた。用事もないので二つ返事で頷く。

『今日、タルタロスにアタックするつもりなんだ。新しい階層が開かれたから』

「そうか。それじゃあ、今日は新戦力の確認とバトルスタイルについての摺合せってトコだな？」

『うん、正解！ 全員出撃できるみたいだからよろしく!!』
「おっけ、任せとけ！」

会話もそこそこに、至は携帯電話を切ってポケットに入れる。
そして、後輩たちの待っているであろう巖戸台分寮へ向けて駆け出した。

1. 新しい戦いに身を投じるだけの簡単なお仕事
 1—1. ピンクのボツタクリ妖精をフルボツコにするだけの簡単なお仕事

?????/?/?/?/?/?/?/?/?
 /
 ??????/?/?/?/?/?/?/?/?
 /
 ??/?
 ?

『使用料は3000円だけど、どうする？ あ、カードは未対応だから。現金しか受け取らない主義なんで』

ピンクの妖精がにこにここと笑いながら首をかしげる。派手なブルーグリーン^ダの髪や、顔に施された派手なペイントが一際笑顔を際立たせていた。

奴を見返す面々は三者三様。しかし、面々は聖エルミン学園の制服を着ていることと、険しい表情をしていることは皆共通だった。

ある者は眉間に皺を寄せ、ある者は口元を引きつらせ、ある者は完全に表情が消えている。苛立たしげに歯ぎしりする者や、拳を掌に打ち付ける者もいた。

この妖精の要求金額、実は彼らの所持金の7割強なのだ。どこからどう見ても完全な『ボツタクリ』である。

回復アイテムでさえ、(まだ)500円前後で購入できるのに——等々、面々の怒りは尽きない。

——ゆらり。

満面の笑みを浮かべていた妖精は、何かの気配に気づいたように首をかしげた。何も理解していないので笑顔はそのままであったが。

もし、それが「危機感」からくるものだと思えば、慌てて逃げ出していたであろう。逃げ出すことが正しい選択肢であったのだ。しかし妖精はそれに気づかなかつた。故に結末は定められた。

次の瞬間、ピンクの妖精は凍り付く。目の前にいる少年少女が背負っている「何か」に。——多種多様のアルカナのペルソナが具現し、一斉に戦闘態勢を取る。少年少女も、様々な得物を構えていた。完全に殺る気満々だ。

『え、ちょ、マジ!? やめて暴力反対!! ここは穏便に行こうよ! ねっ、ねっ!? え、

あ、あの、ちよ、待っ——』

慌てた妖精の制止も虚しく、

『アツ——!!?』

この場一带に、大爆発が巻き起こった。

?????/?/?/?
/?/?/?/?/?/?/?/?
/?/?
?

ピンクの妖精は真っ青だった。

奴だ。奴らがいる。正しくは「あの時自分に攻撃を仕掛けてきた学生のうち2人」が、

今自分の目の前にいる。

普段通りのノリで使用料をふっかけたのまではよかった。七姉妹高校の制服を着た少年少女と記者風の女性、春日丘高校の制服を着た少年が嫌そうに顔を歪めたところまでは。

4人は嫌そうな表情を浮かべただけで止まった。しかし、それで止まらず、ペルソナを降魔し得物を構えて微笑むのは——件の2人。

3年前、妖精を文字通り“フルボッコ”にした聖エルミン学園2—4の生徒たちのうち、姉御肌の女傑と左耳にだけ星のイヤリングをつけていた自由奔放な子ども。

女傑のペルソナであるカーリーが、自由奔放な子どもペルソナであるナルカミがこちらを睨みつけていた。殺気のもつた視線に晒され、妖精はガタガタ震えだす。

——そして、断罪の時は訪れた。

『——久しぶりだな、ボッタクリ妖精』

イヤリングの青年がにやりと笑った次の瞬間、この場周辺に大爆発が巻き起こった。

??????
 /
 ???????
 /
 ??
 ?

記者風の女性と刑事が銃の安全装置を外す音を聞いた。赤い髪に白いメツシユを入れた女性は、おもむろにシャドーイングを始める。サングラスで目を隠した長髪の男性もコインを弄び始めた。

そんな彼らの中心にいたのは、左耳に星のイヤリングをつけた青年。得物を構えた面々の背中には、面々のペルソナが殺気を迸らせながら控えていた。完全に殺る気満々である。

（——あ、ボクオワタ）

妖精が自分の末路を悟った刹那、この場が凄まじい熱と光に包まれた。

2009. 6 / 14 影時間
タルタロス / エントランス

「どうしてお前がここにいるとか、また出やがったかテメエとか、うちの後輩たちにもポツタクリを働いたのかとか。——言いたいことは山ほどある」

青い光が立ち上り、彼のペルソナ・ナルカミが降り立った。青年の、深緋色の瞳がぎらりと輝く。

「だが、それよりもまずは殴らせろ」

殴るといふ単語とは裏腹に、青年が取った行動は、銃のトリガーに手をかける”というものだった。殴るところか殺しに掛かってきているレベルである。

数分前、帽子をかぶり顎にうつつら髭を生やした少年が「アンタどこに戦争しに行くんスカ!」と、青年に突っ込んでいたことを思い出した。何事かと顔を出さなければ、きつと逃げおおせたに違いない。死亡フラグなんて立たなかつただろうに。

己の愚行を悔やんでも、もう遅い。

ピンクの妖精は、諦めたように弱弱しい微笑みを浮かべる。口元が勝手に引きつった結果だ。笑いたかつたわけではない。

しかし、青年にとつてはそれも怒りを煽るモノでしかなかつたのだろう。彼の口元には、歪んだ笑み。

彼のペルソナが力をため始める。どう、と風が巻き起こる。それに煽られて、左耳に ついていた星形のイヤリングがしやらしやらと揺れた。

「——歯あ喰いしばれ、ボツタクリ妖精!!」

ピンクのボツタクリ妖精——トリッシユは、己の末路を受け入れた。

【1——1. ピンクのボツタクリ妖精をフルボッコにするだけの簡単なお仕事】

ひとしきりボツタクリ妖精をのし、至の活躍（というか脅迫と恐喝）によつて、どうか時計による回復料一律定額（プラスで使用料金50%カット）を勝ち取った。

これで陽向たちの財布が困窮することはないだろう。いい仕事した、と、至はうんうん頷いた。外道を成敗したおかげか気分がいい。

——いい仕事をしたので、体調が「絶好調」になった！

不思議なアナウンスが脳裏を駆けた気がしたが、そんなことはどうでもいい。

今なら何発でもヒエロスグリユペインをぶっ放てそうだし、銃の命中率も普段より上がったような気もする。

ぐるぐる腕を回してストレッチ。……普段よりも体が軽いのだ。これなら若者たちの足手まといになることはないだろう。

「い、至さん怖エ……。つてか、あの時計にあんな妖精が住み着いてたなんて……」

「私のルキアでさえも、あの妖精を知覚することができなかったのに……」

「しかも、あの様子からしてボツタクリの常習犯らしいな」

ぶすぶすと焼け焦げた床に視線を向けながら、順平・風花・明彦が呟く。気のせいか、風花がどことなく落ち込んでるように見えた。

どうやらこのボツタクリ妖精、新しい商売(時計による回復)を始めるにあたってジャミング能力を習得したらしい。

姿を消しながら料金を徴収する——これなら、文字通り「自分に被害が来る」ことはないのだ。だって誰にも知覚できないから、トラブルに発展する心配がない。

不平不満があっても、それを訴えるべき店主がいないのだ。それ故、利用者が諦める以外にないのである。今まで、陽向たちはそうやって泣き寝入りをしていたようだ。

勿論、過剰徴収の分もしっかり(強引に)返金してもらった。これで放課後課外活動部もやりくりが幾分か楽になるだろう。

ボロ雑巾同然になったトリツシユは、うめきながらも時計の上に座る。ピクシーと同程度の身長であるため成せることだ。奴はこれ見よがしにため息をつく。

「……相変わらず、キミはどこへ戦争しに行くんだい。背中にライフルとマシンガンなんて背負っちゃって、腰にはハンドガンだよ? しかも二丁拳銃だ。どこの傭兵だよ?」

「バズーカ背負ってないだけありがたく思えこの守銭奴。本来だったら、テメーにロケ

ランを100発撃ち込んでも物足りねえんだ。それに、雪の女王事件時は背中にこのセツトプラスアルファで、鏡をはめ込む額縁背負って塔のぼりしたからな。正直まだ余裕だよ」

「あ……保健室に置いてあつた植木鉢も、背負って持ってこうとしてたもんね」
アガステイアの木

トリツシユは懐かしむかのように遠くを見た。おそらく、11年前初めて至たちと顔を合わせたことを思い出したのだろう。

鏡の破片を手に入れるために挑む3つの塔。その塔には、アガステイアの木と呼ばれる「不思議な力を持つ木」が一切存在していない場所だった。悪魔や邪なるものを祓う力を持った霊木は外敵を一切寄せ付けない。

故に、安心して休息できる場所だった。肉体疲労は回復しないが、拠点にはもってこいである。これのおかげで、至たちは安心して異界化した御影町を探索することができていたのだ。

ひよんなことからその情報入手した至は、保健室からこの植木を運んで行くこととしたのである。勿論、仲間達から大目玉を喰らい、しぶしぶ元の場所へ戻してきたが。

「ライフルとマシンガン、そして鏡をはめ込むための額縁のせいで凄いいことになってるんだから、これ以上荷物を増やすな。見てて辛い」——それが、仲間たちの意見で

あった。

ちなみに、彼らがそう言った時、至は既にその3つを全て背負っていたのである。しかも1人だ。もつとも、これは「事件を起こした張本人としての償い」のつもりだったのだが。

「実は、ついさつきまでこの時計も背負ってこうと思ってた」

「やめてくんない!? 確かにこれの原材料はアガスティアの木だけだよ」

「お前を見た瞬間に『もういいや』って思ったから、持ってたかねーよ。……美鶴ちゃんや陽向たちから、荷物を増やすなって言われてんだから」

至は大きく息を吐く。本来だったら背中にもう1つ、ロケットランチャーを背負っていく予定だった。

それを美鶴や陽向たちに言ったら即「やめて」と言われたので、しぶしぶライフとマシンガンに切り替えたのである。

どうでもいい蛇足だが、武器を提供してくれるお巡りさん——黒沢巡査の目の前で「コンピニでバズーカが買えた時代は昔の話か」なんてうっかり言ったせいで、あわや取調室行きになりかけたのが昨日の話だ。

圭が色々とりなしてくれなければ、事態はとんでもない方向に転がっていただろう。また貸一つ作ってしまったな、と、至は心の中でひとりごちた。彼がこめかみを抑えてため息をつく姿が妙にリアルである。

学生時代——雪の女王事件やセベク・スキャンダルに巻き込まれた際——、彼のキャッシュカードを利用して武器の購入をしていた。事件解決と共にチャラにしてしまったが、その時に「圭から金を借りた」という事実は未だ消えない。それで脅されたことは星の数ほどある。仲間たちはみんなそうだった。

「そもそも『殴る』って言っという銃のトリガーに手をかけるってなんだよ!? 確実にボクの事殺しにかかっているだろ!?!」

「ナルカミのゴッドハンドは打撃属性ですー。だから殴るといふ表現は間違ってますーん」

「異議あり! そのあとキミ、思いつきりボクに発砲して来たろ!? 色々連射して来ただろ!?!」

「ナルカミの一撃以外は全部外れたので実質上『殴る』表現だけで充分です。……ま、狙って外したんだがな」

「この鬼畜! ド外道!?!」

「人泣かせのボツタクリに言われたくねーよ。その言葉、そつくりそのままテトラカーンとマカラカーンで反射してやらア！」

「至にいさーん、何してるのー？ 行くよー？」

陽向の呼び声がかかるその瞬間まで、至とトリツシユのやり取りは続いていた。

\$\$\$\$

同日 影時間

タルタロス／奇顔の庭アルカ・後半

「オルフェウス！」

ガラスの割れるような音が響き、陽向のペルソナが姿を現す。幽玄の奏者——オルフェウスだ。彼女は豎琴をかき鳴らし、術を発動させる。巻き上がった炎がキリングハンドの群れを焼き払った。アギの複数形呪文・マハラギである。

『弱点にヒット！ わあ、一気に敵を一掃しました!!』

風花が声を弾ませる。確かに、あんな勢いで敵を一掃する様を見ていれば気持ちがいだろう。

至もうんうん頷きながら、愛用しているライフルの照準を合わせる。狙いは、低空飛行で飛び回るスマッシュレイヴンの群れたちだ。

ランプの中にある赤い炎がちろちろと点滅している。それを目印に、引き金を引いた。1発、2発、3発、4発——派手な発砲音が鳴り響き、弾丸は寸分の狂いもなく鳥たちを貫く。

ぴい、と、悲痛な金切り声が響き渡った。群れのうち何羽かがそのまま消滅し、何羽かが体勢を崩す。それを見過ごさず、至は手を挙げた。

ナルカミを呼び出し、合図する。着物を着た彼の周囲に冷気が漂いはじめた。

それは一気に吹き荒れ、あつという間に残りのスマッシュレイヴンたちを飲み込む。

「マハブフダイーン！」

凄まじい吹雪は、鳥たちの後から飛び出してきた情欲の蛇ごと呑み込む。弱点を突かれたシャドウたちの金切声と、はじけ飛ぶ音が派手に響いた。

これで、面々の後ろ側は大丈夫だ。しんがり役として、きちんと役目を果たすことはできたと思う。

「真田先輩はあつちの敵を、桐条先輩はあそこにいる奴らをお願いします！」

「わかった。こつちも負けられないぞ！——ポリデュークス、ジオー！」

「了解だ。——ペンテシレア、マハブフ！」

陽向や自分の活躍に触発された上級生たちも動く。陽向の指示に従い、攻撃に入つた。召喚機の引き金が引かれ、明彦のポリデュークスと美鶴のペンテシレアが具現する。

迸る雷が鋼鉄のギガスを襲い、巻き起こつた冷氣が徒党を組んで湧いてきた嫉妬のク

ビトたちを一網打尽にした。見事な弱点攻撃だ。

互いの健闘を讃え合うように2人は顔を見合わせる。「ナイスです先輩!」——陽向も嬉しそうに笑いながら親指を立てた。

その様子に微笑ましさを覚え——しかし、ちよつとした油断が身を滅ぼすことに繋がるのだ。

至は反射的にショットガンを構え、撃つ。弾丸は、美鶴と明彦の丁度背後に当たる位置から突っ込んできたダークイーグルの羽に直撃した。

振り返った明彦に召喚されたポリデュークスが、間髪入れずジオをうち放つ。悲鳴を上げて崩れ落ちた黒鷲に、美鶴の見事なレイピア捌きと蹴りが炸裂。派手にはじけ飛んだ。

どうやら援護は間に合ったようだ。そして、向こうで別の敵たちを相手取っていた千影・順平・ゆかりも敵を撃破したようだった。

この階で徘徊していたシャドウどもは、あらかた退治できたらしい。静まり返った空間。今度こそ、仲間たちは一息つく。

至も警戒を解きつつ、けれど愛用の銃をいつでも構えられるようにしておくことは忘れない。

「にーいさん、ナイス援護!」——陽向が満面の笑みを浮かべた。至もそれに答え、その

ままハイタッチ。伊達に10年間、異形のものど戦ってきたわけではないのだ。

念のため、風花に素敵を依頼した。ほどなくして結果が返ってくる。目立った強敵や、要注意らしい死神タイプの姿もないらしい。

面々を見渡せば、まだまだ余裕のようだった。むしろ、本格的な探索はこれからだと言いたげに、瞳をぎらつかせている。

「よーし！ この調子で、番人シャドウのいる階まで駆け上るぞー！」

「『おー』」

陽向の宣言に、仲間たち全員が拳を突き上げる。至もそれに続いた。

影時間はまだまだ始まったばかりである。そして、この塔の攻略も。

この先にどんな運命が待っているのか、どんな謎が眠っているのか——まだ、誰も知らない。

2012. ?/? 昼

八十稲羽／寂びれた神社

「……ふーん。キミ、この神社を再興させたくて悩んでるんだ」

見るからに寂れた神社。それなりに手入れはされているようであったが、やはりボロボロなのは明らかである。

その陰で、1匹の狐が悲しそうにうなだれていた。首元には赤いチェック柄の前かけをつけている。彼女はとても元気が無さそうだ。

そんな狐の眼前で点滅するのは、淡い光。

「なら、お賽銭を効率よく増やすためにいい方法、教えてあげる。……もちろん、タダじゃないよ。ってか、タダでするはずないじゃんか。世の中は等価交換が基本だしね」
♪

ピンクの服を着た妖精はにつこりと笑っている。対して、それを持ちかけられた狐が忌々しそうに眉を潜めた。しかし、狐にはどうすることもできないらしい。渋々、と言

う様子で小さく鳴いた。

了承を意味する合図。こうなれば、言質は取つたも同然だ。妖精はふふふと笑つて視線を上へ向ける。

神社の境内に生える木は、魔を寄せ付けぬ特別な木。その木に生い茂る葉には、どんな怪我や病も一瞬で癒す不思議な力が込められていた。

それだけではない。近々、この田舎町に大きな異変が起きようとしている——それを利用しない手は無い。「近々、いい金づるが来るからね」と、狐に耳打ちする。

ついでに利益の7割を「手間賃」として提供させる約束もした。これで、今回こそがつりお金が入る。

今まで3回全部酷い目にあい、赤字で終わったのだ。今度こそ、今度こそ——気分がよくなつて、妖精は三日月形の笑みを浮かべる。

「いつか崇つてやる。オーバーキルしてやる」とでも言いたげな呪詛のこもつた狐の視線など歯牙にもかけず。

ピンクのボツタクリ妖精は、頭の中で呑気に札束を思い描いていたのであった。

——偶然事件に巻き込まれたためにこの町を訪れた“天敵”によって、オーバーキル並みにフルボッコにされるまで、あとXX日。

1—2. 色んな相手と語らうだけの簡単なお仕事

2009. 6/14 影時間

タルタロス／奇顔の庭アルカ・後半

Q. 昆虫の王様と言えば？

A. カブトムシ。

小学生の男の子に質問したら、（上にヘラクレスだの何だの余計な単語がついて来る場合もあるが）大体そんな答えが返ってくるだろう。

あるいは、大人でも即答する人間がいるかもしれない。かくいう至も、昆虫の王様はカブトムシだと思ってる。誰が何と言ってもカブトムシだ。

タルタロス内部にも、たまにカブトムシを模したシャドウが現れるのだそう。陽向曰く、前の階層であるテベルではよく見かけたという。

現在地点、47階。風花が「番人シャドウがいる」と言っていた場所だ。

丁度そこに、デカイカブトムシがいる。しかも3匹。

黄金色に輝く装甲のような固い皮膚。羽の部分には繊細な装飾が施されている。職人が、己の持ちうる限り全ての技術の粋を集めたかと思われんばかりの、だ。

羽の模様ばかりではない。奴らが頭に頂く王冠もまた、様々な宝石があしらわれているではないか。博物館に展示されてもおかしくないレベルだろう。

「文字通り、 “昆虫の王様” ですね……」

眩しさに目をすぼめながら、千影が小さくため息をついた。キンキラキンに輝くカブトムシたちは、威風堂々とした佇まいを崩さない。

そういえば、 “奴” の眷属を止めるために冬木市を駆け回った時は、金ぴかに輝く外国人のお兄さんにご協力して頂いた。一人称が「我」^{オレ}で “王” を自称する、随分痛い人だった。……間違つても、本人の前では言わなかったが。

彼は自由奔放且つ身勝手に傲慢な性格であった。けれど、子どもを大切にしている人だった。港でよく釣りをしていた。アロハシャツを着て青い髪を結った紅い目の人や、赤いジャケットを着た銀髪で色黒の人も一緒だった。連れではなかったようだが。彼等もまた、その一件で至に協力してくれた人たちだった。

ちなみに、彼らの他にも協力してくれた人たちがいたが、「協力者全員が、 “奴” の眷

属が便乗しようとしていた元凶——『とある事件』の関係者」だったらいい。その大本になった事件も無事に解決したようだ。その後彼らは帰国してしまっただったので顔を合わせていないが、きつと故郷で元気にやっているだろう。

繰り返される10月の4日間。あんな事件、二度とお断りである。

——話が脱線したので元に戻そう。

件のお兄さんにカプトムシの写真を見せたら、どんな反応を示しただろう。まるで害虫を見るような目つきで、武器の雨あられを喰らわせたのだろうか？

もしくは、目をキラキラ輝かせて「献上することを許す（意識・俺に頂戴）」と上から目線で命令したのだろうか。

今朝、航から届いた荷物の中に入っていた特注品のカメラを取り出し、奴らを写真に収める。実はこれ、影時間でも使えるシロモノだ。

桐条グループの연구원たちと合同でシャドウの研究にも携わり始めた航から「シャドウの姿かたちを写真に収めて送ってくれ」という仕事を言い渡されたためである。

「よし、撮った。——あとは、心置きなく倒すだけだな」

「そうですね。……あまり長く見ていると、眩しさに居た堪れなくなってきたそうだな」

「確かに。あれは煌びやかすぎると言うか、何と言うか……」

至の言葉に、美鶴とゆかりが何とも言えなさそうに苦笑する。確かに——カブトムシという姿かたちがアレであるが——奴らは煌びやかだった。

もし奴らが無機物だったら、どこぞの博物館に「古代の遺産」として残されていてもおかしくない程、材料にもこだわっていいそうである。宝石とか金箔とか、あと装飾の模様とか。

順平も同じことを考えたらしい。「あいつが持つてる王冠、いくらくらいするんすかね……。売ったらそれなりの金額になるんじゃないかなー？」と、ひっそり零す。

「成程、倒すついでに軍資金になつてもらうのか。……それはそれで、モチベーションが上がりそうだな」

「……前にも言ったがな、明彦。これは遊びじゃないんだぞ」
「わかつてるさ。ただ……」

美鶴の忠告を流すように明彦は返事をしたが、何かを言いよどむ。

うまく表現できる言葉を探しているかのように、口を開いたり閉じたり。何か考え込むように唸り、腕を組み、もどかしそうにしていた。

煮え切らぬ様子である彼に、美鶴が首をかしげる。しばし明彦はうんうん言っていたが、どうにか言葉は見つかったらしい。

無理矢理絞り出すかのような——けれど、そうすることで揺るぎそうになる何かを抑え込むような——声で、紡ぐ。

「…………この力を俺が持っている理由はまだわからないし、どのようにして自分自身と向き合えばいいかの見当もつかない。だが、今、俺ができることはわかっているつもりだ。……………それを、全力でやる」

明彦が顔を上げる。視線の先には、金びかに輝く巨大なカブトムシ。

彼の灰銀の瞳は、迷いながらも己の成すべきことを理解しているかのようだった。

ペルソナ能力を持つ者は、嫌が応とも己と向き合わなくてはならなくなる——先日、至に言われた言葉について、彼は彼なりに考えていたらしい。

同じような悩みを抱えていた順平もまた、神妙な顔つきで頷いている。どこか足元はおぼつかないけれど、なんとか立ち上がろうとしているようだった。

他の面々も、まだまだ迷いながらであるが、己自身と向き合おうとしているようだ。どんな方法で向き合えばいいかわからなくても、頭の片隅でそれを考えている。

きつと彼らは最初の頃、何も意識せずに戦っていたに違いない。「力があるから」という単純な理由で集められた、ただそれだけの集団だったのだろう。

父の真実を知るために美鶴に接触したゆかり、一族の罪を清算するために戦っていた美鶴、己の力を磨きたい一心でいた明彦、力を見出されたことに浮かれていた順平、持っていた力を見込まれてリーダーに任命された陽向。

目的も考えも、何もかもがバラバラ。彼らはてんで別々の方向を向いている。そこに、相互理解等々の考えは殆ど皆無だったのではないだろうか。仲間としての結びつきが希薄だったことは容易に想像できた。

(……まあ、俺も人のこと言える立場じゃなかったけどな)

今でこそ、聖エルミン学園2―4の面々やJOKER呪いを追いかけた面々とかけがえのない絆で結ばれている。しかし、戦いの幕が上がった当初、そこまでの結びつきがあつたかと問われれば――答えはNだ。

前者は暇さえあればつるむだけのグループでしかなかったし、後者に至っては「成り行き上」行動を共にしただけである。各々が各々の主張を持ち、好き勝手な方向を向いていた。

そんな奴らが、共に戦い抜くにつれて固い絆で結ばれた。様々な困難や理不尽に直面し、その度に手を取り合い、時には叱咤激励し合いながら乗り越えてきたのである。

「お前ら、間違っても“1人で乗り越えよう”とか考えるなよ？ 確かに1人でどうかしようとするのは大切だけど、人に助けを求めるのは恥ずかしいことじゃないんだから。……特にひなは注意だからな。委員会とか部活とかいろいろ掛け持ちしてるみたいだけど」

「了解！ 心配してくれてありがとう。でも、私は大丈夫！ やりたいことをやってるだけだから!!」

晴れやかな笑顔で、陽向は大きくVサイン。明朗快活なもの、責任感が強いのも、頑張り屋なのもいいことだ。

……だがしかし、それが裏目に出そうで少々心配である。陽向をフォローできる人間がいてくれればいいのだが——うん、現時点では難しそうだ。

千影に視線を向ければ、どうやら彼も同じことを考えていたらしい。不安そうに——けれどそれを押し殺すように苦笑する。

他の面々も色々思う所があるらしい。陽向の様子に微笑ましそうな眼差しを向けつ

つ、何かを決意したような色を見せた。……それが何であるかまでは、至は察せなかつたが。

ひとしきり笑いあつた後、彼らはカブトムシへと視線を向けた。その瞳には、強い決意。まだまだ粗削りであるものの、戦士としての素養や素質は充分だ。

自然と口元に笑みが浮かぶ。理由は単純、あの子たちと一緒に戦えるのが嬉しいのだ。その成長を見守り、力を貸せることが。

湧き上がる喜びを、至は受け入れる。

得物を抱えて敵と向かい合う彼らの最後尾に立ち、至は愛用の銃を構えた。

【1—2. 色んな相手と語らうだけの簡単なお仕事】

轟音。耳をつんざくような響きの後、崩れ落ちたカブトムシがはじけ飛ぶ。そして、最後のカブトムシがはじけ飛ぶようにして消滅した。

強敵との戦いを終えたためか、仲間たちの息は上がっていた。今日の探索はここまでが限界だろう。

転がった王冠を回収する。——これは、順平の見立て通り、高く売れそうだ。

「ふう。……今日の探索はここまでだね」

「さんせい。そろそろ俺っち限界だったし……」

「明日も学校だしね」

陽向の言葉に、仲間たちが顔を見合わせて頷いた。賢明な判断である。

丁度この階層に設置されていた転送装置を作動させ、タルタロスのエントランスに帰還する。へとへとになった面々を迎えたのは、ナビ役を担当していた風花だった。

彼女も随分披露しているようで、ちよつとふらついているように見えなくもない。ナビだろうがなんだろうが、ペルソナ能力を使うのは精神を消費する。

……もし、セベク・スキャンダル^あやJOKER事件^時に、風花のようなナビゲーター^{案内}がいてくれたなら——なんてことを考えた。

しかし、エルミンメンバーおよびJOKER呪い事件で出会った面々の索敵能力はみなどつこいどつこいである。よって、誰が見張り番をしても問題なかったのだ。

ついぞと言ってはなんだが、至たちに襲いかかってきた悪魔たちは（一応）コミュニケーションを取ることは可能だった。交渉やコンタクトによっては、戦闘を回避するこ

ともできたのである。

今回は塔登りがメインであり、町中を駆け回る必要がない＋安全な拠点があるという違いはある。しかし、ここは足を踏み入れるたびに内部構造が変化するという。

異界化した御影町や噂のせいで凄まじいことになった珠？溜市でさえ、迷宮内部が変わるということはなかった。これは確かにナビが必要だろう。

それに、シヤドウにコミュニケーションは通用しないのだ。出会ったら即戦うか逃げるかしなくてはならない。大半の場合が戦闘になる。

敵の弱点をアナライズで分析するナビゲーター役は重宝されるだろう。タルタロス攻略には欠かせない役割になることは確かだ。

面倒な敵と戦う羽目になった時は大変だろうが。悪魔たちの時は交渉やコンタクトを駆使してお帰り頂けたのに、と、至はひとりごちる。

「交渉できれば、少しは楽になるんだけどな」

「シヤドウに交渉？　ムリっすよ至さん。あれ、どうみても話通じる相手じゃないっしょ」

至の呟きに順平が苦い顔してため息をつく。やれやれ、と言った調子で肩をすくめる

彼の言葉に、美鶴も少し疲れた様子で頷いた。

「二応シャドウには一定の知性が備わってはいるが、人間とコミュニケーションを取るには至らないようだ」

「あー……やっぱり悪魔とは違うんだな。奴らの時は交渉やコンタクトで戦いを回避したりアイテムもらったりしたんだけど。……友達になってくれた子もいたし」

そういえば、雪の女王事件の時に出会ったヒーホーくんとヒーホーちゃんはどうかだろう。人間と友達になりたいと言っていたジャックフロストたちは。

至たちのことを友達と言つて、色々サポートしてくれたのだ。聖エルミン学園が氷の呪縛から解放されたのと一緒に、彼らは姿を消してしまったが。

ただ、冬になるとどこからともなく2人(2匹?)の声が聞こえてくることがある。たまにだが、彼らの後ろ姿を見かけることもあった。——もつとも、それは一瞬のことなので、一切確証はないのだが。

至が懐かしんでいる様子から何かを察したのだろう。面々は神妙な顔つきでこちらを見つめている。

ややあつて、「悪魔と友達つて……」と、ゆかりが零す。ハイゼルの瞳には、困惑と興

味。

「人にだつていろんなタイプがいるみたいに、悪魔にだつていろんなタイプがあるんだよ」——そう言つて至は微笑んだ。

そして、件のジャックフロストたちのことを紹介する。桐条側の研究ではわからなかつた部分もあつたのか、美鶴は感嘆するようにこちらの話を聞いていた。南条と桐条では研究の着眼点が違つていたのだらう。ついでに南条側の当主・圭は悪魔たちと戦つた経験がある。

主に、交渉時は彼に活躍していただいた。皮肉を言つたり、物でつつたり、演説したり……何度彼の交渉手腕に助けられてきただらうか。特にくちさけとの交渉で。……ああ、あの時は玲司も頑張つてくれたか。ムドオン地獄を紙一重でかわしながら手品をしていた彼の背中を思い出す。

珠？瑠市での一件では、複数人で掛け合いしていた。たまに話が大きく脱線してコントミたいな状態になったり、收拾の付け方がわからないままグダグダに終わつてしまつたり、真面目な本人たちと対照的にコンタクト内容が酷くギャップがあつたりした。簡潔に言おう、色々とフリーダムでカオスであつた。

興味深そうに話を聞いていた面々が、何やら引つ掛かりを覚えたように眉をひそめた。

至自身もまた、話していて何やら違和感を感じ始める。——そして、気づいた。

「……交渉とかコンタクトって言っても、ロクなことやってなかった」

文字通り、「今更」である。

\$\$\$

2009. 6/20 昼

巖戸台商店街／たこ焼きオクトパシー前

日々が過ぎ去るのは早い。そう感じるのは、毎日が充実している証拠だろう。充実と言うより、忙殺されていると言った方が正しいのかもしれないが。

「おじさん、たこ焼きーダース」

「あいよー」

至の注文を聞いた店主は、慣れた手つきでたこ焼きを作り始める。たこ焼き器の中に生地が注ぎ込まれ、彼はタコやら何やらを放り込んだ。

タコ以外のブツは何が放り込まれたか。至が確認する寸前でくるんとひっくり返される。嗚呼惜しい——心の中で地団駄を踏んだ。もう少しでわかったのに。

そんな自分の心境など知ったこっちゃない店主が、出来上がったたこ焼きを手渡した。代金を払い、近場にあつた椅子に座る。

タルタロスでの金ぴかカブトムシ——黄金蟲攻略後から、至はシャドウのデータ整理と調べもの＋αに勤しんでいる。おかげで巖戸台分寮で過ごす時間がめつきり減ってしまった。

周囲の面々は「至さんも頑張っているんだから」と気を使ってくれるが、正直彼らのコミュニケーションがちよつと心配なのである。

一応陽向は率先してみんなと関わってはいる。だが、陽向を介さないという条件だと、面々同士はあまり深く打ち解けていない。

戦闘中はそれなりに連携が取れているから充分ではないか、と言う者もいるかもしれない。戦いが進めば、必然的に仲良から大丈夫と言う者もいるだろう。

かくいう至も、戦いが進んでいくうちに仲間たちと絆を育んだ人間の1人である。1人であるが——その1人であるが故に、知っているのだ。

積み重ねられた日々の中で、絆はふとした日常から結ばれていくのだと。そしてそれが、戦いのときに大きな真価を発揮するのだと。

(みんなでゴハン、なんて楽しみもやってないからなあ)

エルミン時代の面々とは、あの戦いが起こる以前から一緒につるんでいた。戦いの以前や以後では色々変わってしまったものはあったけど、過ごし方は変わらない。

ピースダイナーでジャンクフードを食べながら、他愛のない話に花を咲かせた。進路のこととか、授業のこととか、様々なことを語り合った。場合によっては、テストの勉強会的なこともやったっけ。

政治経済では圭と一緒に盛り上がり、周囲の面々を置き去りにして議論した——なんて笑い話を思い出した。

その時の光景を思い出し、至はくすりと笑みを零してたこ焼きのパックを開ける。爪楊枝を刺して、1つを口に運ぼうとして——

「また会ったな、空本　いた「おおっと手が滑ったア！」むごっつ」

七姉妹学園の制服を着て金色の目を持った茶髪の男子高校生を視界に捉えるや否や、至は即座にたこ焼きを“奴”の口に叩きつけるように突っ込んだ。

文字通り問答無用。できたてホカホカのたこ焼き一一個が、すべて口の中に放り込まれたのだ。普通に考えて、とんでもないことになっているだろう。どこか？　口の中が。

案の定、“奴”は咳き込みながらのた打ち回っている。いいザマだ——至はふふんと鼻で笑いながら、爪楊枝に刺さっているたこ焼きを頬張った。——うん、なかなか美味い。

普段、世界危機的規模で“奴”に振り回されるのだ。せめてこういった細かい嫌がらせくらいしたってお咎めはないだろう。

もしそのお咎めという意味で世界危機的規模の事件を巻き起こすのなら、それはそれで腹立たしい。ささやかな趣向返しもさせてくれないのかコイツは。

普遍的無意識は心が狭いのか、至が傍若無すぎるのか。至的には自分の方がまだマシではないかと思っている。懐の広さ的にも、傍若無人っぷりにも。

実験と言う名の『遊び』で世界崩壊の危機に立ち向かわされるこちらの身にもなれっ

てんだ——その叫びはきつと、あの2人には届かないだろう。

“奴ら”のようなんだっ広い大局観を理解したいとは思わないし、理解できるとも思っていない。元より、次元が違いすぎるのだ。

「おじさーん、もうオーダー追加でー」

「あいよー」

目の前でた打ち回る“奴”を完全に無視し、追加注文。余計な出費をしてしまったなーと、至はぼんやり考えながらたこ焼きを待つ。程なくして追加注文分はできあがった。受け取り、代金を手渡す。

できたてのたこ焼きに爪楊枝を刺してつまみ上げる。はふはふ冷ましながらたこ焼きを頬張れば、ソースとマヨネーズと青のりの三重奏が口の中で響き渡った。もちもちとした弾力が心地よい。それをしばし堪能しながら爪楊枝を運ぶ。

至がたこ焼きの半ダースを食べ終えたのと、咳き込んでいた“奴”がどうにか立ち直ったのは同時だった。ぜえぜえと荒い息をしつつ、取り繕うかのように乱れた襟元を整える。

「満月以来だと言うのに、酷い態度じゃないか。……まあ、そんな所も気に入っているが」

「頬を染めるな気持ち悪い。帰れ、今すぐモナドマンダラの奥底へ帰れ。そして二度と地上に出てくるな」

「ふはははは、私を舐めるなよ!? 何故なら私は、這い寄る☆混沌・にやるらとほつてつぶー♪ なのだからな!!」

「うー! にゃー! レッツにゃー!!」——「奴」は訳の分からないことを叫んで、訳の分からない手の動きを繰り返す。しかも渋いバリトンボイスでだ。可愛くもない。強いて言うならただひたすらに珍妙な光景である。もしくは気持ち悪い。

「通りかかった小学生が変態を見るような眼差しを向けていることに気づいていないのではないか? ついでに、至も「奴」にたいしてそんな視線を向けている。もちろん

「奴」は

意に解さない。素敵な神経の持ち主だと感嘆したくなる。

「乾、行こう。アレは目を合わせちゃいけない」「そうだね、創まにいちちゃん」——賢明な判断だ。中学生らしい風貌をした銀髪の少年が、件の小学生である茶髪の少年を促してさっさと去っていく。どうやら彼らは月光館学園の生徒らしい。

……そういえば、今日は授業が早く終わる日だったか。視線を戻せば、「奴」は何かを値踏みするように彼らの背中を見つめていた。絶望を抱える人間カモを見つけたのか、奴は口元を三日月に緩ませる。

「……ふふ、興味深いな。先程の茶髪の少年が抱える「闇」も、銀髪の少年がこれから辿るであろう「運命」も、甘美な響きを宿している。楽しめそうだ……」

「俺の目の前で獲物探したア、いい度胸だな。泰山麻婆でもぶつけてやろうか？」

「それは……嫌だな……」

「なら、ここに来た理由と要件をさっさと吐け。そしてさっさとモナドマンダラへ帰れ」

「空本 至が冷たいー」

むくれるように「奴」は口を尖らせる。気持ち悪いッたらありやしない。周囲の視線も冷たいが、何故か至も同類と見ているものもちらほらある。いい迷惑だ。

鋭い視線を向ければ、どこか寂しそうに笑いながら肩をすくめた。そして、くつくつと不気味な笑い声を零す。

「Magician、Priestess、Empress、Emperor……さて、
魔術師、女教皇、女帝、皇帝……さて、

問題だ。この並び順にアルカナを並べると、13番目に出てくるアルカナは？」

「……Death^死神。それが、何を意味してんだよ」

「それこそが“答え”だ。——“満月に現れる影”に対する、な」

相変わらず、ざっくりとした話題提供しかしない。むしろ、謎かけをして反応を楽しんでいるように見える。“ゴイツ”はこんな奴だった。

至が問い詰める間もなく、“奴”はさっさと立ち上がる。ひらひらと手を振りながら、昼間だと言うのに溶けるかのごとく消え去ってしまった。

それを見送ることしかできなかった自分が不甲斐ない。伸ばしかけた手が宙を彷徨う。ぎり、と、至は思わず歯噛みした。

あの野郎いつかシメる——その決意を固めて手を握りしめれば、ナイスタイミングで至の携帯電話が唸る。

出れば、電話の主は美鶴だった。今日は理事長が寮に来るんだそうだ。

なんでも、新事実が発覚したらしい。とても熱の入っている様子だった、という。

至の反応が生返事だったためだろう。『……どうしたんですか？』——心配そうに、美鶴が問いかけてきた。

ああいけない。年長者がこんなのでどうする！ 至は気合を入れるようにして深呼吸

吸。そして、いつも通り満面の笑みを浮かべて頷いた。

「大丈夫！ 今から戻るから」

「それじゃ」「ええ、また後で」——携帯を切った後、至はそそくさと残りのたこ焼きを平らげる。

空になったプラスチック容器をゴミ箱へ捨てて、持っていたちり紙で口についたソース類を拭う。その屑もしっかりゴミ箱へポイ。

ばんばんと手を叩き、至は分寮へ向かって足を進めるのであった。

1—3. 6月20日イベントを全力で過ごすだけの簡単なお仕事

2009. 6/20 夕方

巖戸台分寮／玄関

雪のように真っ白な体、まるで宝玉のようなルビーの瞳。目が赤くて体が白い動物は、アルビノと呼ばれる先天的な遺伝子疾患を持っている可能性が高い。

殆どの場合は視覚的な障害を負ったり、紫外線による皮膚の破損や皮膚がん発症の可能性が高いのだ。自然界に至っては、白い体は目立つため外敵からよく狙われる。

たまに白変種という種類と混同される場合もあるが、遺伝子疾患である前者とは対照的に、後者は正常な遺伝子情報により変化したものだ。

人間でもアルビノを発症するケースがある。この場合は先天性白皮症と呼ばれるが、これの説明は割愛しよう。

「お前はえらいねー」

陽向が慈しむような眼差しを向けて、真っ白な柴犬の頭を撫でていた。ゆかりや風花も、少し寂しそうにその雪色を見つめている。

独りぼっち故にわかる何かを感じているのだろうか。柴犬は陽向にされるがままにしている。互いの寂しさを半分こしようとしているみたいだ。

そういえば、商店街で「神社を守る白い犬」の話をしていた人を見かけた。たまに神社を通りかかると、白い犬が腰を下ろしている姿もあつたか。

神主が事故で亡くなり、その人物の代わりに神社の見回りをやっている——オクトパシーの店員が「いい話でしょう？」と言っていたことを思い出す。

あれが件の「神社を守る白い犬」なのだろう。あまり関係ないが、最近本屋で似たようなフレーズの本を見かけた気がする。今度読んでみようか。

余計な思考はそれくらいにして、至は面々に声をかける。その犬はどうしたと訊けば、3人はつい先程おばさんから聞いたことを至に話してくれた。

どうやらこの白い犬——コロマル（漢字では虎狼丸と書くらしい。なんてカツコイイ名前なんだ!!）は、やはり件の「神社を守る白い犬」らしい。アルビノという遺伝子疾患を持つこの子に、元気に育ってほしいという願いを込めてそう名付けられたのだそう

だ。

彼の飼い主は半年前、事故で急死している。どのような事故かは詳しく聞いていないのでわからないが、それ以後、コロマルはずっと神社に居座つて動かないらしい。知り合いが引き取ろうとしたが無理だったみたい、と、ゆかりが付け加える。

「……そっかー。お前、カッコいいな」

至は屈んで、コロマルの頭を撫でる。大事なものを守ろうとする、誇り高き白銀の犬。まるで狒犬のようだ。

そんな至の思考が伝わったのか、コロマルは誇らしげに鼻を鳴らす。ルビーの瞳がきらきら輝き、ただまっすぐに向けられた。

どこまでも澄み渡った緋色を見返し、至は微笑む。答えるようにコロマルがひと鳴きし、うれしそうに頭を押し付けてきた。

生き方に、精一杯生きようとする姿勢に、その命に貴賤はないのだ。それを噛みしめながら、至はしばしコロマルの頭や背中を撫でる。

うんうん頷いていた刹那——不意に感じた違和感に、至は弾かれたように周囲を見回した。

かすかだが、ペルソナの気配がする。微弱な共鳴反応。出どころはどこだ!?

「い、至さん?」

「ちよつ、どうしたんですか?」

「にいさん、何かあった?」

風花・ゆかり・陽向が首をかしげるが、至はそんなの眼中になかった。

微弱な反応を深く探るため、目を閉じて集中する。その反応を追いかけるように視線を向け——そこにいたのは、誇り高き白銀の犬。

コロマルは「わふ?」と、きよとんとした様子で首をかしげた。ルビーの瞳がくりくりと動く。どうしたの? と言わんばかりに。

(……………犬!!?)

いやちよつとまでそんなバカな。羽生蛇ラーメン初見並みの衝撃が頭を駆け巡る。

人間がペルソナを使う現象なら何度も見ている。心の海がペルソナの生まれる場所なのだ。

そうになると、犬にだって心があるわけだから、理論上ありえないわけではない。いやしかし、でもだから。

コロマルは首をかしげ、ぱたぱた尻尾を振っている。その様子はとても愛らしい。愛らしいが、今はちよつとそういう問題ではない。

爆発寸前の思考回路とは裏腹に、至の行動はどこまでも冷静だった。携帯電話を取り出し、内蔵されているカメラで愛くるしい白銀の犬をパシャリ。

恐ろしい勢いでメールの文面を打ち終えた後、それを航と圭へ送信した。しかしそれだけでは終わらない。

至の手は、何故か勝手にメールの送受信履歴から周防 克哉を探し出した。そして、先程撮ったコロマルの写真を添付する。

『ペルソナ反応あり。ただし犬だ』——文面を打ち終え、送信。数秒で「送信されました」という表示が出た。

それから数拍おいて、至の携帯電話が反応する。メール受信、差出人は周防 克哉。『何故、猫じゃないんだ……』

ごく丁寧にシヨボン顔の顔文字がついたメールが返ってきた。脳内で響く「だから何

だ」という突っ込みに、至は答える術を持っていない。

一連の動作と現象を確認し終えた後、至は「猫派の人間がどう反応するか気になっただけだった」ことに気が付いた。

【1—3. 6月20日イベントを全力で過ごすだけの簡単なお仕事】

同日 夜

巖戸台分寮／ラウンジ

「これまでのシャドウ4体は、現れた順に、カテゴリーI〜IVだとわかったんだよ！」

幾月が、どこかマッドサイエンティスト的に眼鏡を反射させながら力説する。

カテゴリって何だと首をかしげた順平に、千影が「シャドウのアルカナ属性のことです」と耳打ちした。

その横で、風花がぼんと手を叩いた。回りくどく専門単語で覆われた彼の言葉を、彼女はぼつさりとは簡略化する。

「大きなシャドウは全部で12体いて、残りがあと8体つてことですね？」

「さすがは山岸くん！ 飲み込みが早いんだから」

「……今まで倒した奴らのアルカナ属性を出現順に並べると、タロットカードの番号順になる。そこから考えると、今後出現するシャドウカテゴリーのアルカナや出現順番は予測できる

“ つてことでもいいんだな？”

「おお、さすがは南条ご当主が信頼する調査員だ！」

風花と幾月の会話に割り込むように質問すれば、幾月は声を上げて目を輝かせる。

「そうなんだよ！ 今まで出現したアルカナを順に並べると、Magician魔術師、Priestess女祭司、Empress女皇帝、Emperor皇帝となる。そうすると、残されたアルカナはHierophant法王、Lovers恋愛愛、Chariot戦車、Strength剛毅、Hermit隠者、Wheel of Fortune命運、Justice正義、Hangedman刑死者の順番になるんだ。

……まあ、タロットには2種類の並び順があるからね。場合によっては、
 Strength^剛とJustice^{正義}が入れ替わる可能性もある」

「旧来式とウエイト式ってことか。おっけーです」

「でも実際、シャドウって一体何がしたいんスかね？」

至がそう言つて頷くのと入れ替わりに、先程まで千影にカテゴリのことを訪ねていた順平が再び首をかしげる。どこか腑に落ちなさそうだ。

幾月も「いい質問だね」と微笑する。が、彼の研究でも、シャドウの目的までは明かせなかつたらしい。

シャドウは、獲物の精神だけを喰らう。それは確かに捕食であることは間違っていない。だが、それではまどろっこしいのだ。増殖するためなら、獲物を食べてしまえばいいのに。

奴らはどんな方向へ行きたいのだろうか。最後にどうなりたいのか、それは誰にもわからないという。今後の研究が期待されると幾月は締めくくる。

精神を食われたせいで、生きる屍同然になった人間——巖戸台式影人間を量産して何が楽しいのだろう。珠？瑠式の「影人間」が増えても困るのだが。

至が小さくぼやいたそれに、幾月は「あ……それはそれで厄介なことになるなあ」と

遠い目をする。

珠？瑠式「影人間」が世界中にあふれたら、彼らを救助できるのはペルソナ使いだけだ。いくら頑張っても限界がある。ペルソナ能力に開花する人間はわずかなのだ。

オーバーワークで倒れるか、逆に「絶望して珠？瑠式「影人間」に仲間入り」する可能性もある。後者なんて目も当てられない。ミイラ取りがミイラになる以上の痛手だろう。

「…………面白いですね」

明彦が不敵に笑う。——って、ちょっと待て。

「お前おかしいだろ！ 珠？瑠式「影人間」が全国規模で増える現象のどこが面白いんだ!! ただの地獄絵図じゃねーか!!」

「いやそつちじゃなくて！ 俺が面白いと言ったのは、シャドウとの戦いのことです！

——…………あ、だからと言って、貴方の言葉を忘れた訳では…………」

明彦はあわあわした様子で視線を彷徨わせる。弁明しようと口を開き、しどろもどろ

に言葉を紡いでいた。

どうやら会話と発言のタイミングが悪かったらしい。一步間違えれば、全国のペルソナ使いに喧嘩を売ったも同然な発言である。圭や玲司、ゆきのや優香あたりからブーイング（物理と精神的なもの）がきそうだ。

彼が戦いを楽しんでいる節があることは知っているし、彼自身もそれを自覚している。しかし、至との会話を忘れた訳ではないようだ。戦いを楽しみただけではいけないというのを、今の明彦はちゃんと知っていた。

今できることに全力で取り込む——それが、迷いながらも明彦が見つけたスタンス。まだふらついてはいるものの、その眼差しは前を見据えている。

彼の発言に続くかのように、大きく頷いたのは美鶴だった。

濃い深緋色の瞳には、揺るぎなき意志が宿っている。そこには一切の妥協も迷いもない。

自分が何を成さねばならぬのか、彼女は幼い頃から知っていたのだろう。しかし、「成さねばならぬ」から気を張っていた。

ペルソナ能力者を「確実に」引き入れるために、情報管理を徹底していたのだと思う。それが裏目に出て、ギスギスした空気が流れてしまったようだが。

先の一件でどうにかゆかりと和解（？）できたのがきっかけで、崩壊寸前まで背伸び

していた美鶴が抱えていた危うさは、幾分か緩和されたように思う。

「……すべては、桐条が招いた災いだった」

ほつほつ、と。美鶴は、自分自身が知りうる桐条家の負の遺産——タルタロスと影時間が生まれた理由を話し始める。

先代当主・桐条鴻悦。晩年——10年前の彼は、どういう経緯か知らないものの、シャドウという存在に目を付けて研究を続けていたようだ。

最終的には、それが影時間とタルタロスの誕生、ひいてはシャドウが現実世界を徘徊することに繋がったのだという。

「私の権限では、その詳細に関する情報を得ることはできなかった」——美鶴は悔しそうにため息をつく。その姿は、どこか頼りなさ気に見えた。

シャドウの研究と一言で言っても、目指す場所によつては、アプローチや研究内容および方向性もガラリと変わる。研究者である航を弟に持つ至は、それを重々理解していた。

鴻悦が何を目指していたかさえ掴むことが出来れば、タルタロスや影時間を消すための研究方法を見つけられるかもしれない。

「今更君たちにこんなことを頼むのは、虫がいい話なのかもしれない。けれど、君たちにしか頼めないことなんだ。……頼む。私に、力を貸してくれないだろうか……？」

おずおずと、美鶴は不安そうに尋ねる。凜とした眼差しはそこにはなく、子どもらしい感情が揺れていた。

仲間たちは神妙な顔つきになって顔を見合わせたが、満面の笑みを浮かべて美鶴を見返す。

「当たり前じゃないですか、先輩！」「水臭いっすよ！」「本当に今更だな。当然だろう？」——彼らの瞳には、一切の迷いが無い。

美鶴は驚いたように目をぱちくりさせる。仲間たちの発言を理解した後で、彼女はかすかに体を震わせた。口を真一文字に結んで面々を見返す。

今にも泣きそうだが、けれど泣くことはない。泣いてはいけなと言いついて聞かせているかのようで——でも、痛々しさは感じない。次の瞬間にはもう、口元が緩んでいたから。ただどしく紡がれた「ありがとう」の言葉を、きつと活動部の面々は忘れないう。

少しだけ、彼らは『仲間』として結びつけたのではなからうか。面々の様子を見つめ

て、至はそんなことを考える。

ふと、セバク・スキャンダルで单身神取に挑もうとしていた玲司や、JOKER事件で戦っていた「彼」のことを思い出した。

たつたひとり、ペルソナ使いとして一族の罪を贖うために戦っていた美鶴。

たつたひとり、神取鷹久を仇として憎み、復讐をするためにセバクに乗り込もうとした玲司。

たつたひとり、「罪」を償い「罰」を受けるため、世界を救うために戦い続けた「彼」。

3人は、たつたひとりで事を成そうとしていた。孤独のまま、だれにも頼れず、頼らずに。

特に——「彼」は。

(……………苦い記憶だけど、それが今の俺を奮い立たせる記憶でもある)

最後の最後まで、「彼」は孤影のまま。もう二度と手が届かない場所へと「帰っていった。至たちはその背中を、ただただ見ていることしかできなかつた。

「彼」が残したこの世界を守ることが、自分たちにできることだと思っ

相変わらず、方法は見つかっていないけれど。

「でも、今回の報告のおかげで、具体的な『終わり』が見えてきましたね」
「そうだね。いつまで続くのかなーって不安だったけど、これでまた頑張れそう！」

仲間たち同士の団結という余韻をそのままに、千影が明るい声で微笑む。陽向も同じ気持ちだったらしく、しきりに頷いていた。

残りのシャドウはあと8体。マジシャンやプリーステスのように1体ずつ出現するの、あるいは今回のエンペラー&エンプレスのようにコンビで出現するのか。

単体とコンビで出てくる奴らの法則性もわかれば、どんな敵が出てくるのかの検討が付きそうなものだ。最も、世の中はそんなにうまくできていないようだが。

法則性——ふと思ひ出す。つい数時間前、“奴”と交わした些細な会話を。

『Magician^{魔術師}、Priestess^{女教皇}、Empress^{女帝}、Emperor^{皇帝}……さて、問題だ。この並び順にアルカナを並べると、13番目に出てくるアルカナは？』

「……死神……」

そういえば、「タルタロス内部では、ごくまれに強力なシャドウが出現する」と陽向が言っていた。

確か、風花が加入する以前までアナライズ担当だった美鶴は、そのアルカナをそのまま呼称に使っていたという。

——死神タイプ、と。

至は実際目撃したわけではないのでよくわからない。わからないが、今までの雑魚シャドウのタイプはMag^魔ici^術an^師g^刑ed^死man^者までが確認されている。

しかし、実際には「タルタロス内部に出没する超強敵」として、Dea^死th^神のアルカナを保持するシャドウの存在があるのだ。なのに、満月に現れる大型シャドウのアルカナは、Han^刑ged^死man^者までしかない。

通常のシャドウのタイプには確かに存在しているのに、大型シャドウの属性には位置していないアルカナ——それが、「奴」の言う「13番目のアルカナ」・Dea^死th^神。この事実は、一体何を意味しているのだろうか？

それこそが「答え」だと、「奴」は言った。「満月に現れる影」についての。

満月の巨大シャドウ12体を倒し終えた先に残るアルカナがDea^死th^神であることは言うまでもないが、なんというか——不吉だ。

「？ 空本くん、どうかしたのかい？」——至の様子から何かを感じ取った幾月が首を

かしげる。

「なあ、タルタロス内部に出没する超強敵のアルカナって、Death^死神^神だったよな？
……ってことは、現在確認されているシャドウのアルカナは、“全部で13種類”って
ことだろ？」

至の言葉に、ゆかりが弾かれたように「あつ」と声を上げた。

「大型シャドウは12体——Magician^{魔術師}とHangedman^{刑死者}までしかない
！ 1体足りないんだ!!」——その通りである。

それについてはどうかと幾月に尋ねれば、彼はうーむと険しそうな顔をした。どうやらまだ、それについては研究中らしい。

色々話し合った後、「12体のシャドウを倒し終えても油断しないようにすること」
で、仲間たちの考えは一致。今後とも、シャドウ討伐を頑張ろうということでは会議は終
了する。

決意を宿して頷く面々。その様子を見つめて、至は微笑んだ。いい顔をするように
なったな、なんて思う。

——刹那、この場に響き渡ったのは腹の虫の大合唱だった。

出どころは何処だと視線を巡らせれば、理事長含んだ全員が気まずそうに視線を彷徨わせる。時計を見れば、話し合いを始めた時間から1時間半経過してはいないか。そういや夕飯まだった、と、面々は力ない苦笑を浮かべた。……当然か。察についてからすぐ、この会議を始めたのだから。

「……じゃあ、今日は趣向を変えて、みんなでどつか外食しに行こうか!」

「わあ、いいですねえ!」

「さんせーい! じゃあ、どこで食べるか多数決を取りたいと思いまーす!!」

至の提案に千影が乗る。そんな自分たちの意見に賛成した陽向が、仲間達へと問いかけた。即座に面々が勢いよく手を挙げて、自分が最良にしている店の名前を挙げていく。

商店街の店を挙げる者もいれば、ポロニアンモールにできたばかりの高級レストランを挙げる者もいた。結局みんな、点でバラバラな方向を向いているらしい。挙句の果てには店のメニューについて熱い議論を繰り広げていた。

様々な意見が飛び交う。がつつり食べたいだけの、テーブルマナーが厳しい店はちよつと困るのだ、あそこの隠れメニューはどうだの、お値段がリーズナブルだの。互いが互

いの情報を照らし合わせ、真剣に語り合っている。

まとめ役の陽向も、真摯な眼差しで仲間たちの意見を聞いていた。千影は庶務役として、挙げられた候補地について詳しくまとめている。

「でも、誰がお勘定するんスか?」「え? 大人2人じゃないの?」——うん? なんだか会話の雲行きが怪しくなってきたぞ? 主に金銭方面で。

幾月もなんとなくそれを察知したのだろう。そろりそろりと後ずさる。——……後ずさる?」

「理事長さーん、どこに逃げるつもりですか?」

「ギクツ! ……いい、いやー、僕はお邪魔かなーと思つてねー」

「嫌だなあ幾月さん。お邪魔なわけじゃないですかー、みんなと一緒に食べましようよー。勿論幾月さんも一緒ですよー」

「いやーいいよー。ここは空本くんがみんなと一緒に行けばいいんじゃないかなー? ほら、世代間の交流つて大事ですからー」

「いやいやでも……」「いやいやまあ……」

逃がしてたまるか、貴様も道連れだ——その意を込めて、至は幾月の肩を掴み逃げ道

を塞ぐ。

顔を真つ青にしながらも、幾月は逃げようともがいていた。一応口元には笑みが浮かんでいるものの、端がかなり引きつっている。

きつともし、子どもたちがこの光景に気づいていたら「なにあれ大人げない」と一蹴していただろう。

しかし、子どもたちは絶賛議論中だ。醜い争いを続ける理事長と調査員のやり取りなど、文字通り「アウトオブ眼中」である。気にも留めてないし、そのまま議論は続行中。そして何より、財布役に認定されかけつつある大人2名にとってこれは死活問題だ。やっていることがアレでも、自分たちは文字通り真面目に考えているつもりである。

「はははははははは」

男2人の引きつった笑い声が、どこの店で夕食を食べるかの議論をする寮生たちの熱い議論にかき消され——飲み込まれていった。

——余談だが。

ポロニアンモールの有名なレストランで、月光館学園の学生たちと思しきグループ

が、楽しそうに外食をしていたそうだ。

その際、眼鏡をかけたスーツ姿の男性と左耳に星のイヤリングをつけ黒いジャンパーを着た男性が、るーるー男泣きをしながらお会計を払ったという。

1—4. 絆を紡ぎ、なぞるだけの簡単なお仕事

2009. 6/21 昼

長鳴神社

階段から、緑色のボールが弾んで落ちてきた。それは至の足元にコツンと当たる。

なんだと思つて拾い上げれば、丁度そこへコロマルがやって来た。彼はじつとボールを見つめている。

どうやらこのボールはコロマルのおもちやらしい。至は屈んでコロマルの頭を撫でると、拾い上げたそれを彼へ差し出した。

自分のおもちやを口にくわえ、彼はばたばたと神社の境内へ戻つていった。至はそんな彼の背中を見送り——ふと気づく。

子どもだ。とある野球チームのユニフォームを模したTシャツに身を包み半ズボン履いた茶髪の少年と、白いポロシャツを着た銀髪の少年。

どうやらコロマルは彼らと遊んでいたらしい。2人の少年たちは、楽しそうに何かを

話している様子だった。ボールを取って来たコロマルの頭を撫でる。

「次は創にいちやんの番だよ!」「任せろ!」——茶髪の少年に声をかけられた銀髪の少年が頷く。そして、綺麗なフォームで振りかぶった。

「よーし、とつてこーい!」

銀髪の少年がボールを投げる。コロマルがそれを啜えようと走る。ボールは大きな軌道を描き、神社の階段を超えて、至の真上へ落ちてきた。

反射的に至は手を伸ばす。ぱしん、という確かな感触を感じた後で、自分の手を見た。先程のボールが、至の手の中にある。

ぱたぱたと足音が響き、それに反応して視線を上げた。コロマルに続いて、茶髪の少年と銀髪の少年が駆け寄ってくる。茶髪の少年は小学生、銀髪の少年は中学生くらいか。

至は軽くボールを弄んだ後、2人の元に歩み寄った。「ほい。君たちのボールだな?」——そう言つて手渡せば、2人は声をそろえて礼を言う。

「ありがとうございしました!」——なんて快活な挨拶だろう。見ていてとても微笑ましい。やはり子どもが元気なのが一番である。

そんな至の様子に同意するように、コロマルが小さく鳴いた。至も頷き、ぼふぼふと彼の頭を撫でる。

「お兄さんも、コロマルと仲がいいんですね——コロマルと親しげな様子だった至の様子に、2人の少年が屈託のない笑顔で声をかけてきた。

昨日分寮で会ったんだと言えば、少年たちは合点が言ったように手を叩く。

「もしかして、お兄さんが分寮の新しい寮母さんですか？」

「そうだけど……なんで知ってるんだ？」

「やっぱり。順平さんやゆかりさんが話してたんだ。『最近新しい寮母さんがやって来た』って」

茶髪の少年が問い、至はそれに答えた。間髪入れず、銀髪の少年が神妙な顔つきで頷く。

どうやらこの少年たちは、この近隣に住んでいるらしい。茶髪の少年は月光館学園・初等科の寮、銀髪の少年は近隣にある某企業の社宅にだ。

両者は親戚同士らしく、家同士の距離も近いので、よく一緒に遊んでいるのだという。順平やゆかりも、たまにこの神社にやって来るのだそうだ。

ならば話は早い。至は自己紹介として名前を名乗り、少年2人に問いかける。彼らは屈託のない明るい笑みを浮かべ、元氣よく名乗ってくれた。

「僕、乾つていいいます。天田 乾」

「俺、出雲いずも 創真そうま。創造の『創』に真実の『真』つて書いて、『そうま』つて読むんです」

「ほー……。2人とも、立派な名前だな」

子どもの名前には親の願いが込められている。茶髪の少年——乾や、銀髪の少年——創真の親は、きつと彼らを大切に想っていたのだろう。

名前は親が子どもに手渡す最初のプレゼントだ。至にこの名前をくれたのは母親で、航にあの名前を手渡したのは父親だったらしい。別れた母からの、数少ない贈り物だった。

乾と創真は照れたようにはにかむ。ああ、この2人も親が大好きなのだ——至は何となくそれを察し、微笑んだ。

——しかし、どこことなく2人の表情が寂しそうに見えるのは気のせいだろうか？

その寂しさには覚えがあつた。かつての陽向や千影、そして——両親が離婚し、航と離れ離れにされた直後、至が抱えていたもの。

けれど、それはすぐに鳴りを潜める。創真が乾に笑いかければ、すぐに乾も楽しそうに笑い返したからだ。

大丈夫。乾には、彼を支えてくれるかけがえのない相手がいる。そして創真にも、彼を支えてくれるかけがえのない相手がいるのだ。

彼らの絆は強固に結ばれている。ちよつとやそつとじや、決して切れることはないだろう。エルミン時代の友人や、JOKRE事件の戦友に勝るとも劣らないくらいだ。

「2人はとても仲がいいんだな」と問えば、即座に「はい！」と勢いのいい返事が返ってくる。もちろん、乾も創真も満面の笑みを浮かべていた。

「それにしても、さっきのボール！ あんな綺麗な体制でキャッチできるなんてすごいですー！」

「そうそう！ 結構勢いよく投げたから、『しまった！』って思ったんだー」

あははは、と。少年2人の笑い声が響く。

その様子がとても楽しそうなので、至もつられて微笑んだ。

「いやー、昔は色々あったからねー。そのせいで、反射神経とか運動神経が鍛えられたっ

て感じかな」

「すごいなー！ 空本さん、何かスポーツとかやってたんですか？」

「高校時代、クレー射撃やってたんだ。あとは、他の部活で欠員が出た時のピンチヒッター。フェンシングやらサッカーやら演劇部やら、色々やったっけ」

「うわあ、それって過労死してもおかしくないですよ!!」

わいわいがやがや。

……どれだけ話し込んだのだろう。ふと気づけば、空の向こうが藍色に滲み始めていた。

もうすぐ夜の帳が下りてくるころだろう。少年2人にも門限と言うものがある。

「それじゃあ、また今度」「さようならー!」——挨拶もそこそこに、少年たちは並んで同じ方向へと帰っていく。

思い出したのは、かつて両親が仲睦まじく暮らしていた頃。学校帰り、いつも航と一緒に並んで競争してた。同じ方向に帰って行くのが『当たり前』だと信じていた。

生まれた頃から一緒だったのだから、死ぬその瞬間も一緒なんだとばかり思っていた。そう信じて疑わなかった、幼い頃の記憶が脳裏を駆ける。

彼らの背中を見送った後、至も分寮へむけて歩き出す。空には、まばゆく一番星が瞬

いていた。

「1-4. 絆を紡ぎ、なぞるだけの簡単なお仕事」

2009. 6/27 昼

辰巳ポートアイランド

「……復讐サイト？」

『ああ。それ絡みの事件が、ウチの管轄内で発生したんだ。……達哉が、巖戸台の面々と合同調査をすることになった』

ただ今の着信は周防 克哉。電話越しの声があるものすごく寂しそうに聞こえるのは、きつと気のせいではない。奴は筋金入りのブラザーコンプレックスである。

至にも航という朴念仁の弟がいる。確かに奴は（恋愛面で）手間がかかるとは、至は「あいつなら大丈夫だろう（恋愛以外）」という確証を持っていた。勿論、その根拠はどこに

もない。

克哉の場合はおそらく至と真逆なのだろう。どうしても、弟が心配で心配で（以下延々と続いたため省略）たまらない。

どんなに達哉本人が「大丈夫だ」と念を押そうとも、どんなに「大丈夫だ」ということを示そうとも、克哉には通じないのだ。

弟にして相棒である達哉を信じることが出来ないというのは、いささか問題ではないだろうか？ いい加減信じてやれよと至は思う。

永遠にコンビを解消するわけではないのに。この合同捜査が終われば、達哉はちゃんと克哉の相棒として復帰できるのだ。

今回の一件は、達哉個人の試金石的な事件だ。今まで克哉とのコンビが多かった彼が、己自身の力で事件解決のために駆け回ることになる。克哉の力を借りずに、だ。

「いい加減、達哉を信じてやれって。かっちゃんお兄さんだろーが——…：…なんだろう。受話器の向こうから、とても沈鬱なため息が聞こえてきた。面倒なので話題を変えよう。

「それで？ 合同調査なんてしなくても、克哉の腕だったら一気に事件解決しそうな気がするんだけど。ネットの書き込みとか探ればすぐわかるじゃんか」

『そちらの証拠は押さえてある。……問題は、被害者の殺害方法と殺人現場の状況証拠だ』

「とうとう?」

『……目撃者が1人もいない。その場に居合わせていたはずの人間でさえ、誰も言い争う声や銃の発砲音を聞いていないんだ』

はあ、と、克哉が大きく息を吐いた。『仲間内ではお手上げ状態になっているんだ。仲間内では』——何か含んだ言い回しである。

まるで『自分には何か確証がある』と示しているかのようだ。他の人間たちにはわからない、何か重要な——

——……『他の人間たちには、わからない』?

「……もしかして」

『君の考えは僕と同じものだと確信している。……そして、達哉の考えともだ』

せーの。誰にも頼まれていないのに、至は心の中で克哉に合図する。無論、受話器越しでは声に出さねば届かない。

しかし不思議なことに、次の瞬間、至と克哉の声は綺麗に二重奏を奏でていた。

『——影時間内での犯行』』

影時間はペルソナ使いしか知覚できないし、ペルソナ使いだけが動くことが出来る特殊な空間だ。一般の人間はその存在自体知らないし、感じることもできやしない。

あの時間内であれば、「目撃者が1人もいない・争う声や銃の発砲音さえ聞こえない・成功率100%」の3拍子が容易に成り立つのだ。

ペルソナ使いだからこそできる完全犯罪である。同時に、一般人は犯人を捕まえることはできないのだ。ペルソナ使いの人間がいなければ、もうそこでドン詰まりである。

運がいいのか悪いのか、周防兄弟はペルソナ使いの警官だ。しかし、彼らがそのことを話しても、一般人にカテゴライズされるであろう上司に、信じてもらえる可能性など皆無。

何故ならそこには証拠がない。影時間を証明するものも、影時間内で犯行が行われているという確たるものも、何一つ持って来れないから。

受話器越しからぎりぎり嫌な音が響き渡る。どうやら克哉の歯ぎしりのようだ。

彼はかつて、JOKEER事件の担当から外された経験がある。あの時は上司——もと

い敵の部下が真相に触れさせぬよう邪魔をしていたが、克哉が無力を嘯みしめていることは変わらない。

そして尚且つ、ペルソナの力を悪用する犯罪者に、達哉をたつた一人だけでぶつけなければならぬのだ。本来なら、彼の傍で力になってやりたかっただろうに。

(……………りゃあ、とんでもないヤマになりそうだな……………)

何かのた打ち回るような響きで呪詛のようなものを唱える克哉の声をBGMに、至は剣呑な表情を浮かべて空を見る。

雲一つすらない青空の向こう側。その奥に、重苦しい鉛色の雲がかすかに顔をのぞかせているように見えたのは、きつと気のせいではないのだろう。

『……………ああそうだ。今日付けで、達哉が巖戸台に到着する予定だからな。今、君は巖戸台にいるんだろう？ 暇だったら手伝ってやってくれ』

「あら、イタリーじゃない！ 元氣だったー？」

「……………久しぶり、至さん」

——通話が切れる寸前に克哉が言った言葉や、背後から聞こえてきた男女の声は、ちよつとだけ「気のせいであつてほしかった」というのが本音である。

\$\$\$

周防 達哉は、兄の克哉とコンビを組む若手刑事だ。そして、JOKER事件で至ちと戦つたペルソナ使いである。

しかし達哉はそのことを覚えていない。覚えてはいないが、「わかつて」はいる。それ故、現在でも付き合いが続いているのだ。

そんな彼に寄り添うように佇むのは、キスマット出版の雑誌記者・天野 舞耶。彼女もペルソナ使いであり、JOKER事件の戦友である。

達哉は克哉の言うとおりに、復讐サイト絡みの件でここに来た。舞耶は別件の取材でこの地を訪れたらしい。「こんな所で会えるなんて思わなかつた」——彼女は楽しそうに笑う。

至だつて舞耶と同じ感想である。しかも、この2名が同時にやって来るだなんて。職

業別々の人間が、何をどうすればこんなことになるのだろう。偶然って恐ろしい。

この2人、偶然出張が重なったのを利用したか、あるいは色々画策して同じ場所になるよう仕向けたんじゃないかな。そう考えた理由は、2人の背後にうつすらと漂うペルソナ——達哉のアポロと舞耶のアルテミスがイチャイチャしているように見えたためだ。

おかしいな。平時にペルソナを、しかも街中で召喚したりする程、この2人ははっちやけていないはずだ。

……いや、違う。達哉と舞耶は気づいていないのだ。自分たちが微弱ながらも共鳴していることに。

(……そんだけ好きあつてるんだなあ)

至は思わず口元を緩める。

この2人のなれ初めやら何やら——平行世界での出来事やJOKER事件のことを考えると、なんだか今の光景が尊く神聖なものに見えるのだ。

それ故、どうしても、至は彼らのうふふあははな光景に対して強くモノが言えないのである。……結果、多少こちらの精神がすり減ってしまう羽目になっても。

「で、どうして至さんはこっちに？」

「あー……ちよつと、仕事でな」

「仕事って、対怪異調査員の？ ……やっぱり、この街で何か起きてるのね。それって影時間絡み？」

「まーな。詳しく言えないけど、その最前線ってトコか。当時の達哉と同年代位の面々が踏ん張ってる」

「この街にもペルソナ使いがいるのね……」

ふむ、と、舞耶が真剣な面持ちになって考え込む。10代向け雑誌担当とはいえ、表情は立派な記者そのものである。そこに担当や貴賤はない。

隣に座る達哉も、目を鋭くしていた。おそらく克哉から影時間だ何だの話聞いていたためだろう。

「……もしかしたら、至さんたちが『復讐サイト』で暗躍してるペルソナ使いと接触する可能性も否定できない」

剣呑な表情。有りうるかもしれない可能性を憂うかのように、達哉がまっすぐに至を見返す。

JOKER事件当時、彼は18歳。丁度、陽向や千影たち放課後特別活動部と同年代だ。あの年代は多感な時期で、大人に反発したりすることも多い。特に達哉はそうだったらしい。

大人という存在に対して強く反感を抱く年代の子どもたちは、大人で警察である達哉の話の聞こうとしない。接触だって、全力で避けようとするだろう。話し合いというのが通じればいいのだが——彼の顔にはそう書いてある。

ペルソナ使いが一番多い年齢は10代後半〜20代前半に集中していた。おそらく、件のペルソナ使い達もそのくらいの年齢だろう。更生の余地は充分にある。できればそうなってほしい——そう、達哉の目は雄弁に語っていた。

それと同時に、影時間の最前線にいる放課後特別活動部の面々についても心配しているようだった。

平行世界やJOKER事件の戦いも過酷なものだったから。……肉体的にも、精神的にも。

「確かにな。同年代が相手となると、辛いモンだつてあるだろう」

「こっちはただでさえ面倒な事態に陥っているのに」と至はぼやく。タルタロスやら満月のシャドウやら、厄介な事態が次から次に襲い掛かってくるというのに、その上にまた心配事が追加されてしまうとは。

これ以上、陽向や千影たちに負担がかかる事態は避けたい。避けたいが、相手は影時間の利点を活かして立ち回るペルソナ使いたちだ。そして、奴らが行っていることは立派な犯罪行為である。面々が見過ごせるとは思えなかつた。

あの子たちは躊躇いなく突っ込んでいくだろう。特に、正義感が強かつたり、お人好し気質な人間であれば。……むしろ、正義感が強い面々しかいなかった気がするなど至は思い至る。かくいう自分も人のことは言えそうにないが。

それを察知したのか否かはわからない。しかし、本当にいいタイミングで、達哉と舞耶が声を合わせる。

「至さん（イタリー）が一番注意してください（注意しなさい）」——見事にハモつた。

勿論、至には自覚も前科もある。だから、ただただ苦笑し返すことしかできなかった。

「復讐サイト絡みの情報を得たら、ソッコで達哉に回すからな」

「ついでに、後輩達にも注意を促しておいてください。用心するに越したことはない」

うん、と、互いに頷く。その余韻のせいか、ぴりぴりとした空気が漂う。

どこまでも真剣で重苦しい雰囲気吹き払ったのは、底抜けに明るい舞耶の声だった。

「こんな時こそ、レッツ・ポジティブシンキングよ2人とも！」

ああ、相変わらずである。至が苦笑し、達哉が口元を綻ばせる。「舞耶姉らしい」——
達哉も達哉だ。相当惚れこんでいるらしい。

彼女の発言をきっかけに、この場に和やかな空気が流れた。流石は正統派の天然(?)
ムードメーカーである。何て素敵な合言葉だ。

互いが互いに顔を見合わせて、笑う。

——さあ、思い出話に耽るとしようか。

\$\$\$

同日 夜

巖戸台分寮／ラウンジ

報告を終えたら、周囲が一気に静まり返った。驚きに見開かれた面々の視線が突き刺さる。

そんなに珍しいことを言ったつもりはないのだが、一体全体どうしたのだろうか？

「……警察官や雑誌記者にも、ペルソナ使いがいるなんて……」

「しかも、全員が至さんの知り合って……」

「すごいってどころじゃねーぞ……」

どこか夢心地の口調で、明彦・ゆかり・順平が呟く。確かに眼差しは至に向けられているはずなのに、何か別なものを見ているかのようだ。

補足として、知り合いの職業を全部あげてみた。南条コンツェルンのTOP、世界を

飛び回るアーティストやモデル、大人気の芸能人、人探しのプロ・マンサーチャー、探偵、会社員、研究者、警察官等々。それはこのまま至の人脈に直結している。

ペルソナ使いが築くコミュニティは、後に大きな力となる——なんだろう。明らかに別のシステムに直結している気がしないでもない。……そもそもシステムって何だ？ 思考を別な方向に向けている間に、今度こそ周囲が上の空になった。一部の面々が狂ったように笑う始末。正常なのは陽向と千影だけである。

思い返せば、至は人脈を駆使してここまで生きてきたように思う。なんやかんやで、自分は彼らに助けられればなしだった。

生活費や仕事は圭に斡旋してもらったりしてる。場合によっては、航に頼ることもあった。

仕事では達哉や克哉・パオフウやうらら・たまきとタダシに協力を依頼することもあった。

その代償や代わりとして、彼らの仕事を手伝ったり調査依頼を受けたりして、どうか陽向や千影を養う分の給料を得ている。いい意味で、割に合わない気がしないでもない。

「しょうがないな」と彼らは笑う。笑って、その度に力を貸してくれた。微力ながら力を貸すこともある。そうやって、至は今日この瞬間まで生きてきたのだ。

築いてきた絆を振り返れば、本当にいろんなことがあった。楽しかったこと、苦し
かったこと、辛かったこと、悲しかったこと——戦いの日々を、鮮明に思い描ける。

(……いつか、ここにいる面々も、そんな風に思える日が来るのかな)

来たらいいな、と至は思う。今はまだ、そういう関係や絆を結んではいけないけれど—
—けど、いつか、すべてが“思い出”に変わるときに。

駆け抜けた道を振り返って、笑いあうことが出来たなら。そんな日が来てくれたら、
いいと思う。

けれどその前に。

「お前ら、俺の報告聞いてたか？」

「「「「あ」」」」

人脈に気を取られたせいで、別のペルソナ使いの存在についてすっぽ抜けた面々に、
改めて警告をし直さなくては。

IF—XX1. 色んな意味で惨事に直面する新しい可能性のひとつ

?????2013 ?/?
 /
 ?????? ?? ?

シャドウワーカー。それは、ペルソナ使用によつて構成された、「影」の組織である。主な仕事は「ペルソナが絡んだ事件の解決」であるが、場合によつては凶悪犯に対抗することもある秘密組織。

それ故、任務中はもちろん、日常生活でも、決して目立つてはならないのだ。

もう一度繰り返し返そう。

シャドウワーカー。

それは、ペルソナ使用によつて構成された、「影」の組織である。

主な仕事は「ペルソナが絡んだ事件の解決」であるが、場合によつては凶悪犯に対抗することもある秘密組織。

それ故、任務中はもちろん、日常生活でも、決して目立つてはならないのだ。

間違つても、〃民間人の注目の的になる〃なんてことはアウトである。完璧にアウトである。

何度でも繰り返そう。

シャドウワーカー。それは、ペルソナ使用によつて構成された、〃影〃の組織である。文字通り〃影〃なので、任務中はもちろん、日常生活でも、決して目立つてはならない。間違つても、そんな事態になつてはいけない。

——最後にもう一度だけ、確認しよう。

シャドウワーカー。

それは、ペルソナ使用によつて構成された、〃影〃の組織である。

主な仕事は、〃ペルソナが絡んだ事件の解決〃であるが、場合によつては凶悪犯に対抗することもある秘密組織。

それ故、任務中はもちろん、日常生活でも、決して目立つてはならないのだ。

……その上で、ひとつ質問だ。

至る所に何か仕込まれていそうな危険な雰囲気を漂わせる黒いライダースーツに、艶やかな光沢を纏う白い毛皮のコート（特注品）に身を包んだ女性。

一切隠し通そうとする努力が見当たらず、マシンガンやら関節やらの機械部分が完璧

にフルオープンむき出しになっているロボット少女。

上半身裸で赤いマントとボクサーパンツに身を包んだ、「どこからどう見ても不審者です本当にありがとうございました」的な格好をしている青年。

誰もかれも目を引く格好である。むしろ、悪目立ちしすぎて「絶対に目を合わせてはいけない人たち」認定されるレベルである。

でも、この中で圧倒的に目を引くのは誰だと問われたら、誰を名指しするであろうか。

「……………」

彼らと真正面に向かい合う男性は、ただ茫然と面々を見返していた。

3人の身なりに驚いた、というのもある。それぞれがそれぞれ、突出した格好をしてきたからだ。

男性の眉間に皺が寄る。眉と口元がひきつる。喉の奥から微かに変な声が漏れる。沈黙が続く。

「……………一つ確認したい。それ、仕事着正装？」

「はい。そのつもりですが」

男性の問いに、女性は何の迷いもなく頷いた。ややあつて、「何か、おかしい所か？」と小首を傾げてみせる。

しかし男性はその問いには答えず、ただ黙っている。眉間の皺がさらに深く刻まれた。何か言いたげに視線を3人の服装に向けて、息を吸つて、吐いて。

「真面目に、仕事着 正装なのか？」

「はい」

「はい、であります」

「はい」

今度は女性だけでなく、少女と青年も真顔で返事を返した。彼らの目はどこまでも純粹である。そしてどこまでも本気である。男性がこめかみを抑えてしまいうくらいに。勿論、この面々が理由を察せるはずがない。

「どうしたんです？」「体調が悪いのでありますか？」「だとしたら、早めに休んだ方がいい。貴方はただでさえ多忙なんですし」——的を盛大に外したフォローのせいでも、ますます頭痛が悪化しそうなのだろう。彼は眉間の皺をより一層深くし、首を振る。

ちがう、ちがうんだ、そうじゃない——どこか憔悴したような、何か喉につつかえたような、心地が悪そうな声。心なしか、男性の肩がわなわなと震えているように見えなくもない。しかし（というかやはりなのか）悲しいがな、件の3人は全く気付いていなかった。

3人が顔を見合わせ、首を傾げあう。

男性は、ついに言う気になったのだろう。大きく息を吸って、勢いよく顔を上げた。

「お前ら、どつからどう見てもそのカッコは完全にアウトだからな!! ——特に明彦、お前は服を着ろ! 今すぐだ!!」

【IF—XX1. 色んな意味で惨事に直面する新しい可能性のひとつ】

2013+n (1≦n<6) ?/? ?

某所／とある店内

「……………」

男性の話聞いた青年は、「アイツならそうなると思った」とため息をついて視線を逸らした。男性も、彼のぼやきに同調するように肩を落とす。

とある筋から関わった真夜中のテレビに、帰ってきた力の狂信者・剛腕のプロテインジャンキー”なんて紹介されていた時は度肝を抜かれたが、彼——真田 明彦と久々に顔を合わせて理解できた。そう呟いて、男性はこめかみを抑え大きく息を吐く。

実際、明彦は仕事中に「おまわりさんこいつです」とあわや通報されかけたのである。リーダーである女性のおかげで事なきを得たが、どう考えても笑い話で済むレベルではない。

もちろん怒られた。男性の友人である警察官たちからも、組織のトップからも。罰として、プロテインと肉禁止令が出されたという。それでベッコベコに凹んでしまったのだから、彼らしいといえれば彼らしいものだ。

「肉とプロテインさえあれば生きていけるような、バカな奴だから……」——明彦とは孤児院時代からの付き合いを持つ青年が、疲れ切ったようにまたため息を吐く。青年は

思い出しているのだろう。明彦の爆走っぷりを。

自分の実力を、ひいては限界を知りたい。……未だに、明彦の根本的な思考回路には一切の揺らぎが無いようだ。

男性がかつて贈った言葉の意味を考えてはいるけれど、かつて、そして己を支え続けてきた力への執着は変わらない。そして終わらない。

けれど、彼が力を追いかけるのは「守りたいものを守るため」だ。ただがむしやらに追いかけていた頃とは違い、その横顔は晴れ晴れとしている。

「正直、甘く見てた。……仕事着なんだから、とーぜん仕事の時は着替えるわな」

「……いや、アンタはよくやった。充分、あの世間知らずの天然たちをフォローしたよ。俺だつたら投げてる」

青年は、男性の苦労を知っていた。実は男性、シャドウワーカー3人組の服装があまりにもアレだったので頑張った。自分の友人であるカリスママモデルと芸能人に連絡し、彼らが信頼するスタイリストを呼びつけたのである。

色々ぎやあぎやあ大騒ぎした挙句、なんとか「普通の、けれど洗練された都会人」というイメージの洋服を見繕い、最初の時の凄まじい服装のイメージを払拭した。そして

「一般人」の装いになった面々を送り出したのだ。……そこまではよかった。

しかし、3人はあの服装に戻ったのだ。「仕事をするから」という、超単純な理由でもちろん、仕事先であつた八十稲羽田舎町のペルソナ使いは啞然茫然。

男性が真夜中のテレビに関わつたときに起きた、田舎町にリムジンが乗り付けてくる。並みのシヨックだつたことには相違ない。

「もうやだ。南条くんと美鶴の逸般人いっぽんじんつぶり」——かつての級友にして上司・南条 圭と組織のトップである女傑・桐条 美鶴の名を呟きながら、男性はテーブルに突つ伏す。青年は何も言えなくて、ひっそりとアイスコーヒを煽る。窓の外から見える景色は、熱波が蜃気楼のように揺らめいていた。うだるような暑さに辟易しながら、けれど人々はしつかりと足を進めている。自分が目指すべき場所に向かつて、だ。

真夏の暑さに晒されているわけではないのに、男性はひどく疲れた様子で窓の外の景色を見やる。冷房の涼しさを嘯みしめるように、伸びきつた体勢のままグラスを揺らした。

氷とグラスがぶつかり合い、軽やかで涼しげな音を立てた。少しは涼しさに救われるのが普通なのだが、男性は未だにぐったりしているように見える。

ここまで披露している姿を見せるなんて珍しいことだ。その事実には少しだけ笑みをこぼし——けれどそうとは察されぬよう、青年はアイスコーヒを一気に飲み干した。

——刹那、この店内に似つかわしくない歌が流れ出す。サトミタダシのうただ。

「あ、電話だ」

勿論、その凶悪な歌を着信にしている人間は、男性ただ一人である。彼は即座に姿勢を正して電話に出る。

……先程まで、しなびた植物みたいになっていたのが嘘のようだ。

「もしもし？ あ、明彦？ 丁度いいタイミングで電話して来たな。今、真次郎と一緒に
お前の話題で盛り下がってたところ。……はは、そんな怒るなって。事実だから」

どうやら、件の明彦からの電話だったようだ。青年——荒垣 真次郎は思わず口元を
緩める。幼馴染からの連絡が嬉しいのだろう。

それを視界の端に捉えて、男性もひっそりと微笑む。昔に比べれば、真次郎はよく穏
やかな表情を浮かべるようになった。

「で、何か用？ ……うん、うん……は？ マヨナカテレビ？ アリーナ？ …………」

今も昔も現役な超大型ハリケーン・神話爆走”空本 至う？ ……なんだそれ、何かの
 広告かなんか？ ……”今も昔も現役な超ド級の朴念仁・神話覚醒”藤堂 航？ なん
 で航なんだよ？ ……え、なに？ 真次郎や陽向たちもいる？ なんてだよ、意味
 わかんねーな”

「事件は解決したんじゃ——」男性——空本 至はそう言いかけ、何か思い出したよう
 に言葉を止めた。ぴくぴくと口元を引きつらせる。

かすかに響いた共鳴反応に、至が弾かれたように窓を見た。黄金の蝶がひらひら飛ん
 でいる。あれの正体を、至と真次郎は知っていた。普遍的無意識の片割れである。

「……オーケー明彦、情報ありがと。総仕上げは俺達に回されたみてーだから、頑張つて
 来るわ」

手短に連絡し、電話を切る。至は何かを確認するように真次郎を見返した。真次郎
 も、何の迷いもなく頷き返す。

かつては至が申し訳なさそうな眼差しを真次郎に向けていたが、今ではそんなことは
 なくなっていた。きっと至は気づいていないに違いない。勿論、その事実にあ堵してい

る真次郎は、自分がそう思っていることを知らない。

2人は携帯電話を片手に連絡する。至は弟の国光 千影に、真次郎は大切な相手・要陽向に。数コールで繋がり、2人は手短に件の話を説明した。受話器越しの千影と陽向は躊躇うことなく頷き返してくれた。

あとは至の双子の弟・藤堂 航だけである。

至は携帯電話にかけてみたが、眉を顰めた。いつまでたつても航が出ないからだろう。

気を取り直すように、今度は圭にかけてみる。圭は電話に出たらしい。至は半ば怒鳴るように航の名を出し——止まる。

しばし無言。幾何かの間を置いた後、「某桃姫か!」と零し、電話を切る。至は慌てた様子で立ち上がり、伝票片手にずかずかと歩みを進めた。

何事かと真次郎が問いかける。至は半ばイライラを吐き出すように、カウンターに伝票を叩きつけながら、告げた。

「普遍的無意識ども、航をマヨナカテレビに突き落しやがった!!」

空本 至とその関係者たちの戦いは、再び幕を開けることになるのだが——それはま

た、別のお話。

どこかの世界にありうるであろう、物語の可能性。
機会があつたら、語るとしよう。

そしてそれは、ある可能性を切り拓き、未来へと繋がっていく——。

\$\$\$

2019 ? / ?? 夕方

綾風市 / 某所

「お前さあ、どう考えても不法侵入だからね。絶対『おまわりさんこつちです』って連絡されてもおかしくないからね。完璧にアウトだから」
「問題ないだろう。ちよつと台所を拝借するだけだ」

「いやいやいやいや。明彦、普通に考えなさい。自分が直面した時のことを考えてみなさい。『ある日家に帰ってきたら見知らぬ男性が晩御飯作ってました』ってなったら、お前は一体どうすんの？ 普通の人は即座におまわりさん呼ぶからね。迷いも躊躇いもなくおまわりさん召喚するから……って、言ってる傍から冷蔵庫を物色するんじゃない!!」

「……ううむ、いまいち大規模な料理は作れそうにない……。チャーハンで行くか」「チャーハン!? またご飯ものかよ! お前、こつちに赴任する前に真次郎くんから『一人でも作れる簡単料理』の手ほどき受けたはずだろ!? なんでマスターしたレパートリーは全部ご飯がらみなんだよ!」

「シンジに『いろいろな面倒だから、手軽にできて腹いっぱいになるご飯料理を教えてください』って頼み込んだら教えてくれた」

「真次郎くんが投げた。完全に投げた。風ちゃんでも見捨てず気長に教えてたのに……って、手際いいお前」

「一人暮らしをするようになってから、自炊してたんでな」

「ごめん。毎食プロテインだけで過ごしてるかと思ってた。『剛腕のプロテインジャンキー』よろしくな惨事になってるか」と

「貴方は俺を何だと思ってるんだ!」

「おい、ご飯飛ばぞ気を付けろ！——あれ？　なんで俺お前の料理にアドバイスしてんの？　違うだろ！　このままいったら非常にマズイって！　慎くん帰ってきたら絶対警察に電話するよ！　不法侵入で訴えられるよ！　そんなことになったら文字通りの惨事になるってーの！　参事官が惨事引き起こしてどうすんだ!?　なにこれ、ギャグにしても何にしても笑えない!!」

「文字通り “さんじ” ってか！　……って、幾月かアンタは!?!」

「あの野郎と同格扱いしないでくれる!?!　すごく虫唾が走るから！　てか、いい加減にしなさい。慎くん、お前のことは絶対不審者だと思うからね。もしも本当に通報しちゃって、『おまわりさんこつちです』から『こいつがおまわりさんです』的な事態になったら、お前一体どうするつもり——」

「もしもし警察ですか？　今ウチに不審者が……」

「慎くんごめん、ほんとうにごめん。こいつがおまわりさんなんだ」

「えっ」

「そして認めたくないけど、俺の後輩にあたる元・ペルソナ使いの警官で、惨事官なんだ」

「「えっ」」

「——結局チャーハンだけかよ!?!」

「ああ。有り合わせだが、けっこういけるぞ? むぐむぐ、もぐもぐ——たびえなひのか、2人とも?」

「口に物を突っ込みながら話すんじゃないの!?! てか、食器も材料も全部このお宅のだから!?! 偉そうに言うんじゃないの!!」

「……至さん、この人……」

「ごめんね慎くん。後で、旧知の仲である人たちにきつーく叱ってもらおうから。ついでに冷蔵庫の材料も補充しとくから。……えーと、美鶴と真次郎くんの電話番号は——」

「よりにもよってその2人か!?! ——ッ!?! ごふつ、げふつ……」

「わー!?! み、水ー!!」

「なんだこの惨事」

——…これもまた、別のお話。
どこかの世界にありうるであろう、物語の可能性。
機会があつたら、語るとしよう。

1—5. 縁を辿って縁に行きつくだけの簡単なお仕事

2009. 6 / 30 朝

巖戸台分寮／ラウンジ

「……やっぱり、増えてきたな」

ニュースと新聞に目を通した後、至は大きいため息をついた。昨日届いた麻希のメールにも、前者と同じ情報が載っている。特に後者であるメールには、患者の様態についての詳細が記されていた。

彼女はある意味、巖戸台式影人間の最前線にいるのだ。影人間にされてしまった人間の症状や詳しい人数やらの情報はとても貴重である。あとは患者の事故現場と在住先か。シャドウの行動範囲や影響範囲の割り出しにも使えそうだ。

ただ今統計作成中である。次の満月までには結果が出る予定だ。

他の面々も朝食に箸を進めつつ、険しい顔でニュースや新聞に視線を向ける。この街での「影人間の増加」は、満月に現れる巨大シャドウが活発化してきた証拠だ。

誰が何かを言わずともぴりぴりした空気が漂う。満月への戦いへ向けて、面々は色々と思う所があるらしい。さながら「負けられない試合」に挑まんとするスポーツ選手に

見えなくもない。明彦の考えは、ある意味で間違っているのだ。

ただしこの試合、負けたりベンジもクソもない。良くて影人間の仲間入り、悪くて現実時間内で「事故死」処理である。まるで、セベク・スキヤンダルで対峙した裏の會長・武多たけだの仕事内容みたいだと至は思う。

奴の仕事は「神取の障害になりうるモノの抹殺」であり、主に対象物や対象物関連のもみ消しがメインだった。

そして至も、その「抹殺対象」にされた人間の1人である。

「でも、今回の行方不明事件は奇妙だよ。接点の有無や性別に関わらず、2人組が突然行方不明になるんですよ？」

「あー。接点がない場合もあれば、恋人同士だったり上司と部下だったり……今度のシャドウは節操ないわねー」

「おかげで、周囲の人たちが色々とあらぬ噂で盛り上がってるみたい。夏紀ちゃんも言ってた」

陽向、ゆかり、風花が話し込むすぐ横。何を思ったのか、順平がいやらしい笑みを浮かべて妄想に耽っていた。

彼が何を考えているのか、至にはなんとなくわかる気がして苦笑する。まるで高校時代の秀彦や正男を見ているようだ。双子の弟は、未だにそんな浮ついた話は無いようだが。

……正直いい加減にしてほしいくらいなのだ。奴のおかげで、至は麻希&英理子の凶悪タッグに色々やられている。奴らの所業を思い返すだけで寒気がした。何故自分ばかり、弟の割を食う羽目になってしまうのだろうか。

「男女ペアだと恋人というレッテルが押しつけられたり、同性同士だと一部の人々が目をぎらつかせて語ってる場合が多いですよね。……だからといって、僕はその人たちがどうかとか、そういう非難めいたことを言うつもりはありませんが」

「? 何故、同性同士だと一部の人間がそうなるんだ?」

「あー……。先輩、知らない方が幸せだつてこともありますよ」

千影が気まずそうに視線を逸らし、明彦がきよとんと首をかしげる。彼はまだ子ども

並みに純粹である証だ。天然ボケという氣質の相乗効果でもありそうだが。

そういえば、最近優香が「夏の陣」に参加するために頑張っているらしい。仕事を片付けつつ、自分の趣味である薄い本の作成に心血を注いでいるのだとか。何かに熱中できることはいいことである。

売り出しだけではなく買い出しにも行くそう。会場は込み合うことが予測されるので大変なことにならないければいいが、と至は思う。毎回、「夏の陣」や「冬の陣」の映像が流れているのを見るたびに気が遠くなるのだ、笑えない。

オンリーが7月7日にある、と言っていた優香の言葉をふと思い出す。そういえば満月も7月7日だった。

あっちもこっちも決戦らしい。あまり嬉しくないダブルブッキングである。何とも微妙な気分だ。

明彦の言葉を借りれば、「七夕デスマッチ」なのだそう。ボクシングのタイトルマッチっぽい気がないでもない。まあ、明彦はボクシング部だし。

そうこうしているうちに、面々は朝食を食べ終えたようだ。がちやがちやと音を立てて、流し台へ食器を置いて行く。これを洗うのは寮母である至の仕事だ。

「行つてきますー!」「おう、いつてらっしやい」——面々の見送りを終えて、至は早速皿洗いに取り掛かった。

【1—5. 縁を辿って縁に行きつくだけの簡単なお仕事】

掃除と洗濯を終えて一息つく間もなく、至は次の仕事へ取り掛かる。まずは郵便物の確認だ、と、玄関に置いてあったポストを開けた。

何名かのポストに、手紙が入っている。小包等の届け物はない。宛先と差出人を確認し——止まる。

宛先は伊織 順平、差出人は檀原 淳。

平行世界で、そしてJOKER事件で関わった、かつての少年の名前があった。

……最も、平行世界では家庭崩壊が起きており、彼の姓は母親の姓——黒須であったが。

そういえば4年前、彼から「父親である明成と同じ教職に就き、晴れて中学校の生物化学教員になった」という話を聞いた。至もお祝いに駆け付けたから、覚えている。

特に植物——花に関する知識が豊富で、授業中によく花関連の話をしていたという。女子にモテたい男子生徒や、花が好きな女子生徒からの人気が凄まじいらしい。

本人の趣味と友人のリサが絡んで文学も嗜んでいるということから、国語科教員と話し込む場面も見受けられるという。

……そういえば、「父の教え子で、鳥海という先輩の国語担当教師と仲良くなった」という話を聞いた気がする。彼女はその後、有名なマンモス高校に転勤になったそうだ。確か、陽向の担任も鳥海という名前だったか。中学・高校の教員免許を両方とも取得している場合なら、中学校から高校へ異動するのは有り得ない可能性でもない。

（人のつながりって、意外な所に転がってるもんだな……）

封筒に書かれた淳の名前を見つめながら、至はひっそりとひとりごちる。中身を是非とも覗いてみたい衝動に駆られたが、どう考えてもアウトだろう。

懐かしさからくる誘惑を振り払い、白い封筒を順平のポストに入れておいた。その調子で、誰宛に手紙が届いたのかを確認する。

それら全てを終えて、至は買い物袋を片手に商店街へと足を進める。心なしか、足取りがいつもより軽い気がした。

満月シャドウとの戦いにひと段落ついたら、久々に淳に連絡をとってみよう。家族と生徒たちの話で盛り上がりそうだ。

寮母さんになったんだと知ったら、彼はどんな反応を示すのか。それはそれで楽しみである。

(……そういえば、淳が最初に持ってたペルソナって——)

ああ、もしかしたら、だからかもしれない。

平行世界の淳が目覚めたペルソナは、Wheel of Fortuneのヘルメス。

姿とアルカナは違えど、順平と同じ旅人の守護神だ。あまりよく知らないが、平行世界の至は「ラクカジャ神」と呼んでいたらしい。

こちらの世界でも、彼はJOKER事件とは別件の事件に巻き込まれてペルソナ能力を発現している。

勿論、こちらの彼のが最初に発現したペルソナもWheel of Fortuneのヘルメスだ。

その事件のおかげで淳は平行世界の出来事を“知”り、平行世界の仲間たちと顔を合わせ、再び友としての絆を築き上げた。

それは今でも生まれ、強く結びついている。丁度この事件の騒ぎが収まった頃だった

のだ。淳から「中学校の先生になった」という連絡が届いたのは。

同じペルソナを所持する教師淳と生徒順平。彼らには絆以外にも繋がっているものがあつたのかもしれないな、と、至はそんな事を考えた。

\$\$\$

2009. 7 / 1 夜

巖戸台分寮 / ラウンジ

「——お、黒須 純子だ！」

ニュースからアニメチャンネルを切り替えようとした順平が、思わずと言った様子で声を上げた。テレビ画面には、凛とした佇まいの女優が映っている。

どうやら、近々舞台公演がこのあたりで行われるらしい。今ここで映し出されている純子は、舞台の主役に抜擢されたようだ。

40代を過ぎたとはいえ、彼女の魅力や立ち振る舞い、そして演技への熱意や技術は衰えることを知らない。

むしろ、年を重ねるごとに深みを増しているように思う。かつては新進気鋭のアイドルたちが持つ若さに嫉妬し、その果てにJOKER化してしまったなんて嘘みたいだ。

平行世界ではもつと悲惨な末路を辿ったことも至は知っている。だから、彼女の成功はととても喜ばしいことだった。淳が嬉しそうにしている姿が目には浮かぶ。

「え？ ……順平くん、知ってるの？」

「ああ。俺、彼女のファンなんだよなー」

「意外。アンタ、人妻熟女趣味でもあったの？」

「そんなヤマしいもんじゃないって！ 中学時代の恩師繋がりでさー」

じと目で見られ、順平は弁解するように——でも恩師の事を誇るように話し始める。間違いはない、淳のことだ。

あまり詳しく公にされているわけではないが、淳と純子は血の繋がった親子なのである。

舞台公演や仕事の度に、母へ手渡す花束の花を選ぶ彼の姿を知人らは知っていた。至

もその1人である。

ゆかりと順平の話に、近くを通りかかった陽向と千影も加わった。この2人も、純子との面識や付き合いがある人間だ。

それが功を奏したのか否かは知らないが、共通点にはなつたらしい。順平が嬉しそうに表情を綻ばせ、純子や淳に関する話をし始める。

順平は中学時代の恩師・淳から、花閨連の知識をいつもご教授して頂いたという。ついでに、彼から「夢を追いかけることの大切さ」を語られたらしい。

「最初は『うるさい大人の説教だ』って流したけどさ。……最近になって、色々思うことが増えてきてなー」

「まあ、それ以前から文通は続けてるし、たくさんお世話になったんだけど——どこか照れくさそうに順平は笑う。

卒業を待たずに巖戸台へ転校したため、それきり淳には会っていないらしい。

会話を盛り上げる面々を横目に、至はふと順平のポストに視線を向けた。彼のポストは空っぽになっている。

おそらく、恩師である淳の手紙から「何か」を得たのだろう。昨日までの順平とは、

文字通り何かが違うような気がした。

変化の芽は着実に芽吹いている。それはそのまま、順平自身の成長に繋がっていくのだろう。

花が好きだった少年は今、子どもたちという花を育てて咲かせる手伝いをする仕事に就いた。そして、彼が手塩にかけて育てる花の蕾は、近いうちに咲き誇るかもしれない。近々また手紙を書くつもりなんだ、と、順平が苦笑した。まるで悪戯がばれて困ったような子どもものの表情で。

いいねいいねと周囲が湧く。「花が好きなら、なにか押し花でもつけて送れば?」「名案!」——とても楽しそうだ。

(……そっか。淳も、立派に仕事やってるんだな……)

なんだか感慨深くなって、至はひっそりと微笑んだ。

携帯電話のメール履歴から樞原 淳の名前を探す。しばし時間がかかったが、なんとか見つけることが出来た。

手短にメールを打ち、送信。これでよし、と、携帯電話を折りたたむ。

少し離れた場所では、相変わらず面々が和やかに会話している。気づけば美鶴や明彦

も加わっていた。いつの間にか手紙の書き方講座なるものが開かれている。

「まずは便箋からだ」——と。どこから持って来たのだろう、美鶴がばさばさと便箋（しかも封筒とのセットもの）を何百種類も取り出してテーブルに並べていく。

流石は桐条、スケールがでかかった。周囲の面々は哑然茫然である。この調子で行ったら、淳への手紙が出せるのはいつになることやら。

あれはどうだ、これはどうだと便箋を進められ、あーうーあーうー煮え切らぬ返事で返す順平。

その脇で便箋を物色するのは女子2年生組だった。この便箋だったらあの用途に使えるかも、と、楽しそうに談笑している。

「もう少し変わった柄の方がいいんじゃないか？ これとか」

「ちよ、待つてくさいよ！ 真面目にやつてくさい真田先輩！」

「うわー……真田先輩、さすがにこれは酷くありませんか？」

「なっ……!?!」

変な柄の便箋を差し出した明彦へ、順平と千影の突込みが入る。センスに苦言を呈され、明彦はかなりショックを受けたようだ。青筋がいつぱい刻まれている。

彼の口が戦慄くのを無視し、順平は真剣な面持ちで便箋選びへと戻った。恩師に失礼のない柄を、他の誰でもない自分自身の手で選ぶつもりらしい。

長らく悩んだ後、彼はとてもシンプルな、けれど凛とした白い花柄が描かれた上品な便箋を選んだ。

「それ、いいじゃん！ 順平意外とセンスあるんじゃない？」——女性陣からも声がかかる。その言葉に、順平は「だろだろ？」と笑った。

この時点で胸を張った彼だが、手紙の書き方講座はこれからが本番だ。美鶴の言葉に、彼は目を点にした後落胆するように肩を落とす。

本当に、いつになったら淳への手紙を書き終わることが出来るのか。見ているこちらも不安になってきた。

妥協を許さない美鶴の様子から、まだまだ時間がかかりそうなことは明らかだ。

「俺にはセンスがないのか」と呪詛を唱える明彦を背にして、彼女の手紙の書き方講座が繰り広げられる。

「……でも、何を書こうかな。俺ツチ的には活動部のことを書きたいけど、流石にアウトツすよね……」

「いいや、大丈夫だと思うぞ？ おそらく話は通じる」

突如割って入った至に、面々が目を丸くする。

至は懐からタロットカードを取り出し、面々に示した。描かれたカードは、
Wheel of Fortune^命。

「彼——榎原 淳は、俺の知り合いで、ペルソナ使いの1人だからな」

「え？ 至さん、榎原先生を知ってたんスか!?!」

驚いた順平の声に、さらに追撃が入る。

「ええっ!? 順平って淳さんの教え子だったの!?!」

「わー、初めて知りましたよー」

「えええ!! 陽向つちと千影も知り合い!? 世の中狭すぎじゃねーの!?!」

わいわいがやがや。——巖戸台分寮の夜は、まだまだ明けそうにない。

余談だが、「順平と淳のペルソナが同じ『ヘルメス』だった」ことを話したら、彼は嬉

しそうにガッツポーズをとっていた。

そして余談ついでに蛇足だが、後にそれを知った淳から「複雑だけどすごく嬉しい」というメールが返ってくることになる。

\$\$\$

2009. 7 / 3 影時間

タルタロス／奇顔の庭アルカ・後半

ごう、と、恐ろしい勢いで風が巻き起こる。その狙いは、風属性を苦手とする順平に向けられていた。彼は焦ったように声を上げる。防御しようにも間に合わない。

それを察知し、至は彼の目の前に割り込むようにして立ちふさがった。即座にペルソナを交代してスザクを呼び出す。至のスザクは風を無効化できるのだ。

吹き荒れるそれは決して至を傷つけない。打ち放たれたガルダインの威力を相殺するかのよう、スザクは大きく羽ばたいた。破裂するような音が響き渡る。

仕返しとばかりに至が腕を掲げれば、紅蓮の聖鳥は高く飛びあがって炎を放った。

アギダインやマハラギダインなどは比喩物にならないくらい、紅蓮の焰——地獄の業火だ。

順平がぼかんとした表情でそれを見つめる。自分のペルソナが覚えているアギ系スキルを復唱しつつ威力を思い出しているようだった。

天と地以上の差が存在していることは明白である。

「っ……俺だって！ ヘルメス！」

負けず嫌いなお調子者は、自分にできることを成すために動く。

引き金が引かれ、淡い光が舞う。順平のヘルメスが嘶くように声を上げた。刹那、ゆかりの足元から青い光が湧き上がる。——援護魔法・ラクカジャだ。

物理攻撃で狙われ、且つ体力の低いゆかりの援護にはうってつけである。「ナイス順平！」——ゆかりの明るい声が響いた。

それで調子に乗つたらしい。彼は「任せろ！」と言つて、仲間たちに対して次々とラクカジャをかけていく。

物理攻撃を反射してくる上に、自分の魔法は雀の涙程度の威力しかない。でも、何

かできることはあるはずだ——と。

この現状で、彼は必死になって「自分ができること」を模索している。いつぞやの至の発言や淳からの手紙が、彼に「変わろう」という意識を持たせているのかもしれない。……まあ、根底には「自分は特別な力を持っている」ことや、「自分を認めてもらいたい」という思いがあるのだろうけど。

先のモノレールオーバーラン事件でもそんな所があった、とは、陽向からの話である。

（確かに、突っ走って行きそうな気性はあつたけどな。マークとブラウンを足して2で割つたような性格だから）

思い出したのは秀彦と正男。お調子者で向こう見ずな、猪突猛進で自己顕示欲が強めな一面を持つ2人である。

その一面のおかげで現在の成功を勝ち取った、とも言えなくはないが。

騎士が容赦なく打ち出す攻撃。けれど、ラクカジヤのおかげでダメージは緩和されている。順平の援護のおかげだろう。

『真田先輩のかけていたタルンダと、リーダーがかけていたラクンダの効果は切れまし

たー!」

「先輩、お願いします! ——カハク、ラクンダ!」

「よし! ——ポリデュークス、タルンダ!」

引き金が引かれ、ポリデュークスとチャイナ服に身を包んだ妖精——カハクが降り立つ。赤と紫の光が番人——不屈の騎士を包み込み、奴から力を奪い取った。

間髪入れず、美鶴と千影が召喚機の引き金を引く。まずはペンテシレアが降り立ち、不屈の騎士ヘレイピアの切っ先を向けた。

続いてペリが降り立ち、手を掲げる。2体の周囲に冷気が収束する。水系の術・ブフーラだ。

魔法攻撃が得意なペルソナ2体の攻撃に耐え切れず、騎士が膝をつく。それでも不屈の名を冠する番人は、ふらつきながらも立ち上がった。

再び風が巻き起こる。先程は防衛態勢が取れなかった順平だが、今度は防衛が間に合ったらしい。他の面々も同じだった。

このまま押し切る——陽向の視線の意味を理解した面々は領いて駆け出す。至もまた、それに続いて援護体制を取る。これは保険だ。

雷が、炎が、氷が、唸る。迎え撃つ騎士の周囲に、風が巻き起こる。

「「いっけえええええ!!」」

陽向のアギラオ、美鶴のブフーラ、千影のジオンガが、同時に打ち出された！ それらは不屈の騎士が打ち出したガルーラとぶつかり合う。

拮抗していた4つの属性たち。徐々に、徐々に、陽向たちがうち放った3属性が、不屈の騎士のガルーラを押し返し始める。——そして、競り勝った。

迸る雷が、冷気が、焰が、騎士に襲いかかる。それらをまともに喰らった番人は、断末魔の悲鳴を残して消えていった。

ぴりぴりした空気がしばし漂ったが、もう何も出てこないと確認した面々が脱力する。至も保険としてためていた力を抜いた。代わりに、面々へ回復魔法をかけてやった。

スザクが柔らかな声で鳴く。温かな光が、疲れ切った面々の傷を癒していった。今日はまだもう少しだけ先に進むつもりでいる。

「順平、ナイス援護！」

「おう！ 当然!!」

その言葉に、彼は誇らしげに胸を張った。今回は褒めてもいいよね、と、ゆかりが茶化すように笑う。

「今回はつてなんだよー、ゆかりツちつたら酷いなー」——むくれるように順平が口をとがらせ、それが引き金になったのか、面々も笑い出した。

いつにも増して和やかな空気が漂う。尊敬する恩師と同じペルソナを誇るように、順平はとんとんと胸を手で軽く叩いた。

周囲を軽く探索し、アイテムと宝箱を回収。そしてその勢いのまま、面々は60階への階段を駆け上った。

——静かである。敵がほとんどいない。

その調子でまた階段を見つけ、先へ進む。次の階も、その次の階も、その次の次の階も、敵は殆ど徘徊している様子はない。

そして65階までたどり着いた時、一際目立つ大きな階段が鎮座していた。……最も、その大階段の前には、何か不思議な力によって閉じられた門があるだけだったが。

「今回は、ここで行き止まりみたいだね」
『そうみたいです……』

陽向が確認するように門を睨めば、風花が息を吐くような調子で頷いたらしい。

「どうやら、この塔は、ある一定期間が経過すると先の階層が開かれていく」形式のようだ。この先へ行くためには、あともう少し待つ必要がある。なんてじれったいのだろう。

至がため息をついた瞬間、何かが自分の頭に直撃した。ペしん、という軽い音。「いつて！」——自分でも間抜けな声が出てしまったと思う。

足元に落ちたそれを拾い上げ——至は思わず息をのむ。人工島計画書文だ。慌ててざっと目を通そうとし——

「至にいさん、帰るよー？」

陽向の声に断念した。

1—6. 七タデスマッチ1回戦に挑むだけの簡単なお仕事

2009. 7/7 影時間

巖戸台分寮／作戦室

「幾月さん幾月さん、その発言は一体どういうことかなー?」

空本 至は殺気立っていた。天地がひっくり返るんじゃないかなと思うくらい、背中にオーラを背負っていた。

幾月は慌てた様子で後ずさる。奴の眼鏡には、うつすらとだが至の所持するペルソナたちが映り込んでいた。どれもこれも異様な空気を発している。

麻希からの資料と風花の分析から明らかになった、七タデスマッチの会場に選ばれた場所——それが、至が怒り心頭になっている理由だ。

巖戸台の白川通り。そこは夜の歓楽街である。おピンク系の水商売やら何やらがはびこる地帯だ。勿論、未成年お断りの。

そんな場所に赴くのは、17歳と18歳で構成された健全な高校生たちである。まだ修学中の学生である。

どこからどう見ても、どう考えても、誰が見ても明白なくらい教育に悪いだろう。いや、断言する。悪い。

なのに、幾月は軽いことのように言うのだ。

「たかがアミューズメントホテルなのだから——と。」

「お、落ち着くんだ空本くん！ そんな感情的になる必要ないじゃないか。たかがアミューズメント・ホテルだよ!？」

「あの通りにあるホテル群のどこがアミューズメントだアア!? どつからどうみても、いかがわしい、年齢制限があるアブないホテル」じゃねーかああああ！ 明らかにお子様お断り・泊まるだけじゃすまない・アツ——の三拍子が揃ってるだろ！」

「いやいやいや、大丈夫だよ！ 空本くんが危惧するようなことなんてきつと起こらないから、そんな殺気立たなくとも……」

「貴様それでも学校の理事長かアアア！ 子どもの教育に携わってる人間の言う言葉じゃねえだろーが!!」

「いや、理事長つてのは、どつちかという経営方面だから……」

「つべこべ言うな！ 学校関係だったら、どこに属そうがみんな教育に係わる人間なんだよ！ 普通に考えろ!!」

逃げ腰になる幾月の胸ぐらをつかんでガクガク揺らす。こいつは本当に教育関係者なのだろうか？

今度、ゆきのや淳や冴子先生にこいつの思考回路のことを話してみたいと思う。きつと3人とも険しい顔をするに違いない。

シャドウ討伐以外のことは頭が回らないのだろうか？ そんな失礼なことが頭にぼんと浮かんでくるくらい、幾月の思考回路が理解できなかつた。

「ちよ、やめて勘弁してよ空本くん！ 僕、研究畑の、人間で……そ、そんなに揺らされると、ちよ、つと、キツイ……」

「あつはははは言い訳になつてないですよ幾月さーん、研究云々より大人としての有り方について学ぶべきだと思いまーす」

怒りすぎて笑顔しか浮かばない。自分のテンションとボルテージが斜め方向にかっ飛んでいきそうだ。戻つてこれそうにないかもしれない。

いや、いつそこまでも突き詰めていってしまふべきだろうか？ 圭から「もう知らん」とさじを投げられることもあったつけ。別件でだけど。

本当に、コイツどうしてやろうか。しつかり教育しなおすべきだろう。圭を召喚して長話聞かせてやろうか、それともゆきのに拳で語ってもらおうか。

そんな風に、幾月とコント（若干暴力的な）をしていたためか。

「……陽向、千影。あんたの後見人……」

「あー……いつもあんな感じですからね。そこらへんは慣れということだ」

「至さんって、怒ると喚き散らすか満面の笑顔になるタイプなのか。初めて知ったな」

「でも、背中に変なオーラ背負ってるのは共通なんだ……」

「あははは……」

「チカの時も本気で怒った、って聞いてたけどね。にいさん、身内の事になるといつもこうだから」

「身内……」

生暖かい視線を向ける面々の様子に気づかなかった。

【1-6. 七タデスマッチ1回戦に挑むだけの簡単なお仕事】

同日 影時間

ホテル内部

「あのヤローぜってーブーツ飛ばーす、後でぜってーブーツ飛ばーす！」

右の拳を左の平手に打ちつけながら、至はずんずんと足を進めた。先陣を切るような形になっているが、戦闘の時は殿に回るから別にいいかと思っている。

最も、現時点では雑魚シャドウが徘徊している様子はない。むしろ、見つけたとしても恐ろしい勢いで逃げ去っていくのだ。

満月の巨大シャドウと対峙する時のためにも、体力はできるだけ温存しておくのがいかに決まっている。

「すげえ、全自動虫よけスプレー……」——順平が何やら感心したような（けれど若干

怯えた）声で呟いていた。

そういえば、何かで同名のエンカウント回避アイテムがあつたような気がしないでもない。……ああそうか、ポケモンのアイテムだ。

この時間帯だと、廊下やロビーに人がいる様子はない。おそらくみんな部屋の中にいるんだろう。つまりはそういうことである。

個人的にはかなり居心地が悪い十面々の教育に悪いので、サツサと巨大シャドウを片づけてしまいたいところだ。長居したくないし、させたくない。

早く出てこないだろうか。そしたら速攻で片づけるのに。それが面々の成長のためにならぬと知っていても、ここに長居するよかマシだと至は思う。

「風花、敵の居場所割り出せた？」

『はい！ えっと、3階の奥の間にいるみたいです』

「ホテル内部の地図と照らし合わせると……『デラックス・スイートルーム』？ 一番高い料金の部屋みたいですね」

ふむ、と、千影が考え込むように顎に手を当てた。隣にいた順平はニヨニヨしている。視線は若干斜め上を向いていた。明彦に至っては気にもしていない。

ゆかりは気にしないように努めているようだ。美鶴はそんな後輩の様子に首をかしながらげている。3年生組のキョトン感がパネエ。パーフェクトにノットアンダスタンである。

むしろこのままピユアでいてほしい。スイスエクティヴォなピリオド、あるいはシーンにそんなデンジャラスなものなどアンダスタンしなくていい。

そんなものに足を踏み込んだせいで、彼らの目の前がゴーズブラック、もしくはブラックアウトしてしまう危険性があるのだ。青少年が道を踏み外す原因を誘発してたまるか。

大体幾月がケアレスすぎるのだ。これでもかかってくらいケアレスすぎるのだ。ハンドレスでケアレスでケアレスなのだ。奴はブランクしているんだろうか。

……さて、自分は何を考えているのだろうか？

誰か、通訳かエリーを呼んでくれ。

至の頭の中はもういろんな方向にはじけ飛びかけている。

そんな中、偶然見えた一組の影。視線を向ければ、どこかで見覚えのある男2人がふらふらと奥の部屋へと消えていく所だった。

片や鳶色の髪を一つに束ね、蝶を模した奇妙な仮面を被った男性。片や、七姉妹学園高校の制服に身を包んだ不良じみた格好の少年。

(……………いや、いやいや、いやいやいや!)

ちよつと待て。色んな意味でちよつと待て。

何故この2人が一緒になって、ピンクなホテルの一室に消えていく必要があるんだ。

というかアレ、確かに別存在扱いだけれど、厳密に言えば同一人物でもあるんだぞ。
なのに何故。

至にはさっぱり意味がわからない。しかもあの2人、目が虚ろじゃなかったか？ おまけに足取りも、どこことなくおぼついていなかったような——？

「至にいきさん、そつちじゃないですよ！ 1人でどこいくつもりですか？」

「——ハッ!? あ、悪い！」

思考をいろんな方向に飛ばしていたせいで、自分だけ別な方向に行こうとしていたらしい。

この調子では、年長者としてのいろんなものが危うい。至は咳払いし、慌てて彼らの殿につく。

先陣を切るのは陽向、続いて千影、そして他の面々が並ぶ。まだまだ幼いその背中を見守りながら、至も足を進めた。

そして、目的地である部屋の前へやって来る。扉越しにびりびりとした殺気が漂ってきた。この部屋の中に倒すべき相手がいることは明らかだ。

面々は気合を入れるように前を向く。その瞳には迷いも躊躇いもない。幾何の間を歩いて、陽向が一気にドアを開けた。

「……………」

果たしてそこにシャドウはいた。でつぶりとした巨体に赤いマントをなびかせて、奴はベッドの上に鎮座している。どこまでも貫禄と風格が漂う奴だ。

風花のアナライズの声が響く。シャドウのアルカナは法王らしい。ならば、肥満体のくせしてあの威風堂々とした存在感も領ける。むしろ肥満体だから威風堂々してるのか。

だがしかし、仲間たちの眼差しは奴に向けられていなかった。性格に言えば奴の足元だ。無造作に散乱している薄い本だ。色々危険な絵が描かれた危険なものだ。

年頃の男女が、或いは男性・女性同士が、「くんずほぐれつにやんにやんしている」危

険な構図。詳しいことは、とてもじゃないが至には言えない。

この場に幾月がいたらどんな風に形容するだろうか。デリカシーのなさそうなアイツなら、平然と躊躇いなく実況し出しそうで怖い。あくまでも「そんな気がする」だけなのだが。

航がいたら「何故みんな呆然としてるんだ？　これが一体何を指しているんだ？」と首をかしげて、内容を朗読し出しそうだ。そつちもそつちで酷すぎるだろう。おまけに、素でやる。だからものすごくタチが悪いのだ。

「……………これ、これは……………」

「いや、……………え……………」

「な、なんて破廉恥な……………」

「……………うわ、サイアク……………」

ドン引きである。みな、顔に青筋を立ててドン引きである。

至もまた、それに釘付けになっていた人間だった。見惚れたのではなく、全く逆の意味で。

子どもの教育によろしくない——そう判断したとき、頭でそうしようと考え付くより

も先に体が動いていた。

「——スザク、ここにがある薄い本全部焼き払え！」

青い光が炸裂し、至のスザクが舞い降りる。己の心境を表わすかのように、スザクは間髪入れず地獄の業火をうち放った。

法王アルカナのシャドウ——ハイエロファントの悲痛な叫びが聞こえたような気がしたが、きつと気のせいであろう。

\$\$\$

とりあえず目に痛いモノは全て燃やし尽くした。ということ、戦闘開始である。

コレクション(?)していた薄い本全てを灰にされた怒りだろうか。ハイエロファントは一際激しく咆哮すると、大きく手を振り上げる。稲妻がばちばちと迸り、降り注いだ！ 慌ててみな防御態勢を取る。

激しい光と衝撃。雷系の魔法——マハジオンガだ。おそらく奴が使えるであろう術

を、怒りによつて最大規模までブーストしたものだ。なんてヤツだ、と、至は心の中で舌打ちする。雷が弱点なゆかりは寸でのところで防御が間に合ったようだ。でも、その威力はやはり堪えるらしい。

「じ、自給自足……」

自分自身に回復魔法をかけながら、ゆかりが小さくぼやく。それを横目に、至はハイエロファントに向き直った。奴は相変わらず奇声をあげている。

そして、所構わず無差別に雷をうち放つていた。仲間たちは寸でのところでそれを避けつつ、縫うようにしてその巨体に攻撃を仕掛けていく。

明彦のポリデュークスがタルンダを、陽向のカハクがラクンダを唱える。ハイエロファントの攻撃と防御力を下げたのだ。入れ替わるように、順平のヘルメスがラクカジャをかける。

「今回はサポートを大盤振る舞いです。——フェンリル、マハタルカジャー！」

青い光が舞い上がり、姿を現したのは千影のフェンリル。世界すら喰らうと言われた

白銀の狼は、天へ向かって大きく咆哮した。全員の足元に赤い光が湧き上がる。

それと入れ替わりに感じたのは、力がみなぎってくるような感覚——今なら思いつきり相手をタコ殴りにできそうな気がする。味方全員の攻撃力を上げる術・マハタルカジャだ。

術の援護を受けた陽向と美鶴が駆け出し、召喚機の引き金を引いた。陽向から現れたのは馬にまたがり病気を振りまく疫病神——ペイルライダー。続いて具現したのは、美鶴のペンテシレアだ。前者はガルーラを、後者はブフーラをうち放つ。

順平と千影がペルソナを呼び出す。ヘルメスとアーサーが飛び出すと、彼らは容赦なく斬撃を加えた。刃の軌跡が煌めき、巨体に幾重もの傷をつける。続いて明彦が引き金を引き、ポリデュークスが目にもとまらぬ速さと勢いで、拳の一撃を叩きこんだ。

「よし、効いてる効いてる——」悲鳴を上げるハイエロファントの様子を見つめて、陽向が不敵な笑みを浮かべる。

S. E. E. Sが押しているのだ。このままいけば充分押し勝てるかもしれない。

それを後押しするため、至もナルカミを呼び出す。味方の攻撃力が上がり、相手の防御は下がっているのだ。

背後で再びフェンリルが吠える。舞い上がったのは緑色の光。援護魔法のマハスクカジャ——命中と回避を上げる術である。

「よし、いけツ！——パイパースマッシュユ！」

降り立ったナルカミは、即座に一撃うち放つ。容赦ない斬撃がハイエロフアントの腹に命中した。

キツイ一撃を喰らった巨体がぐらつく。構わず、至は銃の引き金を引いた。一発、二発、三発、四発——銃弾はハイエロフアントの腕や腹を穿つ。そして、全弾くれた後で再びナルカミが降り立ち、もう一度パイパースマッシュユを叩きこんだ！

先の一発目よりも威力があがった一撃に踏ん張りきれなくなったのか、かすかに体制が揺らぐ。追い打ちのようにもう一発叩き込めば、その巨体がぐらりと傾いた。勿論その好機を逃すはずがない。

飛び出したのは明彦だ。一発、二発、三発。リズムカルに拳を叩き込む。

「フィンニツシュ！」——その言葉とともに、見事な突きがハイエロフアントの腹にめり込み吹き飛んだ。

「——要！」

「おっけーです！ みんな、総攻撃ッ!!」

「了解！」「待ってましたア！」「劍の錆にしてやる！」

明彦が陽向に視線を向ける。間髪入れず陽向が頷き、合図した。それを受けた面々が武器を持って駆け出す！

至も彼らに続き、銃の引き金を引いた。勿論、全弾くれてやる勢いで。

己の獲物を、己の思うがままに振るう。容赦ない攻撃の雨あられを受けたというのに、ハイエロファントはまだ倒れないようだ。大きく腕を振るって攻撃を打ち払う。

それを避けられなかった面々が弾き飛ばされ、床にたたきつけられ尻餅をつく。だが、彼らは屈することなく立ち上がる。瞳に宿る闘志はまだ折れていない。消えていないのだ。

遠距離から狙撃しつつ、至もハイエロファントを睨む。奴の方がはるかに巨体なためか、必然的に至たちが見上げる形になるのだ。

ハイエロファントが吠える。巨体が揺れて、奴の周囲にどす黒い何か湧き上がった。

——刹那、不意に足がすくむ。

出所不明の、得体の知れぬ「何か」。脳裏を駆けたのは、薄暗い舞台だった。

床でぼんやりと発光するのは青い蝶の死骸。無数に散らばるそれらは、1人の少女を

取り囲むようであった。

赤みを帯びた煉瓦色の髪が無造作に散らばり、人形のように真つ白な肌には一切の血の気がない。瞼は固く閉じられていた。

黄金の蝶がひらひらと舞う。発光する青に照らし出された黒い触手が、ゆらゆらと蠢いている。響くのは、感嘆に満ちた称賛の声と嘲笑う声。

青い蝶の死骸が一際強く発光する。死骸の山に埋もれるようにして、少年少女が横たわっていた。彼らの顔も真つ白で生氣がない。

その声の主を知っている。その光景の意味を、知ってゐる。あ、と、至の喉から情けない音が漏れた。体から一気に力が抜け、そのまま崩れ落ちるように膝をつく。

「う、あ、あああ………！」

「あ、あああ………ッ！」

「やだ、やだ………怖い………！」

「くう………！」

「い、嫌だ………嫌だあああ………ッ！」

「ううう………ッ！」

声がする。明彦が、順平が、ゆかりが、美鶴が、千影が、陽向が、怯えたように高い声を漏らす。崩れ落ちるように膝をついた面々は、体を震わせながらハイエロフロントを見上げていた。

焦ったような風花の声がするが、わからない。一体何を言っていたのだろう。判別できず、どうにもできず、ただただ至は聞き流していた。呆然と、ハイエロフロントを見上げることにしかできない。体を支配するのは、圧倒的な——恐怖。

そのためか、反応が遅れた。

次の瞬間、体を思い切り殴られたような衝撃。恐怖に竦んでいた体は、まるで人形のように放り出されて壁に叩きつけられた。

何かがぶつかると音と入れ替わるように、仲間たちの悲鳴が響く。体制を整える間もなくもろに叩き込まれた一撃。一切、知覚できなかつた。

うめきながらもなんとか体を起こす。——早いのだ。あの巨体が、認識できぬほどの速さで動き、自分たちに攻撃を繰り返して出してくる！

あ、と思った時、至は再び床に倒れ伏していた。情けない悲鳴が漏れる。息がつまりかけ、思わず咳き込んだ。

風花の叫び声が聞こえる。何を言っているんだろう？ でも、それを理解するよりも、湧き上がった恐怖が思考回路を占領した。

怖い。怖い怖い。怖い怖い怖いこわいこわいコワイ——!! ただそれだけが、至の頭の中を駆け回る。ただ、それ以外考えられない。

情けないくらい、足がガタガタと震えている。ひゅーひゅーと、鳴り損ないの笛の音色に近いような呼吸。怖いのだ。ただひたすら怖いのだ。理由がわからない。

理由がわからないから怖いのか、怖い理由がわからないから怯えているのか、そもそも何が怖いのだろう。目の前にいる、巨大なシャドウが怖いのか——?

「——ゆかり、お願い!」

「うん! ——お願い、イオ!」

陽向の声に応えて、ゆかりが引き金を引く。ぱりん、と、ガラスが粉々に砕ける音。青い光が舞い上がり、巨大な牛の頭に乗った美しい乙女——イオが淡い光を放つ。なんて、綺麗な光なのだろう。自分の心を覆い尽くすかのように湧き上がる恐怖を振り払ってくれる。

——……はて、何故自分はこのシャドウに恐怖を抱いていたのだろう。改めてまじまじとハイエロファントの巨体を見やる。どこからどう見ても、メタボリック健診で即刻アウトを頂きそうな体型だ。でっぷりとした腹の贅肉(?)がたるんで揺れた。

なんとも間拔けな表情だ。狸爺が嗤っているように見えなくもない。……ああ、なんだ。恐れる必要など何一つなかったのだ。こんな奴、今まで至が相手をしてきた悪魔たちや這い寄る混沌、あるいは普遍的無意識の権化に比べれば、大したことなどないのだから。

至は思わず笑っていた。勝手に錯乱して、無意味に怯えていた自分がバカみたいだった。

ハイエロフロントからは、自分の顔はどんな風に見えるのだろうか。きつと、ふてぶてしい位に不敵な笑みを浮かべているに違いない。事実、至もそんな気分だった。

体を起こすついでに銃を構えてトリガーを引く。乾いた破裂音がリズムカルに響き、打ち放たれた全弾が奴の巨漢に命中する。

「「うおおおおおおおおお!!」」

後続くように飛び出したのは男性陣だ。順平が大剣を、明彦が拳を、千影が刀を、思いつき振りかぶる。何の迷いも躊躇いもなく、その獲物はシャドウの身体に叩き込まれた。

刃の軌跡が煌めくように交差し、ハイエロフロントの腕を切り裂く。黒い影がぼたり

と落ち、それを潜り抜けるように駆け抜けた明彦が拳を叩きこむ。

「イオ、もう一回！」

「ペイルライダー、お願い！」

「行くぞ、ペンテシレア！」

男性陣が男性陣なら、女性陣だつて負けてはいない。召喚機の引き金が引かれ、立て続けにペルソナたちが姿を現す。風が唸り、冷気が逆る！ それらはハイエロフアントを飲み込み、切り裂き、砕け散った。

『効いてます！ このまま攻めれば、充分いけますよ!!』

「よっし、もつかいだナルカミ！」

風花の嬉しそうな声が響く。それに乗つかるような形で、至は再び手を掲げた。降り立ったナルカミが、4発目となるバイパスマッシュを叩きこむ！

悲鳴を上げてハイエロフアントが吹っ飛び、壁にその巨体をめり込ませながら激突した。ぐったりとした大型シャドウは、ずるずると崩れ落ちてダウンする。

「——ひな！」

「うん！ ——みんな、もう一回行くよ！」

「「「おう！」」」

陽向の号令が響き渡る。仲間たちが力強く頷き、それぞれの獲物を片手に躍りかかった！

放たれる弓が、叩き込まれる拳が、空気を切り裂く斬撃が、容赦ない刺突が——そして、間髪入れずに打ち放たれる銃弾が、ハイエロフロントに襲い掛かる！！

立つことすらままならぬほどに消耗していたハイエロフロントに成す術はない。ただ、至や陽向たちの攻撃を受け続ける以外には、何も残されていないのだ。

空気を震わすような振動が響いた刹那、ハイエロフロントの巨体が崩れていく。形を保てなくなったのだろう。身体を構成していた黒い影が、ぐずぐずに溶けて——消える。

シャドウの存在が、消え失せる。——今回の討伐は、うまくいったのだ。

それを肌で実感した仲間たちは戦闘態勢を解く。互いが互いに視線を向けて、笑った。

『——待つてください。……シャドウ反応、消えてない……!?!』

勝利のハイタッチを、と、伸ばしかけた手が止まる。風花の困惑した声が響き、仲間たちは慌てて戦闘態勢を取って周囲を見回す。しかしどこにも姿が見えない。

その違和感を察知したのか、風花が反応を調べ始めた。面々も警戒を解かず、周囲をしきりに見回している。その瞳に宿るのは一抹の不安。

至も集中してみる。風花程の索敵能力はないが、面々とは違う共鳴反応を探れば手がかりになるやもしれない。

ざらざらと嫌な音が響く。耳障りで不快、どこかねっとりとした空気が漂う。甘ったるい感覚に吐き気を催してしまいそうだ。——これは一体、何だろう。

どこかでこれに似たような気配を覚えたことがある気がする。脳裏に浮かんだのは麻希と英理子、2人の視線の先には首をかしげて佇む航。悪夢の修羅場一歩手前だ、これ。

嫌なものを思い起こさせられた、と、至は心の中で歯噛みしつつ身を震わせる。……理由は知らないが、気のせいか、ちよつと寒気がしてきたぞ。

しかも、どこからか寒気に近い波動のようなものが自分の肌を舐めまわすようにまと

わりついて来る。煩いったらありやしない。ついでに気味が悪くて嫌になってきたぞ。その発信源へと視線を向ければ、部屋の間にある大きな鏡が目に入った。人の全身を映し出せるほどの、巨大な鏡。中世ヨーロッパの城に出てきそうな、技巧的な鏡縁だ。豪華絢爛を地で行くような流派の。

それは酷く、至の目を引いた。おそらくは陽向や風花たちも、あの鏡から何かを察知したに違いない。視線を鏡へと向ける。

大きな鏡。何の変哲もない鏡。豪華な鏡縁にはめこまれていること以外、普通の鏡。それはそのまま、部屋の全体を映し出している。

しかし何かがおかしかった。何か足りない。部屋全体は映し出されているのだが、何かがおかしいのだ。感じるのは違和感——そして、不快な波動。

仲間たちの視線は釘付けであった。その違和感を探すために、戦闘態勢を解いていた。探索することに重きを置いていた。戦いに関する警戒の一切を解いていた。

——それが間違いだっただの。

誰かが嗤う声があった。魔力が爆ぜる感覚が肌を突く。

ぞわり、と。自分にまわりついていた何か、明確な悪意を持って自分たちを引き込まんとうねった。

(——しまった！)

至が畏に気づいた刹那、鏡が凄まじい光を放った！

思わず顔を手で覆う。仲間たちの短い悲鳴が聞こえたと思った瞬間、何もかもが白く塗りつぶされた。

1—7. 七タデスマッチ第2回戦の惨事を静観するだけの簡単なお仕事

????? ????

? / ?

?

真っ暗だった。

ただただ、真っ暗だった。

『……………せよ……………』

どこからか、声が聞こえる。

ひどく粘りつくような、甘ったるい猫なで声。まるで異性に媚びるかのような、あるいは色気を振りまくような、ねっとりとしたものだ。

頭が痛い。意識を浮上させようとするれば、何者かに絡め取られて引きずり込まれそう

になる。浮かびたいのに浮かべない。まどろみの中に捕らわれる。

『……………汝、享樂せよ……………』

先程よりも鮮明に聞こえてきた。男か女かの判別はできないが、ざらざらと纏わりつくような不快感を催す響きである。

発言者の声に交じってハアハア荒い息が聞こえてくるのは気のせいか。その音の中に、ペンを走らせるような軽快な響きが混じっているように聞こえるのも。

そういえばこれとよく似た音を聞いたことがあったなあ。ぼんやりとした意識の中に浮かんだのは、血眼になってペンを走らせる綾瀬 優香の姿だった。

7月7日はオンリーイベントの日——彼女は張り切っていた。とつても張り切っていた。

なんでこの日が優香が赴く聖戦と重なっているのだろう。どいつもこいつも戦っているのだろうか。

(……………戦い?)

そこまで考えて、至はふと考える。

何故、自分はここにいるのだろうか。何のために、自分はここにいるのだろうか。何か、大切な目的があつたはずだ。とても大切な目的が。

戦い。……そうだ、戦いだつた。自分たちは戦いに来たのだ。ここに——白河通りの、このホテルに。怪しい臭い満天の危険なホテルに。

では何故、何のために。この場所での戦いとは何か。考えかけた刹那、再び何者かの声が響く。『汝、享樂せよ。衝動に身を任せよ』——思考回路が焼切られたようにどろどろになる。考える気力を奪い取られていくような感覚。

意識をはぎ取られてしまいそうになつたが、至はどうか踏みとどまつた。このまま溺れてはいけない。溺れるわけにはいかないのだ。自分たちは、そんな風になっている暇などないのだから。

月、満月、大型シャドウ討伐。沈みかけた何かがゆらゆらと頭の中で瞬く。浮かんでは消えて、浮かんでは消えてを繰り返しながらも、至はそれを留めようと足掻く。7月7日、七タデスマッチ、白河通りの危険なホテル。

……ああそうだ。自分たちがここに来たのは、大型シャドウの討伐が目的だつた。決して、衝動に身を任せて快楽に溺れるためではない。

思い出した。それはとても大切なことだ。だから、今ここでまどろんでいる場合では

ない——!!

(——?)

意識を浮上させようと足掻けば、不意に真つ暗闇に光が浮かんだ。

部屋の一室。天窓がついた豪華なベッドに、男性と青年が背中合わせに座っている。

不気味に輝く黄金の瞳には、普段のような覇気がない。むしろなんだか死にかけている気がした。濁っている。

2人はぶつぶつと何かを言っていた。内容は一切聞き取れないけれど、漂う空気が「やっちまった」感を演出していた。

何を? そんな疑問を持ってよく見れば、2人はタオルケットに体を包んでいた。それから覗くのは、どことなく汗ばんだ素肌である。

……………なんだろう。もの凄く嫌な予感がする。むしろそれしかないんだが、どうすればいいだろうか。

「もうやだ最悪だ。こんなのもつて、こんなのもつて……」

「Love^恋rs^愛タイプなんて大嫌いだ……!」

うめくような2人の声が響く。とても投げやりだ。

それに混じる『同一人物同士ぶまいれすハアハア』の声。おそらくこいつが、あの2人に何かをやらかしたのだろう。

「妄想を現実を持つてくるな」——茶髪の少年が嘆く。その声からは絶望の色が見て取れた。ちなみに、「奴」は普遍的無意識の破壊と絶望担当である。

至は吹き出した。正直、指さして「ざまあ」と2人を嘲笑つてやりたかった。が、そうやってはいられないことに気が付いた。

おそらく、時折聞こえる不快な声の主は自分たちにも同じようなことをさせたいに違いない。ぞわり、と、悪寒が背中を駆け抜けた。脳内警報が最大値を叩き出す。

さらさらとペンを走らせる音、荒い息、もつともつとと不気味に響く声。『今年の「夏の陣」はイケるかも。よし、次に行こうか！ ウエヒヒ……』——あ、これは最高にマズイ。超絶にマズイぞ。

キャラ崩壊も甚だしいが、奴の趣味趣向のためにこの身を使われてたまるか。S・E・E・Sの面々を生贄にされてたまるか。

引きずり込まんと纏わりつく不快感すべてを振り払い、半ば強引に意識を覚醒させる。頭が酩酊状態のようにがんがんしたが、どうでもいい。

そこはホテルの一室だった。目に痛いピンク系のハートが描かれた壁紙と天井。どうやら自分は、大きな楕円形のベッドに横たわっているようだ。

部屋のどこからか、水の流れる音が聞こえる。ざあざあ、ざあざあ——なんて間の抜けた響きだろうか。いや、どうでもいい。嫌な予感がしてたまらないのだ。早くしなくては。

頭の片隅が酷く痛む。それらの一切を無視し、至は思い切り腕を振り上げる。青い光が炸裂し、降り立ったのは紅蓮の聖鳥。

何をどうすればいいのかわからないが、それらを一気に消し飛ばす方法を自分は知っている。消費魔力はこの際考慮しないでいい。とにかく、早急に。

「スザク、メシアライザー!!」

スザクが嘶く。それと同時に、鮮やかな黄金色の光が炸裂した。

【1—7. 七タデスマッチ第2回戦の惨事を静観するだけの簡単なお仕事】

2009. 7/7 影時間

ホテル内部

『至さん、大丈夫ですか?』

「……あと少し遅れたらマズイ事態になってたかもしれん」

『?』

「あ、大丈夫。おっけーだ」

風花の呼びかけに、至は慌てて返事をした。入れ替わりに、「な、ななな、なんだコレはッ!」と、部屋のどこかから美鶴の叫び声が響いた。出どころは、先程まで水の音が響いていた場所。

それを察知した——厳密に言えば、『美鶴の悲鳴に気づいた』——風花が、きよとんとした声色で美鶴に問いかける。彼女は慌てた様子で取り繕っていた。

どうやら、自分たちはシャドウから精神攻撃を受けていたらしい。今回も2体同時に

湧いて出てくるパターンだったようで、ハイエロファントの敗北に合わせてそのシャドウは罫を発動させたのだという。

満月が近づく度に「2人組の行方不明者」が発生していたのは、先程倒したハイエロファントというよりも、この罫を発動させた別なシャドウが主な犯人だったのだろう。……だからといって、ハイエロファントが「一切」絡んでいなかったというわけでもなさそうだが。

むしろハイエロファントもグルだったに違いない。意識が戻る寸前に聞こえた「夏の陣」等の会話や、戦闘開始直前にハイエロファントが散らかしていた危険な薄い本がそれをはつきりと示している。そういえば、アルカナの順序でH*ier*^法o*ph*^王antの次はL*ove*^恋r*s*^愛だった。

しかし、こんな精神攻撃をしてくるとは。こんな奴のアルカナタイプがL*ove*^恋r*s*^愛だなんて、世の中酷すぎやしないだろうか？

バカにしている。明らかに人をバカにしている。人の心を盛大に弄びやがって、と、至は心の中で歯噛みした。多感な少年少女の心に変な傷やら何やらを植え付けるつもりか。

恋愛関係で悪夢のような地獄を体験するのは自分だけでいい。いや、どっちかというとなれば「とぼっち」と称した方がいいのか。脳裏に浮かぶトライアングルを否定す

るようにぶんぶんとかぶりを振る。

「……つと、そうだ！ 大丈夫か美鶴ちゃん？」

「!? あ、ああ……はい。今行くので、もう少し待っていただけませんか？」

気分を変えるために、向こうにいる美鶴に声をかける。どこか切羽詰ったような返事が返ってきた。もう少し時間がかかるらしい。

至も返答し、何故か散らばっている自分の服を回収して着替える。いつの間にか下着姿にされているとか、何という状態だ。笑えない。

「風ちゃん、ひなたたちは無事か？」

『はい。つい先程、至さんたちよりも先に連絡が取れました。大丈夫だったみたいです。ただ……』

風花は言いよどむ。至が促せば、彼女は首をかしげていそうな声色で言った。

『シャドウの精神攻撃を受けた際、色々何かあったみたいで……みんな様子が変わなんで

す』

「具体的には？」

『あの、その……なんかみんな、ブツブツ唱えてるって言うか……鬼気迫る様子というか……』

『「あんなもののために、よくも人を変態に貶めてくれたな！　今に見ている!!」とか、「自分自身の欲望を満たすために、人の心を弄ぶとかサイテー！　見てなさいよ!!」とか……』——ああそういうことか。お、把握した。

何をやられたかはわからないが、何をしようとしていたかは察しが付く。そこから辿れば、あのシャドウ——ラヴァーズが何をしたかったのか、大体想像がつくのだ。はた迷惑な存在である。

うーん、と考え込みそうな様子の風花。至はそんな彼女の注意をそらすように「とりあえずみんな無事なんだから？　こつちもすぐ合流するからって伝えてくれ」と言伝を押し付けた。そうとは知らず、風花は頷いて通信を切る。面々に報告しに行つたのだから。

もう一度美鶴に声をかければ、彼女は少し慌てた様子で現れた。いつも通りの白いワイシャツに真っ赤な女子用のリボンを身に着けて。

どことなく慌ただしさは残るものの、令嬢としての威厳や貫禄が崩れないのは流石桐条次期当主といったところか。少々顔が赤かったりするけれど、まあ気のせいだろう。

扉を開けた廊下の十字路。そこに、陽向たちがいた。

……彼らの様子は、先程風花の報告で聞いていた。聞いてはいたが、やはり実際に見てみるのとでは違う。

ぴりぴりとした空気が肌を突く。全員が、俯きながら何やらぶつぶつ呪詛を唱えている。背後に揺らめくペルソナたちは、誰もかれも目がぎらりと輝いている。

至はふと思いつく。そういえば、杜王町でも似たような空気を味わったことがあったつけ。あとはイタリヤに旅行した時とかも。

至が声をかければ、面々はまっすぐにこちらを見返して速攻で頷く。やる気は天元突破、むしろ「や」の字が「殺」の字に変わっている気がする。

この面々なら大丈夫だろうとは思いますが、どうしてか心配で仕方ない。変に暴走しすぎなければよいのだが。

『どうやら、シャドウは先程の部屋に結界を張ったみたいですよ』

「……往生際が悪い奴だ」

風花の分析結果を聞いた明彦が、舌打ちしそうな勢いで呟く。彼は自分の手のひらに、大きく拳を打ち付けた。ぱん、という音が重々しく響き渡った。

順平は判別不能の言葉を呟きながら、大剣をフルスイング。風を切る音がびゅうんと響く。そこにボールを投げれば、その芯に当てた上に、いい音を出して飛んでいくだろう。ホームランは間違いなしだ。

佇む千影の手は、刀の柄にかかっている。うかつに間合いへ踏み込めば、何の容赦も慈悲もなく叩き斬られるに違いない。口元に浮かぶ歪んだ微笑はそのまま怒りのボールテージに直結している。確実に殺ると気満々なことは間違いがない。

女性陣も怖かった。陽向はしきりにつま先で床と叩いては薙刀を振るっているし、ゆかりの口元はどこか鬼気迫った綺麗な三日月の弦を描き、美鶴は真顔でレイピアの柄を強く握りしめている。誰もかれも目が怖い。

仕掛けなんてどうでもいいからぶつちぎって、そのままシャドウの根城へ踏み込んでしまいたいような勢いがこの面々にはあった。状態異常というなら、完全に興奮状態である。あるいはヤケクソ。

どす黒い炎が燃えている。そんな光景が見えて、「ああ、これはまずい」と悟った至は無言のまま再びスザクを召喚する。メシアライザーは役不足だ。誰も傷ついていないのだから、アムリタで充分だろう。術を発動すれば、鮮やかな光が面々を包み込む。

光が晴れ——しかし、彼らの状態異常は一向に回復していない。

あれおかしいな。アムリタの効果は、全状態異常回復ではなかったのか。

……まさか、「そもそも状態異常ではない」ということなのか？

「さっさと結界解除して、殴り込みに行きましょう。……全てを破壊する勢いで」

千影が不気味に微笑んだ。彼の背後に浮かぶフェンリルが唸っている。

多分、犯人と鉢合わせしたら容赦なくデットリーバーンを叩きこむだろう。ホテルが火事になりそうで怖い。

「風花、結界の起点になっているものは何？ 早速破壊しに行くから、そこまでのナビを

頼めるかな？」

『う、うん。探してみるね！』

陽向は笑顔だったが、おそらく内面は荒れ狂っているのだろう。薙刀の石突をしきりに床へと叩きつけている。こつ、こつ、こつ、こつ。

床を叩く速度がどんどん早くなってきた。こつこつこつこつこつこつ——それは、そのま

ま陽向の怒りに直結しているのだろう。

風花がアナライズを始めてから手持ち無沙汰なのか、石突で床をつつくのをやめて薙刀の素振りを再開する。風を切る音が響き渡った。

他の面々も同じように素振りに精を出している。彼らが背負うオーラに充てられたためか、徘徊するシャドウたちが悲鳴を上げて逃げ惑っていた。逃げ惑いすぎてシャドウ同士がぶつかっている光景が視界の隅にちらつく。

中には同士討ちを始めるものや、術技が使用不能になつているものまでいた。混乱ついでに錯乱しすぎだろう。至る所からあぎやああとという悲鳴が聞こえる。しかし、S・E・E・Sの面々には一切聞こえていないようだ。

ややあつて、風花から通信が入る。

どうやら、結界の起点となつているのは、部屋に設置されていた鏡らしい。2か所あることまでは突き止めたが、「どの部屋のどの鏡か」までは特定できなかつた、と、彼女は落胆した声で告げた。

でも、鏡を見た時の違和感は全員が感じたものだ。それを探れば、おのずと起点である鏡を見分けることが出来るだろう——陽向はそう告げて、風花に礼を述べる。そして、面々へと向き直つた。

「皆の者、出陣！ 戦じゃあああああああああああああああ!!」
「「「「「応ッ!!」」」」」

ぱらりらぱらりらく、と、暴走族がよく鳴らしそうなクラクションの音色が聞こえてきそうな気がする。

……いや、聞こえた。幻聴にしては、やけにリアルな響きを持つて。

誰が鳴らしているわけでもないのに。どんな怪奇現象だろう。

おかしい。S・E・E・Sの面々が身にまとっている服が学ランに見えてきた。お前らは（方向的に）どこへ行く気だ。相当、至も空気に毒されてしまっているらしい。

鏡と言う鏡を手当たり次第破壊していきそうな勢いである。影時間内に器物破損が起きた場合、現実時間ではどのような扱いをなされるのだろうか。そこが不安だ。

面々はもう、それを考慮する気配はなさそうであった。余程、ラヴァーズの精神攻撃が腹立たしかったのだろう。気持ちはわかる。わかるが、まずは落ち着け。

そう言いかけ、しかし至の声など彼らの耳には届いちやいない。

蹴破るような勢いでドアを開け、室内へ侵入。

鏡を確認し、「ここは違う」と言い残してさっさと部屋を出る。

扉を開けて鏡を確認。異常なしと判断したら、即座に立ち去る。

——それを何度繰り返しただろうか。

ある部屋に入って鏡を確認したその瞬間、仲間たちが恐ろしい勢いでその大鏡を叩き割った。ばりん、という破砕音が勢い良く鳴り響く。そこに迷いも躊躇いもない。

大鏡に走る亀裂。室内の様子が歪む。しかし鏡には、人間の姿が映し出されていない。先程感じた違和感はこのことだろう。封印の起点になる鏡には、人が映らないという見分け方があるらしい。

(おおかた、面々は共鳴現象で見分けてるんだらうけど)

「よし、まずはひとつ！ 残りひとつ！」

陽向が音頭を取り、面々も武器を振り上げる。どこの軍隊だ。ここは何時代だ。

確かに、こんな場所に長居したくないと思ったのは至だった。さつさと巨大シャドウを倒そうと思っていたのも至だった。

それは今でも変わっていない。変わっていないのだが、先程とは違って自分が引きずられている気がする。

部屋を出た後は、先程と同じルーチンワーク。

蹴破るような勢いでドアを開け、室内へ侵入。鏡を確認し、「ここは違う」と言い残し

てさっさと部屋を出る。

扉を開けて鏡を確認。異常なしと判断したら、即座に立ち去る。——それを何度繰り返しただろうか。

ある部屋に入って鏡を確認したその瞬間、仲間たちが恐ろしい勢いでその大鏡を叩き割った。ばりん、という破砕音が勢い良く鳴り響く。そこに迷いも躊躇いもない。

大鏡に走る亀裂。室内の様子が歪む。ばちん、と、どこか遠くで何かが壊れたような音が響いた気がした。

『あ、結界が解かれました！ これで、あの部屋に入れます！』

嬉しそうな風花の声が通信越しに聞こえる。それを聞いた面々の表情が、変わった。

「にやり」——擬音を付けるとしたら、おそらくこんな感じだろう。

そのまま、陽向たちはどこかかと廊下と階段を駆け抜けていく。足取りが早く、軽やかだ。だが、一步一步踏みしめるようして足を進めていく。

途中で出会うシャドウたちが慌ただしく道を開ける。さながら自分たちは大名行列といったところか。中には逃げ遅れて蹴飛ばされたものもいた。

面々の背中を見失わぬよう、至も足を速めた。殿役としての役割も、もちろん忘れて

いない。面々の背を守るのが、至が至自身に課した役割である。

そして、戻ってきた件の「デラックス・スイートルーム」。

「この先、大型シャドウ潜伏中」の注意を促す風花の通信に、陽向たちは「大丈夫！」と即答する。

傍から見れば満面の笑み。しかし、面々が背負うどす黒い「何か」は、先程よりも明確に——そして濃くなっている気がする。

ドドドドドドド、と、変な擬音が背後から追いかけてきているような気がしないでもない。杜王町で見かけたアレだ、と至は直感する。怖い。

ぶうん、と風切音。薙刀が、刀が、大剣が、弓が、突剣が、拳が唸る。完全に、「討ち入り前の部隊」状態だ。

これから戦いに行くのは間違っていない。間違っていないが、何かが違う気がする。

「よーし。皆の衆、討ち入りじゃあああああああああ!!」

「「「「「おー!!」」」」」

陽向の掛け声に合わせて、仲間たちは躊躇うことなく扉を蹴破った。ラヴァーズがこちらを見返す間もなく、間髪入れずに引き金が引かれる。

ガラスが砕ける音が響いた後、青い光が炸裂する。降り立ったのは、あの子たちの心に宿る見慣れたペルソナたち。

（——え？）

見慣れたペルソナたち、だったと思う。しかし、「何か」がいつもと違っていた。ゆらゆらと揺らめく黒い影は、（千影を除いて）明らかに見慣れたペルソナたちではない。陽向が呼び出したオルフェウスを始め、面々のペルソナは姿が変わりかけているようだった。

そういえば、ファイレモンやイゴールは『ペルソナの覚醒』がどうこうとか言っていた気がする。人の心の成長に合わせてペルソナは心の海へと還り、新たなペルソナとして生まれ出るのだという。

おそらく、面々のペルソナはそれに近い状況にあるのだろう。半覚醒状態、と言った所だろうか？ 暴走状態ともとれなくはないが、面々は何の苦も無くペルソナを使いこなしている様子だった。だからあれは「暴走状態」ではない。

至がそう分析した刹那、

もないことをしようとしていたのだ。丁度、普遍的無意識どもにやらかしたことに。

普遍的無意識どもを酷い目に合わせてくれた点には感謝するが、あの子どもたちで自分の欲望を満たそうとしたことは許せない。許すわけにはいかない。

(……しかし、凄まじいな)

きつと、あの子たちはペルソナ使いとして実力を開花させるだろう。

至はそんなことを考えながら、慣れぬ力を大盤振る舞いしたために疲弊している面々を見る。荒々しい呼吸が部屋中に響いていた。

でも、面々はやり遂げたような表情を浮かべている。ふらつきながらもハイタッチを決めている程だ。

「至さんも！ ほら！」

「!? ——おう！」

駆け寄ってきた順平に促され、至もそれに答えるように手を叩いた。ぱちん、と、乾

いた——でも、確かな重みをもってその音は響く。

脳裏を駆けるのは聖エルミン学生時代・あるいは珠？瑠を駆け回っていた頃、強敵を打倒した後のこと。あの時もこうして、仲間たちと笑ってハイタツチを決めていた（一部例外あり：例、最初の頃の克哉やパオフウ等）。

懐かしいなど至は思う。我も我もとハイタツチを決める面々に付き合いながら、思わず目を細めた。戦いを通して育まれる絆——まだ細く頼りないけれど、でも、決して切れることはないのだ。

『作戦終了です、お疲れ様でしたー！』『……お疲れ様でしたー！』『……』——至を含んだ、放課後特別活動部たちの合唱だ。

わいわいと弾んだ会話を繰り返しながら、仲間たちは意気揚々とホテルを後にする。

ふと感じた違和感に振り返りかけ——至は即座に視線を逸らした。そして、陽向たちの後を追いかける。

丁度件の普遍的無意識の権化どもが、男泣きしながらふらふらと夜の闇へと消えて行ったなんて、自分たちにとってはどうでもいいことだったからである。

完全に蛇足であるが。

翌日の学校で「S・E・E・Sの面々が白河通りに消えていく現場を見た」等の変な噂が飛び交い。

“そういう”方々がノリノリで描いていた“そういう”絵に普遍的無意識の権化ども（蝶の仮面をつけた青年と七姉妹高校の制服を着た少年）が描かれていたり。

後に優香が購入したという戦利品の中に、何故か奴らが「くんずほぐれつにやんにやんしている」本を発見することになるのだが——…まあ、それは別の話だ。

2. 本格化していく戦いに挑むだけの簡単なお仕事
2-1. 壁にぶち当たる寸前まで、騒がしくもセンチメンタルに過ごすだけの簡単なお仕事

2009. 7 / 8 昼間

巖戸台分寮 / ラウンジ

『昨日、白河通りのホテルで爆発騒ぎが発生しました。しかし、不可解なことに、誰一人として爆発した瞬間の目撃者がいないという……』

(いやあああああああピンポイント!!)

至は即座にテレビを消した。心当たりがありすぎて、どう取り繕えばいいのかわからないレベルである。

影時間で器物破損をするとこんな感じになるらしい。この補正を喜ばばいいのか、悲しめばいいのか。

これなら、復讐サイトの事件が「目撃者不在」のため、有耶無耶にされてしまうのも頷ける。大半の警察関係者は、至たちが関わっているだなんて微塵も思っていないだろう。

一部そうでない者——周防兄弟と舞耶・マンサーチャーコンビ・圭が、「事件を知った。お前が関わってるんだらう？」と、今朝電話をかけてきた——もいるが。察知できるのは適性者だけであらう。

……そういえば、帰りにペルソナの共鳴反応を覚えた気がする。その反応はすぐに消え失せてしまったが、気のせいではなかったようだ。今朝かかってきた達哉の電話で、達哉もペルソナの共鳴反応を察知したと言う。

『説教するって言って突っ込んでいきかけた舞耶姉を止めるのが大変だった……』

彼女が放った共鳴反応に恐れをなしたためか、ペルソナ使いの反応はすぐに消えてしまったらしい。

……それもそうか。舞耶はJOKER事件で至と一緒に駆け回った、歴戦の勇者である。悪魔やジョーカーを相手にして戦ってきたペルソナ使い。ファイルモンが認めた存在の1人だ。

まあ、彼女や達哉たちに対して執着している様子はないが。ファイルモン曰く、至は「特別な例外」らしい。理由は一切わからないのだ。解せぬ。

奴とは「コインの表裏」の関係である。『這い寄る混沌』も、おそらくは似たような理由で至にご執心なのであろう。正直、とても迷惑だから勘弁してほしい。

決して奴らは変わらないとは知っている。至が生まれる前も、その後も、おそらくは死んだ後だって、きっと奴らはあの調子で至に執着し続けるのだ。

特に、死んだ神取の魂を噂の力で復活させ、傀儡にしていた『奴』なら——きっと、至の魂で「遊ぶ」ことなど「赤子の手をひねる」程度のことだろう。そして、『奴』と表裏一体の存在であるファイルモンにだって、似たようなことはできるはずだ。

だからといって、奴らのために動くつもりも、大人しく玩具になってやるつもりもないが。

脳内で不敵に笑う普遍的無意識どもに舌を突きだしながら、至はぎつと目を通していた新聞をたたんだ。

「さーて、今日はどうしようかな」

『寮母』という役職の仮面を外し、どの仮面を被るかを思案する。

次に被るべきは「対怪異調査員・空本 至」の仮面か、あるいは「巖戸台の市民・空本 至」の仮面か。ふむ、と、少しだけ考え込む。

そんな自分の気分を察知しているかのように、真夏の空は澄み渡っていた。もうすぐ、陽向たち学生陣には「夏休み」という大イベントが近づきつつある。

『あー……テスト嫌だー……』

『シャドウ討伐後にすぐテストだもん。どうにかなんないかなー……』

『そうだね。今のうちに、きちんと勉強しておかないと』

『特に、順平は気を付けなよ？ 中間テストの順位張り出されたの見たけど、あそこまでなると確実に補修圏内だって』

『やめろおおうな陽向ツチイイイ!! 思い出すだけで頭痛いつてのー!』

……訂正。もうすぐ、陽向たちには「期末テスト」という大イベントが近づきつつある。

一応各々が勉学に励んでいるが、中には振るわない者もいるようだ。勿論、その筆頭が順平である。

陽向日く、順平は「中間テストで見事な程の成績不振を叩き出した」という。きつと

教師陣の目はぎらぎらと光っているだろう。

一応、シャドウ討伐後は勉強に励むと言う方向で一致した。そうでなければ、面々は後に地獄を見る羽目になるであろうから。主に学業面で。

エルミン在学時代はよくファミレスや放課後の教室で勉強会をやった。セバク・スキャンダルを駆け抜けた仲間たちと、互いの得意・苦手科目を教え合ったりしていたわけ。

教える方も教えられる方も、なんやかんやで真剣だった。「人に教えるというのは、教える側がしっかりと理解してないとできないんだね」——当時、教師志望だったゆきのが噛みしめるようにして呟いていたことを思い出す。

あの事件以後、自分たちは前にも増して積極的になるようになったと思う。勉強会を開いたり、カラオケやゲーム大会をやってみたり。

高校を卒業して大学生になっても、あの面々以外（達哉一行は例外だ）の友人知人に対しては、どうしても深く付き合えなかった。

やはり「一緒にあって世界を救った」という大きな絆があったから、なのだと思う。至はふむ、と考え込んだ。

「……2年生組に、『勉強会やらないか』って誘ってみようかな」

一応、至はアルバイトで塾の講師をやっていたことがある。少しばかりは力になれるかもしれない。

そうと決まれば、早速本屋に出向いて参考書を読み漁るとしよう。今日の目的地は本屋に決まりだ。

〔2-1. 壁にぶち当たる寸前まで、騒がしくもセンチメンタルに過ごすだけの簡単なお仕事〕

同日 夜

巖戸台分寮／2階

さらさら、さらさら。シャープペンが紙の上を滑るなめらかな音が響く。綴られてい

くのは言葉、あるいは計算式。

うんうん唸る声と回答解説の声が交互に空間を揺らす。互いの苦手教科を互いが教え合う様子は、いつかの日々を思い起こさせた。

「順平、そこ計算間違ってるよ」

「えっ!? そうなの!？」

「4段目の部分。3段目までは正解だからね。えーと、この場合はこれをこうして……」

陽向は順平に数学を教えている。中間テストで成績下位に堂々殿堂入りした彼は、いろんな意味で未来が危ない状況下にあった。

去年も大体どんじりの成績だったようで、「これ以上成績が下がったら親を呼ぶ」とも言われたそうだ。ものすごく気まずそうにしていたか。

そんなことを考えながら、至は2人の様子を覗き込む。陽向はペンを止めることなく解説を書き出し、それを参考にしながら順平が続く。

「……これでもいいのか?」——解き終えて、おずおずと言った調子で順平は陽向に尋ねる。陽向は解説書と睨めっこした後、満面の笑みを浮かべて赤ペンで丸を付けた。

それを見た順平はおお! と声を上げて手を叩く。正解した喜びに浸る彼だが、陽向

時計の針がカチカチと音を立てていた。勉強会を始めてから、時計の針は2周半を回る。もうすぐ夜も更けてくるころだ。

そろそろ寝る時間かなと思つた時、順平が大きく背伸びしてシャープペンを置いた。やり遂げたような、疲れ切つた表情。

「やっと終わったー」と、間の抜けた彼の声が響く。陽向が早速採点に入る。

さらさら、さらさら。赤いボールペンは、丸やペケを描いていく。順平の表情は硬い。

「……10問中、7問正解！ やつたよ順平！」

「おおう、いい所までいったじゃん！」

「平均正答率を上回りましたね！」

「すごいすごい！ 順平くん、大躍進だよ！」

「やった！ さっすが俺エ!!」

まれに見る高成績らしい。2年生組から凄まじい勢いで褒めちぎられ、順平はガッツポーズをとつた。

基本問題10問でそこまで褒めちぎられるとは、逆に前回のテスト結果が気になってしまう。

おそらくそれは順平にとっての「地雷」だろう。なんだか居た堪れないので、黙っていることにした。

もう少し先をやってみようか、とノリ出した順平に、至はひよいと時計を指さす。時刻は21時。そろそろ寝た方がいい時間だ。

「知ってるか？　ちゃんと睡眠取らないと記憶力下がるんだぞ」

人間は、眠ることによって知識を整理・記憶していく。睡眠時間を削るということは、知識の積み重ねを阻害することになるのだ。

それだけではない。睡眠時間が減るということは、そのまま明日の体調に影響すると言の意味を持つ。体調回復、コンディションを整えるためにも、睡眠は重要だ。

入試直前で体調を崩して泣きを見た——そんな会話、エルミン時代にちよくちよく聞いたことがある。

勿論、至やその仲間たちはハマしなかった。……一歩間違ったら危ない出来事なら、至は何度も経験したが。言わずもがな、主な原因は麻希と英理子である。

思い出すのは大学入試1週間前。結果的に「真冬の川に突き落とされかけた」(本人たちに「その気がなかった」のが怖い)ことが脳裏にまざまざと浮かんだ。

あの恐怖はいつまでたつても色あせない。そして、男性陣十タダシ&たまきらに助けられた際の感動もだ。

「……至さん、大変だったんスね」

「えっ?」

どうやら言葉にしてしまっていたらしい。順平が、「労わりたいのに労われない」とでも言いたげな、微妙な表情で手を右往左往させていた。

他の面々も同様である。「あ……」と、何とも言えなさそうな声を漏らしていた。そこまで露骨に困惑されても困るのだが。

嫌な空気がこの場を満たして数分後。「そろそろおいとましようか」と漏らした至の言葉に従い、面々は勉強道具を片づけ始める。

期末試験まであと6日。ここでどれ程知識を蓄えられるか、あるいは持ちうる知識の質を上げられるか。

所詮は付け焼刃と笑うだろう。けれど、足掻いた人間には、足掻いたなりの見返りが来る。少しでも良い結果が残るなら、足掻いた方がいいに決まっている、と至は思うのだ。

……まあ、足掻き方にも「効果的な足掻き方」と「無意味に等しい足掻き方」という

のもあるけれど。必ずいい結果が出るとも限らないわけだ。

それでもできる限りのことはしたい。やっておきたい。最後の最後に後悔しか待ち受けていないと言うのなら、特に。

思い浮かんだのは少年の背中。普遍的無意識どもの実験に使われ、たった一人で世界の滅びに立ち向かおうと奔走していた「向こう」の少年。

自分は何もできなかった。ただ茫然と、「彼」が消え去るのを見つめることしかできなかった。それしか道がないのだと、どこかで諦めたが故に、何もしなかった。

それを今、とても後悔してる。出来ることは沢山あったのではないかと。

もつと「彼」の話聞いてやればよかった。もつと「彼」に話かけてやればよかった。もつと、もつと——。

(……今更遅いってことは、わかってるんだけどなあ)

考え始めたらキリがない。

至は思考を打ち切ると、就寝の準備に入る仲間たちの背中を見送る。

そして、自分の部屋に戻るために足を進めた。

\$\$\$

2009. 7 / 11 昼間⇒夕方

至の自室⇒巖戸台分寮付近

こちらのPCを起動させるのは久しぶりだ、と至は思う。

どこでどんな事態が待ち受けているかわからない——その観点から、至は複数のPCを所持している。重要な情報は全てこちらのPCにまとめ、弟の航や上司兼友人の圭にメールで送っていた。

一応、寮に持ち込んでいるノートPCにも2人からメールが来るが、重要度が高いものはこちらに送信しているのだ。それを知らせるメールが届いたので、至は久々に圭から斡旋された自宅へと舞い戻って来ていた。

『重大な情報が入ったんだ。影時間をなくす方法についての話だから、今晚必ず寮に来

てほしい』

(言われなくとも、最初から今晩は寮で過ごすつもりだったの。勉強会だってあるんだから)

今朝、幾月から届いた連絡を思い出し出してため息をつく。この家に行く、とは言ったが、だからといって今日丸一日不在にするつもりはない。

情報整理を終えて、向こうへの連絡を終えたら帰宅するつもりでいる。報告すべき内容は多々あったが、この時のためにちまちまと情報整理をしていたのだ。

人工島計画書文に記されていた内容、この前のシャドウの行動パターン、先の幾月が言っていた内容を今後まとめる旨。それらをまとめ上げていく。

圭や航から届いたメールに記載された資料を見比べつつ、情報を整理整頓。情報の種類によってメールと件名を変えながら、至はばたばたとせわしくキーを叩いた。

2人から送られてきたそれらには、色々と気になる情報が載っている。どれもこれも、今後の自分たちに関わって来そうな内容ばかりだ。

例えば、コロマルのペルソナ反応について。あれはどうやら気のせいではなかったようだ。ちなみに、アルカナタイプは剛毅だったという。

写真からではペルソナの姿や名称は判別できなかったが、どうやら彼(この敬称略で

いいのかわからない（は相当のペルソナ使いらしい。能力に目覚めて3ヶ月弱だ、とは航の話である）。

そういえば彼の飼い主が亡くなったのは、6月の時点で2ヶ月ほど前——つまり、現在から計算すれば3ヶ月ほど前のことだ。時期的にも一致している。

『おそらく、飼い主の死がペルソナ能力開花への引き金だったと思われる』——航と圭の見解はそうだ。

「…………飼い主さんが亡くなった時、何かあったのかな？」

おそらく、影時間やシャドウに関わるような出来事だ。

事故当時、コロマルはどこで何をしていたのだろう。飼い主が亡くなった現場にいたのだろうか？

「それに…………」

まとめるべき点は他にもある。

人工島計画書文に記載されていたシャドウ絡みの情報だが、元々シャドウは現実世界

に形をとどめて存在することができなかつたようだ。

それが、とある方法によつて実体を保ち続けることが可能になつたという。その方法に関する資料は、残念ながら入手した分には記されていなかつたが。

ただ——実体化させるためのプロセス構築として、JOKER事件で出てきた「穢れ」の収集法が例として記されていた。

まさか、とは思ふが、シャドウのルーツはあの「穢れ」——JOKERと関連しているのではないだろうか。

人の悪感情から生み出された存在・JOKERは、人間たちの悪感情・あるいは負の感情を糧にして成長していく。その結果が、あのJOKER使いの強さだ。

誰かに憑依する度に成長し、姿を変えていく。そういえば、遠目から見かけるシャドウの様子は「穢れ」と同じだった。

黒いゲル状の身体に、不気味に光る赤い瞳。人が近くを通りかかると、ゲル状の塊は姿を変えて襲い掛かってくる。

大きさは、どうやら出現シャドウの数に左右されているらしい。あとはそのシャドウの強さか。どちらかというところ「質より量」らしいが。

『厳戸台では、この10年間で未解決事件や事故が増えたと聞く。……おそらく、影時間

やペルソナが絡んだものだ』

『書類上解決扱いされている事件や事故でも、一部の人間が奇妙な証言をしていたらしい。多分、彼らは影時間への適性があったからだと思う。……誰からも取り合ってもらえなくて泣き寝入りした』というケースが圧倒的みたいだけど』

そういえば、周防兄弟はそんなことを言っていた。奇妙な証言といえば、至には思い当たる節がある。

『突然空が緑色になったと思ったら、車が止まっちゃったの。そしたら、黒くて大きな死神と金髪の女の人が……』

『パパとママが、パパとママが……うわああああああん!!』

泣きながら、陽向はそう言っていたのだ。——至が彼女を引き取った頃、彼女はしょっちゅう事故直後の夢を見ていた。

陽向の証言はいつもそこで途切れてしまう。思い出したくないのだろう。誰だって、人が死ぬ現場など思い出したくないに決まっている。

「……巖戸台の事件なら、たっちゃんかっちゃんよりも黒沢さんが知ってそうだよな」

でも、おそらく一般人には何も教えてくれないだろう。あの仕事は守秘義務によって成り立っている。下手すれば、バレたら懲戒免職モノだ。

ぶつちやけ何度も、至は達哉や克哉に危険な橋を渡らせたことがあった。その分、至も2人のために危険な橋を渡ったことがある。もちろん何度もだ。

互いが互いを信頼していたからこそ、至は危険な橋を渡ることに躊躇いなどなかったし、周防兄弟もそうだった。あの戦いで結ばれた絆と信頼は揺るがない。

だが、いくら協力者と言えど、黒沢巡査を頼るのは気が引ける。断じて第一印象が「規定に厳しそうなカタブツ」だったからではない。

断じて、「噂を流し、一般の店で武器を買ってた」と零したせいで2時間ほど取調べされる羽目になったからではないのだ。それとこれは無関係である。

むしろ、話せば聞いてくれそうな気がしないでもない。

警察官のくせして高校生に武器の横流しをしている位だ。多分、事情をきちんと説明すれば当時の事件調査記録を見せてくれそうな気がする。

おそらく影時間絡みは隠ぺいされているだろう。目撃者証言だって、「妄言だ」と切り捨てて書類に記載していないかもしれない。

黒沢が、ではない。事件の担当者たちがだ。実際、そうやって記載されなかったことがあるのを至は知っている。

(来週、黒沢さんに当たってみるか。……別件での取り調べ覚悟で)

よし、圭にちよつと協力依頼しておこう。変な方向で取り調べされそうになった際のフオローを。

……うん、なんかしよっぱい気がする。圭の眉間に皺が増えた光景を幻視した。

「——よし、こんなもんかな」

まとめた情報をメールに添付し、2人へ送信。これで、この部屋でやるべきことは終了だ。

至はんー、と言って背伸びする。外を見れば、遠くが赤く燃えていた。もう夕方になつていたらしい。

何かに夢中になると、時間の経過が早くなるものだ。ここに来たときはまだ真昼だったのに。

手に入れた情報類を印刷してファイリング。ついでに、別のUSBに保存する。保存したデータは、そのまま至のバックの中に入った。貴重品管理は徹底的に、だ。

軽く部屋を掃除し、しっかりと戸締りを確認する。セキュリティはしっかりとしているし、大丈夫だ。念入りに確認しなおし、至は玄関へと歩み出す。

扉を開けて、締めて、鍵をかけて。幾月からの報告内容次第ではここに戻ってくる可能性もあるが——まあ、しばしお別れだろう。うん、と至は領いた。

夏真つ盛りの太陽は、少しだけ目に痛い。これから自分たちが対峙するであろう戦いにも、こうして目を覆いたくなる真実がごろごろ転がっているんだらうか。

分寮と本寮に近い位置にあるこの家故か、ぼちぼち帰宅を急ぐ生徒たちの姿を見かける。小学生、中学生、高校生——みな、月光館学園の制服を着ていた。

時折、それに紛れて七姉妹学園の制服や聖エルミン学園の制服を着た生徒が歩く。時間も時間だから当然だろうな、と至は思った。

「——至にいきさん！」

「聞こえた声に顔を上げれば、陽向が帰ってきたところだった。今日は誰かと一緒に帰ってきたわけではないらしい。」

ばたばたと駆け寄ってきた彼女は、楽しそうに今日の出来事を報告する。今日は、家を出を決行した友達の子を探すため、駆け回っていたらしい。

離婚寸前の両親。そのやり取りに酷く心を痛めていた少女——その話を聞いて、至は少しだけ懐かしさを覚える。至の両親も離婚していたからだ。

ただし、その理由は言葉にして表せるような、簡単なものではない。強いて言うならば——「愛し合っているが故に、その手を離さねばならなかった」ことくらいか。互いが互いを守るために下された決断なのだそうだ。

離婚寸前の両親は、いつもいつも泣いていた。離れたくない、一緒にいたい、でも逃げられない——そんなことをよく口走っていた気がする。2人は互いを疎む連中の手によって、引き裂かれた。

どうやら、奴らはいろいろやらかしてくれたらしい。健在だった頃の祖父母は、明らかにそう推察できるような発言をしていた。証拠も全て隠ぺいされ、無理矢理まとめられてしまったのだという。勿論、未だに真実は闇の中だ。

残ったのは——“両親は愛し合いながらも引き裂かれ、それでも互いを想いつづけた”という、ささやかすぎる真実。

それでも、至と航には充分だった。憎み合って、いがみ合って別れた訳ではないのだから。自分たちは、2人の愛の結晶なのだ。

至は左耳のイヤリングに触れる。父が大切に持っていた、母の私物。いつも、父は左耳にイヤリングを付けていた。愛する人を想うかのように。

「この一件で、少しは舞子ちゃんの気持ちを知ってくれればいいんだけどな。仲直りするにしても、別れるにしても。……舞子ちゃんは、彼女の両親が思う以上に大人だから、ちゃんと向き合えるよ」

「……そっか」

ああそうか。件の少女——舞子の両親は、至の祖父母と同じ気持ちなのだ。

子どもには理解できない、わからない。背負うにも、受け入れるにも、とても苦しいことなのだ。庇護対象には傷ついてほしくない——それは当然のことだろう。

そんな祖父母の態度が、至は好きではなかった。子どもだからという理由で、のけ者にされているような気がした。知りたいのに、知らなきゃいけないことだというのに。

理由を説明しろと2人に挑みかかり、泣きわめき、頭を下げて、ようやく至は両親の真実を話してもらえたのである。その道のりの長さと言ったら！ 思い出すだけで気が遠くなった。

舞子は、至だ。あの日、のけ者にされた憤りを抱え続けた自分自身。

爆発の仕方も違うけれど、その根底にあったものはきつと同じ。

そんなことを考えている間に、巖戸台分寮が見えてきた。仲間達も続々と帰宅しているらしく、こちらに気づいた千影が大きく手を振る。彼に答えるようにして、至と陽向は駆け出した。

2-2. BGMに幼児虐待を流すだけの簡単なお仕事

2009. 7/11 夜

巖戸台分寮／ラウンジ

「みんな、朗報だよ！ 影時間とタルタロスを消す方法が明らかになったんだ！」

どこか熱っぽい様子で、幾月が語る。眼鏡の反射具合がどこか狂気じみたように見えるのは、至の気のせいだろうか？

時折専門用語を駆使しまくるわ、無駄な解説が入るわで話が脱線したが、奴の話の簡単に要約すると以下の通りだ。

10年前に起きた辰巳ポートアイランドでの爆発事故は、桐条グループ先代当主・鴻悦の行っていた実験が失敗した際に起きてしまった——それは美鶴から聞かされたものだ。

鴻悦は（どうやってかは知らないが）南条側が保管していた技術と提供したオーバーツを使い、シャドウ研究に精を出していたらしい。シャドウの持つ能力に魅せられた挙

句暴走した結果が、影時間とタルタロスという負の遺産。

しかしそれだけでは終わらなかった。自分たちが倒してきたあの大型シャドウは、10年前の爆発事故が起きた際に飛び散ってしまったものだったのだ。どういう理由で活性化して来たかは知らないが、幾月曰く「今がチャンス」なのだという。

なんでも、「12体のシャドウを全滅させれば、影時間とタルタロスが消滅する」という確かな情報が手に入ったと言うのだ。

戦いの明確な目的が決まったことで色々面々は思う所があるらしい。みな、神妙な顔つきで考え込んでいる。

「で、証拠はあんのか？」

「ああ。事故が起こった際に残されていたビデオがあつてね。その解析を進めていたんだ」

「……爆発事故が起きたか」の理由についての解析はしてなさそうだよな。アンタのその様子からじゃ」

至が零せば、幾月は肩をすくめてため息をつく。

「残されていたデータの損傷具合が酷かったからなあ。事故当時の全容を明らかにするために、まだまだ時間がかかりそうだよ」

「なら、そのデータの解析手伝うよ。南条側の研究者と協力すれば、早く進むだろ？」

え、と幾月が間拔けな声を零した。薄ら笑いがかすかに引きつる。レンズの奥にある渋色が、どこか困惑気に彷徨っていた。

研究者なら予測してしかるべき申し出であり、喜ばしい申し出であるはずなのに。どういう訳か、奴はあまり嬉しそうでない気がする。

至が訝しむように眉を顰めれば、幾月は何とも言えない様子で唸った。ううむ、と、困った様子で手を組んでいる。何故だろう、乗ってくるそばかき思っていたのだが。

「嫌なの？」とと、とんでもない！……でも、心配には及ばないよ——問えば、幾月は薄く笑いながら首を振った。

声色は遠慮がちで、やんわりとした拒絶の意図が見える。蛍光灯の反射のせいか、奴の瞳をうかがうことはできない。

事件の解決を願っている人間として、何か対応がおかしい気がする。早期解決を願うなら、もつと手段を択ばない手に出てもおかしくない。実際、陽向たちをS. E. E. Sに引き込むために手を尽くしていたことは明白なのだ。

至が南条側の人間としてここにいることがなんとなく居心地悪いらしい。ついでに、協力すると言う申し出に抵抗を抱いているように見える。むしろ「お前らには踏み込んでほしくない」というオーラがちらついていた。

渋々だが引き下がれば、幾月はあからさまに安堵したようだった。「桐条側の研究者たちを信用してほしいなあ」なんて言っていたが、彼の瞳はどこか違う色を秘めているように見える。瞳の奥底に何が揺れているのだろう。

——よし、あとでパオフウやたまき&タダシ、周防兄弟たちにガサ入れしてもらえな
いか頼んでみよう。

特に前者は仕事である。依頼料金、ポケットマネーで足りるだろうか。まあ、貯蓄は結構多めにたまっているから多分大丈夫だろう。自信ないけど。

いざとなつたら、こちらもアルバイトはしごするなり、航や圭からの仕事依頼を片づけたらすればいいのだし。伊達に苦学生だったわけではない。

そういうえば、自分の生活状況を話したら、全員からもれなく生活改善を進められたっけ。懐かしい記憶である。

過去に想いを馳せるのもそこそこにして、ふと至はS・E・E・Sの面々を見回した。

彼らはいろいろ考えながら、ぽつぽつと議論のような会話を始めている。

「ところで、真田先輩は『自分自身』に向き合うために色々考えたりとかしてるんですか？」

「いや……意識はしているんだが、なかなか難しくてな。何をどうすればいいのかすら、まだわからない」

ゆかりの質問に、明彦がどこか焦りをにじませた表情で答えていた。どうやら彼は、一度気になったら徹底的に追いかけてようとする気質があるらしい。力への執着でそれは明確になっている。

分からないなりに向き合おうとして、でも分かるのは「どうしようもない」ことだけ。答えを出せない自分自身に対して、どうにもならないもどかしさと憤りを弄んでいるように見える。真摯に取り組むのはいいが、深刻に考えすぎではなからうか。

「至さんも、『深刻にならなくても大丈夫』だって言ってたじゃないスカ——お気楽担当の順平もまた、何故か落ち着かぬ様子でこちらを見た。何も考えていないお調子者の仮面の下で、彼も色々悩み始めているのだろう。影時間消滅について、何か思うことがあったのかもしれない。

そういえば陽向日く、「順平が初めて寮に来たとき、どこか浮足立っているように見え

た」と言っていた気がする。

自分たちに与えられた「特別な力」とくれば、真つ先に連想するものは『ヒーローも』だろう。平和を守る正義の集団。

ペルソナ能力に目覚めたお調子者たち——秀彦や正男、優香あたりが口にしていた気がしないでもない。

「自分たちだけがこの事態を解決することが出来る」という意識がなかったと言えは嘘になる。特別意識が存在していなかったというわけではない。

事実、セベク・スキャンダルや「雪の女王事件」での大人は「無力な存在」か「立ちはだかる敵」のどちらかであり、味方は高校2年生の学生で構成された仲間達である。

極め付けには「ほぼ」自分たちの力「だけで事件を解決してしまった」と言っても間違いではないところだろう。あの2つの出来事が、今の自分にとってとても重要な出来事だとは自覚している。

平行世界の自分はそのツケを払うことになったらしい。勿論、この世界にいる至も同じ轍を踏みかけた。

仲間の力と自身の力。過信と慢心はしないが、勿論信頼することは忘れない。むしろ、信頼しなければ始まらないと思っている。

「山岸、話がある。……後で部屋を訪ねても構わないか？」

「？ はい、わかりました」

どこか思いつめたような、暗い影。深緋色の瞳が決意に燃える。

美鶴の様子に影響されたのか、風花はおずおずと言った調子で頷いた。それを見た美鶴は小さく頷くと、陽向たちと話をしているゆかりにも声をかける。

ゆかりも最初は目をぱちくりさせていたが、彼女の様子から何かを悟ったのだろう。

「わかりました」——一切の迷いはなく、即座に頷く。

どこか鬼気迫る気配を宿す少女の背中を見送りながら、至は目を伏せた。

責任感の強い美鶴のことだ。おそらく、ゆかりとの約束を果たすため、何らかの無茶をやらかすつもりなのだろう。

根はとて真面目で義理堅い子だから。おまけに、どこか無鉄砲な一面も漂っているように見えなくもない。

戦いは新たな局面に入った。影時間を終わらせる方法がわかり、シャドウの残り数も残り7体。そろそろ折り返し地点が見えてき始めた頃だろう。

同時に、面々の心持にも変化の兆しが見えつつある。最初に顔を合わせた時よりも、何か変わっている気がした。

真剣な眼差しでいろいろ考える面々を見つめ、ふと至は思い出す。

シャドウの戦いだけでなく、もうひとつの戦いが面々に迫ってきている。1学期の期末テストはもうすぐだ。

だがしかし、面々はそのことを完全に忘れてるように見えた。特に、テストで赤点予備軍だった順平は。

「シャドウとの戦いの前に、まずは期末テストがあるからね。そちらの対策も怠らないように」

「えー！ せっかく忘れてたのに……」

「そうだね。少し休憩したら、昨日の続きから始めようか」

幾月の指摘に出鼻をくじかれた様子で、順平が頭を抱えた。横にいた陽向が部屋へと駆け出す。勉強道具を取りに行くのだろう。

彼女に続いてゆかりと風花も自室へ急ぐ。「順平くんも行きましょう」「はー……」
—千影に促され、渋谷と順平も立ち上がった。その表情には「勉強どころではない」とはつきり書かれている。

順平だけではない。みな「テスト勉強しなきゃ」と言いつつ、内心は別件の事を考え

ている。今回の戦いについて、改めて意識しているに違いない。おそらく今日の勉強会はあまりはかどらないだろう。

「テスト勉強、頑張つてくれたまえ」——そう言つて、幾月はひらひら手を振つた。なんてことしてくれたんだ、と、至は心の中でひっそりと舌打ちする。

こんな時にそんな話を持ち出してくるな。おかげで、勉強に支障が出始めてる奴らがいるじゃないか。

幾月からしてみれば、戦いに明け暮れる面々を少しでも励ますために、この朗報を告げたのであろう。しかし、些か時期尚早だったのでは、と思う。

もし伝えるなら、テスト地獄が明けた後がいい。せめて今は勉強に集中させてやれよと思うのだが、その配慮は足りないらしい。

……最も、その配慮が裏目に出る可能性は無きにしも非ずであるが。今回はそうなる可能性は低かった。もう少し後で伝えてもよかつたのだ。

至の知り合いにいる研究者は、誰もかれも「空気が読めない」上に「配慮が欠けている」人間ばかりのようだ。幾月然り、航然り。特に後者は変な意味も含んでいるからタチが悪い。

最近ではペルソナ研究の派生で悪魔についての研究にも首を突っ込んでいるようだった。分野違いでも気になるものは気になるのだと言う。特にお気に入り調べ始めた

のが魔劍士スパーダの伝説らしい。あとは葛葉一族についてとか。

(……なんか、ロクなことにならない気がする)

漠然とした予感が脳裏を駆ける。浮かんだ数字は4。それに駆られて、出来心でカードを引いてみた。

塔、悪魔、月、運命。ついでに、何やら赤いコートを着た銀髪の偉丈夫が見えたような気がしなくてもない。もしくは黒い外套を羽織り黒猫を引き連れた青年の姿か。

どちらにしろロクなことになる気がしなかった。漠然とした予測をすることで、こんなに疲れたのは久しぶりだ。至はこめかみを抑える。

これ以上考え込めば、精神衛生上問題が出てくるだろう。早々に思考を打ち切り、別方向へと動かす。——どうやら、自分も勉強会に集中できそうになかった。

【2—2. BGMに幼児虐待を流すだけの簡単なお仕事】

2009. 7 / 13 昼

巖戸台分寮 / ラウンジ

本日、陽向たちを筆頭にした学生たちは、大きな戦いへ向けて出陣した。期末テストである。

それさえ乗り越えれば、あとは楽しい楽しい夏休みがお待ちかねだ。……………乗り越えられれば、の話だが。

(……………今日からしばらく暇になるな)

掃除と朝食・晩御飯の準備さえしてしまえば、大抵の時間はフリーになる。

知り合いへの依頼は、昨日の時点であらかた終わっていた。主な内容は「事件に関する情報の行方」である。

あとは個人的な疑問関心くらいか。どの依頼も「一筋縄ではいかないだろう」と険し

い顔をされた。勿論、互いに承知の上だ。

南条側のバックアップがあつたとしても、やはり桐条のガードは堅い。身内である美鶴に対しても伏せられていない部分があるから当然だろう。

一応自分の側からも調べてはみるが、自分が欲しいと思うものや新しいものが手に入る可能性は薄そうだ。期待はできないと思われる。

インターネットの巡回を軽く済ませた後、至は大きく背伸びした。このままネットを使っている遊ぶ気にもなれない。

テレビだって、この時間帯だと陳腐なワイドショーが関の山だ。マスゴミによる腐ったニュース番組など見ても意味はない。

(みんな、しっかり勉強してたもんな。特に順平の成長力には目を見張るモンがあつた)

あれは絶対、"ある条件を満たせば爆発的に伸びていく"成長タイプだ。燻りやすく移ろいやすいのが弱点であるが、一度点火すれば燃え尽きるまで激しく火花を散らす。

至の予感はず解だったらしい。テスト1週間前という短期間で、基礎問題で全滅していた順平がぎりぎり応用問題に手を付けられるまでになったのだ。テスト成績が下の下という事態はどうか避けられるだろう。

どうしようもないことは確かにある。性格や趣向における得手不得手、周囲の環境、能力的な限界。それでも「何もできない」人間なんていないし、存在はない。誰にだって、状況を打破し望む結果を得るための力はあるのだから。

誰にだって、夢を掴む権利がある——だったか。平行世界の女記者が、こと切れる寸前に残した最期の言葉。

夢を叶えると言うのが結果なら、きつと自分の考えは「彼女」に近いのであろう。

「彼女」のことは「航とは違う意味での天然」と平行世界の自分は思っていたらしい。ついでに自分もそう思った。

脱線しかけそうになった思考回路を引き戻すかのように、至の携帯が鳴り響く。着信音はもちろんサトミタダシ薬局の歌である。

相手は『くたばれパピヨン仮面』、もといフィレモンだ。迷うことなく至は電話を切る。正直電源を落としてやりたいが、それで困るのは至自身だ。いつ連絡が届くかわからない。うかつに切れる筈がなかった。

そんなこちらの心情を知っているから、奴は諦めずに電話をかけてくる。邪魔くさいッたらありやしない。5回ほど抵抗した後で、至はため息をつきながら通話ボタンを押しした。不機嫌さを隠さず、受話器越しにいる奴に届くくらいの舌打ちをしてやる。

勿論向こうは歯牙にもかけはしなかった。気にしてすらもいなかった。ただ気さく

に『君、今暇かね？ ああわかってる。明らかに暇だね』と語りかけてきた。ウザい。電波が悪くなりましたとでも言っていてブツツリ切ってやりたかったのだが、それよりもファイルモンが用件を伝える方が早かった。

『これから1週間、暇で仕方がないんだろう？ 最強のペルソナ使いである君に相応しい場所を用意したんだ。是非ともベルベットルームに足を踏み入れてくれたまえ』

『来てくれるまで何回でも電話するから、そのつもりで』——奴の言葉を最後に、電話が切れる。

なんて嫌な脅しだろう。携帯電話の番号を変えてやろうか、と至が思った刹那、メール着信を告げる音が鳴り響く。

送り主はファイルモン、件名は『それと』、内容は『電話番号変えてもムダだから』。……
本当になんなんだコイツは。

忌々しい気持ちを抑えつつ、ガリガリと頭を搔く。大きくため息をついた後で、至は重い腰を動かしたのであった。

\$\$\$

同日 昼

ベルベットルーム⇒聖エルミン学園(???)

青い扉の先に広がる青い部屋。普段は来客用の椅子とテーブルしかないのに、今日は部屋の内装が違っていた。

部屋が一番奥に鎮座するのは城門を連想させるかのような、アーチ形で重々しい鉄製の扉だ。そこから微かに漏れる空気は、どこかぴりぴりとしている。

丁度、珠?瑠を駆け回っていた時に「私の挑戦を受けてくれないか」と、フィレモンに迷宮へと引きずり込まれたことを思い出す。いつも奴は唐突であった。

(しかも、南条くんとエリーまであの部屋に呼び出したくらいだし)

勿論、強制的である。どこまでフリーダムなんだ、普遍的無意識・秩序担当よ。

今までの所業を思い浮かべながら、至は扉を睨みつける。開けようと伸ばしかけて――

—しかし至は手を止めた。扉の向こうから、明らかな殺気を感じた。

悪魔がはびこっている。絶対、あそこ以上にひしめいているに違いない。開けたらしばらく戻ってこれない気がする。

扉の前には時計がひとつ。タルタロスのエントランスで見かける時計と同じものだ。時計の上にはピンクの妖精。勿論、奴が何かを言う前に、間髪入れずヒエロスグリユペインを叩きこむ。

そして始まる楽しい交渉。結果、回復料金半額＋永久定額&アイテム料金正規価格という権利を勝ち取った。

「この鬼！　ひとでなしー！」——そんなトリツシュの叫びを完全に無視し、至は時計に記録を残しておいた。

こうすることで、迷宮で万一の事があっても帰ってくる事が出来るのだ。記憶と経験を蓄積した状態で、だ。何て便利なのだろう。

ドアの取っ手に手をかける。がちや、という鈍い音が響いた。

—刹那、真つ白な光が何もかもを飲み込む！

「——っ!?!」

「あまりの眩さに目を覆う。別な場所に飛ばされるような感覚。自分が立っているのか座っているのかすらわからなくなってきた。」

しかしそれは一瞬のことで、浮遊感はずぐに消え去った。ざり、と、ブーツが大地を踏みしめる音が響く。自分は、両足でしっかりと立っている。

光が弱くなったのを瞼の裏越しから察知し、至は目を開ける。

チチチ、と、場違いな鳥の鳴き声が響いた。どこまでも平和な、それでいて見覚えのある光景が広がる。

聖エルミン学園の校門。空本 至がペルソナ使いとして目覚めた場所であり、最初の事件が起きた舞台だ。

かつての日々が脳裏を駆ける。あの頃自分たちは若かった——込み上げてくる懐かしさに、思わず至は目を細めた。

『この世界は、君の記憶や経験をもとにして作り出された迷宮だ。まだまだ浅いタルタロスの敵には無い強さと歯ごたえを求めるにはうってつけだろう』

「そりやどうも。余計なお世話」つて、こういうことを言うんだよな。まさしく文字通りだ」

『私が認めた最強のペルソナ使い、空本 至。——さあ、君の力を見せてくれ』

「おいこら、微妙に会話が成立してないぞ。勝手に話を——」

進めるな、という至の言葉は続かなかった。それを遮るような勢いで、何かが突進してくる音が迫ってきたからである。タイヤが回転する際に発せられるものだ。

同時に耳をかすめたのは、愛くるしい猫の鳴き声。しかし至の記憶が真つ先に拾い上げたのは猫の姿ではなかった。見た目は猫であるが、明らかにそれとは程遠い凶悪な敵。

思考が答えをはじき出す前に、至の身体は回避行動に移っていた。その場から飛び去りつつ振り返り、敵の姿を確認する。

機械の猫——端的に表現するとしたら、その一言に尽きた。ペットロボットといつても差し支えないかもしれない。

……背中に機関銃など背負っていないければ。あるいは、万能属性魔法を連発したりしなければ。

脳内で猫の鳴き声に変なBGMを奏で始める。突如、何の脈絡もなく「幼児虐待」という言葉が浮かんだ。

それとほぼ同時に、敵が背負った機関銃が派手に唸った。即座に至も回避する。放たれた弾丸たちは地面を穿ち、土ぼこりを飛ばしていた。

あと少し遅ければハチの巢にされていただろう。ひやりとしたものが背筋を駆け抜け、冷たい汗がこめかみを伝う。

「——テツソ、か」

厄介な奴が出てきたものだ。

セベク・スキャンダル事件の際、あきが召喚した悪魔である。ジャックフロストとタメ張つてもいいのではと思うくらい可愛らしい外見であるが、可愛さに惹かれて近寄つた数名が危ない目にあつたのだ。

勿論、外見を見て「こいつなら苦も無く勝てる。楽勝だ」と思った者も、あわや銃弾の雨あられに襲われかけた。トラウマ一步手前の出来事に等しい。……至にとつて、航を巡る英理子と麻希のトライアングル”に勝るトラウマはないのだが。

応戦しようとして手をかざし——しかし、何かに無理矢理押し込められるような違和感を覚えた。ペルソナの召喚ができない。例えるならそれは、外側から何か強い圧力がかけられているみたいに。

『ああ、今回は特別なルールを採用したんだ。 “特定の場所” までたどり着かないと、ボ

ス敵とは戦えない仕組みになっているから。鬼ごっこ、頑張ってくれたまえ。——なに、君なら余裕だろう？』

「なんつー仕組みにしてくれやがったアアア！ 畜生、オメーは本当にロクなことしないな!!」

不敵な笑い声は、ドツプラー効果よろしく空気に溶けるようにして消えていく。完全に悪ノリの産物ではないか。

テツソが恐ろしい勢いで機関銃を連射する。それら全てをどうにか回避しながら、至は周囲を見回した。

特定の場所は、どこだ。ノーヒントで迎えてもいいのか。だとしたらとんだ鬼畜ダンジョンである。逃げ回るにも戦うにも、体力に限界が来る方が早い。

『そうだな。ヒントは——この世界は、君の記憶と経験によつて構築されている』ということかな』——ファイルモンの言葉に、至は頭を回転させた。無論回避も忘れない。記憶と経験、記憶と経験。脳裏を駆けたのは、仲間たちとテツソを迎え撃った瞬間のことだ。確か、異界化した後の、どこかの野外だったはず。詳しい事は覚えていないが、とにかく野外だったことは確かだ。

校舎内にある扉を開けた先。中庭のような、場所。

その場所を鮮明に思い出そうとして——刹那、世界がぐにやりと曲がった。気づけばそこは、学校の廊下。長い長い直線。曲がり角など見当たらない、変わった場所だった。先程まで校庭にいたはずなのに。至がそう思つて首をかしげた時、背後からエンジン音が響いた。猫の鳴き声が、場違いに響き渡る。

「うげっ!？」

背後の曲がり角から勢いよく飛び出してきたのは、やはり件のテツソであった。鳴き声は相変わらず可愛いまま、けれど弾丸を容赦なく撃ち放ってくる。

逃げ場は直線のみ。脇道も無ければ教室もない。ただただ長い、真っ直ぐな廊下が広がっているだけだ。扉までかなり距離があるらしい。というよりもむしろ扉と言う名のゴールが一切見えなかった。

「ニャーオ！」

「痛い！ 痛い痛い痛いって！ ——クソッ、ゴールが見えるまでこの調子かよ！」

何発の弾丸が、至の身体をかすめただろうか。

ペルソナの召喚と交代が出来ないだけで、宿しているペルソナの属性耐性や能力ブースト等は効力を発揮している。現在、至が降魔しているペルソナはナルカミだ。

ありとあらゆる属性に耐性を持つナルカミであるが、あくまでも「耐性がある」にすぎない。ダメージ自体は減るものの、殴られれば痛いという現象は変わらない。

スザクに降魔し直せれば回復できるのに——心の中で悪態をつく。どうしようもないことはわかっているが、わかっているのと諦めるのでは次元が違う。むしろ、わかっているから諦めきれないのだ。どうにかできないものだろうか、と。

立ち止まったらアウトという、銃弾が飛び交う鬼ごっこだ。似たようなことは何度もやったことがある。

その度に「二度とやりたくない」と願い、忘れ、再び巻き込まれて思い出すというサイクルを続けていたか。

それらが走馬灯のように至の脳裏を駆ける。畜生、俺はまだ死ぬつもりはないぞ！心の中で叫びつつ、テツソの攻撃を撒くように心がける。

勿論、足を止めずに前へ進むことも忘れない。むしろ忘れたら蜂の巣にされた後三途の川に打ち捨てられてお終いだ。普遍的無意識どもがつまらなそうにしてる姿が浮かぶ。

アレにバカにされるのも利用されるのも癪である。嫌いな奴にバカにされ、利用さ

れ、黙っていられる奴がどこにしよう。おまけに、何をやっても相手が得をするといったら！ 反発してやりたくもなるだろう。己の持ちうる全ての力を使って。

今回は、それが「フルマラソンからの戦闘」であるだけだ。持久および耐久力と、スピード勝負。

このまま消耗し続ければ不利になる。とにかく、早くたどり着かないだろうか。中庭に繋がる扉——そこを開けさえすれば、こちらのターンが始まるのに！

至は歯噛みしながらも、走る速度を上げた。銃弾の雨あられを喰らいすぎたので、そろそろスザクで回復したいところなのだ。

（——っ、見えたア！）

身体が悲鳴を上げかけた時だった。進行方向、前。そこには白い扉があった。テツソと戦った中庭に繋がるであろうと思しき扉が。

しめた、と言わんばかりにラストスパート。先程までは先が見えなかったのに、扉との距離はぐんぐん縮まっていく。

最後は殆ど跳躍だった。駆けていた勢いを衰えさせることなく、そのまま思い切り扉を蹴破る。一瞬、太陽の眩しさに目をつぶってしまいかけた。

広がるのは、セベク・スキヤンダルでテツソと戦うことになった中庭だ。今回の、決戦の舞台。

押さえつけられるような息苦しきから解放された感覚を覚え、至は即座に手を挙げる。呼び出したのは、スザク。

温かな光が舞い上がり、テツソによつてつけられた傷が癒えていく。——よし、これで準備は万端だ。

テツソが唸る。至が振り返りざまに手をかざせば、青い光幕が炸裂した。降り立つのはナルカミ。戦闘態勢は万全である。

一瞬、テツソはたじろぐように後ずさりした。が、すぐに咆哮して機関銃の先をこちらに向ける。

至は不敵に笑えば、ばちばちと雷が迸った！ マハジオダイーン——対集団用の雷属性魔法だ。

単体用と比べて威力は低いものの、魅力なのは広範囲を巻き込める点である。

小回りが利くテツソでも、流星にこの場合全体が対象にされていたら逃げようがない。

弱点である雷を叩きこまれたテツソは悲鳴を上げた。が、やはり仕留めるには至らなかつたようだ。まだまだピンピンしている。

「……一筋縄じゃあいかないってか」

至は舌打ちしつつ、テッソと対峙した。流石はフィレモン、あるいは暇を持て余した普遍的無意識の遊びだ。理不尽感が半端ない。

しかも明らかにテッソの能力がおかしいのだ。奴と対峙した当時はマハジオしか覚えてなかったから苦戦したが、今ではマハジオオダインが使える。威力だつて跳ね上がったのに、一発で倒れない。大してダメージを受けた様子もなかった。

鋭利な爪を輝かせながら迫るテッソを迎え撃つため、至はライフルを構えてトリガーを引く。

陽向たちが対峙している期末テストと同じくらい、激しい戦いになりそうだ。

少し離れた、近いような遠いような未来

卵の中の世界／どこかの迷宮・5階層

「たとえばの話をしよう。自分の身内を銃撃してきた不審者が、いきなり『雇え』やら『連れて行け』って言ってきたとする。日本文化には『水に流す』という文化があることは確かだ。確かなんだが、流せるかどうかは個人の判断による。

俺の場合はどうかって？ ……どこをどうすれば流せると思う？ 何をどういった思考回路をすれば、水に流してくれると思つた？ 無理だよ。おかしいよね。おたくらだつてそうだろう。身内が突然銃撃され、襲つてきた相手がいきなり『雇え』って言つて来たら、選択肢にYesはあるか？

ないよね。常識的に考えて有り得ないよね。むしろ、お前らの場合は『己の持ちうる得物全てをフルに使つてオーバーキルする』タイプだろ。無論、相手の話なんてガン無視だ。今のお前らがそうでもんね。頭大丈夫？ ああ大丈夫じゃないか。どの道どつちもイカれちやつてるんだからしようがないんだよねきつと。

こうなつたら、頭にシヨック(物理)療法叩き込むくらいしなきゃ治らないかなあ。今からでも効果あるかなあ。少しでも効果が出る可能性があるなら、是非ともやったほうがいいと思うんだ」

「むしろ、精神的にもショック療法したほうが効果出るんじゃないか？ どちらのショック療法が効果的なのは、人の性格や性質による個人差があるからな。俺が魅了無効化できるのに対して、お前はしょっちゅうヤケクソ状態なってるし」

「否定はしない。確かに学生時代、お前がどこまでもアレだったから、とぼっちりで精神攻撃と肉体攻撃受けまくったさ。メギドラオン連発とか普通にやられたし、各属性の最強魔法の雨あられを駆け抜ける羽目にもなったよ。大変だった。

でも、やつぱり一番辛いツツーかキツかったのは、使用済みのトイレ掃除用ブラシやらつつまりを直す吸盤やら向けられたことだったんだよな。周囲からいろいろ言われるのも嫌だったし、何より、雑菌だらけになった先端向けられるって嫌じゃね？ 汚いし。

しかもやる側の女子2人は満面の笑み浮かべてたし。圭たちがいなかったら、俺って一体どうなってたんだろうなあ。精神崩壊引き起こして人間不信にでもなってたかもしれんなあ。ってことは、一歩間違えば——」

「まずいことになってたってことだよな」

「どう考えても精神的苦痛のせいです本当にありがとうございましたー。弁護士呼んで裁判やっても勝てるレベルです。証拠もこんなに残ってるんだから、訴えた人間が圧倒しそうです。てか、勝たなきやおかしいね。おかしいよね。むしろ負ける展開なんて俺には一切想像できない」

「訴えられた側は、確実に死に至るだろう。社会的な意味で」

「確かにそうだな。……そっか。人を殺すのって、肉体的なものだけじゃない。精神的な意味だつてそうだし、社会的な意味でも殺すことが出来るって訳だ。なるほどな。なんで俺、そんな簡単なこと気づかなかつたんだろう？　今まで何度も普遍的無意識たちにやられてたことじゃねーか。」

“人にやられて嫌なことは他人にするものじゃない” って言うけどさ、身内が理不尽に虐げられてるの見たらそんなのどうでもよくなるね。倍返しにしてやりたくなるよね。これでもかかってくらい、じわじわじっくり報復してやりたくなるわ」

「お前凄かつたもんな。自分を馬鹿にしてきた外人相手に、日本語でひたすら罵倒してやったんだっけ？　侮辱されてるのはわかるけど、何て言ってるかわからない” っていう恐怖を盛大に味あわせるのが目的っていう」

『わかってても怖い』 って圭から言われた」

「確かにな」

同じ顔をした双子の兄弟。

兄の方はちらりと視線を向ける。無論、喋る口は休ませぬままに。

赤い外套を羽織った銀髪の偉丈夫・黒い学生帽と外套がトレードマークな少年・少年

が連れている黒猫が、青筋おっ立てながら困惑した表情を浮かべている所だった。

前者の男性は、外国人故に日本語がさっぱりわかっていない。しかし、2人の表情からして、己がボロクソに言われていることは辛うじて察しているらしい。

後者の少年と猫は、生まれも育ちも日本である。故に2人が何をしゃべっているかわかりのだが、丸わかりの上、内容が内容であるが故に苦い顔をしていた。

とられる。確実にとられる。何を？——何かを。

男性と少年および黒猫は、ただただ漠然とした予感を感じている。

前者は「何を言われているかわからないから」、後者は「何を言われたかわかっていないから」、何て言葉を返せばいいのかわからないのだ。

それでも諦めたらダメだということを察した男性は、しきりに英語で話しかける。

『何を言っているんだ？俺は日本語がわからないんだよ——彼の言葉は、当然、無視された。勿論意図的に、である。』

同じ顔した双子の兄弟、仕事柄世界中を飛び回っていることが多いのだ。

多少日本語訛りではあるものの、きちんと聞き取ってもらえるほど会話のレベル。その基準にいたるのだから、英語がわからないということは有り得ない。

ついでに、悪意を持って語っているのは兄の方だ。弟は兄の言葉を受けたうえで、何の悪意も害意もなく、素で補足と合いの手を入れているだけに過ぎない。

それを知っているのは、2人の気心が知れる2人の身内だけだった。

あの2人——特に兄の方が「ああなったら止まらない」ということも知っている。

しかし、身内は止めようとすら思わなかった。彼は、自分の心を代弁してくれていたから。

「……なあ、あの2人どうにかならないか？」

「無理。むしろもつと言つてほしいしやつてほしい」

ちよつと泣きそうな顔で話しかけてきた黒猫の言葉を間髪入れず打ち落とす。

それを聞いて項垂れる黒猫。奴は少年をけしかけた本人なのだから、自業自得である。

遠くの方で猫の鳴き声が響いた気がした。頭の中に浮かぶ文字は幼児虐待。幼児というより青年虐待な気がするが、まあどうでもいいか。

むしろ今まで虐待されていたのはこちらの方だ。勝手に悪魔にされてしまうわ、友人や信頼していた大人からは裏切られるわ、出会いがしらに不審者どもから襲撃されるわ、鬼ごつこという名の精神的苦痛を受けるわ、散々だった。

戦いも終わりに近づいて、あとは『この世界の真実』と『己がどうあるべきかの判断

を下す”だけ。身内である双子の兄弟が一緒にいてくれなかったら——きつと自分は、取り返しのつかないことになっていただろう。

2人は尊敬すべき先輩に当たる人であり、自分を助けてくれた人であり、この世界で唯一生き残った血縁者であり、身内だった。

そして、最後まで自分を裏切らないでいてくれた人だった。

赤い偉丈夫や黒い少年の実力は知っている。何せ、その刃や銃弾は自分に向けられたものだったから。味方になれば心強いのは当然のことだろう。

しかし、今まで散々攻撃され、挑発され、仲魔や身内を馬鹿にされ、彼らをボロ雑巾のように扱われて。今更、快く迎えてもらえないなんて虫がよすぎる話ではないか。

「仲間になったのはいいけどさー……」と言いながら、兄の方に視線を向けた。彼は自分の言いたいことを察してくれたらしい。それがそのまま冒頭に繋がっている。

日本語訛りの英語が響く。今度は偉丈夫用のために、先程と同じ内容を英語で語っているようだった。しかも早口。反論の余地など一切挟まぬ勢いで。罵倒はすべて日本語だ。これなら罵倒に対して的確な反撃などできるはずがない。

ついでに、弟の方も英語で補足や合いの手および相槌を打っている。そこに悪意は一切ない。どこまでも澄み渡った綺麗な眼差しに、偉丈夫は気圧されているようだった。

そんな弟とは対照的に、兄はどこまでも荒んだ眼差しを向けている。あれもまた、別

の観点から見れば「どこまでも澄みきった綺麗な眼差し」と言っても間違っていない。

「人の話を聞かないヤツの話を、どうして聞いてやらなきやいけないんだ？ これこそ矛盾の極みだと思うんだが……」

「ぶっは、ナイスだ弟！ ……なあ、今どんな気持ち？ 自分がやって来たことが跳ね返ってきて、今どんな気持ち？」

彼らの発言に、元・襲撃者たちは肩身が狭そうに項垂れた。心なしか、眼差しが先程よりも荒んできた気がする。兄の方と同じ目になりつつある。

そろそろ許してやってもいいかもしれない。言いたいことは全て、彼らが代弁してくれたから。

「もういいよ」と言えば、兄の方はちよつと物足りなさ気のため息をつきながらも頷いた。相変わらず、弟の方は首をかしげている。

やつと解放される、とでも言わんばかりの勢いで、元・襲撃者の2人と1匹が顔を上げる。そんな彼らの様子に思わず笑いが込み上げた。

「——それじゃあ、コンゴトモヨロシク」

「ああ、よろしく頼む」

「契約成立ってとこだな」

かつての襲撃者たちと、がちり握手を交わす。これで2人は正式な仲間だ。自分の心を代弁してくれていた双子（特に兄の方）も、肩を竦めつつ「よろしくな」と笑う。

先程とは打って変わってフレンドリーになった兄の様子に、新たな仲間2人と1匹が目を見張る。若干笑みを引きつらせながら、それでもがちり握手を交わした。

2—3. 屋久島旅行へ想いを馳せるだけの簡単なお仕事

??????
 /
 ??????
 /
 ??
 ?

それはまるで、妖精のように見えた。

グロテスクな蛹から羽化したのは、美しい蝶。1人の少女の顔と姿を模《かたど》り、その背には揚羽蝶を思わせるような模様の羽が生えている。

誰かが息をのむ音がする。零すように吐き出された空気には、感嘆の意が込められていた。それを飲み、零したのは——仲間だったのか、あるいは自分だったのか。

至はRPGをよくやる方だ。故に、なんとなくこの後の展開は予測できる。これが、セベク絡みの「最後の戦い」だ。

この戦いさえ終われば、街の異変は元に戻る。悪魔たちも大人しくなるだろうし、異界化によって壊れてしまった日常だって帰ってくるのだ。

気合が入らないはずがない。負ける気も無ければ、負ける要因など見当たらなかつ

た。振り返ればそこにはみんながいる。苦楽を共にし、駆け回った友たちが。

巻き込まれてなし崩しの仲間になった者がいた。自ら進んで協力を申し出てくれた者もいた。利益協定から加わった者もいた。

それぞれがそれぞれに思惑があつたけれど、でも——今では、かけがえのない仲間だ。胸を張つて、そう言える。

「第2形態つてトコか……!」

「ハッ。姿が変わろうが何だろうが、やるべきことは何も変わらなねエ。……そうだろう?」

「当然! 絶対に負けれない!」

「ああ、やるよ。こいつを倒せば、全部終わるんだ!」

至の言葉に続いて、玲司・麻希・ゆきのが頷く。他の面々も同意し、得物を構えた。その眼差しには一切の迷いが無い。

隣に立つ双子の弟に視線を向ければ、航は迷うことなくこちらを見返した。そして、鋭く輝く刀を構える。

「行くぞ、みんな！」

「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」

リーダーの号令に答え、面々が走り出す。己の得物を構えて、迷うことなく敵へ向かう。災厄が入った箱の名前を冠した蝶は、羽をはばたかせて自分たちを迎え撃った。

偶然明けられてしまった災厄の箱。飛び出したのは、幾億千万の絶望だった。その絶望は、たくさんの人を傷つけ苦しめる。勿論、現在進行形で。

先の雪の女王事件でその箱を開けた人間の1人として、至は逃げるわけにはいかなかった。その絶望に、真っ向から立ち向かっていった。

何度も諦めたくなったことがある。何度も投げ出してしまいたいと思ったこともある。弱音を吐いたことだってあった。

だけど、歩みを止めることはない。傍にいて、背中を押してくれた人たちがいた。手を引つ張つてくれた人がいた。手を差し伸べてくれた人もいた。——みんながいた。

災厄の箱から飛び出してきた絶望を迎え撃ち、倒し終えた後。そこに何が残るのか、まだ誰も知らない。

あの逸話で、最後に残ったのは希望であった。具体的な内容は一切記載されていない。……そもそも、希望という言葉の概念自体あやふやだ。

それでも自分たちは生きていくのだろう。概念があやふやであっても、どこまでも愚直に生きていく。この戦いで築いた絆や、それ以前から結ばれていた絆と一緒に。きっと、負けない。その未来を掴むために。

2009. 7 / 18 昼

記憶の迷宮 (???)

「……随分懐かしい記憶だなあ」

いつかの出来事を思い浮かべながら、至は“それ”と対峙した。不気味なまでの艶

やかさと美しさを備えた蝶が、あの頃と変わらぬまま羽をはばたかせている。

麻希の面影を宿した災厄の象徴。絶望に呑み込まれ、色々なものを諦めてしまった少女の嘆きが、時間を超えて再び至と向き合っていた。

雪の女王、およびセバク・スキヤンダルから、長い時間が経過した。あの頃少年少女だった面々は立派（？）な大人になっている。時の流れは残酷で、あと数年経過すれば、みな30代に突入だ。

大人になっていく中で、何度も何度も絶望と対峙した。普遍的無意識どもからの嫌がらせを受けて、何度挫折しそうになっただろう。それでも諦めなかったのは、大切な仲間たちがいたからだ。至を慕ってくれた子どもたちがいたからだ。

かつて「大人が役に立たない。クソ喰らえだ」と嘆いた子どもも、今や立派な大人の仲間入りである。いや、もうすぐオツサンの仲間入りだろう。大人になった今日でさえも、右往左往する日々が続いている。結局、自分は何も変わっていない。

——それでも。

あの日、あの時、あの戦いの中で、自分は沢山のものを得た。時折揺らいで消えそうになる、けれど確かに存在する希望の在り処を知った。

だから大丈夫。きつと大丈夫。根拠など何処にも存在しないが、心の底からそう思える。この場に自分しかいなかったとしても、自分の傍にはみんながいてくれる、と。

“どうして? どうして貴方は絶望しないの? どうして貴方は前を向いていられるの?”

いつか訊かれた質問だった。何もかもを投げ出してしまった少女が、前を向いて足掻こうとする自分たちに向けた言葉。嫉妬と羨望が入り混じった響き。

「あの頃と何ら変わんねーよ。俺がお前に言えることも、これからお前に示すことも」

“今の貴方には、傍にいてくれる仲間なんていないじゃない。いるのは、守らなきゃいけない後輩たちだけでしょ?”

(……あれ? 記憶の迷宮だよな、コレ。なんで “現在” の俺のこと知ってんだコイツ) “質問に答えて。誰もいないのに、貴方は1人きりなのに、どうして絶望しようとないのよ!?”

違和感を覚えて考え込みかけた至に、蝶は催促する。早く答えろ、答えて見せろと言わんばかりに金切声をあげていた。

“ほら、答えられないでしょう?” とでも言いたげな眼差しが突き刺さる。情緒不安

定なのは、あの頃と変わっていないらしい。

記憶の中の蝶——パンドラも、似たような眼差しを向け、似たような調子で言葉を口走っていた。まじまじとその様子を観察してみる。

……今思えば、随分とヒステリックだ。最終決戦の時、至はそのことを意識していなかったらしい。それもそうか、大一番で余計なことを考える暇などなかったから。

最終決戦で場違いなことを考えたら、おそらく玲司や圭・ゆきのあたりからの突っ込みが入ったであろう。げんなりした面々の表情が手に取るように浮かんで消える。

ニヤルラトホテブに乗っ取られた神取を見た至の第一声——『すっげえキモいデザインだな！』に、『よりにもよってそっち!?』『もつと他に言うことあるだろ！』と、仲間たちから綺麗な突っ込みが入ったのは、今でも色あせていない。

さて、そろそろ思考回路を切り替えよう。至は口の端に微笑を浮かべた後、まっすぐにパンドラを見返した。

「何度でも言おう。俺の答えは、何も変わらない——後輩だろうが何だろうが、この場に居合わせてなからうが、至の示す答えはひとつなのだ。

2丁拳銃を弄ぶように回転させたのち、その銃口をパンドラに向ける。トリガーはいつでも引ける準備が整った。小さく口笛を吹いて、至は駆け出す。

「俺たちは負けねえ。この場に居合わせてなかるうが、まだまだヒヨツ子だろうが、大切な仲間たちがいるからなっ！」

長い時を超えて、あの日得た答えをもう一度。

いや、あの日だけではない。あの日から様々な出来事を経験し、幾重もの絶望や悲しみと向き合ってきた。

その中で、生きていく中で得た答えの数々を。——今、改めて示そう。

〔2—3. 屋久島旅行へ想いを馳せるだけの簡単なお仕事〕

同日 夕方

巖戸台分寮／ラウンジ⇒巖戸台商店街

本日、テスト最終日。

泣いても笑つても、今日で最後だ。そして、これさえ乗り越えれば夏休みが待つてい
る。

カレンダーの翌々日にはでかかど赤い丸が書かれていた。その下には「屋久島旅
行」の文字。

（ああ、もうそんな時期になったんだ）

先週の会話をもう一度思い出してみる。確か、その日は美鶴の別荘に足を運ぶ予定に
なっていたか。それを圭と航に報告したら、「その日は圭と航が別件で武治に会う予定
だった」と言われて吹き出したのは記憶に新しい。

一応面々にも報告し返した。みな「何そのとんでもないダブルブッキング」とでも言
いたげな顔をされた。特に幾月は「仕組んでないよね？ ドッキリじゃないよね？」と
しきりに確認してくる始末。貴様よりマシだろ、と突っ込みを入れておいた。奴が困っ
た様子でいたのが妙にひっかかっている。

幾月 修二。奴の行動がおかしいというのは何となく気づいていた。確かに奴は、
シャドウ殲滅に関して好意的に協力してくれる。しかし、先の困惑からわかるとおり、
時折その言動に不可解な違和感を覚えるのだ。何故、協力体制を敷かれることを嫌がる

のか。何故、南条側のアプローチを嫌がっているのか。謎は尽きない。

そんなことを考えたせいで、疲労に沈みかけた体が更に重くなったような錯覚を覚える。

つい数時間前まで、至は戦闘の真つ最中だったのだ。記憶の迷宮を踏破——もとい、全ての敵を倒して、至は現実世界へ帰還した。

『また、君に暇な時間が出来たら電話する。君の力はこんなものではないだろう？』——去り際に恐ろしい言葉が聞こえたような気がしなくてもない。

しかし、疲れ切った頭で物事を考えても答えが出るわけがなかった。至は投げ捨てるように思考を切り替える。

そろそろ夕飯の準備をしておいたほうがよさそうだ。旅行の準備は前々からできているから問題ない。

今日の献立は何にしよう。テストを頑張った面々を労うには、どんなメニューがいいだろうか。

とりあえず、疲れていそうだから甘いものは入れておきたい。あとは、少し豪華なものにしてもよさそうだろう。個人的には手早く作れるものもいいが、自分の疲労よりも後輩たちの頑張りを優先させることにする。

大体のメニューに検討はつけた。早速商店街に繰り出すことにしよう。財布と貴重

品を片手に、夕方の巖戸台へと繰り出す。時間帯が時間帯なので、下校途中の学生たちの姿がちらほらあった。

「どいつもこいつも、テストから解放された！　って顔してるな。……死んだ、って顔してる奴もちらほらいるけど」

自分たちがそれと対峙していた頃のことを思い出し、至は懐かしくて目を細める。どこまでものどかで平和な光景だ。

死んだ、という顔をしているのはお調子者組と不良組だった気がする。圭や航は無縁の表情だった。当然至も無縁である。

……最も、至の場合はテスト勉強とアルバイトの両立を成し遂げようとしているときが「死んだ」という顔になるのだが。

奨学金をもらうための条件に「学年での好成绩」という欄があるのだ。授業もきちんと出席し、部活でもいい成績を取める。奨学生への条件が厳しいのがエルミンの特徴である。

至の場合は特待生としての奨学金だ。条件がとんでもないということとは当然である。普通の人間が呆然とするくらい条件だ、と正男も言っていたっけ。

祖父母にあまり負担をかけさせたくなかった。ただでさえ、父亡き後はずっと世話になつて来たのだから。

少しくらい孫らしいことをさせてほしい——それゆえ、特待生奨学金を勝ち取つたのだ。……結局は、何の恩返しにもならず、ましてや役にも立てなかつたが。

ほろ苦い思い出を辿りながら、至は大きいため息をつく。親孝行、しようとおもえば親は無し——それとよく似ている。

だから、今できることは今のうちにやっておいた方がいい。できなかつたことを後悔するのは、もう嫌なのだ。かつての「彼」と同じように。

ネガティブな方向に考え始めた自分を叱咤し、至は思考を切り替える。
買うべきものへの検討はついている。

「さーて、まずは野菜だな」

チラシと睨めっこしながら、至は八百屋へと足を進める。あそこのおばちゃんとは顔なじみだ、いい品を提供してくれるだろう。

巖戸台商店街に並ぶ店は近所のスーパーよりも品質が高い。しかも、顔なじみになると割引いてくれることもある。ついでに、世間話から情報を手でできるのだ。

一石二鳥とはまさにこのこと。世間話で楽しく盛り上がることもできるし、現在巖戸台で起こっている出来事や噂の最前線に触れることもできる。

伊達に珠？ 溜での事件で情報——もとい噂集めのために奔走したわけではない。そして、探偵を自称しているわけではないのだ。対怪異調査員としての意地やプライドもある。

至はうんうん頷きつつ、エコバック片手に歩みを進めた。八百屋の看板が目に入る。こちらの存在に気づいたおばちゃんや、気さくに手を振ってくれた。

挨拶を交わして世間話に興じる。勿論買い出しも忘れない。目ぼしい野菜や果物、お徳になつている野菜や果物を注文し、精算。お値段はぎりぎり1500円台だった。

次は精肉店と魚屋を回り、あらかた必要なものを買ひ込む。これだけあれば充分だろう。

使用金額は、八百屋の分含んで5000円ちよつと。どうせすぐに屋久島へ出発するのだ、そんなに買い込む必要はない。

「よし、こんなもんか。あとはきつきと寮に戻つて、手早く料理を作るだけだな」

みんなが返ってくる前に、沢山作つておきたい。疲れて帰ってきた面々を、満面の笑

みと美味しい料理で迎えてやりたい。

嬉しそうに笑う面々の様子を思い描きながら、至は帰路へ着く。勿論、みんなに「ゆっくりでいいから、真つ直ぐ家へ帰っておいで」とメールしておくのも忘れなかった。

了承の返事が返ってきたことを確認し、至は小走りで寮へ急いだ。あとはみんなが帰ってくる前に、美味しい料理を作り上げて、彼らを迎えるだけだ。

夕焼け色に染まった空の向こうで、一番星が小さく輝き始める。

夜の帳は、もうすぐ降りてこようとしていた。

\$\$\$

2009. 7 / 19 夜

巖戸台分寮 / ラウンジ

和気あいあいとした声が聞こえる。陽向や千影たちは、明日の屋久島旅行に向けての最終準備を行っているようだった。

水着は何にしよう、屋久島で何をしよう——楽しそうに語らう面々の様子を視界の端に収めつつ、至はテレビに視線を向ける。

丁度、レポーターが街をゆく人々に声をかけている所だった。話題はやはり無気力症が中心で、それに関する人々の見解が放送されている。

彼らは何も知らない。ペルソナ使いが命を賭けて戦っていることも、戦っているペルソナ使いはみんな学生であることも。

知らないが故に幸せなこともあるのか、と、ぼんやりそんなことを考えた。至の場合、
“知らなかった”がために“とんでもない事件に発展した”という出来事ばかりだ。

ペルソナさま遊び然り、雪の女王然り、ジョーカーおよびJOKEER事件然り。ああ、本当にロクなことが起きていない。自分のトラブルスターターの能力に眩暈すら覚える。

『そんなに大切だったら、鍵をかけて閉まっておけばいいんだよ。そうすればどこにも行かない』

平行世界にいた少年は、幼い頃の“彼ら”にそう言ったらしい。それが忌まわしき事件を引き起こし、“彼”が孤独な戦いをする事になった原因へと繋がっていく。

終いには、自分が死んだせいで「彼女」が死亡。大切な人たちを失ってしまった「彼ら」は、罪をあがなうために罰を受けた。忘却と言う名の罰を。

普遍的無意識の絶望担当が嗤う声が聞こえてきた気がして、至は小さく首を振った。無理矢理それを振り払い、テレビのチャンネルを変える。

次に映し出されたのは、復讐サイトの事件だった。そのサイトの存在について、人々にインタビューしているらしい。口々に彼らは己の意見を口にする。

「実際にあるならば是非とも利用したい」「あつたとしても、そんな物騒なものに手を出せない」「いつ、どこで、自分がターゲットにされるかわからない」——様々な意見が交錯し、映像と共に流されてしまう。

そういうえば、達哉たちは奴らと思しきペルソナ使用の反応をキャッチしたと言っていた。その反応を追いかけてみる、とも言っていたか。

場数を多く踏んだとはいえ、あまり無茶な行動をしてほしくない。克哉の気持ちはよくわかる。わかるが、達哉を信じていないわけではないのだ。きっと彼なら、己の望む結果を得るための努力は惜しまないであろう。

普段コンピを組んでいる兄と離れ離れ、己の力だけで事件のヒントを掴まねばならない。——記念すべき最初の「単独で挑む」事件だ。相手はペルソナ使用の少年少女ときている。かつて不良少年だった達哉だ、色々と思う所があるに違いない。

……しかし、相手は達哉と舞耶のペルソナ反応を知っている。下手に共鳴現象を使えば、相手に存在を察知されて逃げられる危険性もなきにしもあらずだ。

相手が達哉の挑発に乗ってくれればいいが——そう考えて、そうとも言えないなどは思い直した。復讐成功率100%を誇る相手だ、持ちうる武器や実力だつて相当だろう。

至近距離からの銃撃による傷と、出血性によるショック死。復讐サイト関係の被害者たちの多くがその死因だった。手口がいつも同じなので、同一犯の犯行だと思われる。しかも、複数だ。情報収集役と実行役にわかれているらしい。

(復讐サイト関連には注意を払っておくべきだろうな。他にも、気をつけておかなきゃいけないことは沢山ある。だが……)

至はちらりと視線を向ける。

明日の屋久島旅行に向けて、誰も彼もが浮かれていた。長らく戦いばかりで、羽を伸ばす余裕はなかったから当然だろう。

こういう時こそゆつくり休ませてやりたい。どこにでもいるような学生として、たくさん楽しい思い出を作ってほしい。今しかできないことなのだ。

昔、エルミン学園時代のメンバーと旅行に行つたことがある。長期休みと圭の財力+ α を利用した、3泊4日の北海道旅行。

どこまでもただっ広い草原で、動物たちと戯れた。牧場でいろんな体験をしたり、夜景を見るために粘つたり、スキーやスノーボードに興じてみたり。

春休みには、卒業旅行と称して某アミューズメントパークに足を運んだ。絶叫マシンをはしごしたり、限定グッズを買いあさつたり、会場内で迷子になつたり。

S. E. E. Sの面々には、そういった交流が足りないのだ。今回の屋久島旅行は、絆を深めるのに打つてつけであらう。

……本題が別な所にあることは、充分承知しているのだが。

「ところで、陽向ちゃんはテストどうだった？」

「ばっちり！ 手ごたえはしっかりつかんだよ！」

「さつすが陽向。今回も学年TOPだったたりして〜」

2年生の女子組が楽しそうに会話している。テストが終わり、いろんな意味で安全圏を確定しているが故の余裕が伺えた。

テストでの死亡フラグを見事に回避したらしい。勉強会の成果が出たな、と、至は

思った。彼らの努力を芽吹かせる手伝いが出来た——それはとても嬉しいことである。

……そういうえば、順平はどうなっただろう。彼の成績が気になって、ふと視線を順平へ向けてみた。視線の先にいるのは相変わらずおちやらけた彼の姿。

千影と談笑する彼の会話を聞き取ろうと、集中する。

「テスト終わった後の順平君、すごく輝いてましたよ。大きな仕事をやり遂げた人みたいで」

「おー、千影もわかるかー。そうなんだよそうなんだよー！ 至さんやお前らとやったところがドンピシャで出てきてなっ！ 今回のテストはがっちり手ごたえあったぜ！！ 基礎問題もそうだけど、至さんが陽向ツチに教えてた応用問題が、数字変えてそのまんま出てきた時は『しめた！』って思ったなー」

「基礎の成績が悪くて応用だけ正解したら、先生たちが呆然とするでしょうね……。まあ、順平君の周囲の人たちの様子からして、カンニングを疑われるようなことは万一も無さそうですね」

「ひっど！ 俺、一切カンニングなんてやってねーよ!!」

「やってたら速攻で止められますって。信じてますよ。当然じゃないですか」

『いやー、勉強会やつといてよかったわー。空本が南条と一緒に解いてた応用問題が、数字変えてそのまま出てきたからな』

『隣でやり方聞いてたから、本当に助かったぜ!』

『愚か者。基礎問題ができないのに、応用問題だけができてどうするんだ。不正行為を疑われてもおかしくないだろう』

——…懐かしい会話を髣髴とさせるようなやり取りだ。

正男と秀彦は後にカンニング疑惑が浮上しかけたらしいが、周囲の回答状況と比較した結果、白だと断定された。

変な濡れ衣を着せられたことに怒っていたのが今でも印象に残っている。彼らのむすつとした表情は、未だ色あせることはない。

美鶴や明彦は問題なさそうだ。幼い頃から英才教育を叩き込まれた美鶴には、効率的な勉強方法を習慣的に行えるよう叩き込まれている。明彦は「勉強＝トレーニングと同じ」と考えているため、手を抜くなど性格的に有り得ない。

…まあ、あの2人は「勉強はできるけど、世間の一般常識というか、最近の若者が知っていそうなことに疎い」タイプだ。勉強以外にも、熱中できる分野が複数あった方がいいと思う。特に明彦は、ボクシング以外にも知っておくべきではなからうか。

機会があつたら話しかけてみよう。「ボクシング以外にも、何か夢中になれる分野を見つけてなさい」と。余計なお世話だと怒られるか、あるいは本気にして悩みだすか。前者も後者も面倒であるが、このままボクシング一本にされても困る。

真次郎の弱点は、視界が狭い上に鳥目であることだ。熱中しようがしまいが、肝心なところを見逃してしまっていることが多いタイプ。

目の前に道があれば、躊躇いなく爆走してしまうほどの勢いがある。その勢いに、己自身が耐えきれず振り回されてしまいがちなのだ。

それでは、いつか大事なことでまで見落としてしまうだろう。それが、更なる後悔に繋がってしまいそうで怖い。

人生の崖から飛び降りる寸前だった玲司が踏みとどまれたことを思い出す。彼は「至がいたから踏みとどまれた」と言っていた。正直自分はなにもできなかったし、踏みとどまれたのは玲司自身の強さだ。

むしろ、至の方が玲司に何度も助けられた。そのことを素直に感謝したのだが、玲司は耳を真っ赤にしてそっぽを向き、目を合わせてくれなかつた。嗚呼懐かしい。かつての過去に思いをはせる。

そんな至を現実世界へ引き戻すかのように、至の携帯電話がサトミタダシの歌を歌いだす。見れば、航からのメールだった。

『明日の待ち合わせ場所について』——南条側が桐条側に問い合わせたいことの詳細や、明日からの予定を確認するもののようなのだ。

弟が送ってきた文面に目を通し、慣れた手つきでメールを送り返す。しばし待てば、相手から承諾の意を告げる返信が返ってきた。

(これでよし。あとは、明日を待つだけだ)

「わ、もうこんな時間だ!」

「そろそろ寝た方がいいかも。明日も早いし……」

「そうしよう。明日、出発時間に寝坊するわけにはいかないからな」

「じゃ、各自解散! おやすみなさーい!!」

時計を確認した面々が、挨拶を交わしながら部屋へと戻る。誰も彼も足取りが軽い。余程明日が楽しみだと見える。

そんな後輩たちの背中を見つめながら、至も自分にあてがわれた部屋へと戻った。

準備の最終確認をし、そのまま布団にもぐる。そういえば、テレビで「熱帯夜になるかもしれない」と言っていた気がした。

夏真つ盛りだから当然であろう。気温はこれから鰻登りの一途をたどるらしい。そう簡単には眠れなさそうだ。

正直、至も屋久島旅行が楽しみな人間である。明日を楽しみにしている人間にとつて、寝る前から夜明けまでの時間はとても長い。

明日からの悠々自適な羽伸ばしを思い描き、至ははやる心を鎮めるかのように瞼を閉じる。——まだ、眠れそうにない。

2-4. 罪の重さを思い知り、新たに決意するだけの簡単なお仕事

2009. 7/20 昼

屋久島／浜辺

自分たちは、桐条 武治に真実を聞き出すためにここに来た。

それと並行して、屋久島の自然を体感しながら、ゆつくり羽を伸ばすはずだったのだ。

——なのに何故、こんなにも動きづらい状況になってしまったのか。

両肩をがっちりと掴まれた状態で、至は立ち尽くしていた。経験則がけたたましく警報を鳴らしていると言うのに、一步も動くことが出来なかった。……いや、肩だけでなく、存在そのものを驚掴みにされたような状態だと言った方が正しい。

至の肩を掴んでいる女性たちは笑っていた。しかし目は完全に笑っていない。むしろ、獲物に食らいつく寸前の目をしている。鷹や鷲、あるいは虎や豹を連想させる眼差し。彼女たちの背中には、彼女たちの所持する最強アルカナのペルソナが半具現化していた。

片やJudgement審判のウオフマナフ、片やPrincess女教皇のスクールド。揺らめくオーラが半端ない。闘気が渦巻きすぎて蜃気楼が見えそうだ。おかげで夏だといふのに体感気温が絶対零度近くの寒さである。逃避がてら、何か着込みたくなってきた。

「……なんでお前らここにいんの？」

「仕事です♪」

(嘘だ！ 明らかに嘘だ!!)

怖いほどに清々しい笑みを浮かべる女2人——桐島 英理子と園村 麻希。

両名とも、聖エルミン時代からの級友だ。雪の女王事件及びセブク・スキヤンダルと一緒に駆け抜けた、頼れる仲間。そして——至の双子の弟・藤堂 航に想いを寄せる者たちである。

彼女たちの執着心はとても強い。航が遠出をしようものなら、ありとあらゆる手を使って「偶然」その場所で行くわす程だ。明らかに影で細工していることはバレバレだし、マネージャーが泣きついてくることもあった。……至には、どうしようもできなかったのだが。

ついでに「航が振り向いてくれない」という麻希と英理子の悲痛な悩みにも答えようがない。航のすつとぼけた朴念仁っぷりは、昔から変わらなかつたのだ。三つ子の魂百まで、きっと奴は永遠にあのままだろう。アプローチ法を変える以外なさそうだと至は思う。

現に今、目の前にいる航はきよとんと首をかしげている。

この状況の意味に、まったく気づいていない。

「どうした麻希、背中にジャックフロストなんて背負って。英理子も、なんでジャックラントンを背負ってるんだ」

(お前の眼は節穴か!!)

至は盛大に突っ込みを入れた。勿論、声には出していない。心の中である。

もし音に出していたら、即座にスクルドとウオフマナフが牙を剥くだろう。

どこをどう見たら、奴らが背負っているペルソナがLover^{恋愛}タイプ^愛の2大マス

コットになるというんだ。陽向のペルソナとして召喚される場合は両方とも

Magician^{魔術師}だったが。

少なくとも、あの可愛い雪の妖精やハロウインのカボチャは禍々しいオーラなんか背

負っていない。いや、航の前では麻希も英理子も恋する乙女（年齢的には少々疑問が残る）なのだ。これくらい切り替えは余裕でやってのけるだろう。

両名がピクシーを背負っていたこともあった。ただし、そのピクシーはかなりの強化を施していたため、Love^恋rs^愛タイプにあるまじき凶悪な殺気を放っていたが。曰く、「マリンカリンやメギドラオン、ヒエロスグリユペインを継承させた最強使用」なんだとか。マリンカリンなんて何に使うのか、用途は怖くて聞けなかった。……確実に、2人が望むような効果は得られないだろうが。

おそらくそのピクシーは健在だろう。セットしていないだけで、多分2人の心の海の中に存在している。

そして、今か今かと出番を待ち続けているのだ。……どうしてだろう、寒気が先程より酷くなってきた気がした。

きやいきやい思ひ出話や現状報告に耽る女帝^{まおう}2名と弟。その間中、至の肩は2人によつてがちちりと掴まれたままであった。

後輩たちに助けを求めようにも、みな楽しそうにしているので気が引ける。もし気づいたとしても、スクールとウオフマナフが半分具現化しつつあった影響のせいで誰も近づけない。近づけば、問答無用で無属性全体攻撃が飛んでくる。

その殺気に対抗できる数少ない存在（本人無自覚）・陽向と千影は、至が麻希と英理子

らにエンカウントするのと入れ違いに引き上げていったばかりだ。なんてバッドタイミング。そして追い打ちとばかりに、航はすたすたと去っていく。武治や圭と色々話合う、その下準備のためであろう。悪いこと程連続して、しかも間髪入れず起きるものらしい。

意中の相手が去ったのとほぼ同時に、スクルドを背負った麻希とウオフマナフを背負った英理子が至を凝視する。間違いなく、2人は自分を殺しかねない——それ程の気迫と勢いがあった。肩を握りしめていた手に力が籠められる。……ものすごく痛い。

「——で、Itaruはどちらに協力してくれますの?」

「今度こそ、はつきりさせてほしいな。空本くんはどつちの味方なの?」

「……高校時代から変わらない質問だな」

相変わらずな鬼女どもの言葉に苦笑すれば、「あら」と2人は顔を見合わせる。そして、どこか威圧的な笑顔を向けてきた。

「諺」
 He^娘 t^を h^勝 a^ち t^取 w^ろ o^う l^と d^す t^る h^の e^は d^{う?} a^{う?} u^{う?} g^{う?} h^{う?} t^{う?} e^{う?} r^{う?} w^{う?} i^{う?} n^{う?},

”

must with the mother first begin. “ですわ”
 「何するつもりだオメーらは。その戦術を選んだことは評価するが、完全に度が過ぎてるんだよ。それに、そういうのは本人が決めるもんだろうが」

「……それができれば、苦労なんて……」

「Makiの言うとおりですわ……」

至の言葉に、麻希と英理子がぐくりと肩を落とす。

惚れた腫れたの痴話話。誰を好きになって、誰を愛して、誰と生きていくか——それは、身内が勝手に決めるものではないと至は思っている。

それは航本人が決めることだ。至がしゃしゃり出てあれこれ言う資格など、どこにもない。航に振り向いてほしいなら、2人が独自に努力すべきだろう。……どうしようもないことはわかっているが。

「こうなれば、仕方ないね」

「ええ。力技になります……」

瞬間、めりめりと嫌な音が響いた。間髪入れず、肩に走った鋭い痛み。みしりと軋む

音がする。軋んだのは骨か、あるいは筋肉か。

なんだと叫ぼうとすれば、突き飛ばすようにして手を離された。寸でのところで体制を整えて振り返れば、2人の足元には青い光が立ち上る。

ペルソナを召喚する際に発生する、光膜だ。半透明だったウオフマナフとスクルドが、実体を持つて屋久島の海に具現する!!

（——あ、俺オワタ）

航や圭に助けを求める間もないことを悟った至は、乾いた笑みを浮かべたまま目を閉じる。

瞼の裏を、白い光が焼切るのが見えた気がした。

『御影遺跡のテツソとテディベア、悪魔の山のジャックフロストとジャックランタンを同時に相手しているような状態だった』——後に、会議を途中で止めて、武治やヤマオカらと共に浜辺へ駆けつけた圭はこう発言したという。

その場に居合わせていた後輩たちは、メギドラオンやヒエロスグリユペインが飛び交う光景を見守ることしかできなかつたらしい。

意識が戻った後、後輩たち（特に男性陣）に肩を叩かれた。順平と明彦が涙目になりながらうんうん頷いていた。何故泣かれてしまうのかわからない。

笑い飛ばすために「高校生の頃からよくあることだから気にするな」と言ったら、戦慄した後で拙くたどたどしい慰めの言葉を貰い、終いには男泣きされた。だから何故だ。

「俺、しばらくカノジョはいいです……」

「全くだ」

「——あれ？ どうしたんだお前ら。遊びすぎて疲れたのか？」

明彦と順平が重い溜息をついたのと、「ここまでボロボロになるくらいはしゃいだんだな」と航がすつとぼけた発言をするのはほぼ同時。

その発言を聞いてしまった武治と圭が、廊下の向こうでがつくりと脱力し項垂れている現場が見えた。勿論、蛇足であるが、2人ともスタボロの状態である。

【2—4. 罪の重さを思い知り、新たに決意するだけの簡単なお仕事】

同日 夜

屋久島／桐条家別邸・応接室

「美鶴から、大体聞いているな」

桐条グループを取りまとめる男・桐条 武治が、重々しい口調でそう口火を切った。面々が頷けば、武治は静かに目を伏せる。中央のソファに腰かけていた圭が、険しい眼差しを床に向けていた。

南条側の技術や資料を勝手に持ち出されたことに対する憤りか、はたまた分家筋が犯した過ちと罪の重さに対する怒りか——判別はできない。

しばし目を伏せていた武治が、顔を上げる。残された右目には、どこか憔悴しきつた

ような——けれど、揺るぎない覚悟と意思が宿る。

10年前の事故で失われた左目が健在であったら、自分たちを見返す眼差しはもつと強かつたのかもしれない。真正面から受けとめた自分たちが、思わず圧倒されてしまう程。

片目だけでも十分な迫力だ。桐条グループとしての器を見せつけられたような気がする。……もちろん、上司で同級生で戦友である圭だつて負けてはいないが。

「全ては大人の……我々の罪だ。私の命で贖えるなら、とうにでもそうしているところだが——」

「命は投げ捨てるために使うものではないだろう、桐条当主。罪を贖うためにも、生きべきではないかと私は思う」

武治の言葉を打ち消すように、圭はまっすぐ彼を見返した。かつて神取の孤独と限界を見抜き、這い寄る混沌によって蘇つた彼と対峙した際に全てを悟つた時の眼差し。

まったくもつてその言葉通りだ。死んでしまえばそれで終わり、償いや贖いなどできやしない。生きているからこそ、人は罪も犯すし、それを償うチャンスも得られる。

何か思う所があったのか、武治ははつと息を飲んだ。「それも、そうだな————険しさ

の中に、かすかな笑みが浮かぶ。

「君たちの力を借りる以外術がない。協力してくれないだろうか？」——その言葉に、仲間たちは躊躇わず頷く。

力強く頷く若者たちの様子を見て安堵したのか、武治はゆっくり息を吐いた。張りつめていた空気が一瞬だけ和らぐ。

武治は粛々と話を続けた。罪を言葉にする度、痛みを堪えるように目を伏せる。

「父は研究をおかしな方向へと推し進めていった。南条側から無断で資料や技術を持ち出し、秘密裏且つ独自に研究を続けていたらしい。……今となっては、あの事故や当時の研究者たちの離散により資料の大部分が失われた。先代が隠し持っていたと思しき資料を含んで、散文的に残されているもの——」

「——『先代当主の研究目的』や『研究の最終地点が何であったか』を特定するには至らなかった、ということか」

航の言葉に武治が頷く。どうやら、武治でさえ詳細を掴みかねているようだ。

息子にすら知られたくない程の研究内容。一体、先代当主の鴻悦は何を追い求めているのであろうか。

……考えてもラチが明かない。残された少ない資料をかき集め、読み解いてゆくしかないのだろう。地道な作業が必要になる。

道のりは長そうだ。だが、諦めるわけにはいかない。もう既に巻き込まれ、戦っている少女少女たちがいるのだから。

「君たちには、真実を知る権利がある」——武治がそう言った時、電気がふっと消えた。巨大なモニターが現れ、映像が映し出される。

画面は白い筋が幾本も入ってよく見えない。映像としての価値は殆どなくなっていたが、残された音声は慌ただしさや緊迫した空気を生々しく伝えていく。

現場に居合わせた科学者が、命がけて残した情報。荒い映像からでは、そこにいる男性がどんな人物か判別することは不可能だ。

『この記録が……心ある人に触れることを……願います』——雑音交じりでくぐもつた声が響いてくる。声の主に覚えがあるのか、ゆかりが訝しげに眉を蹙めた。

彼女がそれを問う間もなく、過去に残された言葉は再生されていく。逃げ惑う人々の悲鳴や爆発音をBGMに、言葉は粛々と紡がれていった。

『ご当主は忌まわしい思想に魅入られ、変わってしまった。……黄昏の羽や、月のかけら……この実験は、行われるべきじゃなかった！』

もう未曾有の被害が残るのは避けられないだろう……。でも、こうしなければ……。世界の全てが破滅していたかも知れない!』

(……黄昏の羽と、月のかけら? まさか——)

「世界の、破滅?」

聞こえた言葉に、至は思わず息をのむ。風花が首をかしげた刹那、画面内から大きな爆発音が響いた。

おそらく、ビデオがとられた部屋の近くで起こったためだろう。断末魔の悲鳴が飛び交う。

それが人のものなのか、あるいは逃げ出した異形の者のものだったのか、判別はできない。

『この記録を、見ている者よ。誰でもいい、よく聞いてほしい!! 集めたシャドウは大半が爆発と共に近隣へ飛び散った。悪夢を終わらせるには、それらをすべて消し去るしかない! ……すべては、僕の責任だ。全てを知っていたのに、成功に目が眩み、結局はご当主に従う道を選んできました……』

『全て、僕の……責任だ……』——雑音交じりの映像に、一瞬だが人が映り込む。その姿に、ゆかりがはつと息をのんだ。刹那、大きな爆発音と共に映像が途切れる。

ゆかりの口が動く。「おとうさん」と紡いだ声は震えていた。彼女が今にも泣きだしてしまいそうに見えたのは、気のせいではないだろう。

あれが彼女の父親・岳羽 詠一郎なのか。あの切迫した状況でなければ、とても穏やかそうな風貌である。でも、強い意志の持ち主であることは察することが出来た。

ゆかりの発言に驚いた面々が彼女を見て、そしてすぐに武治に視線を向けなおした。美鶴もこの事実をつかみ切れていなかったのだろう。困惑した眼差しを父親へ向ける。

武治はその眼差しを受け止めたうえで、告げた。この映像に映し出されていた人物は“岳羽 詠一郎”本人であり、当時の主任研究員であったことを。彼はこの研究だけでなく、南条コンツェルンから依頼されたオーパーツの解析にも関わっていたことを。

「彼を見出して利用し、こんな事件にまで追いやってしまったのは、我々グループだ。彼は、桐条に取り殺されたも同然だ……！」

「……いや、桐条だけに責任があるわけではない。あのオーパーツを解析するようそちらに依頼したのは我々だ。まさか、それがこんな……！」

悔しそうに唇を噛んだ武治の言葉に、圭が小さく首を振った。航も、悔しそうに俯いて歯噛みする。握りしめた拳が震えていた。

違う。違う違う。圭や航には何の責任もない。彼らは、南条だけであのオーパーツの解析やJOKEER事件で使われた穢れの抽出技術の管理を進めようとしていた。他の企業や研究者に触れていいものではないから、と。

だけど、どんなに大きな企業でも、あんな技術を1企業でどうにかしようなどという限界がある。ここは、南条グループと同規模。またはそれに準ずるような技術や財力を持ち、且つ信頼できる存在と協力すべきだ——そう言って、桐条グループを候補に挙げたのは、他ならぬ至だった。

「調和する2は、完全な1よりも勝るんだらう？」——半ば強引にあの2人を言いくるめる際、そんなことも言った気がする。名言をこんな形で出された圭は、苦笑しながらため息をついたものだ。「負けたよ」と、そう言った彼の表情を、至は今でも覚えている。『なーなーブラウンー。これ、おもしろそうじゃね？』——雑誌に書いてあった『ペルソナ様遊び』。それを見つけて、面々に提案したのは至だった。

『航ー。体育館倉庫漁ってたら、こんな仮面見つけたんだ。多分これが、いわくつきの仮面』だと思うんだけど——セベク・スキヤンダルに巻き込まれていたさなか。学校の七不思議に興味を持って調べまわり、スノーマスクを発見して持って来たのは至

だった。

『そんなに大切だったら、鍵をかけて閉まっておけばいいんだよ。そうすればどこにも行かない』——『大好きなお姉ちゃん』が引つ越してしまふ悲しみに暮れる年下の子どもたちにそんなことを吹き込んだのは、平行世界の至だった。

『……お前なら、こんな運命のひとつやふたつ……覆せるって、信じてるから……』——『彼』の罪を重くし、見に余るほどの罰を受けさせるきっかけになった呪い^{ことば}を遺したのは、平行世界の至だった。

「——違う。俺のせいだ」

思わず至は呟いていた。え、と、周囲の視線が自分に突き刺さる。

「南条くんと航は、他企業にこの技術管理云々絡みで協力を依頼することを拒んだんだ。『悪意ある人間にこの技術が知られたら、それこそ世界を揺るがしかねない』って。『だからこの技術関連は、南条だけで管理すべきなんだ』とも言ってた。

……それを無理矢理言いくるめて、かつて桐条宗家が誕生した際に南条が贈った言葉まで引き合いに使って、桐条グループに協力をもちかけるように進言したの、俺なんだ。

——いや、そもそも、黄昏の羽や月のかけらをエルミン学園で見つけたのも、全部俺だ」
「至にいさん……」

「至さん、それじゃあ——」

「——父さんは、そんなものの研究をしていたせいで、あの事故を引き起こしたっていうの？」

順平の言葉を遮るようにして響いたのは、ゆかりの呆然とした虚ろな声。

父の無実を信じ、必死になって情報を集めていたゆかり。

その根底にあったものが、がらがらと崩れていく——そんな音が聞こえてきそうだ。

「影時間も、タルタロスも、たくさんの人が犠牲になったのも……みんなみんな、お父さんがやったってこと……!?!? そんな技術がもたらされたから、そんなものが見つかったから、お父さんが——」

「お、おい……! 岳羽、落ち着け!」

がくぜんとした様子で言葉を紡ぐゆかりに、流石の明彦も「これはマズい」と判断したらしい。慌ててフォローを入れる。……勿論、効果なんてあるはずもない。

彼女の真向かいに座っていた美鶴は後輩を氣遣っているのか、どこか躊躇いがちに手を彷徨させた。しかし、何かを決意したのだろう。彼女はぐつと手を握りしめる。

「岳羽、逃げずに最後まで聞いてくれ。確かにこれは、君にとつて不都合なものかもしれない。私だつて……こんな真実など、告げたくなかった。見たくないと思つた真実だつてあつた……！」

君を呼び出したとき、話しただろうか？ 桐条が、ペルソナ能力覚醒を促すために南条から無断で資料を持ち出した挙句、影時間適性者に対して人体実験を行っていたこと。そして、無理矢理ペルソナ能力を植え付けた面々で探索部隊を結成させ、タルタロス探索をさせていたこと！ 知れば知る程、嫌になつた……」

武治が驚いた表情で美鶴を見返す。いつの間に、と、彼の眼差しは叫んでいた。

おそらく、武治は娘を守りたかつたのだと思う。余計な遺恨を背負つてほしくなかつたのだ。

だから、美鶴に真相や闇の部分の隠していたのだろう。「私はそれに向き合つていくつもりだ」——美鶴はそう締めくくる。

ゆかりはしばらく、虚ろな眼差しを彷徨わせていた。何も言わず、何も言えず、ただ

じつと黙っていた。

彷徨い続けた視線が、ゆらゆらと至に向けられる。口が動き、ある一定の言葉を紡ぎ始める。

圭がはつと目を見開いた。航が何かを言って、彼女の発言を止めようとする。

しかしそれは間に合わない。ゆかりの口の動きはスローモーションのようにゆっくりだったが、まるで突風のように至の耳元をかすめた。

花火の光が炸裂した後で遅れて音が聞こえてくるメカニズムが脳裏を駆ける。至がゆかりの言葉の意味を理解したのは、美鶴が咎めるように彼女の名を呼んだ時だった。

(——『あんたのせいだ』か)

否定はしない。できるはずがない。

引き金を引いたのは、確かに至だったのだから。

——たとえそれが、無自覚で悪意のないものだったとしても。

ゆかりは勢いよく立ち上がり、部屋から飛び出していく。彼女の背中を追ったのは陽向だ。足音がどんどん遠くなっていく。

嫌な沈黙が応接室を支配する。気遣うような眼差しも、自分の名前を呼ぶ後輩や友人

の声も、がらんどくに響いてくる。

傷つく資格なんてどこにもない。彼等に心配されていいはずもない。一番辛いのは、至ではなくゆかりの方だ。

行き場のない悲しみや怒りをどうすればいいかわからない。そして何より、原因を持ちこんだに等しい奴が目の前にいる。

至だって、そうした状況に身を置いたことがある。その時、相手に向かって問答無用で一撃、パンチを叩きこんだ。

自分だってそうやって相手に八つ当たりしたのだから、ゆかりだってそうして当然だろう。

原因を作った自分には、彼女の激情と向かい合う義務がある。逃げることなど許されないと、許すこともない。

「俺のことはいいから、岳羽ちゃんのフォローしてあげて」

後輩たちを促せば、面々は所在なさ気に応接室から離れ始める。何度もこちらを振り返っては、ゆかりと陽向の後を追いかけていった。

残されたのは、大人が4人。武治、圭、航、至——誰一人、何も言わない。どう考え

たつて、何かものを言えるような状況ではない。

しかし、あえてその空気を壊したのは航だった。俯いて黙っていたかと思えば、奴はがばつと顔を上げてつかつかとこちらに歩み寄る。

「……先程お前が言ったことが正しいなら、俺だつてお前の『共犯者』だろう?」

「言うにコト書いて何言つてんだよ。お前には何も責任なんてないだろうが」
「うるさい。俺はお前の『共犯者』だ。……俺が、俺自身が今、そう決めた」

だから、と、航が言葉が続ける。

「何でもかんでも、一人で抱え込もうとするな。勝手に先に行こうとするな。……俺を、置いて行くな」

弟の纏うオーラに気圧され、思わず至は目を瞬かせた。

有無を言わせぬ覇気の中に漂うのは、航の気遣いと心配とその他諸々の感情だろう。どこか不安げに揺れる眼差し。

……ああ、珠? 溜の時や巖戸台に行くと言つた時も、こんな感じの眼差しを向けられ

ていたか。

大丈夫だと告げる代りに微笑んで、素直に感謝の言葉を述べる。それでようやく安心(?) したらしく、航はふつと笑みを浮かべた。

——入れ違いに、肩を叩かれる。

見れば、困ったように苦笑を浮かべる圭の姿があつた。

「ならば、俺も同罪だな。……だから、お前たち、俺を差し置いての抜け駆けは厳禁だ。

——いいな？」

「南条くん……」「圭……」

悪戯つぼく笑う圭の姿。エルミン学園時代の気難しい表情しか知らない元同級生たちが見たら、きつと椅子から転げ落ちていただろう。……最も、至や航にしてみれば、多少珍しいもののそれなりに見慣れているため、別に何ともないのであるが。

その場に居合わせた武治はしばし自分たちを見比べ、まるで弟と友人を見守るかのような温かな眼差しを向けてきた。気のせいか、彼の隣にはぼんやりとヤマオカらしき影が漂いつつある。ハンカチで目元をぬぐっているように見えたのは気のせいだろうか？

武治の視線に気づいた圭は、バツが悪そうに咳払いする。心なしか耳元が赤い。そして、至と航兄弟に対して、頑なに視線を合わせようとしなかった。「俺、か……。聞いたことがないから、とても新鮮で、つい」——武治の追い打ち攻撃、効果は抜群だ！ 今度こそ、圭が首を振る。

そのまま武治に弁明（？）やら釈明（??）を始める圭を視界に抑えつつ、至はふと時計に視線を向けた。もうすぐ影時間が始まる頃である。

影時間前に別邸に戻らないと、丸一日締め出しを喰らうんだっか——オートロックセキュリティであることを思い出し、至は苦笑する。

もうそろそろ、陽向たちが戻ってくる頃だろうか。

帰って来たら、きつとゆかりは至に謝罪しようとするのだろう。「言いすぎてゴメンなさい」——そう言つて、頭を下げる。色々フオローしようとするのかもしれない。

謝罪に対する返答よりも、まずは笑つて迎えよう。「おかえり」と、分寮に帰ってくる面々を迎える時と同じように。いつもと変わらない様子で、迎えてあげよう。

その勢いで笑い飛ばしてしまえばいい。気に病むことなど何一つないのだと、そう言つてやればいい。何も心配する必要も、身構える必要もないのだから。

そして伝えよう。自分が今、ここで固めた決意を。

“事件解決のために全力でバックアップし、必ず君たちを守り抜く”——と。

「ただいま帰りましたー！」

至がそうやって前を向いた瞬間、丁度帰って来た陽向の声が聞こえた。

2—5. 機械乙女をパーティに迎えるだけの簡単なお仕事

2009. 7/21 朝

屋久島／ラボの道中

今日はテコでも浜に出ないことにした。

理由は簡単、あの女帝^{まおう}2人が、本日も浜辺にいるからである。

身内以外誰もいないのなら、襲われても多少（？）問題ないと思う。止めてくれるストッパーもいるし、ペルソナ能力を具現化させても何も言われないだろうし。

しかし悲しいがな、今日は運悪く一般人が浜辺でうろうろしていた。昨日のような不運^{こうん}が連続して起こるわけがないのである。そんな事態は稀だろう。

勿論、あの地獄を間近で目撃してしまった私たちは、二つ返事で至の「今日は海に行かない！」発言を聞いてくれた。むしろ「行くな」と止めてくれた。持つべきものはやはり友人と理解者である。

この別荘が並大抵の娯楽施設など比にもならないくらい、豪華な場所だということは知っていた。

すぐ傍に海があるにも関わらずプールバーがあったり、テニスコートや運動場があったり、カラオケ設備も完備されていたり。

……そこで時間を潰す、という選択肢がなかったわけではない。

しかし、桐条当主や南条当主、あるいは関係者から許可を得た”とか”関係者と知り合いだ”とかで、あの女帝^{まお}2人がが乗り込んでくる可能性も否定できない。

桐条や南条の名前を出されてしまえば使用人も頷くしかないし、関係者に会いたいと強く要望されれば無碍に扱うこともできないのだ。絶対、敷地内の中に入ってくる。

もしそうなってしまえば、昨日の再来である。至の穏やかな時間は木端微塵になることは明らかだ。ゆつくり休むことすらできやしなくなる。

『じゃあ、せっかくだからラボの方に行かないか？ シヤドウに関する話や研究成果の情報交換もしたいからな』

『成程。そこなら部外者は立ち入り禁止だろうから、行こうかな』

『えっ？』

『——いや、こつちの話だよ』

そんな時に出てきた航の提案に、即2つ返事で頷く。至の言葉の意味を知らない幾月が首をかしげた。ああ、無知は何て罪深いシアワセなのだろう。奴は麻希と英理子の破壊神っぷりを運良く(?)目撃しなくて済んだ人間であった。羨ましいつたらありやしない。何故自分はクジ運が悪いんだろう。

それに、桐条の研究所と言ったら、南条並みのセキュリティと秘匿性の高さを誇っていることは間違いないさそうだ。そうなれば、麻希や英理子が航を追いかけ、自分たちの後について来た”という最悪の事態から逃げられるかもしれない。

(——そう考えた時期が、俺にもありました)

至は心の中で呟き、大きく肩を落とした。幾月からの何とも言えない眼差しが痛い。同情するなら助けてくれ、マジで。

鬱になりそうな気分のまま目線を動かす。そこには、何故か部外者である麻希と英理子が航を囲んで何かを話している姿が目に入った。おいマネージャー、奴らを止めてくれ——言いかけて、止めた。彼等も奴らの被害者である。これ以上何も言えそうになかった。女の執念は怖い。

どうしてこんな時に限って、圭や武治は「仕事のため」に帰ってしまふんだろう。仕方がないことだとはわかつているけれど、やっぱり理不尽だし不運すぎるとしか言いようがない。自分は常々こういう運命の元に生まれついでいるとでも言うのだろうか。至にはTowerアルカナの適性はなかったはずなのに。今ならTowerのペルソナを好き勝手取り扱えそうな気がしないでもない。

別件で出会ったTowerアルカナのペルソナ使い（not・城戸玲司）は、自分のペルソナがミジャクジ——「日本代表ご立派さま」だったことに絶望して、ペルソナ暴走を引き起こしていた。最近の連絡では、ペルソナが覚醒してマール——「世界のご立派さま」になったという連絡が届いたか。「周囲の面々からペルソナ能力を探知されるのが怖い」とも言っていた。哀しい話である。

そんなことを考えていたら、いつの間にか航と幾月が先に行ってしまった。残されたのは、自分だけ。やばいと思い、慌てて研究室に入ろうとしたがもう遅い。

「至くん、ちよつと待ってくれないかなー？」

「ダメですよItaru。逃げようだったって、私たちが許しませんわ」

——ガッ。

表わすとしたら、そんな擬音が入るだろう。強い力で両腕を掴まれる。右は麻希、左は英理子。

ぎぎぎ、と、至は首を動かす。相変わらず、麻希と英理子は笑っていた。昨日、海岸を焦土同然にした時と、寸分変わらぬ笑みが浮かんでいる。

止めてくれ。ここでペルソナをぶっ放つのはやめてくれ——至は全力で訴える。気圧されて声が出なくなってしまうた代わりに、眼差しで訴えた。しかし甘かった。奴らは話を聞いてくれなかった。

ごう、と風が吹く。具現化したのは、2人が全力で作った「マリンカリンやメギドラオン、ヒエロスグリユペインを継承させた最強使用」のピクシード。航を口説き落とし、且つ、至を自分の味方に引き入れるための脅迫用に作られたペルソナの1体。

確実に殺しにかかっている。もう、「周囲にどれだけの被害を出そうが気にしない」という眼差しになっている。

きつと今日の夕刊や明日の朝刊は大騒ぎだろう。原因不明の爆発事故——うん、新聞の一面は表題は決まったも同然だ。

（——ああ、俺オワタ）

メギドラオンとヒエロスグリユペインをうち放つためのエネルギーが収束する。それを感じ取ったせいとか、びりびりと魔力が頬を打った。どんどん魔力は膨れ上がっていく。

研究所の職員全員に謝罪の言葉を呟きながら、至は諦めて目を閉じた。せめてもの抵抗と言え、自分が現在降魔しているナルカミの全攻撃耐性（半減）くらいか。

しかしそれも所詮は雀の涙。2人のペルソナがうち放つ術技の威力は、ナルカミの耐性など気にもせず問答無用で大ダメージを与えてくる。貫通なんてスキル、この世界には存在しないはずなのに、だ。

終わりを覚悟していた時——不意に、背後から感じたペルソナの共鳴反応に目を開けて振り返る。

至が突然動き出したのか、あるいは彼女たちも共鳴反応に気づいたのか——それはわからない。わからないが、女2人も同じ方向に視線を向けた。

次の瞬間、恐ろしい勢いで「何か」が飛び出して来る！慌てて回避しようとしたが、間に合わない。

「うおっ!?!」

「きゃあ!」

突っ込んできた勢いそのまま、*“それ”* によって弾き飛ばされる。
背中と頭に強い衝撃を感じたと思った瞬間、至の意識は完全にブラックアウトした。

〔2-5. 機械乙女をパーティに迎えるだけの簡単なお仕事〕

同日 夜

屋久島／桐条家別邸・応接室

「……で、俺や麻希とエリーを弾き飛ばしたのが、この子？」

「はい。先程は申し訳ありませんでした。私はアイギス、シャドウ掃討を目的に活動中です」

金髪碧眼の機械乙女——アイギスは、淀みなく言葉を紡いで謝罪する。綺麗な90度のお辞儀だ。プログラムとはいえ、完成度は高い。

心を持つ機械なんて、漫画や小説の中にしかないと思っていた。しかも、第一印象が人と相違ない程の外見だとは。素直に感嘆せざるを得ない。

彼女が、つい数時間前に至たちを弾き飛ばした張本人。そして、ペルソナを心に宿したシャドウ殲滅兵器なのだ。あの時の共鳴現象は彼女のペルソナ・パラディオンのものらしい。

アルカナタイプはChariot^{戦車}。物理攻撃と味方のサポートに特化した術技構成となっている、物理系のエキスパート。順平や明彦と同じパワータイプである。

他の面々に対する自己紹介は既に終わっていたらしい。順平が「こんなにかわいいのにロボなんて」と打ちひしがれている。勿論、誰一人としてフォローに回らない。そして至も回るつもりがない。

アイギスは陽向にべったりとしている。これはこのままでいいのかと視線で問えば、陽向は困ったように首を振った。陽向ではどうしようもないようだ。

「なんでも、この子にとって、ひなが『大切』らしいです」

「……大切、ねえ」

千影がそう言つて、アイギスを見た。困惑した眼差しが向けられても、彼女は無反応である。

至はじつと眼差しを向けるが、アイギスは何も語らない。無機質な瞳がこちらを見返すだけだ。

アイギス本人にも、陽向に執着する理由がわかっていないらしい。ただひたすら、陽向が大切なのだと訴えた。

ううむ、と幾月は考え込む。眼差しは「技術者」としてのそれだ。

普段からこういう仕事人としての眼差しを見せてくれているならば、頼りない理事長という評価も変われると思う。

まあ、技術者の大半は「自分の研究分野や仕事と関わらない分野は廃人並みに酷い」を地で行くことが多いのであるが。

その筆頭を行くであろう弟（家事能力：—E X、調理器具に触っただけで大爆発するレベル）は、アイギスや書類と睨めっこを続けている。

至には到底理解できない単語や数式をぶつぶつ呟きながら、何やら思考に集中しているようだった。

入れ違いに、自分の見解をまとめた幾月が顔を上げる。

「今朝、突然再起動したばかりだから、人物認識が完全じゃないのかもしれない。個人的には、寝ボケてるって可能性も……」

「それはないな。つい先程彼女を調べてみたが、そう言った不調はどこにも見られなかった。だから有り得ない」

「航さんの言うとおりです。常識的に考えて、寝ボケるなんてないですって」

「……………うんそうだね。機械がそんなことしないよね」

持論を一撃で切って捨てられ、追い打ちでゆかりの援護射撃。幾月はるーるー涙を零しながら崩れ落ちた。切って捨てた張本人である航には、当然一切の悪意もない。「藤堂くんにはロマンがない」とひっそり嘆いた幾月の言葉も、「可能性が0だと明らかになっているのはロマンではない」と一蹴した。

奴にとって、〃0%ではないと判断できない〃、あるいは〃100%無いと判断できたもの〃はロマンとは言わない。可能性が〃ある〃、あるいは〃あるかもわからない〃からこそロマンなのだ、奴は考えているのだ。

シユレーティンカーの猫。箱の中の猫は生きているか、あるいは死んでいるのか。開

けてみるまで分からない。生死の可能性はフィフティフィフティだからだ。——…多分、それも航の考えるようなロマンに属するんだろう。

このままいけば、航は幾月に対して「航の考えるロマンの定義」を語りつづけることになる。自分の好きな分野に対して、奴は決して妥協しないのだ。そういう意味では、奴と明彦は似たようなタイプだと言える。

奴が語り出すと面倒なので、さっさとアイギスの件をまとめてもらった。「アイギスが陽向に執着する理由は、後々明かしていくことにする」という。要するに、簡潔に言えば「保留」である。

……もしも可能性があるとするとするなら、10年前の事件で「何かがあった」と考える方が妥当だろう。陽向に執着するようになるきっかけが。

幾月やラボの人間から航が聞いた話では、10年前の事件当時はそんなプログラムなどされていなかったらしいし、その後もそんなプログラムを植え付けてはいないらしい。

機械はプログラムされたことしかやらないのが普通である。心があったとしても、何か「きっかけ」がなければ行動するには至らない。何もないのに「陽向の傍にいなければならない」と言うのはおかしいのだ。

「でも、きつかけが何であろうと、アイギスが一緒にいてくれるのは嬉しいよ」
「ひな……」

「はい。全力で、陽向さんの傍にいます」

陽向が楽しそうに微笑む。アイギスはそれを確認し、びしつと背を正した。これに敬礼のポーズが追加されれば、まんま軍人である。……座ってる状態ではやらないだろうが。

あの様子からして、アイギスは陽向に害をなす存在ではなさそうだ。むしろ、陽向を守るために全力を尽くす所存でいるらしい。なら、多分問題ないか。現時点では、そういうことにしておこう。

至は早々に決断を下し、大きく息を吐く。

「……それはそれでいいとして、だ。なんで麻希とエリーが、桐条の別荘でカラオケやってたんだよ」

「麻希は宿泊していたホテルの水道管が破裂して、部屋が水浸しになったために泊まれなくなつたらしい。英理子は悪質なストーカーが嫌がらせをしてきたようで、身を隠すという意味でこちらに来たらしいぞ」

(どこ)までが本当なんだか)

航が語っているのはもつともらしい理由だが、2人の執着ぶりからして嫌な予感しかない。ソースは長年の経験である。伊達に、航攻略に必要なだと言う理由で色々追い回されてきたわけではない。

カラオケに興じるモデルとセラピストの様子を見ながら、幾月が肩を落としている。どうやら彼は、カラオケで歌いたかったようだ。もはや麻希と英理子の独壇場である。幾月などお呼びじゃない。

他の面々も同じ気持ちのようだった。それとなくリモコン求めて手を伸ばす幾月からリモコンを死守している。絶対に渡すつもりはないようだった。それもそうか。一般人よりも芸能人が歌う方がいいに決まってる。

むしろ、幾月に歌わせるくらいなら、麻希と英理子に渡した方がマシだと思うのだ。S・E・E・Sの面々が下した判断は間違っていない。

すかつ、と、幾月の手が空を掴む。「あ」と、間の抜けた声が響いた気がする。勿論、面々は気にも留めない。英理子と麻希の熱唱に拍手を送るのに夢中になっているのだ。そういえば、あの2人の交渉にも「歌う」があったような気がする。

恋愛面さえ除けば、麻希と英理子は仲のいい友人と言っている。セベク・スキヤンダ

ル後はよく一緒にカラオケに行ったり、ファミレスで勉強会をやったりしていたから。懐かしい日々を思い出す。時は流れ、色々なものが変わってしまったけれど——変わらないものもあるのだ。至は静かに目を細める。

「せつかくですし、みんなも歌わない？」

「大人数でのChorusも、カラオケの醍醐味ですわ」

「いいですね！　じゃあ、みんなで歌いましょう！　——ね、何歌うー？」

麻希と英理子の勧めに、陽向が頷き振り返る。仲間たちに問えば、みんなこぞって「はいはいはい——いい！」と手を挙げて持ち歌を挙げていく。

「パート分けとかやれる歌が盛り上がるよね」「じゃあ、俺はこの曲がいい」「私はこっちのほうがお勧めだなあ」——云々。

入力番号や歌の出だし等を見比べながら、S・E・E・Sの面々が議論を始める。当然、リモコンを幾月に渡そうとする者は誰一人もいない。むしろそれとなく死守してゐる。

幾月が俯く。肩が震えている。もしかしたら泣いているのかもしれない。S・E・E・Sの面々は歌う曲を決めたらしい。リモコンを使って入力し、楽しそうにステージ

へ立つ。

「桐条先輩も一緒に歌いましょうよ！」

「いい、いいのか？ わ、私は……」

「せっかくの機会だ、みんなで歌おうぜ。年齢身分なんて関係ない、今日は無礼講だ！」
「ふむ」

至の言葉に反応し、航が書類との睨めつこを止めた。いつの間にか、奴の手には書類の代わりにマイクが握られている。歌う気満々だ。

悪魔と交渉するときもこんな風に歌っていたか。懐かしい。過去の思い出に浸っていた時、タイミングよくイントロが流れ始める。

至はうんうん頷きつつ、さりげなく幾月からリモコンを遠ざけた。

\$\$\$

2009. 7 / 22 昼

屋久島／浜辺

どうせこうなるんだろうな、という予測はしていた。だから、別段驚く気も起きない。要するに、屋久島旅行初日のアレ・2日目の未遂だったアレと同じようなものである。昨日の「未遂」が一番幸運値が高かった場合の結果だったようだ。

正直に言うと、アレを幸運と言うのは違う気もするのだが。アイギスの突撃で気を失っていたのは、果たして幸運と言えるのか甚だ疑問である。

「で、今度こそ白黒つけてくださいますわよね？ Itaru？」
「そうだね。私と桐島さん、どっちにつくのかを」

うふふふふふふふふふふ。あはははははははははははは。
女帝^{まおう}2人の笑い声が怖い。

順平をダウンさせ、総攻撃を仕掛けていた陽向や千影らが止まる。

美鶴は呆然とこちらを見つめていた。明彦も顔を真っ青にしている。

初日の延長戦、と言った方が正しい光景。至の眼前には、やはりスクルドとウオフマナフ——もとい、麻希と英理子が仁王立ちしている。そしてこの場には、航はいない。彼はしばし浜辺をうろついた後、ラボへと行ってしまった。

航はここに残ると言う。しばらくラボにいるらしい。麻希と英理子も滞在しようと思っているようだが、さすがにもう無理はできないようだった。勿論、スケジュールの意味で。「これ以上は無理。本当に無理」と、マネージャの泣き落としが入ったという。

一応、彼女たちは良心的な性格である。ただ、結構肉食系な面が強く、己の望む結果を得るためなら多少(?)の無茶をやらすだけで。その被害が、もろ至に集中砲火するだけであつて。良心的でなければ、アイギスに吹っ飛ばされた至を治療してくれなかったであろう。

……彼女たちにとっては、〃航の兄〃の株を稼いだだけなのかもしれないが。

だからといって、そう易々と協力してやるつもりもない。好きな相手くらい、自分の力で射止めるべきだ。

「何度言われようと、俺は自分の意見を変えるつもりはない。あいつの伴侶は、あいつ自

身が決める問題なんだから」

殺気が増大した。後光に這い寄る混沌が凶悪な笑みを浮かべている図が見えるのは、きつと気のせいではない。

あの2名は奴を装備することはできないはずだ。奴に魅入られ、且つDevil《悪魔》の適性がなければ無理なはず。

ああ、愛が成せる技なのか。だとしたら、とんでもなさすぎる——

「ちよ、麻希さんも英理子さんも止まってください!」

「やめてあげて! もうやめてあげてよおおおおおおおおお!!」

「強力なペルソナ反応を感じしました。——来ます!」

「至さあああああああああああああああああああん!!」

仲間たちの悲鳴が木霊する。それを最後に、至の視界は真っ白に染め上げられた。

?????????

??
/
??
?

空が、世界が、何もかもが、緑色に染まった時間。

無残な程に大破した乗用車から、少女はどうか這い出した。そして、目の前で起きている光景に息を飲む。

死神だ。死神が、何かと対峙している。銃撃音が響き、何かと死神がぶつかり合う。火花が飛び散っていた。

両者はアスファルトに叩きつけられる。ボロボロで、満身創痕と言ってもいい。思い通りに動かぬ四肢に力を入れて、どうにか動こうと足掻いていた。

ずるずると体を引きずって、死神と影が睨み合っていた。互いに限界を超えているにもかかわらず、互いの願いのために戦いを続けようとしている。

少女は何もできなかつた。ただ、その成り行きを見守ることしかできなかつた。何か

をするには、少女はあまりにも無力だったためだ。

——ふと、影と死神がこちらを見た。

のたうつようにして、影がゆつくりと近づいてくる。死神はかすかに身じろぎするだけだ。

少女は動けない。傷の痛みや迫りくる恐怖に、足がすくんでしまったのだ。

眼前に影が迫った。呆然と見上げる少女を見下ろし、影は手を伸ばす。月明かりに影がぼんやりと照らし出された。

はつきりと見えないが、人だ。だけれど、纏う雰囲気はどこまでも無機質で、無感情で、事務的だった。おおよそ人とは言い難い。

人にして人ならざる「何か」がゆつくりと口を動かす。何を言っているのかは全く判別できない。問い返す間も余裕もなかった。

次の瞬間、いきなり影が少女の視界を塞いだからである。ひ、と喉がひきつる音が響いた。

ずる、と。得体の知れぬ何かが入ってくる感覚に見舞われる。嫌だ、嫌だ、やめて——その叫びは、声にならない。影に届くこともない。

「封印、完了しました——」

がしやんと、何か^が倒れる音。
それを最後に、少女の意識も闇に落ちた。